

頭註

國譯本草綱目

第十四冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目拾遺　第十四册

目次

本草綱目拾遺木部第六卷

本草綱目拾遺木部目錄……一―二

木部

響豆……一
木蛇……二
通香木……三
閏月椶皮……三
南天竹……四
沓克木……八

綠益子……九
丁香油……一〇
檀香油……一二
肉桂油……一二
水安息……一三
夜蘭……一六
黎椒……一八
白胡椒……一九
山胡椒　馬思答吉
金剛纂……二一
鍛樹皮……二二
黃葛樹……二三
川槿皮
土漆……二八

水團花……二八
蘆欖果……二八
千張紙……二九
　木蝴蝶
風葉……三一
拔爾撒摩……三一
楓果……三二
咬人狗……三三
　刺犛
桂子……三四
　桂丁　桂耳　桂樓
椶木……三六
樟皮……三六
　樟梨

榕鬚……四〇
穪七樹……四三
柏㮰……四四
柏子殼……四四
松毬……四四
松皮膏
羅漢松實……四七
金松……四七
山西柏油……四八
松油……四九
茶油……五〇
枯餅
杉木油……五一
淸明插簷柳……五二

柳椹……五三
柳屑　柳蕈
檉柳……五五
桑癭……五七
鐵扇子　桑榾柮　桑葉滋　桑油
伽㑲香……六一
特迦香……六九
氣結……七〇
飛沈香……七一
地臘香……七二
金雞勒……七三
臭梧桐……七三
臭牡丹
木八角……七八

草八角
烏不宿……八一
破布葉……八三
天戚沙……八四
淡竹殼……八四
桃絲竹二黃……八五
竹衣……八五
枸橘……六
葉底紅……八七
茶樹根……八九
礀茶葉　經霜老茶葉
雨前茶……九〇
普洱茶……九五
研茶……九七

龍脊茶……九七
安化茶……九七
雪茶……九八
武彝茶……一〇〇
松蘿茶……一〇一
六安茶……一〇六
普陀茶……一〇七
江西岕片（羅岕）……一〇七
水沙連茶……一一〇
紅毛茶……一一〇
角刺茶……一一一
欒茶……一一一
雲芝茶……一一三

紅花茶……………………………………………………一一三
烏藥茶……………………………………………………一一三
瀘茶………………………………………………………一一三
瘟茶………………………………………………………一一四
樂山茶……………………………………………………一一四

本草綱目拾遺藤部・花部・果部第七卷

本草綱目拾遺藤部・花部・果部目錄………………………一一二

藤部

雞血藤膠…………………………………………………一二五
乜金藤……………………………………………………一三〇
鹿角藤……………………………………………………一三〇
買麻藤……………………………………………………一三一
紅木香……………………………………………………一三二
紅皮藤

雷公藤……一二三
藤黄……一二五
金鎖銀開……一三三
乳藤……一三五
蝙蝠藤……一三六
皆治藤……一三七
無根草……一三七
麥裏藤……一四〇
白毛藤……一四〇
天毬草……一四一
松蘿……一四三
松上寄生……一四三
楓上寄生……一四三
蛇莆藤……一四四

李頭藤……一四四
龍鬚藤……一四四
臭藤根……一四五
黃練芽……一四六
木龍藤……一四八
蔞油……一四八

花部

梅花……一五一
梅梗
雪荷花……一六一
雪芝　雪裏花
水仙花子……一六六
催生蘭……一六六
珠蘭……一六七

建蘭花……一六八
葉　根　草蘭
玫瑰花……一七三
金雀花……一七五
金蓮花……一七七
佛桑花……一七八
寶珠山茶……一八〇
粉團花……一八二
根
玉簪花……一八三
玉蘭花……一八五
丁香花……一八五
紫茉莉……一八六
野薔薇……一八七

秋海棠……一八九
茶菊……一九二
　城頭菊　金鈴菊　金箭頭　菊米　菊根
睡蓮……一九七
瑞香花……一九八
子午蓮……一九九
桃金孃……二〇〇
假素馨……二〇一
千金花……二〇一
梧桐花……二〇二
金鳳毛……二〇二
十姊妹……二〇三
雨韭……二〇三
罌粟子油……二〇三

佛前舊供花……二〇四

果部上

延壽果……二〇五
櫻額……二〇六
倒吊果……二〇七
飛松子……二〇八
茶朒子……二〇九
椰油……二一〇
　椰中酒　椰膏　椰皮　椰肉
宜母果……二一三
天師栗……二一四
化州橘紅……二一六
　橘紅上絲　糖橘紅　橘餅　藥製柑橘餅　青鹽陳皮　橘苓
昔蔻檳榔……二二五

瑣瑣葡萄……二二六
南棗……二三〇
山棗　藏棗
落花生……二三四
油
核桃油……二三九
阿月渾子……二三九
薯良……二三九
無漏果……二四〇
胖大海……二四〇
藕粉……二四一
節粉
菱粉……二四四
蒂　殼

芡粉……二四五

本草綱目拾遺果部·諸穀部·諸蔬部第八卷

本草綱目拾遺果部·諸穀部·諸蔬部目錄……一—三

果部下

諸荔……二四七

殼

龍眼核……二五一

殼

蜜望……二五五

蒲桃樹……二五六

荸薺粉……二五七

野荸薺……二五七

櫻桃核……二六〇

山櫻桃……二六一

栗殼……二六一
刺菱……二六一
沙角
烏欖仁……二六三
刺梨……二六五
枇杷核……二六六
羊桃……二六七
倒捻子……二六九
甘蔗滓……二七一
皮
猴闥子……二七四
瓜子殼……二七四
蒲桃殼……二七五
橙餅……二七五

津符子……二七六
必思答……二七七
黄皮果……二七七
甘劍子……二七八
揚搖子……二七九
海梧子……二八〇
木竹子……二八〇
橹罟子……二八一
橦子……二八二
羅晃子……二八二
夫編子……二八三
白緣子……二八四
繫彌子……二八五
人面子……二八五

四味果……二八六
千歲子……二八七
侯騷子……二八八
仙掌子……二八九
酒杯藤子……二九一
藥果……二九二
莆子……二九二
楸子……二九三
隈支……二九三
呂宋果……二九四

諸穀部

沙米……二九七
西國米……二九八
珠兒粉　竹米

陳倉米……三〇〇
朱公米
山穀……三〇二
青稞黃稞……三〇三
米油……三〇三
鍋焦……三〇四
陳久年糕
阿迷酒……三〇六
酒釀……三〇七
酒䔰
神黃豆……三一〇
緬豆　回回豆　青花豆　眞寧豆
穭豆……三一三
葉

蠶豆殼……三二四
醬油……三二六
糟油
腐……三二六
漿　沫　渣　皮　乳　鍋巴　泔水　麻腐
芝蔴殼……三三二

諸蔬部

甘儲……三三五
粳粉　甘儲酒
山百合……三五一
石衣……三五二
石耳
野芋艿……三六五
青芋　上芋藤　野芋頭　鬼芋

野毛豆……三五八
野蘿蔔……三六〇
地骷髏　三生蘿蔔
南瓜蒂……三六二
穰
辣茄……三六四
刀豆根……三六八
殼
地胥……三六九
葛乳……三七〇
鮮草果……三七一
眞珠菜……三七一
鵓鴿菜……三七二
葛仙米……三七一

黃矮菜……三七五
白茄……三七六
葉 蔕
天茄……三七七
牛心茄子……三七八
緬茄……三七八
醬茄……三八〇
糟茄
玉瓜……三八〇
節瓜……三八二
穿腸瓜……三八二
天骷髏……三八四
鬼骷髏……三八五
白鼓釘……三八五

三寶薑……三八六
彎薑……三八七
川薑……三八七
沙葱……三八八
風葱……三八九
番蒜……三八九
蒜梗……三九〇
刺兒菜……三九一
波斯菜……三九一
乾冬菜……三九二
陳冬菜滷　陳芥菜滷　糞金子
麒麟菜……三九六
諸筍……三九八
乾筍

紅海粉……四〇三

本草綱目拾遺器用部・禽部・獸部第九卷

本草綱目拾遺器用部・禽部・獸部目錄……一一二

器用部

番打馬……四〇五
老材香……四一〇
縛木藤……四一一
敗琉璃……四一一
浮子
油胭脂……四一七
木套皮……四一八
火漆……四一九
七氣罌餅……四二〇

紅毼……四二三
白褐
罽布……四二四
舊帽沿……四二五
綿珠……四二五
紅絨……四二六
棉紗……四二六
舊頭繩……四二七
北羅砂……四二八
烏金紙……四二八
皮金紙
舊織紙……四三〇
包烟紙……四三二
粗草紙……四三二

厠草紙
酒罈上紙……四三四
燒酒草……四三四
古瓦……四三五
青龍背……四三五
絹篩籮……四三六
陳年竹燈盞……四三六
銅燈盞靑……四三八
料絲……四三八
烏龍翅……四三八
船篷箬……四三九
洋船璞……四三九
櫓箍……四四〇
漆盤上漆……四四〇

油木梳……四四一
衣帶……四四二
刀鞘……四四二
舊竹筯……四四二
草鞋鼻上布……四四三
織機上草辮……四四三
肉臺上屑……四四三
盛米栲栳……四四四
鋼羅底
砂壺……四四五
靈鶴盞……四四六
花簪……四四七
小兒破鞋……四四八
夏布舊蚊帳……四四八

厠上椽木……四四九
屎板
白秋霜……四四九

禽部

燕窩……四五三
素燕窩
石燕……四六〇
蝙蝠腦……四六〇
石鉨……四六一
鸕鷀涎……四六一
翠鳥舌……四六二
白鶴雞……四六三
鬱雞……四六三
谿雞……四六三

雪雞……四六四
洋鴨……四六四
烏鴉膽……四六五
鵝毛……四六六
屎　涎　蛋殼　腿骨　喉管
鷹吐毛……四七一
鷹條
雄雞卵……四七三

獸部

獅子油……四七九
血　糞
象糞……四八三
象白　尾毛
犴血……四八五

醉虎……四八六
油 膽 脂
鹿胎……四八八
乳餅 脛骨
猴經……四九一
犬豕胎糞……四九一
猯油……四九二
海狗油……四九三
狐麝……四九四
獺糞……四九五
狼脂……四九五
山羊血……四九六
油 糞
石羊膽……五〇五

山狸……五〇六
犀牛皮……五〇七
貂尾……五〇七
七葛……五〇八
香鼠……五〇八
鼠血……五〇九
猫尿……五〇九
胞 胎 尾血 白松香
浙驢皮膠……五一一
霞天膏……五一一
羊哀……五一四
蘭薰……五一七
家鄉肉 陳火腿骨 猪項上蜻蜓骨 雄猪眼梢肉 製火腿法

本草綱目拾遺鱗介・蟲部第十卷

本草綱目拾遺鱗介・蟲部目錄……一—二

鱗部

脆蛇……五二九
環蛇……五三一
翠蛇……五三一
碧飛……五三二
蟒油……五三三
斷草烏……五三五
龍涎香……五三五
龍涎
西楞魚……五四七
鰣魚鱗……五四七
青魚……五四九

金魚……五五〇
阿羅魚……五五一
渼陂魚……五五一
四足魚……五五二
河豚目……五五二
子
蟯蜋魚……五五二
蜜姑魚……五五三
雪魿……五五五
帶魚……五五六
血鱔……五五八
沙魚翅……五五九
土附……五八〇
烏魚蛋……五六二

青魚膽……五六一
白皮子……五六三
鮀魚……五六六

介部

海龍……五六七
海牛……五六八
白鼈……五六八
鼈膽……五六九
蟶殼……五七〇
海螄……五七〇
吐鐵……五七二
田螺涎……五七四
蛤蜊肉……五七五
蜆腊……五七六

蚌淚……五七七
西施舌……五七八
石蜐……五七九
乾蝦……五八〇
蝦米　鷲爪　蝦子　對蝦
蝦醬……五八四
石上螺螄……五八四

蟲部

雪蝦蟇……五八七
海參……五八八
隊隊……五九四
風蛤……五九五
飯蒼蠅……五九五
蠅蜂……五九六

蜜蜂……五九七
苦蜜……五九七
蜜虎……五九八
蟾皮……六〇一
舌
土檳榔……六〇三
蝃蝥黃……六〇三
藥蜂針……六〇四
驢龍……六〇四
龍蝨……六〇四
洋蟲……六〇五
蟋蟀……六一二
蚱蜢……六一三
淮東子……六一六

燈蛾……六一七
蠅虎……六一七
竈馬……六一八
水馬……六二一
壁蝨……六二三
叩頭蟲……六二七
沙雞母……六二八
禾蟲……六二八
茄棵蟲……六三〇
樓蟲……六三一
蔗蛄……六三三
桃絲竹蝨……六三三
牙皂樹蟲……六三三
黃麻梗蟲……六三三

芝麻蟲……六三四
桐蛀……六三五
牛膝蛀……六三五
山螞蟻窠……六三五
子
蚓窠……六三八
死人蛀蟲……六三九
人蚜
虹蟲……六四二

本草綱目拾遺木部

第六卷

錢唐　趙學敏　恕軒氏輯

本草綱目拾遺木部目錄

鬱豆	木蛇	通香木
南天竹 子、葉、梗。	查克木	綠盆子
檀香油	肉桂油	水安息
黎椒 白胡椒、山胡椒、馬思荅吉。	金剛纂	
黃葛樹 川槿皮。	土漆	水團花
千張紙 木蝴蝶。	風藥	拔爾撒摩
咬人狗 刺葷。	桂子 桂丁、桂耳、桂根。	
樟皮 樟梨。	榕鬚	樠七樹
柏子殼	松毬 松皮膏。	羅漢松實
山西柏油 松油。	茶油 枯餅。茶油、即ち樗樹子油。	
清明插簷柳	柳桃 柳屑、柳蕈。	檉柳
桑葉滋、桑油。	伽南香	特迦香

閏月櫻皮	
丁香油	
夜蘭	
鍛樹皮	
蕀櫪果	
楓果 即ち路路通。	
櫻木	
柏瘿	
金松	
杉木油	
桑瘿 鐵扇子、桑椵榾、	
氣結	

飛沈香　地膽香　金雞勒　臭梧桐（臭牡丹。）
木八角（草八角。）　烏不宿　破布葉　天成沙
淡竹殼　桃絲竹二黃　竹衣　枸橘
葉底紅　茶樹根（霜茶葉、經霜老茶葉。）　雨前茶
普洱茶　研茶　龍脊茶　安化茶
雪茶　武彝茶　松蘿茶　六安茶
普陀茶　江西岭片（羅岭。）　水沙連茶　紅毛茶
角刺茶　欒茶　雲芝茶　紅花茶
烏藥茶　瀘茶　瘋茶　樂山茶

木部

響豆

池北偶譚——樂安に孫公といふ者があつた。年九十にして强健なること四五十歲の人の如くであつたが、自ら言ふには『平常ただ響豆を服するだけだ。每歲槐子の熟せんとするとき、番人を置いて鳥雀などに啄み落されぬやうにし、十分に成熟したときそれを取收めて二箇の枕に作る。夜中それを枕にして寢て聲があつて聽えるものが卽ち響豆であつて、その聲のないものは棄て去る。かくして數月にして響豆を擇り取るのであつて、所在の樹一本の子から一箇を得るに過ぎないものだ。それで每歲一粒を服するに過ぎない。それを數十年繼續してゐるだけで、外に何も術があるわけではない』とのことであつた。

顏氏家訓——庾肩吾は常に槐實を服し、年七十餘にして目に細字を看、鬢髮もなほ黑かつた。抱朴子に『槐子を服すれば、人をして腦を補せしめ、髮を白からざら

しめて長生する』とあるは殆どこれをいつたのであらう。

目を明にし、顔色を悦くし、心志を開き、筋骨を強くし、血髓を補す。

紀曉嵐先生姑妄聽之に云く、響豆とは槐實の夜中に爆響のあるもののことで、一樹にただ一顆だけしかなく、的確にそれを見別け難いものだ。その方法は、始め花の時から絲網を樹上に張り廻らして鳥鵲などの啄み食ふを防ぎ、結子が熟して後に、多く布囊を縫つてそれに貯へ、それを夜中枕にして聽き、聲のないものをば棄て去る。かくして遞に枕して聽くと必ず爆聲を作すものが一囊あるものだ。そこでその囊の子をまた多くの小囊に分けて貯へ、それを枕にして初の通りに聽いてゐると、響のある一小囊がある。そこでまたそれを二箇の枕に分け作り、次第にかやうにして擇り出すと、結局二顆になり、それを分けて枕にすると遂に響豆が手に入るものだ。

木蛇

百草鏡に云く、木蛇は蛇に似て鱗があり、甲内の紋は黃色で菊花の瓣のやうだ。

亦た奇物である。
狗咬を治す。

通香木

邊志――木の長さ數尺のもので、塞外に產する。沸湯を沃いで取つたその汁で衣服を洗ひ、及び一切の花卉に灌ぎ、家屋の壁に灑げば、年を經ても香氣がなくならない。これを燒けば能く天神を降し、香氣が數百里に達する。契丹でこれを珍重する。

奇疾の一般人に名を知られぬものを治し、これを服すれば癒える。これを焚けば瘟疫、穢氣、邪祟を辟ける。

閏月椶皮

徽州のものが色が紫で上級品である。

救世苦海――椶櫚の皮は每歲ただ十二瓣を生じ、閏月の歲には一瓣を多く生ずる

が、ただこの瓣は中間に界紋があるだけが異ふ。

按ずるに、詹氏小辨に云く、椶は毎月一片を生じ、一年間に生えるは必ず十二片であるが、ただ閏月の年に當つてその閏の月に生える一片は、僅にその大半があるだけで、やはり完全な一片でない。吾が家に椶園があつて、毎歳年末にこれを剝いてその都度調べて見たが、その片には中氣の徵がなかつた。

これ等の說に據ると、これが閏月椶皮であつて全瓣のないものである。

○石室奇方――椶櫚は閏年に遇ふと半片を生じ、一个年に十二節長くなり、閏月には半節を增す。

血症を治す。郭大林云く、煆いて性を存して硏り、年陳きものが就中佳し、二三錢を服す。試用して見た結果效驗があつた。王巽初云く、一瓣を用ゐ、燒いて性を存して二服とするもよし。

南天竹

卽ち楊桐である。今は一般に多く庭除に植ゑ、火災を辟けるものだといつてゐる。

綱目の木部南燭の條にはその枝、葉の功用を記載して『苦し、平にして毒なし。泄を止め、睡を除き、筋を强くし、氣を益す。久しく服すれば長生し、饑ゑず、白髮を黑變し、老を卻ける』といひ、幷に上元寶經に、草木を服するの王にして、氣は神と通ず。靑燭の精を食すれば命復た殞ぜずとあるを引いてあるが、いづれもこれを指していつたものだ。しかしその普通日用の功用は概ね記錄されず、その引用した附方の點でも、やはり僅に聖惠方中の風疾、及び誤つて銅錢を呑みたるを治すとあるを採錄しただけで、その他には及んでゐなかつた。故に悉く補つて置く。

○王聖兪云く、烏飯草とは南燭のことで、現に山間の住民が寒食に市中へ賣りに出て、一般家庭でそれを買つて烏飯を染めるものがそれである。南天竹とは楊桐のことで、現に一般に庭除に植ゑ、冬に紅子を結び、それを愛玩するものだ、南燭ではない。古方に用ゐた烏飯草と南燭とは山中に別の一種があるのだ。南天竹をそれに牽强し混淆してはならぬ。この說は道理が明確で從ふべきである。

目を明にし、鬚を烏くし、肌熱を解し、肝火を淸し、血を活し、滯を散ずる。食物には忌むが宜いといふ。

南燭の葉は、味苦し、性は平である。從新に云く、苦く酸し、濇、平である。

子　紅杷子と名ける。八角蝨を治するに、水銀と共に搗爛らして搽れば除ける。また酒に浸すもよし。風痺を去る。從新に云く、南燭子は、酸く甘し、平なり。筋骨を強くし、氣力を益し、精を固くし、容顏のうつろひを駐める。子の白色のものを玉珊瑚と名ける。

【小兒天哮三奇方】霜を經たる天燭子、臘梅花各三錢、水蜒蚰一條を用ゐ、倶に預め貯收し、使用する時に臨んで水で煎じて服す。一劑にして癒える。

【下疳。久しくして潰爛せるを蠟燭疳と名ける】不藥良方――紅杷子を灰に燒いて性を存して一錢、梅花冰片五釐を麻油で調へて搽れば癒える。

【陰莖泄】慈航活人書――紅杷子を燒灰して性を存して一錢に冰片五釐を加へ、麻油で和して搽る。

【三陰瘧】文堂集驗――南天竹を一年隔てた陳き子を取り來つて蒸熟し、一歲の者には一粒の割合として每早朝白湯で服す。

【砒毒を解す】劉霞裳云く、凡そ人が砒を食して垂死なるには、南天竹子四兩を水

に揺つて服すれば立ろに活きる。この方は劉が松江府の官舍にゐたとき親しく試驗したものだ。鮮のもののないときは乾いた子一二兩を用ゐ、湯に煎じて服するのもよし。

葉 眼を洗へば風火熱腫、眵涙、赤痛、及び小兒の疳病を去る。その葉を取つて湯に煎じ、茶に代へて服す。

○郤疫仙方、行篋檢祕——凡そ人のやや頭疼を覺え、身體酸困するは寒邪の感冒である。急にこの藥を服して發散するがよし。經に傳つて變じて時疫と成らしめてはならぬ。この方は多くの人に經驗して異常なる神效を擧げた。烏梅、紅棗各三箇、燈心三十根、南天竹葉三十片、芫荽梗三段、——芫荽がないときは葱白三節をこれに代へるもよし——甘草、麥冬各三錢、小柴胡二錢を水二鍾で一鍾に煎じ、時に拘らず溫服する。微汗して癒える。

【瘰癧の初起】百草鏡——南竹葉、威靈仙、夏枯草、金銀花各四兩、陳酒四壺を隔水で煮透し、一日三服する。半月にして根を除く。每に藥酒を服し、丸藥にして呑むべきものである。

○丸藥の方。殭蠶一觔を炒つて研り、砂糖で和して桐子大の丸にし、毎回一錢づつを呑む。

梗　今は一般に畫眉籠中に置く。鳥風を去る。○筯にして用ゐれば隔食、隔食を治し得る。

査克木

宦遊筆記――塞外に査克木といふがある。叢生して樹の高さは五尺ばかり、皮がなく、枝、幹は清翠で愛すべきものだ。葉は三春の柳のやうだが、然し質は甚だ堅く、いづれも柔條の垂絲がなく、頗る霜雪に耐へる。伐つて薪にし、火を著けると燃えて、形は炭に似て紅焰は出るが烟がない。一寸徑ほどを爐中に入れて置くと、一二日を歴て燼になる。ただ沙漠の地に生えるので、大風に遇つて根株が拔け、それが土に入つても深くなる餘裕がなく、それがために夭折し、久しく經つたものはない。

西北域記――査克木は推河に產する。絲柳に似てゐるが垂れず、皮がなく、霜雪に耐へ色が青い。時に爐に入れて直ぐに燃え、數日にして燼きる。太さは一拱ほど、

高さは一尋ほどあるが、風で拔かれる。それはその地が沙地であり、且つ鹹地なるがために、根が固く著けずして朽ち易いからである。

産難を治す。臨蓐(りんじよく)の時にその木を握れば分娩を容易にする。心痛には灰に焼いて服す。

綠益子

邊志——遼東に産する。樹は高さ一丈餘、その葉は兩兩相對し、盞ほどで黄色の花を開き、花がなくなつてから實を結ぶ。實もやはり兩兩相對し、大いさは木瓜(もくくわ)ほどで綠色である。春生じて夏熟する。人は食へない。悞(あやま)つて食へば、口に入ると齒が屑のやうになつて落ち、舌が漆のやうに黒くなり、口中全體が裂碎して水のやうに出血し、終日物を食へず、十日ほどにして止む。又、能く骨を碎いて泥のやうにする。彼の地では駱駝の初生時にこれを取つてその蹄を潤す。かくすれば千里を行けるが、かくせねば行けない。その性は剛利なること錐のやうで、それで刺せば利(するど)きこと刀、鋸の如くである。凡て角器を作るには必ずこれを用ゐる。

性は烈であつて大毒があり、能く骨を腐し、歯を碎く。外科、方術家に使用するものとなつてゐる。

丁香油

百草鏡——丁香油は南番に產する。これは母丁香から搾取したもので、その油の色は紫で、芳香辛烈である。番地では一般に琉璃の器に貯藏する。もし蓋が密でないと香が外に出て了ふ。粤の澳門に多くある。

○藥性考——丁香油は西番に產する。

氣味は甘く辛し、性は大熱である。關竅に透つて寒を驅る。力は更に丁香よりも速である。胃寒痛を治す。或は少量を滴して煎藥に入れ、或は油を臍上の痛む部分に塗る。

○丹田を暖め、水瀉を除く。塗れば臍を暖めるに膏にして貼る。蠏毒を解するには一滴を薑湯と共に服す。牙に搽れば口臭を治す。

○藥性考に云く、陽を壯にし、腎を煖める。疝痛、陰寒。

〇按ずるに、齊民要術に雞舌香とあるは卽ち母丁香であつて、時珍の所謂『雄を丁香といひ、雌を雞舌香といふ』といふそのものだ。丁香中の雌なるものは獨り大きくして油を取れるが、雄なのものは細小で搾取するに堪へない。予の妻の兄朱放鷴は嘗て粤の地に任官してゐたことがあるが、その話には、丁香油はやはり近代になつて出來たもので、その性は熱にして淫である。凡そ衣服類や裝身具、手廻りの物などに染まると、その氣は數日なくならぬ。近頃では豪貴の家庭で多くこれを珍重し、房帷中の物として用ゐる。色の紫なものを玫瑰と共に水中に滴して攪ぜて見ると、散つてまた聚るものが眞物である。僞物は樟木油といふもので、色はやや淡くして紫中に黃黑色を帶び、氣は辛烈で、鼻に觸れると樟腦の氣がある。沐器や洗衣に滴し、香佩に入れると汗を辟けるものであるが、藥用には入れないといふことだ。綱目には丁香の條下に丁皮、及び根、枝を附記してあるが、油には說き及ばなかつた。或はその當時はまだその物がなかつたのか、有つても一般に中國内に行はれなかつたからかも知れぬ。

臍に塗れば臌痞を散ず。寒を受けて胃の痛むには、好酒で和して服す。

金御乘に云く、胃寒で呃逆し、嘔吐して甚しきには、丁香油を用ゐて中脘に擦り透す。痛痺には痛む部分に擦る。いづれも立ろに效があるもので、試用上極めて效驗があつた。

祝穆試效方——瘰癧を治する化核膏にこれを用ゐるは、その香が烈しくして直に經絡に透り、辛熱にして以て結滯を散ずる點を利用したものだ。

檀香油

藥性考——粵中に出る。商船で持つて來る。

味苦し。惡を除き、胃を開き、吐逆を止める。

肉桂油

百草鏡——粵澳の西洋貿易商人が持つて來る。色は紫で、香は烈しくして肉桂のやうな氣である。或は肉桂の脂だともいひ、或は桂子から搾取したものだともいふが、孰れが事實なるや判然せぬ。

性は熱、氣は猛であつて心、脾に入る。功は肉桂と同じ。

傳信方——各種の瘧を治するに、燈草一莖、約長さ三四寸を用ゐ、水でやや潤ほし、再び肉桂油を塗つて背に貼り、脊風府穴下より肺兪に至つて止り、外を棉紙條で封ずる。臨發の前一二時にこれを行ふべきものである。或は一日前に行へば更に妙である。貼つて後、翌日は發瘧が更に重く、その後漸次に減ずるものである。蓋し風寒、暑濕が盡く提挈されるがために然るのである。

水安息

廣中から出るもので、西洋の貿易商が齎して來るものだ。波斯、交阯、いづれにもある。形は荔支のやうで大きく、外は殼があつて包裹し、皮の色はやはり鮮の荔枝のやうだ。開いて見ると中に香があり、膠漆のやうで黄褐色だ。氣は甚だ馥郁たるものである。この物は、もし開いて全部を使用せぬときは、殘りを外殼に入つたまま碗に入れて置けば走溢せぬが、さなくば五月の梅雨期になるとその汁が自ら滿溢して殼外に出る。殼內に在つたものでも少量に過ぎず、やはり會ま溢出する。や

はり一の奇異な點である。綱目では、安息香の本條に言つてあるものはいづれも乾いたもので、これは樹脂であるといつたが、集解下に、葉廷珪の香錄を引いて、餳のやうなものがあつて、それを安息油といふとあるが卽ちこの種である。瀕湖はまたその功用を詳にしてなかつたが、當今では頗る行はれてゐるものだから、採錄補記して使用者の便に備へる。その殼には絲毫のやうな裂縫があつて、そこから油が走溢するものだから、瀝靑を熬り化して滴して置かねばならぬ。

○百草鏡に云く、安息香に水、旱の二種あつて、水安息は得難いものだ。その香を焚くとき傍に水盆を置いて試みると、その香烟が水中に投じて還結して香となるが、ただ重量がやや減ずるだけのものだ。

○五雜俎に云く、安息香は能く鼠を聚める。その烟は白色で縷の如く、直上して散ぜぬものだ。

辛し、平にして毒なし。心神を通じ、邪魅を除き、蠱毒を辟け、心痛を止め、鬼胎を下し、心の經に入り、腎の氣を通じ、就中房箔を益す。故に龜靈劑にこれを用ゐて陽を興し、反魂丹にこれを用ゐて急を救ふのであるが、しかし大いに眞氣を耗

するものである。凡そ氣虛に火を挾むものは服してはならぬ。火を見ることを忌む。

〇藥性考――水安息香は辛く苦し、性は溫である。風寒、霍亂を除き、腎を煖め、陽を興し、心腹蠱氣、血淋、遺精、鬼交、鬼孕を治し、勞瘵を薰する。

【辟瘟丹】陳杰同生集――紅棗二觔、茵陳を切碎いて八兩、大黃を切片して八兩、水安息五錢を合せて錠にし、每早朝これを焚く。

【子を種む二方】周氏家(一)寶――潮腦を飛升した白霜一兩、麝香二錢、枯礬三錢、龍骨三錢、良薑三錢、五棓子二錢、明雄二錢、水安息、母丁香、酥合油各五錢、官桂三錢、輕粉二錢、紫梢花二錢、大山茨菰三錢を共に細末にし、煉蜜で桐子大の丸にし、蠟丸で封固し、月經後に一丸を納れ、次の日に再び一丸を納れる。種子すること神の如くである。幷に血淋、白帶、陰瘡、陰蝕、楊梅瘡毒等の症を治す。

又、一方。眞川附子一個、重さ一兩二三錢のもの、山茨菰四錢、この二味を童尿を浸透して焙乾して研末し、川烏八錢、五棓子三錢、この二味を共に研末し、水安息五錢、生蟾酥八錢、この二味を共に研り、不麻草烏五錢、明雄五錢、この二味を

(一)寶トアルハ寶ノ誤カ。

共に研末し、官桂五錢、母丁香八錢を共に研末し、酥合油五錢、眞鴉片三錢を共に研末し、紫梢花三錢、蛇床子一兩、倭硫黄五錢、輕粉五錢、右の藥を末にし、白芨五錢を水で煎じたもので共に前の藥を合せて錠にし、交接時毎に津で少量を磨つて莖首に搽る。能く精滑、幷に久しく子を生ぜざるを治し、且つ能く毒を解し、瘡に遇つても傳染せぬ。若し、朝、晝、晩と各一回搽つて久しく中止せねば更に神效がある。前項の方とこの方とを男女同時に用ゐるが更に佳し。或は再び人參五錢を加へるが尤も妙である。

【穿腮起管の年久しく癒えぬもの】許氏方――水安息を搽る。管は化して毒が癒える。

夜蘭

嶺南雜記――粤に産する。道旁の小樹であつて、狀態は木蘭のやうで、また紫薇にも類してゐる。高さは一二尺、葉の大いさは指頭ほどで、頗る藍色を帶び、葉には老いると白い蝸涎のやうな篆文があり、それを鬼畫符と名ける。葉の下に粟米ほ

どの小花があつて、晩になると香が數十歩に聞え、恍として芝蘭のやうである。又、蚊驚樹と名け、暑期に蚊がゐるときこの樹を折つて逐ふと直ちに驚散するものだ。

○粤語——夜蘭は木本で、高さは一尺ばかり、葉は槐のやう、花は粟米ほどで、夜になると蘭のやうに芳香がある。これを折つて蚊を辟けるに用ゐる。門上に挿んで置けば蚊が敢て入らぬ。一名を蚊驚樹といふ。病のときその葉を取つて生で喫ひ、或は水で煎じて用ゐれば、痰を吐して數日にして癒える。葉上に符のやうな篆文があるので、また神符樹と名ける。

○關涵嶺南隨筆に、夜蘭は羅浮の幽谷中に生ずる。香があつて形がない。肉芝と同じく神物であるとあるはこれと同名異物である。

○敍按ずるに、粤志に、歩驚木は、嫩葉に米數粒を和して微し炒り、湯に煎じて飲めば嘔を癒し、寒痰を瀉し得る。花には幽香があつて、歩行してこれに遇ふと往往にして蕙、蘭があるではないかと驚く。故にまた歩驚ともいふのである。永安地方では、嫩葉を乾して京師に贈つて進物にするとあるが、その功用、形狀を考核するに、或は卽ち夜蘭のことではないかと思ふ。

一切の風寒の諸病を治するに、薬を取つて湯に煎じて服す。少頃して大いに痰涎を吐く。或は行路中に寒暑に使され、吐瀉して危篤なるには、數薬を採つて嚼む。或は吐し、或は吐せずして病は癒える。

黎椒

白胡椒、山胡椒、馬思答吉。

邊州聞見錄——川椒はもと黎大所城隅から產出するものが名產であつて、尤も香冽である。大小とも必ず雙び、肉理が細密であつて、罅裂しても子が墮ちない。俗に抱娃子椒と呼ぶ。

四川志——各州縣に多く椒を產出するが、ただ茂州に產するものが最も佳く、その殼の一は開き一は合せるものが尤も妙である。

性は川椒に同じ。薬に入れて尤も效がある。

按ずるに、黎椒は、近頃では眞物が罕にある。他の地から手に入るものは、みなその地方の者が他の產品で僞作してあるので　その功效もやはり僅に相似てゐる位

のものだ。劉少府挹清の話に據ると、眞物は、一二粒を口中に含めば瘴毒を辟け、魚蝦の食毒を解し得るもので、更にまた催春劑にもなる。彼の地方に一種の惡瘡のある妓女があつて、誰もそれに近寄るものがなかつたが、ただ黎椒三粒を呑んでその女と接すれば害を受けず、翌日排便中にあるその椒の內部にその毒が包まれて出るので人の臟腑には入らないのだといふ。故に彼の地でもやはり珍貴なものとされてゐるので、外間に賣り出すことは罕れだといふことであつた。

白胡椒

通雅に云く、廣州から舶載して來る胡椒に玉椒といふ一種がある。色は白く、味は特に他の椒よりも辛い。現に甯波の洋貨店に頗る多くある。その色は雪のやうで、內外共に通じて白いものを上等とする。皮が白く內の黄なるものは劣等品である。魚蝦の毒を解し、房中術の藥劑に入れて用ゐる。

○蓬萊の李金什の話に、外國商人が舶來する白胡椒は、彼の地の者のいふところに據ると、胡椒の嫩いものを用ゐ、生でその皮を去つて曬乾すると、それで白玉の

やうな色になるので、別に他の種類があるのではないといふことだ。物理小識に、胡椒は番國に產し、やはり是も蔓生で白色のものがあるとある。或はこれは華澄茄のことだともいふ。

【胃痛】百草鏡――大紅棗を核を去つて七箇を用ゐ、毎箇の內に白胡椒七粒を入れて線で紮り、好飯鍋上で七回蒸して共に擣き、綠豆大ほどの丸にし、毎服七丸を溫滾水で服す。もし壯實する者の場合には十丸を服する。後に痛が止んで胃中に熱を作し、饑ゑを覺えるとき粥飯で壓すれば平安を得る。これは寒食痰飲もみな治癒する。

【九種の心疼を治す】葉天士方――丁香を頂蓋を去り、廣木香、雄黃、巴豆を油を去り、淨白胡椒各三錢、枳殼、紅花、五靈脂各一兩を共に細末にし、好酒で發して菜子大ほどの丸にし、乾くを候つて瓶內に收貯し、八釐づつを唾津で服す。生、冷、油膩を忌む。半月にして根を除く。

【白痧藥】種福堂方――白胡椒一兩、牙皂一錢、火硝、檀香末、明礬、丁香、蟾酥各三錢、北細辛二錢、冰片、麝香各五分に金箔を量に隨つて加へる。

山胡椒　百草鏡――雲南の木邦土司に產する一種の山胡椒は、色が黑く、顆が大

きく、痛を止め、瘀を破る主效がある。

馬思答吉　五雜俎――西域に產する。椒に似て香が酷烈なものだ。彼の地ではこれを椒に當てて用ゐる。胃を開き、食を消し、積を破り、邪を除く主效がある。

金剛纂

滇志――金剛纂は花が黄で細いもので、土人は植ゑて籬にする。また一種は形が雞冠に類する。

○湧幢小品――金剛纂は天目に生ずる。その樹は長さ三四尺に滿たず、多く屈曲し、春、夏と雖もやはり葉がない。よくその枝に觸れると裾を曳いて前めない。夷緬國にこの種があつて、その剉んだ末を水に漬けるとその水が毒になり、飲めば立ろに死ぬ。それを人瘴といふ。またその力を利用して誘淫の法に用ゐる。

○張洪使緬錄――緬の地に金剛纂といふ木がある。狀態は棕櫚のやうで枝幹が屈曲し、葉がない。それを剉んで水に漬け、暴かに牛馬を甚しく渴せしめてその水を飲ませ、その肉を人に食はすれば必ず死ぬ

○劉魁若の程賦統會——雲南の大侯州に金剛纂を產する。青色で刺桐の如く、最も毒である。

○滇記に云く、金剛纂は、幹が碧色で蝟芒があり、孔雀がそれを食ふ。その漿は人を殺す。この物を草とするは誤である。現に曲江、建水、石屏の處處にある。性は大毒がある。丹術家で材料として用ゐる。丹房本草に、金剛纂は純陽の草であつて、硫を伏す。柳葉藤と共に用うればその功最も神なりとある。

椵樹皮

本草補——泰西に椵樹といふがあり、呂宋にもある。その色は紅く、狀態は杜仲のやうだ。初めある人がその樹皮を取つて切肉數片を包み、そのまま家に歸つて見るとその肉がただ一片に合成してゐたので、始めてその皮が能く肉を合し骨を接ぐものなることと知つたもので、それに因つて椵樹と名けたのである。本草の人參の條下に記載されてある『椵木、音賈』とあるは、この椵の音と斷じて同じくない。或は二種の物なのであらう。有識者に相談して見る必要がある。

斂按ずるに、椵の葉は烏血柑と相似て大いさ團扇ほどあり、鋸齒があり、初生には餅餌を裹んで蒸して食へる。霜後には丹楓のやうに鮮赤色となつて岩谷に照耀する。その皮は柔靱で麻皮のやうだ。烏喇地方ではこれを取つて繩に綯ひ、魚網に作る。水に入れても濡れぬものだ。又、鳥鎗、火繩にもなる。中國にはないものだ。

折傷、胎疵、一切の損傷、肉破れ骨斷ちたるを治す。皮を取つて搗き碎き、酒で煎じて服す。又、渣を患處に敷けば當初の通りに完全に癒える。幼兒の胎中から得て生れた患疵は、それがために皮が開け腸が裂けて腎囊に入り、疼痛忍び難く、また能く一命を失ふものだ。この葉を久しく貼れば皮膜の裂けた部分が自然に復合して永く患が無くなる。但し幼童の年でなければ治癒しない。方は、椵樹皮を用ゐ、或は搗爛らし、或は削片し、油で潤濕して布上に黏して患部に貼り、外を布で牢く腰間に緊縛する。或は半年、三箇月で癒える。

黄葛樹

川槿皮

邊州聞見錄――蜀には黃葛樹が多く、宜賓學宮の前には墻に騎つて生えてゐて、根は未だ地に至らずして合抱してゐるものだ。この樹は某月に種ゑたので、毎歲必ず某月になると始めて芽が出る。藥に入れるには根皮を用ゐる。藥肆中では多くその皮を取つて川槿に代へてある。

○峩嵋山志――嘉樹は羅目縣の東南三十里の陽山江溉に在る。兩樹相對して植ゑられてあり、周圍各二三尺、上に横枝を引いて二丈に亙り、相援き連理して（一）百夫を陰庇する。その名を黃葛といひ、嘉樹と號する。蘇子由の詩に『予の生は江陽なりと雖も、未だ嘉樹に省到せず』とあるは即ちこの樹である。

○益部談資――黃葛樹は、葉は桂に似てやや大きく、團欒として數畝を蔭ひ、冬、春も凋まず、幹は擁腫し、根はみな蟠つて土上に露出し、石崖の側にあるものなどは全く土を藉らうとせずして生えてゐるものだ。蘷之梁の方に最も多いが、惜いかな材用がない。

○按ずるに、王阮亭の居易錄に、雲南に黃果が多く、海棠に似てやや大なるものだ。香は佛手のやうで甘く脆く、梨のやうに津液が多い。蜀に產するものは樹であ

（一）百夫ハ百人ノ意ナリ。

つて結實せぬ。その皮は川槿に類し、やはり能く癬を癒す。現に黄葛といふは、或は音の譌であらう。

疥癬を治するに、その根皮を取つて湯に煎じて浴する。

川槿皮 川中に生ずる。色は紅く、皮が厚くして氣が猛烈だ。孟獲の城にあるものは只一株で、武侯が植ゑて遺したものだと言ひ傳へてある。蟲を殺すに神の如きもので、生でその皮を剝いてその上に蟻を置くと直ちに死ぬ。今ではやはり罕にある。他省の產は土槿皮と名け、薄くして氣が劣るから混用しては用ゐられぬ。現に川地方では多く黄葛皮を用ゐてこれに代へ、それを他の地方へ賣出してゐる。

〇通雅――眞川槿皮は、切斷すると中に絲があり、白茸が杜仲のやうだ。

〇羣芳譜――川槿は色が紅く、氣が厚く、力が優れてゐる。

【癬瘡】楊起簡便方――癬瘡の癒えぬには、川槿皮の煎湯で、肥皂を核、及び內膜を去つたものを浸して時時に擦る。或は汁で雄黄を磨つて搽るが尤も妙である。（また不藥良方にも記載がある）

【頑癬の多年癒えぬもの】活人書――川槿皮二錢、輕粉五分、斑毛七個、大楓子七

粒、河井水を一鍾を共に半に煎じ一夜露し、筆に蘸けて塗る。○また一方では、川槿皮四兩、輕粉、雄黄各四錢、百藥煎四餅、斑毛一錢、巴霜一錢半、大黄二兩、海桐皮二兩を硏つて粉のやうにし、陰陽水で和し、癬を抓損して敷く。必ず自から落ちて癒えるを待つ。

【荷葉癬】活人書――川槿皮を切片し、海桐皮、檳榔各二錢、輕粉一錢半、紅娘子五分を陰陽水に一二日浸し　鵝翎で掃く。もし癢きときは、竹片で刮破して搽る。この藥は三夜露すが更に妙である。

【遍身の頑癬】大楓子四十九箇、川槿皮二兩、斑毛を翅、足を去つて五箇、川椒一錢、輕粉二錢、杏仁三錢、海桐皮二錢を共に末にし、河、井水各一碗で一夜浸し、鵞翎にその汁を蘸けて搽る。

【癬瘡の癒えぬもの】不藥良方――川槿皮を湯に煎じ、肥皂を核、及び內膜を去つてその湯中に浸し、時時に搽る。

【牛皮癬癩】毛世洪經驗集――川槿皮一觔を火を見せぬやうに曬燥して末に磨り、好燒酒一觔で楡蓟四兩を加へて浸し、七日を度とし、時に拘らずその酒を蘸けて搽

擦する。二三十年のものも一年搽れば根を斷つ。もし川槿がないときは土槿を代用するもよし。〇頑癬を治するに、種福堂方では、川槿皮、海桐の皮、尖、檳榔、樟冰、苦參、黃柏、白芨各二錢、雷丸一錢五分、大楓子、杏仁各二粒、木鼈四個を火酒に七日浸し、穿山甲で癬を刮つて少し碎き、その酒を搽れば癒える。〇五仙散。經驗廣集——久年の頑癬、牛皮癬を治するに神效がある。紅粉霜五分、明礬、川槿皮、杏仁各一錢、密陀僧三錢を末にし、一日三回、津で調へて抹する。三日で全癒する。

【粉刺】孫台石方——川槿皮一兩、硫黃二兩、杏仁二兩を皮、尖を去り、輕粉二錢、樟腦五錢、麝香少量を末にし、雞子淸で調へて朝洗ひ晚に搽る。

【祕傳雄鼠骨散】牙の落るを治して重ねて生えしめる。雄鼠骨一具を生で用ゐ、活きた雄鼠一匹を皮雜を剝き去り、鹽水に一時浸して炭火上で炙り、肉が自ら脫落したときその骨を取り、炙燥して衆くの藥の中に入れて共に研つて末にするので、香附、白芷、川芎、桑葉を曬乾したもの、地骨皮、川椒、蒲公英、靑鹽、川槿皮、旱蓮草と共に末にし、牙を擦ること百日すれば復た生え、齒を固くし、奏效せぬとい

ふことなし。

土漆

玉環志——皮は桃樹皮のやうで、人の手に黏著すると腫を發する。もし刀瘡で血が出たときには、この皮を擣いて敷けば止まる。

金瘡出血を止める。

水團花

李氏草祕——溪澗の水に近い場所に生える。葉は蠟梅のやう、樹皮は大葉楊に似たもので、五六月に圓くして楊梅のやうな白花を開く。葉、皮いづれも用ゐられる。

金刃傷、年久しき爛脚瘡を治す。皮、葉を搗いて罨すれば一夜にして痂が著く。（草祕）

蔴櫪果

胎疝を治す。毛世洪經驗集――凡そ小兒の初生に疝を發し、ただ啼哭するだけで病形が現れず、延いて一箇年、二箇年にして始めて疝なることの判明するもので、諸醫も奏效せぬものである。蔴櫪樹上の鴛鴦果一對を用ゐる。その果は樹枝を著けたまま取下して眞假を見分けるもので、一對の果があれば三人を治し得る。荔枝七箇を杵き碎き、平地木三錢と共に煎じて飲む。直ちに瘥えてまた再發せぬ。

千張紙

木蝴蝶

木の實であつて、雲南、廣南府に産する。形は稨豆に似て、その中の片片が蟬の翼のやうだ。灰に焚いて用ゐる。

心氣痛を治す。

按ずるに、千張紙は、滇志にはこれを木の實としてあるが、程豹文の言に據れば、千張紙といふは、仙人掌草を曬乾するとその中心に層層として羅紋をなして心を捲いてゐるものがそれだ。それを拆くと通草のやうな狀態である。故に名けたのであ

る。この物七枚を用ゐ、灰に燒いて酒で服すれば、胃脘痛を治し得るといふ。湯桐崗は、蘇州にあつて、狀態は通草のやうで約そ手の掌ほどの大いさのものだ。曾て丸中に入れて用ゐたが、浸淫惡瘡を治し得るといつた。竝にその說を竝存して參考とする。本草綱目の雜草中にある宜南草は卽ちこれで、形狀も同じく、邪を主り、小兒女が緋絹袋に盛つて臂上に佩ぶれば、惡を辟け、驚を止めるといつてあるが、それが服食し得るものかは判然せぬ。

木蝴蝶　廣中に產する。これは樹の實であつて、片片が輕くして蘆中の衣膜のやうだ。色は白く、蝴蝶の形に似てゐるからかく名けたのである。——四邊は薄くして明だが、中心はやや厚くして甚だ明透でない。子のある壁錢の白膜の狀態に似てゐる。

肝氣痛を治す。二三十枚を銅銚上で焙じ燥して研細し、好酒で調へて服す。

○癰疽に貼る。項秋子云く、木蝴蝶は廣西に產する。さながら蝴蝶のやうで、中心は竹節のやうで色が更に白い。凡そ癰毒で口の收らぬにはこれを貼れば斂まる。

下部の濕熱を治す。

風葉

稗史――梆の桂陽縣には風葉を產し、茗に充てて飮んでゐる。能く頭風を癒すところからかく名けたのだ。また酒に浸してもよし。性は微熱である。前代の人の志、記には記載がない。

性は微熱なり。風を追ひ、血を活す。酒に浸して服するがよし。

拔爾撒摩

坤輿圖說――木の名であつて、白露國に產する。これは樹に生ずる脂膏であつて、極めて香烈なものだ。藥に入れられる。

金刃傷に傅ければ、一晝夜にして肌肉が故の通りに復合する。痘に塗れば瘢がなくなり、屍に塗れば千年腐らない。

楓果

即ち楓實、一名攝子といふもので、これは楓樹に結ばれる子である。外部には栗殼のやうな刺毬があり、內に核があつて孔穴が多い。俗に路路通と名ける。金箔をそれに貼つて、田舍の老婆達が髮に簪し、それで目を明にし、老に宜きものだといつてゐる。浙の臨安縣の役所の後の安樂山に出るものは錢塘楓果と名けて最も佳し。焚けば香の郁しいもので、衣を燻じて瘴疫を辟け得る。綱目には楓脂香にその木皮を載せてあるが、その實を使用することには言及してなかつたから、並に補記して置く。焚燒するには宜いが、湯液に入れて用ゐるといふことはなかつた。その果は冬期になると中に楓蠶子を孕み、春にならんとするときその內部に蠶が生じ、每果中に一個あつて、立夏の後になると蛾に化して飛び去る。藥に入れるには蟲のない陳久なるものを取つて用ゐる。

○槐西雜志――楓香果は、雲南に產するものを焚けば鬼を殺し、邪を去り、瘴濕を辟ける。

瘴を辟け、瘟を却け、目を明にし、濕を除き、經絡を舒べる。拘攣、周身痺痛、手脚、及び腰痛は、これを焚いてその烟氣を嗅げばみな癒える。衣被を熏ずれば蚤

を除き得る。

敛按ずるに、楓果は外刺、皮、肉を去れば圓くして蜂窠のやうになる。卽ち路路通である。その性は大いに能く十二經穴を通ずる。故に救生苦海に、水腫脹を治するにこれを用ゐてあるは、その能く伏水を搜逐するからである。

【癬を治す】德勝堂傳方――楓木上の毬十箇を灰に燒いて性を存し、白砒五釐と共に末にし、香油で上に搽れば直ちに癒える。

【臟毒】古今良方――路路通一個を煆いて性を存して研末し、酒で煎じて服す。

咬人狗

刺　量

臺灣府志――咬人狗といふは、その木は甚だ鬆く、手で搯めば長條が迸起し、(一)火具となる。木の高さは一丈餘、葉は長大で、烟葉に似て毛刺があり、人を刺すと毛孔に入つて甚だ癢く、搔けば紅腫を發して痛み、一晝夜にして止む。

瘰癧を治す。(臺海使槎錄)

(一)火具ハ俗ノツケギ。

刺暈　李氏草祕――その樹は形が烏柿に似て刺があり、人を刺せば直ちに暈をなすところから名けたものだ。

癰腫を治し、疼を定める。樹脳葉を取り、醬板鹽花を入れて發背癰疽を罨する。腫毒の痛み甚しきには、上を罨すれば痛を止める。已に潰れたものと潰れぬものとを問はず、罨すれば癒に至る。

桂子

桂丁　桂耳　桂根

學圃餘蔬――四季花を開いて實を結ばない一種があつて、それが眞の桂である。閩中に最も多く、常に春期中に盛に花を開く、凡そ桂は四季のものの子のあるが眞桂であつて、江南桂は八九月に盛に開いて子がない。これは木樨である。

○臨海志――唐の垂拱四年三月、月桂子が臨海に降つた。芳香で桂の氣味があり、食へば和暢なものであつた。宋の紹定年間に舒某が天台山で月桂子二升を得た。大いさは樟子ほどで皮がなく、色は白玉のやうで雀卵のやうな紋があり、中に仁があ

り、嚼めば芝蔴の氣がある。これを菊に雜ぜ、嚢に入れて枕に作る。石縫中に散佚したものからは十日ばかりで芽が出たが、樹、葉は柔く長く、冬を經ても在つた。盆中に種ゑ込んで置いたが、久くして行方不明になつた。

性は溫、味は辛である。肝を平にし、胃を煖め、胃脘の寒痛に甚だ宜し。○藥性考――甘く辛し。中を溫め、胃を煖め、肝を平にし、腎を益し、寒を散じ、噦を止める。

桂丁 百草鏡に云く、形は吳茱萸のやうだ。廣西、交趾に產する。乃ち肉桂の子である。

心痛を治し、寒邪、胃痛を辟ける。百草鏡――桂丁を研細して三錢を酒で服す。

桂耳 開化山中に出る。これは多年の老樹から蒸出する蕈であつて、表面が紅色だ。土人は採取して血疾を治す。

一切の血症、及び吐血を治す。

按ずると、綱目では桂を五種に分けてあつて、桂といふは卽ち今の所謂交桂、牡桂といふは今の廣桂、箘桂といふは俗に木犀と呼ぶもの、天竺桂といふは浙中の山

桂であつて蓮のやうな子のあるもの、月桂といふは四季花のあるもので、この桂子は乃ち天竺桂の子であるが、綱目には主治の記載がなく、月桂に就てはその子だけを載せてある。桂丁といふは乃ち廣桂の子であるが、綱目ではやはりその主治を言つてない。桂耳に至つては各種の桂にいづれもあるもので、性もやはり略ぼ同じであるが、綱目ではいづれも記載がないから、悉く補記して置く。

○和壽園夜談隨錄——呂司馬季の弟琪は司馬に從つて嶺南に仕官してゐたが、官舍中に頗る幽靜な山院があつて、軒の右側に舊と古井があり、その井の畔に二抱ほどの太さの老桂が二株植ゑられてあつた。ある夏の夜、月光の甚だ皎なとき、琪がその軒下で納涼してゐると、井中から絶えず聲が聞える。欄に凭つてそれを窺ふと、井水は銀のやうに白くして、中に彈子ほどの大いさの紅丸が約そ數十百點ほどあり、その光明は火のやうで、上に向つて相競つて跳躍し、次第に曜になるにつれて次第に高くなり、欄から僅に一尺ばかりのところまで近いた。琪は驚いてその事を司馬に告げ、翌日人夫を使つて井中に下つて探らせて見たが、他に何の異しいものもなく、新鮮なもののやうに赤き桂子數十粒を得たのであつた。琪は戲に井水で

七箇づつを服して七日にして全部を服し盡した。蓋し井中から採り上げたのが四十九粒だつたのだ。後に珙は壽九十九歳に至つて疾なくして逝去した。平原の董太史曲江は珙と親友で、親しくそれを見て誌してある。

○按ずるに、今の月桂子は(一)蓮菂のやうで、鮮なるものは色が青く、乾けば淡黑色のものだ。呂珙の見たものは彈丸ほどの大いさで、新鮮なるもののやうに赤かつたといふから、これとは別の一種なのであらう。天地運度經を調べて見ると、太山の北に桂樹七十株あり、天神青要玉女三千これを守る。その實は赤きこと橘の如し、人これを食ふこと一年にして以て上昇すべしとある。或はこの種であつたのかも知れぬが、惜いかな、珙公の服したのはただ四十九粒だけだつたので、壽命だけを長したものであつたらう。

桂根　年陳く、土に入ること最も深きものを藥に入れて用ゐる。

牙痛に貼れば根を斷ち得る。即ち桂樹根上の皮を取つて用ゐる。

學齋呫嗶——花の中でただ巖桂だけが四出である。予が謂ふに、土の物を生ずるその數はみな五である。故に草木の花はいづれも五なのであるが、ただ桂だけは月

(一)菂ハ蓮實ナリ。

中の木であつて西方に居る。地の四は乃ち西方であつて、金の成數である。故に花が四出なのであつて、金色であり、且つ秋に開くわけなのだ。

樱木

檜に似たものだ。また水松抱木と名ける。生では性が韌いもので、鮮なる間に剝削して履に造り、俗に抱香履と稱へる。潮州に頗る多い。能く濕脚氣を治し、邪風を辟ける。

樟皮

樟梨

この香は樟樹皮である。綱目には樟材、樟腦、樟節はあつて、皮と子とにはいづれも言及してないが、現に山間の住民は率ね皮、子を治病に用ゐて有效である。因て特に補記して置く。

樹皮　年久しき老樟のものを佳とする。天行溫疫、濕毒流注を治し、疥癬を洗し、脚氣を

洗ふ。

【心疼】玉局方——香樟樹皮を取つた時に表面の黑色の部分を去つて內部の第二層の皮を用ゐ、擣き碎いて湯に煎じて服す。直ちに止んで永く再發せぬ。

【刑杖傷】神錦方——樟樹皮を老酒で燉いて味を出し、老公雞冠血で調へて食ふ。痛を止め、血を散するに立ろに效がある。

【霍亂の上吐下瀉】傳信方——樟樹皮一把を水で煎じて溫服すれば立ろに止む。

【脚上に生じた瘡】家寶方——この瘡は個個に小筆管ほどの大いさのものだ樟樹の葉を牙で咬熟し、略ぼ摻つて毒丹を拔き、外に樟樹葉を貼つて連りに換へれば癒える。

敏按ずるに、樟木は、綱目に辛溫といつてあるが、香竄にして性能く濕を除くものだ。故に山居の人の患病に多くこれが宜し。象山縣志に、萬歷中、邑に大疫のあつたとき、一道人があつて、一般人に千年の老樟樹皮を取つて煎じて飲めば癒し得ることを敎へ、幷に樹の老いたるは久しく霜雪を飲んでゐるのでその性が一層清凉であり、疫氣を消し得るものだと言つたとある。これは卽ち藏器のいつた樟木は能

く惡氣、中惡、鬼疰を治すといつた意味である。

樟梨　即ち樟樹の子であつて、處州府遂昌縣の福羅塢、仙人壩、周公園に產し、大なるものが高價で小なるものがそれに次ぐ。予の友人黄慶春は遂昌のある人と親交があつて、その人から樟梨を贈つて來て、心、胃、脘疼を治し、これを服すれば立ろに效があるといつて來たことがあつたが、即ち香樟の子であつて、他の地の產に比較してやや大きい。蓋し千年樟樹に結むだものだからで、效力も神の如くであつた。葉南郊が處州から歸つて來たとき樟梨に關することを詢ねて見たが、その話では、これは子ではなく、樟樹の枝椏の間に結する瘤のやうな狀態のもので、土人はその形が梨に似てゐるところからかく名けるのだといつた。して見るとこれは樟の瘤であるが、しかし予が見たものとはまた類してゐない。姑くその說を並存して再考に俟つ。

磨つて腫毒に塗る。中酒の心、胃疼を治す。いづれも效がある。

榕鬚

藥性考——榕は、葉は大麻に似て、子は冬青のやう、枝幹は拳曲せる木本であつて、稜凹があつて材器とは成らないが奇香を結する。その脂は漆と相似たもので、金を貼り物を膠し得て楮脂に勝る。

○嶺南雜記——榕樹は閩、廣に最も多く、他省には無い。故に紅梅驛以北には榕といふものがないのだ。大なるものは十餘畝を蔭ひ、離奇古怪にして木としての異を備へてゐる。それは體が曲つて梁柱としての役に立たず、理が斜で材用としての役に立たず、質が虚で薪爨の役に立たぬ。莊子の所謂、以て材たらずして壽なるものだ。漳浦黃石齋先生に榕の頌があつて、その木は、年久しきものは常に伽南香を結し、それを焚けば鶴を致く。水際に植ゑればその子が魚を肥す。細枝を曝乾すれば束ねて炬となり、風雨にも滅せぬ。その脂乳は金を貼り物を接ぐべく、漆と同じ。その鬚は藥に入れて用ゐられるとある。

○說文には、㮤を古の松字としてあり、六書故には、古の松字を㮤として、㮤を南方の榕としてある。通雅には、榕は當に別出すべし。木を狀することは稽含に始り、字を分つことは戴侗に始るとある。柳宗元の詩には、榕葉庭に滿ち鶯亂れ啼く

とある。後山叢談には、蔡州の壺公觀にある大木は四垂傍出し、人の能く識るものなし。張戣閒人嘗て蔡に至り、余に話したところでは、榕木は木としては用の無いもので、ただ枝上の垂根を曝して火繩に作り、それを發炮に用ゐる。また物を黑く染め得るといつたとある。贊寧の志にいつてある倒生木、不死樹は、橫枝根を生じ、地に下つて柱の如しといふから、卽ち榕なること疑ない。粤志には、榕の怪は根に在り、上より下に生ずとあり、語に、榕木は倒に根を生ずといつてある。

○粤志——榕は葉が甚だ茂盛し、柯條は節節が藤のやうに垂れ、その幹が三人で抱き圍むほどになれば枝上に根を生じて連綿として地を揷ひ、土石の力を得れば根にまた枝を生じ、幾度もかやうにして枝幹が互に相連屬し、上下なくみな連理となる。その樹は倒に揷木にもなり、根を以て根となし、また根を以て枝となす。故に一名を倒生樹といふ。幹は多くは中が空で堅くなく、用ゐるところがない。離の木であつて、その象は離の大腹のやうである。その中空の處には常に香木を産する。それは炎精の所結であつて、往往にして伽南がある。粤地方ではその香を以て鶴を招來し、子は魚を肥すので多く水際に植ゑてある。その樹脂は金を貼り物を接ぎ得

ること漆と相似たものだ。性寒を畏れ、梅嶺を踰えると生じない。故に紅梅嶺にある數樹の榕は炎塞の界となつてゐる。紅、白、大葉、小葉の數種がある。

○按ずるに、泉州府志に、榕に二種あつて、一種は矮くして盤桓し、その鬚が地に著いて復た生えて樹となる。一種は赤榕と名け、上に聳えて廣大になる。二種は蔭の最も寛廣なものだ。藥に入れるには鬚のあるものを用ゐる。

【齒を固くする】羲復方——牙痛を止める。榕の根鬚を取り、摘み斷つて竹管內に入れ、鹽で塞ぎ滿てて泥で封固し、火で煆いて性を存して末にし、牙の搖動するものに擦る。やはり堅くなる。竹管をば用ゐない。

橺七樹

腹中蚘痛を治す。救生苦海——橺七樹を用ゐ、柴内を取つて炭に燒いて研細し、三錢を酒で服し、或は滾水で服す。且つ能く根を除く。

【破傷風】百草鏡——橺七樹を外面の粗皮を刮り去つて內白皮を取り、搗爛らして酒で煎じて服し、渣を白㽃に和して搗き患處に敷けば自ら癒える。

柏癭

百草鏡——老樹にこれが生ずる。その狀態は瘤のやうだ。柏は性西を指すもので、そこで西方兌金の氣を稟けてゐるところから、能く胃土を平にして胃痛を治する。やはりその氣の相攝服する點を取るのである。

胃痛を治す。

柏子殼

綱目には柏實があつて子殼がないが、近時の奇功散にこれを用ゐてある。砒霜を解すること神の如し。集驗良方の奇功散——柏子殼三錢を用ゐ、炒紅土三錢と共に研つて末にし、雞子淸で調へて服す。服して後に一回寒顫して癒える。重きものも兩服に過ぎず。

松毬

松皮膏

この物は山松に結する卵毬であつて、初には青く、久しくして裂けて鱗甲の形となり、片片に四開して墜ちる。それを兒童が拾つて筐に盈てて市中へ賣りに出る。それを茶爐に炭の代用とすれば茶味を益するものだ。藥に入れるには青く嫩いものを取る。綱目では、松の條下に松實を列して『果部に記載してある』とあるが、果部とは海松子を指したものであらうか。海松子は關東に產し、山松とは異ふ。山松は毬內に老いるとやはり子があつて、粟米のやうに細かで食品にはならないものだ。

【白點風】家寶方――先づ葱、花椒、甘草三味の煎湯で洗ひ、再び青く嫩き松毬に雞子白を蘸けて硫黃と共に粉のやうに磨り、それを八九回搽る。根を除く。

松皮膏 色は琥珀のやうである。西域の伊犂等の地に產する。西域聞見錄に、烏魯木齊は、乾隆四十年に改めて廸化州とした。その地方の者は松皮を取つて膏にし、松樹膏藥といつてゐる。

性は溫である。血を治す。一切の虛怯、勞瘵、婦人の血枯、血閉の諸症はこれを服すれば有效である。

陳海曙の家にこの膏があつて、西域から携帶して來たものであつた。黑きこの漆のやうで、上を松皮が蓋ふてゐる一塊であつた。それは松皮の厚いものは二三尺あつて、その皮を熬つたものが卽ちこの物だといふ。嘗て勞嗽を治するに用ゐ、十日にして病が減じ、また十日にして病が痊え、また十日にして肌が次第に舊に復した。毎服三錢を空心に白水で調へて服す。一个月服すれば癒えぬものなし。

○槐西雜志――田耕野が涼州鎭に仕官したとき、萬年松といふもの一片を携へて歸つた。性は溫にして血を活す。煎ずれば色が琥珀のやうになり、婦人の血枯、血閉の諸症はこれを服すれば多く效驗があつたが、親戚の者共に貰はれて盡くなくなつて了つた。後に予が西域へ往つたときその樹を見たが、それはただ古松の皮で、別の一種のものではなかつた。土人はそれを煮て茶に代へる。やはり微に香氣がある。その最大なるものは、根が千仭の深澗底にあり、枝幹は直ちに山脊に出て、高さはやはり二三十丈になり、皮の厚いものは二尺に餘るものがあつた。奴子玉吳保が嘗てその一片を取つて牀に作つてゐた。意ふにこれは太古時代からのものであらう。萬年なる名稱は殆んど虛稱でない。

羅漢松實

物理小識——羅漢松は潤鞭、厚葉で、樹が老いると實を結び、その實は長さ四五分あり、底は平で上が鋭く、色は紫黑である。乾して藥用となる。本草綱目にはまだ記載されなかつたものだ。

○永甯の僧の話に、羅漢松は、葉の長いものをば長青と名け、能く實を結ぶ。葉の短いものをば短青と名け、實を結ばない。その實はさながら佛のやうで、大なるは雞子ほどあり、小なるは豆ほどのものだ。味は甘くして食へるものだといふ。

汪連仕采藥書——羅漢松、味甘し、腎を補す。その香は肺を益す。心、胃痛を治し、大いに元氣を補す。

一名金錢松。又、徑松と名ける。その皮は一切の血を治し、蟲を殺す。瘴癬には、蘆薈と合せ、香油で調へて搽る。

金松

物理小識——台州に產する。條を垂れ、結子は碧珠のやうなもので、三年に一回

子が熟し、毎年生るものが相續いてその間に璀燦として著いてゐる。

子　腸風を治す。

山西柏油

松油

その色は黑い。紫のものならばその油の滓脚である。その氣は松香のやうなものだ。竹の箸で挑げ取つて見ると絲を懸けたやうに斷れぬものが眞物である。

壁蝨を殺す。凡そ人家の牀几、板壁にこの蝨がゐて困るときは、その縫隙にこの油を滴せば蝨は盡く死ぬ。又、禿瘡に搽る。

【癬を治す】集驗方——眞柏油四兩、黃蠟一兩、雄猪膽一個、斑毛三錢、川椒を目、并に閉口のものを去つて三錢を用ゐ、先づ斑毛、川椒の二味を研末して聽用し、次に生柏油を砂鍋中に入れて熬り、極熱して烟が生ぜんとするほどの狀態とし、然る後に蠟をその油の中に入れて鎔化し、再び猪膽汁を傾け入れ、直ちに火を離して斑毛、川椒二味の末を拌ぜ入れ、竹節で急に攪勻し、その藥を滾水盆上に放在して三

日浸して火毒を去り、然る後に瓷罐中に入れて封固して置いて聽用する。
○諸般の癬の多年のもの、近日の癬毒を治す。生柏油一瓶を患部に塗り、後に年老いた枯桑柴火で熏烤する。內部にゐる毒蟲が死ぬものだ。適當の程度で止める。もし一回で瘥えぬときは再熏すれば癒える。
○又、癬方。經驗廣集――眞柏油で輕粉を調へて塗る。起泡し、その泡が消えて癒える。
狗癬疹を治す。同壽錄――柏油を多少に拘らず用ゐ、鐵杓內で熬り、次に鵓鴿糞を投下して共に和し、香油少量を加へて擦る。
【頭面、耳上の黃水瘡を治す】活人書――眞柏油、眞香油各二兩を共に熬つて膏にして搽る。神の如くである。
【赤遊丹】醫林集祕――蜒蚰十條、茅屋の老壁中から出た土蛛窠五六個、柏油の舊漆器上で刮り下した漆少量を共に搗き、柏油で調へて患部に搽る。立ろに癒える。

松油

その油を取る法は、油のある老松柴を長さ二三寸に截り、燈心ほどに粗く劈いて麻線で茶杯の口ほどの大いさに把ね、一個の水盆に半ば水を入れ、それに一個の碗を坐ゑ、碗の上を一塊の蓆で蓋ひ、蓆には銭ほどの大いさの孔一箇を挖け、再び先に紮つた一把の好松をその蓆の孔の中間に置いて火を點け、少時して再び爐灰でよくその上下週圍を蓋ひ、烟が走出せぬやうにする。烟が走出すればその油が無くなるものだ。かくて適度に溫養すること一二時にしてその油が盡く碗内に滴り入る。その時灰と蓆とを去つて取出して聽用する。一名瀝油といふ。

　疥瘡の久しきに亙つて癒えず、あらゆる藥に効果なきを治す。この油を新浴後に擦る。或は白礬末少量を加へ和して擦るが更に妙である。

茶油　卽ち椶樹子油

枯餅

これは椶樹の子の油である。豫省、閩、粤ではみな茶油を食ふが、椶樹子油なることを知らない。俗に茶油とは呼ぶが、實は茶の子ではないのである。煎熬の仕方

が不熟なものを食へば人をして瀉せしめる。

味甘し、性は涼であり、氣は腥く、色は綠である。腸を潤し、胃を清し、蟲を殺し、毒を解す。生で食つてはならぬ。燈に燃せば目を益し、髮に抹すればふけを解す。

枯餅 藥性考に云く、餅でよく衣を浣ふ。垢を除いて最も淸潔になるものだ。燒灰を瘡に敷く。また積を下し得る。風瘙癢を洗ふには皮、葉を用うるがよし。

杉木油

經驗廣集——杉木油を取る方法がある。碗の面に紙を糊付けてその碗に杉木屑を堆く盛り、炭火をその屑の頂に置いて燒き、少時して火が將に紙に近かんとするとき鐵筋で抹し去り、かく數回燒いてから碗を開いて看ると油汁が碗内に溜るのである。

一切の頑癬を治す。先づ穿山甲で刮破し、軟かな羊毛筆に油を蘸けて塗る。甚だ疼痛が加るときは半日間停めて再び塗る。癬は自ら結痂して癒える。已に破れてゐ

るときは必しも刮破するに及ばない。癬の薬は極めて多いが、都てこの物に及ばない。眞に神方である。

清明挿簷柳

清明の日に屋簷下に挿んだ枯柳枝の南に向つたものを薬に入れる。

物類相感志――清明楊柳は能く醬醋の潮溢を止める。

【甜瘡】濟世良方――清明に挿んだ柳枝を焼いて性を存して一錢、銀硃七分を共に研り、再び飛礬一分を入れて傅ける。

【小兒の胎火で尿せぬもの】濟急方――凡そ初生小兒の小便不通は、胎中の熱毒がまだ化せぬのである。寒、涼、金石の劑を用ゐてはならぬ　ただ須らく清明に簷に插んだ柳枝の南に朝せるものの一握を湯に煎じて服するがよし。直ちに尿するものである。大人の小便閉にこれを服しても效がある。

(一)尿梗を治す。周子象方――清明插屋簷下枯柳一大把を折り碎いて湯に煎じ、桶内に傾け入れてそれに坐り、被で周圍をかこふて熏ずる。片時にして通ずる。その

上で再び內服する。

【白濁】盧復の芷園臆草——清明に插した柳條を煎じて白濁を治す。蓋し勢は肝の苗であり、柳は卯木であり、同類であつて、渾濁の色と淸明の氣とが相待つのである。藥を用ゐるにはかやうな恰好な事實がある。

【下痢後に醃魚水と成つたもの】これは險症である 慈惠小編——清明に人家で簷に插んだ柳の葉を取つて來て湯に煎じて服す。もしそれで止れば救ひ得る。發病後多くの日數を經ずして醃魚水を下す年少の患者ならば治癒の見込があるが、老年の患者では難治である。年少者は勞傷の症肉で化成するので、血水が平和調理して十中の二三は挽囘し得るのであるが、年老者は血氣が久しくして衰弱と成るからこの症と成るので、神仙でも治し難い。

柳椹

柳椹　柳葚

これは柳花がまだ開かぬ時にその枝が垂下して椹のやうな形になつたものだ。所

謂柳蘣であつて、淡黄色である。花が出てからでは用をなさぬ。綱目には柳華があつて柳椹がない。別錄に柳蕢があるが、或はこれをいつたのかも知れぬ。

目を明にし、風を驅り、筋骨を壯にし、齒牙を堅くする。崎嶁神書に柳椹牢牙の法といふがあつて、柳椹を牙に揩ればその宣露を去り、諸風が生ぜず、目を明にし、顏の衰ひを駐め、髮を黑くし、耳を聰くし、筋力を壯にし、壽を益し、身を輕くするとある。

○急救方――柳椹を陰乾して末にし、日にそれを牙に擦れば、風を去り、目を明にし、鬚を烏くし、齒を固くし、久しく用ゐて怠らねば金石を咀めるやうになる。

柳屑　即ち空心柳樹中の屑である。

【濕氣腿腫を治す】慈幼筏――淮陰の地方は卑濕であつて、その地の人民は粗腿のものが多い。偶〻一法を得て治療に用ゐて見るに甚だ效があつた。空心柳樹中の屑を取出して細に篩ひ、鍋に入れて炒熱し、臭泔水で灑濕してまた炒り、麵少量を加へて拌勻し、熱せる內に取つて腿上に敷き、水の出るを候つて再び敷く。數囘にして自ら癒える。

柳蕈　陳氏筆記に云く、柳樹上の蕈である。煎じて服すれば心痛を治す。

檉柳

俗に西河柳と名ける。性の最も透發するものだ。綱目には、檉柳の條下に、その枝葉は痞を消し、酒毒を解し、小便を利すとあるが、疹瘖を治するに用ゐることには言及してなかつた。

○宏治紹興府志――檉は俗に西河柳と呼ぶ。その葉は甚だ細く、桐に似て香しい。天候が雨を催すときに花を生ずるもので、試むるに多く驗を得た。

○本草匯――檉柳は甘にして土の氣を得、鹹にして水の氣を得てゐる。故に能く血分の毒を解し、痞を消し、便を利するがその本功である。近世では往往これを以て痧疹熱毒の出ぬものを治するに用ゐて發散するものとしてゐるが、何人からさやうな說が出たものか判らない。

○本草乘雅の檉柳、繆仲淳本草經疏にこれを敷衍して、以て痧疹を治すものとしてあるが、これは獨りその能く通ずる點を取つただけではなく、又、その象形を取

つたのだ　疹も三たび顯れ三たび隱れる。三の三乘、卽ち三三九であつて、烹てそれを九臟に應ずとしたのである。

○芷園臆草――檉は一歲に三たび花を開き、一日に三たび眠つて起きる。自ら一家を成す獨特のもので、四季に從つて生じ長じ收し藏するものと同樣な經過を辿るものでない。五行に超越して純二氣のものであり、殺機がなくてただ生機のみのものだ．且つ雨は陰陽の氣が和するを以て作るものであるから、それ等の關係も推し測られるであらう。ただ氣魄が尠少だから大道を以て載するわけに行かぬのだ。靈樞に、陰陽二十五人の外に陰陽五人がある。これは陰陽和平の人に屬するものなわけで、又、陰陽自和の汗を啓くわけになるのである。

逢原に云く、檉柳は、特に陽明に入るものだ。故にその功力は專ら痲疹を發するにあり、兼ねて酒毒を解し、風を去るのである。煎湯で風症で身の痒きものを洗浴すれば效がある。

性は平にして疎散し、風を驅り、表を解し、斑疹、痲瘖の出ぬものを治す。經驗方――或は風に因つて閉するものには、倶に西河柳の葉と櫻桃核とを共に湯に煎じ

て洗へば透出する。

○救世苦海――草痧藥方にこれを用ゐ、又、肝天青蓮散にこれを用ゐてある。

○急救方――小兒の痧疹が出ずして喘嗽し、煩悶し、躁亂するを治するに、西河柳葉を風乾して末にし、四錢を水で調へて頓服すれば立ろに定る。

○疹後の痢。從新――西河柳葉を末にし、砂糖で調へて服す。

○疹が發して透らず、喘嗽し、悶亂するには、西河柳を湯に煎じ、渣を去つて半溫め、芫荽にその水を蘸けて擦る。但し頭、顏を洗つてはならぬ。竝に夜間洗ふことを忌む。蓋し痧疹は晝發して夜斂まるものである。乳母、及び兒がその上で西河柳を煎じて服す。

【酒積で病と成つたもの】良方集要――西河柳を曬乾して末にし、一錢づつを溫酒で送下する。

桑癭

鐵扇子　桑榾柮　桑葉滋　桑油

百草鏡――桑が老いると樹に瘣を生ずる。その狀態は瘤のやうなものだ。刀で斫下して陰乾して藥に入れる。

風痺、諸濕を去る。酒に浸して用ゐれば胃痛を治す。（百草鏡）

鐵扇子　百草鏡――桑葉の二番目の桑を採つては用ゐられない。第一番目の葉を採る。その二葉は力が完全であつて、大雪後に至つてもなほ枝上に靑く、或は枝上に黃枯するが、いづれも用ゐられる。大雪に壓されたものをその翌日雪が晴れたとき採下し、線で穿つて戶上に懸けて陰乾する。その色は多くは靑黑色で、風が吹くと鐵器のやうな聲がするから鐵扇子と名けるのである。冬至後に採つたものが良し。

腸風、目疾、咳嗽、盜汗を治す。（百草鏡）一切の天行時眼で風熱腫痛し、目澀眩赤するを洗ふ。鐵扇子二枚を取り、無油茶碗一箇の蓋のあるものを用ゐてその中に鐵扇子を入れ、滾水半盞をそれに沖してよく蓋をし、湯が溫み、その色が黃綠で濃茶のやうに味の出るを俟ち、然る後に眼を洗つて拭ひ乾し、一二時を隔てて再びその藥汁碗のまま隔水で頓に熱して再び洗ふ。每日三五回洗へば癒える。この水一盞で三四十人を洗へる。（養素園驗方）

【中年の眼目昏花】眼科要覧の復明散——霜雪を經た桑葉を用ゐる。臘月に樹に著いてゐて落ちぬものに限る。甘菊、側柏葉、荊芥穗、桑白皮と共に用ゐ、眵涙あるものの場合には艾葉、蒼朮を加へ、發癢するものには赤芍、川椒を加へ、粗き末にして等分を和勻し、湯に煎じて熏じ洗ふ。ただ紅腫してゐるものだけは洗つてはならぬ。

【風眼で涙の出るもの】不藥良方——臘月に落ちない桑葉を湯に煎じ、日日に溫めて洗ふ。或は芒硝少量を加入する。

桑榾柮　これは多年の老桑で數〻その嫩條を伐り取られ、その枝頭長く拳のやうになつてゐるもののことである。

【膈症を治す】梁侯瀛集驗方——老桑榾柮を紅く燒いて性を存して末にし、好酒で送下すれば癒える。

桑葉滋　鮮の桑葉を摘取つてその葉筋を開いて見ると白汁がある。それを桑葉滋と名け、また桑脂と名ける。綱目には、桑葉についてその使用を廣く載せてあるが、ただこれだけは記載してない。

性は微寒、味は苦し、天絲が眼に入つたときにこれを點ける

山海草函——桑葉滋は眼に點け、蜈蚣咬を治す。

【乳癰を治す】集聽——桑葉を第一番目と二番目とに拘らず摘み採り、半段を去つて後半段から取つた脂を三分、黄柏八錢を水で煎じ乾して三分だけを用ゐ、飯鍋で一回蒸し、夜中一夜露して患部に塗る。爛れて骨の見えたものでも能く口を收めて平復する。

小石癰。今は一般に紮馬疔と呼ぶ。錢峻の經驗單方に云く、小石癰は、二蠶桑葉を採つて滴下する滋水を點ければ癒える。

○癭瘤を消す。秋泉祕方——蝌蚪一錢、蛇脫で泥を球に包んで煆いて末にして三分、鬼饅頭滋を乾して一錢、桑滋を乾して一錢、乳香、沒藥各三分、麝香一分を共に細末にし、飯を和して搗いて錠にし、使用する時に臨んで再び鬼饅頭滋で化開し、雞翎で患部に搽る。一夜を過ぎれば消く。

桑油　萬氏家抄に桑油を取る法がある。鮮の桑木を搥き碎いて缾に裝入し、一箇の瓶でその口を蓋ひ、倒に土中に埋めて糠火で煨く。油が自ら滴下する。それを礶

中に貯へて聽用する。

小兒の身面爛瘡を治す。輕粉、雄黃各五錢、猪膽一箇、滑石一兩、硫黃五錢、穿山甲十五片を炙き、鳳凰退を燒いて性を存して五錢を末にし、桑油、猪膽汁で調へ、絹で包んで擦る。

伽𠋆香

今は俗に奇楠と書き、乘雅には奇南棧香と書いてある。棧とは木速香の名であるが、廣地方ではやはり奇南を呼んで棧といふ。名は同じだが香は異るものだ。粵海香語――伽𠋆は海上の諸山に雜出する。凡そ香木の枝柯の竅が露れたものは木が立ろに死ぬが、本のまだ生存するものは氣性がみな温なるところから大蟻に穴を明けられ、大蟻が食つた石蜜をその中に遺漬し、歲久しくして漸浸するので木蜜の氣を多く受け、凝つて堅潤なものとなると伽𠋆に成るのである。その香は、木がまだ死せず蜜の氣がまだ老いぬものを生結といひ、上等品である。木が死して本が生存し、蜜の氣が枯根に膏し、餳片のやうに潤ふたものを糖結といひ次位の品である。歲月

を經ることなほ淺くして木蜜の氣がまだ融化せず、木の性が多くして香味の少いものを虎斑金絲結といひ更にその次位である。その色が鴨頭のやうに綠なるものを綠結と名け、掐んで見ると痕が生じ、釋けば痕が合し、按ずれば圓く放せば方になり、鋸けば細屑が團になるものはまた油結と名け、これは上の上である。伽楠はもと沈香と同類であつて陰と陽とに分れ、或は、沈は牝であつて、味は苦くして性は利し、その香を含藏したものを燒けば芳烈である。これは陰を體とし陽を用とするものだ。伽楠は牡であつて、味は辛くして氣が甜く、その香は勃發して性は能く二便を閉する。これは陽を體とし陰を用とするものだともいふ。然して洋伽楠を以て上とし、占城に產したものは剖けば香が甚だ輕微であるが、しかし久くして減じない。瓊に產したものは土伽楠と名け、狀態は油速のやうで、剖けば香が特に酷烈である。然し手の汗で沾濡すると數月間著いてゐるものだから、必ず淸泉膏か蘇合油で濯はねばならぬ。或は甘蔗心で貯藏し、白蓼葉で苴んで土中に數个月瘞め、日中にやや暴せば後に香魂が復する。占城の產は靜にして常に存し、瓊の產は動にして散じ易い。靜なるものは神を以て行り、動なるものは氣を以て使となる。貯藏するには、

錫で匣を作り、中に一槅を作つて多く竅を明け、その下には蜜を入れその上に伽楠を入れ、薰炙して滋潤せしめ、又、伽楠末で養ふ。他の香末を用ゐては香しくならない。その本香でその香魂を返らしめるので、微塵ばかりを入れて置いてもその元が復するものだ。それは精多くして氣の厚いものだからである。普通の場合には水を見せてはならず、燥せしめてもならぬ。風黴濕土で貯藏するもので、否ざれば香氣が耗散するものだ。

○本草乘雅に云く、奇南と沈とは同類で、樹に因つて牝牡が分れて陰陽、形質、臭味、情性に各〻差別がある。その沈に成るの本は牝であり陰であるところから、味は苦く厚く、性は通利して臭く、含藏して燃けば臭が一層勝れてゐる。陰が體であつて陽が用であり、精を藏して起つことが亟である。南に成るの本は牡であり陽であるところから、味は辛辣で臭氣が顯發し、性は禁止であつて能く二便を閉する。陽が體であつて陰が用であり、外を衞つて固くするものである。等級の分け方では、黄棧の品は四品となり、結狀育てゐるの四十二は同様であるが——沈香に四十二品がある。——ただ牝が多くして牡が少く、獨り奇南だけが世間で最も高貴のものと稱さ

れてゐる。卽ち黃棧の二等のやはりこれに因つてその上下を別け得るのである。沈の本は黃熟すれば固坎が端しく棧透が淺くして材が白く、臭氣も散じ易い。奇の本は黃熟すればただ棧透してゐるだけでなく、黃質邃理で猶ほ熟色が加はり、遠く生香に勝り、爇炙すれば十日餘經つても尙ほ裊裊として消え去らぬものだ。棧とは奇の南方から渡來するもので、重きものを金絲といふ。その熟結、生結、蟲漏、脫落の四品を統て奇南結と稱するのではあるが、四品の中にまた油結、糖結、蜜結、綠結、金絲結の區別があつて、それぞれ生たり、熟たり、漏たり、落たり、井然として秩序がある。大部沈香の重ずるところは質にあるので、故に通體が香と作り、水に入れると沈む。奇南は、結は同じく四品でもただ味が極めて辛辣なだけでなく、舌に著けば舌が痲木し、よく視ると四結の中にいづれも必ず木を抱いてゐて、油といひ、糖といひ、蜜といひ、綠といひ、金絲といひ、色はさうなつて生じてゐるが、その成立の跡は逈に別である。奇南なる一品は本草には記載がなく、後世世間では僅に房中術や佩帶する香具として、その氣臭を取つて希奇なものとして尙び用ゐるが、その形味は想ふに更に特異なもので、沈は力を以て行つて止を行るを用とな

し、奇は力を以て行つて行を止めるを體となす。體中に用を設け、用中に體を具す。牝牡、陰陽の互呈先後の關係のあることが默會し得る。

○宦遊筆記——㑮は一に琪楠と書く、粤東、海上の諸山に產する。卽ち沈香木の佳なるもの、黃蠟沈であつて、香木の枝柯に竅が露れてゐると大蟻がその竅に穴を作り、蟻が石蜜を食つて歸つて香をその中に遺し、歲久しくして漸漬して木に受ける蜜の氣が結して堅潤となつて香が成るのである。香が成ると木が漸次に壞れ、その近傍の草や樹は咸く枯れる。生結といふ紅くして堅いものがあり、糖結といふ黑くして軟なものもある。瓊草にも土伽㑮といふ白質に黑點のあるものがある。現に海南地方で沈、速、伽㑮を深山中で取るのであるが、蟻封の二三尺高さになつたものを見付けてそれを挖るとその下に必ず異香がある。南方の地の香品は數百種を下らないが、然し諸香は賦性が多く燥烈なもので、日久しく薰燒すれば能く人の髮を白くし、血枯せしめるのであるが、ただ伽㑮だけは香氣が溫細で性甚だ人を益する。而るに范石湖の桂海香志に獨りこれに記載し及ばず、(一)寶鴨金猊の間に一韻事を少いたのは如何なることだらう。但し佳なるものは近頃ではやはり得難い。

(一)寶鴨金猊トハ香爐ノ形、卽チ香爐ニ焚爇シテ妙趣ヲ味フコトナリ。

○陳讓の海外逸說——伽楠と沈香とは並生するもので、沈香は質が堅く、彫剔すると刀で竹を刮るやうであり、伽楠は質が軟で、指刻すると錐で沙に畫くやう、味は辣で脂があり、嚼めば牙に粘り、その氣は上昇する。故に老人がこれを佩れば便尿を少くする。上等品をば鶯哥といひ、鶯の毛のやうに綠色なもので、最も得難いものとなつてゐる。次は蘭花結といひ、色は微綠で黑い。また次は金絲結といひ、色は微黃である。更にそれに次ぐは糖結といひ、黃色のものがそれである。下等品は鐵結といひ、色は黑くして微し堅い。いづれも各ゝ膏膩がある。匠人は雞刺木、雞骨香、及び速香、雲頭香の類に伽楠の液屑で澤をつけて僞物を作る。

○物理小識に云く、奇南と沈とは同類で自ら陰陽に分れ、沈は牝であつて、味は苦く性は利し、その香を含藏して燒けば更に芳烈であつて、陰體陽用である。奇南は牡であつて、味は辣く、舌に沾れば麻木し、その香は忽發して性能く二便を閉し、陽體陰用である。その品には綠結、油結、糖蜜結、金絲、虎斑等があり、鋸けばその屑が團になる。船來のものが佳し。

○東西洋考——交趾に產する奇南は、手の爪で刺すと中に入るが、爪を引き出す

と香の痕が復た合する。又、奇楠香油といふものがあるが、眞物は得難い。今は一般に奇楠香の碎片を油の中に漬け、蠟で煮つて作る。微し香氣はあるが、これは僞品である。

黎媿曾の仁恕堂筆記——柬埔寨は日本の支國であつて、夜中に奎宿が睹えない。國人は多く象に騎る。奇楠を産し、その奇楠を取る法は、國人が豫め犧牲物を供へて密禱し、有無を卜つてから密林中に走り入り、樹頭に小兒の話聲の聞えるものを見付けて急に斧を加へて返る。遲れると鬼が出てそれに搏たれる。隔年に一回往つて取るのだが、それを取ると先づ王、及び三優——馬(マ)といふやうに讀む。彼の國の國政を專にする將軍である。——に獻上する。十分に洗ひ剔つて視て上等品なれば存分にその値に對する代價を與へられ、二等品以下のものは販賣することを許可される。

○査浦輯聞——榕樹の千年のものには、その上に伽倫香を産する。

金立夫の話に、盛侯が粤海監督となつたとき、上等の伽倫を入貢させるために十三洋行に命じ、外洋の各處で購求させたが、一年餘かかつて竟に佳品がなかつた。その時の話には、ただ舊器物中に還つて有るので、所謂油結といふは色が綠であつ

て、掐めば痕が生じ、釋けば漸次に合する。今は海外諸山いづれにも得難い。卽ち占城に產する香は氣が輕微だが久くして減ぜず、冬寒には香が藏れて春暖に香が發し、靜にして常に存するものがそれである。蜜結といふは嗅げば香が甜く、その味は辛辣である。手に取つて見ると柔嫩で體の輕いものを上とする。上品は現今ではやはり罕にある。その熟結、生結、蟲漏、脫落の四結ある中にも、いづれも必ず木を抱いてゐるものを油といひ、糖といひ、蜜といひ、綠といひ、金絲といふ。その生結なるものは紅くして堅く、糖結なるものは黑くして軟い。或は黃、或は黑、或は黃黑相兼ね、或は黑質白點花のもの、色それぞれに生ずるもので、その成立は迥に別である。現に粤地方で產するものは東莞縣產の女兒香と相似たもので、色は淡黃、木は嫩くして滋膩でなく、質の粗鬆なもので、氣味が薄く、久しく貯藏すると香しくなく、香液府で養つて置かねばならない。寶貴とするに足らないもので、藥に入れての功力もやはり薄いから識者は注意を要するといふことであつた。

味辛し、性は斂である。これを佩びれば二便を縮し、脾を固くし、腎を保つ。湯劑に入れれば能く精を閉し、氣を固くするところから房中術に多くこれを用ゐるが、

實は氣脫して必ず陷症となることに氣がつかずにゐる。魂を留め魄を駐め得るもので、瀕湖の綱目には、香木類に三十五種があり、質汗の返魂など奇怪なものまで捜求して完備してあるが、獨りこの香だけを遺したのは何故であつたらうか。

○藥性考――伽倩は味辛し、氣を下し、惡を辟ける。風痰閉塞、精鬼、蠱著。竅を通じ、神を醒し、邪風が追卻する。十香返魂丹中に配藥するは、香中に辛辣を帶ぶるからである。紅く堅きものが佳く、それに次ぐは黑く軟きものである。虎斑、金絲に至つては、いづれも木性が雜つてゐる下品である。

奇南香を貯藏するには、錫の匣に蜜、蘇合を入れ、竅を鑿けて隔てて置く。それで潤ふてゐるものだ。もし枯けたときは白蕚薬で苴んで土中に數月瘞めて置けば復する。日中に少し暴せば尤も香しくなる。

【忍溺法】物理小識――伽倩結の末を膏にして會陰の穴に貼れば尿が出ない。

特迦香

五雜俎――弱水の西に出る。形は雀卵のやうで色は頗る淡白である。これを焚け

ば邪を辟け、穢を去る。鬼魅はこれを避ける。博物志記載の漢の武帝が西使香を焚いたところが、宮中の病者が盡く起つたといひ、徐審が鷹嘴香を得て焚いたところが、その一家だけが疫疾に罹らなかつたといふはこの類のものかも知れぬ。

邪を辟け、疫を去り、魂魄を安じ、驚悸を定める。

氣結

交趾、眞臘、占城、瓊海等の地に產する。單斗南云く、これは伽倘香の樹中の腹の空なる處に結するもので、伽倘の芬烈の氣を藉り、日月雨露の精を得て凝結して成つたものだ。故に氣結と名ける。形もやはり香塊と同じだが、酥潤、鬆膩であつて甚だ堅くない。大體に於て、伽倘はその質を得、この物はその魂を得たもので、やはり天生黃は湯泉に出て硫の氣に熏ぜられて結成するやうなものである。然し頗る得難いもので、世間に多く見られない。

噎膈を治す。一二釐を酒に磨つて服す。嚥を下れば開く。

飛沈香

査浦輯聞――海南人が香を採るに、夜間香林下に宿して、その内の樹の光のあるものを望み見ると、直ぐに斧で斫りつけてその場所の記標とし、曉に伐り取ると必ず美き香が取れる。又、光が某樹から某樹へ飛び交すものが見えることがある。それは雌雄相感ずるものだ。やはり斧で痕をつけて置いて取ると飛沈香が得られる。功用の更に大なるものだ

この香は能く陰陽の二氣を和し、升すべく降すべく、外は皮毛に達し、内は骨髓に入り、血を益し、目を明にし、絡を活し、筋を舒べる。

方輿志――黎居の五指山に生ずる。山は瓊州に在る。山中に産するものには沈香、靑桂香、雞骨香、馬蹄棧香があつて、同じく一本のものである。その本は頗る椿、及び欅、柳に類し、葉は橘に似て花は白く、子は檳榔のやうで大いさは桑椹ほどのものだ。交州人はこれを密香といふ。これを取らんとするときは、先づその積年の老根を斷つて置く。歳を經て皮幹が朽爛しても木心と枝節との壞れぬものが即

ち香であつて、堅く黒くして水に沈むものは沈香であり、細枝の堅く實して爛れぬものが青桂であり、半沈み半浮くものが雞骨であり、形が馬蹄のやうなものは馬蹄であり、粗きものが棧香である。

地臘香

黄蔘珠輪の絶句に云く、石火平分す地臘香。註に云く、地臘香は哈密に產する。

蚤、蝨を辟け得る。

蚤、蝨を辟ける。

金雞勒

査愼行人海記——西洋に金雞勒と名ける一種の樹皮がある。これを瘧を治するに用ゐれば一服で癒える。嘉慶五年、予の親戚中の晉齋が粤東から歸つてこの物を携帶して來て、取り出して見せてくれたが、それは細枝で中の空になつてゐるもので、さながら骨を去つた遠志のやうなものであつて、味は微し辛かつた。能く營衞に走

達するものだといふことであつたが、大體に於て性は熱であり、專ら氣血に捷行するものであつた。

【瘧を治す】澳番で相傳へていふ。何の瘧たるを論ぜず、金雞勒一錢、肉桂五分を共に煎じて服す。壯實せる人ならば金雞勒を二錢一服として用ゐるがよし。直ちに癒える。

【酒を解す】湯に煎じて服す。咽を下れば醒める。やはり澳番での言ひ傳ひである。

臭梧桐

臭牡丹

人家の牆砌下に甚だ多く生える。一名芙蓉根といふ。葉は深綠色で、大暑の後に花を開く。紅くして淡く、芙蓉に似て苞があつて內の蕋を外から包み、花は白い五出で瓣が尖つて蒂が紅く、霜が降つて後に苞が紅くなるのだ。中に紫翠色をなした實がある。

○百草鏡に云く、一名臭芙蓉。その葉は圓く尖つて甚だ大きくなく、搓めば氣が

臭い。葉上に紅筋がある。夏花を開き、外に紅苞があつて簇を成し、色は白く、五瓣である。結實は青くして豆のやうに圓く、十一月に熟して藍色になる。花、葉、皮いづれも藥に入れる。

○周延園云く、臭梧桐は一年に三月、十月の二回花を作す。若し葉に紅筋がなく、搓んでも臭くないものならば違ふ。

○學圃餘疏――臭梧桐は、吳地には野生し、花の色は淡く、植ゑてゐるものはない。淮揚地方では大樹になり、花は微紅なるもので、縉紳家で中庭に植ゑてゐる。或は後庭花といふ。ただ閩中だけはこの花が鮮紅であつて通常のものと異ひ、能く百日間花が開いてゐるので百日紅と名ける。花は長鬚を作してゐる。やはり吳地のものとも同じくない。園林中にこれを植ゑてあると、灼灼として低い墻の上に出て見える。深澗中に生えたものは、淸泉、白石と相映じてゐる。永嘉地方ではこれを丁香花といふ。

汪連仕采藥書――秋葉を俗に八角梧桐と呼び、味が臭いのでまた臭梧桐と名ける。根皮を取つて搗いた汁は膠のやうで土阿魏といひ、能く筋を寛にし　血を活し、痞

を化し、癰を消する。

群芳譜——臭梧桐は南海、及び雷州に生じ、近海の州郡にもある。葉は大いさ手ほどあり、三花尖を作して長く青く彫まない。皮は梓のやうで白くして堅く靱く、繩になり、水に入れても爛れぬ。花は細く白く、丁香のやうだが臭味が甚だ美くない。遠く觀るがよし。人家の園内に多くこれを植ゑる。皮は藥に入れられるもので、採取に一定の時期はない。

敍按ずるに、臭桐と梧桐とは家、野の區別があつて、家生のものは樹に成つて高く大きく、野生のものは本が小さくして樹とならず、三四尺に過ぎず、花の色は粉紅で、やはり大紅、純白のものはない。二種俱に藥に入れられるもので、功用もやはり相近い。

獨脚楊梅瘡を治し、鵝掌風、一切の瘡疥を洗ふ。湯に煎じて汗斑、濕火腿腫の久しく愈えぬものを洗ふ。蒼閭子と共に酒に浸して服すれば、幷に能く一切の風濕を治す。痔瘡を止めるには酒で煎じて服す。臁瘡に貼る。搗き爛らして餅にし、桐油を加へて貼れば神效がある。

【半支風】百草鏡――葉を根を連ねて取り、風の當る廊下に掛けて吹乾し、葉を灰に燒いて瓶中に入れ、毎早朝三錢を服して酒で呑む。

○又、邢虎臣驗方――臭梧桐の葉、幷に梗を曬燥して末に磨り、共に二觔を白蜜一觔で丸にし、朝は滾水で服し、夕は酒で服す。毎服三錢。神に過ぎたる效驗がある。

【半邊頭痛を治す】川椒五錢、臭梧桐葉二兩を用ゐ、先づ桐葉を黄に炒り、次に椒を入れて再び炒り、火酒を灑いで鍋の中で拌和し、取起して綢布に捲き込み、痛處に紮り著け、熱酒一碗を飲んで寢具で頸を蓋ふて睡る。汗を出して癒える。

【一切の内外痔】○急救方――臭梧桐葉七片、瓦松七枝、皮硝三錢を湯に煎じて熏じ洗ふが神效がある。

花【風氣頭風を治す】集聽――凡そ頭風には、臭梧桐花を陰乾し、灰に燒いて性を存して末にし、毎服二錢を就寢時に酒で服す。三服して癒えぬものなし。

【痢を止める】必效方――隔年の臭梧桐花を湯に煎じて服すれば癒える。

葉【臌脹疝を消す】救世苦海――臭梧桐葉一百片を湯に煎じて服す。三四回

【疰心痛】華玉先試效の方――臭梧桐葉を一歳に對して一片づつ、歳若干に葉若干を用ゐ、清水で葉を洗ひ、無灰白酒で煎じて服す。

【外痔】黄氏醫抄――臭梧桐葉の煎湯で數回洗へば癒える。

【梧桐酒】經驗廣集――内外一切の乳毒を治す。臭梧桐を春、夏は頭三個を取り、秋、冬は根を取り、搗き爛らして汁を絞り、陳酒と對して熱服し、汗を取るを度とする。神效がある。

【豨桐丸】濟生養生集――この丸は男女の風濕を感受し、或は酒を嗜み飲んで風を冒したために內濕、外邪が四肢に傳はり、脈絡が壅塞して舒びず、ために兩足が軟痠疼痛して歩行不能となり、或は兩手が牽絆して仰擧不能となりたるを治す。凡そ辛勞の人は常にこの症を患ふもので、狀態は風癱に似てゐる。この丸を服すれば立ろに能く全癒する。地梧桐、俗にいふ臭梧桐を用ゐ、花、葉、梗、子を論ぜず、曬乾し切碎いて末にして一觔、豨薟草を炒り磨つた末八兩の二味を和勻し、蜜で桐子大ほどの丸にし、朝夕白滾湯で四錢を送下する。猪肝、羊血、番茄等の物を食ふことを忌む。或は單に臭梧桐二兩を用ゐ、湯に煎じて飲み、その後に酒を飲む。十劑

を連服すれば其の痛が瘥える、或は煎湯で手足を洗ふもよし。

莖中の蟲　風毒流注を治す。

臭牡丹　葉の形は臭梧桐と同じだが、ただ薄くして糙澀である。氣はやはり臭い。五月に花を開いて朶を成し、一蒂に百花を著け、色は粉紅である。

【痔瘡を洗ひ、疔を治す】赤水元珠——蒼耳、臭牡丹各一大握を搗き爛らし、新汲水で調へて服す。黑水を瀉下して瘉える。

【一切の癰疽】淳安の陳老醫云く、臭牡丹の枝、葉を搗き爛らして罨すれば立ろに消く。

【脫肛】祕方集驗——先づ臭梧桐葉の煎湯で洗ひ、後に浮萍草末を摻れば脫しない。——應昌按ずるに、梧桐の二字は牡丹の訛らしい。さなくばこの方は臭梧桐の諸方の內に列入してある筈である。惜いかな原書を得て正すわけに行かぬ——

木八角

草八角

木の高さ二三尺、葉は木芙蓉のやうで八角に芒があり、その葉の蒂に近い部分に紅色のあるものが佳し。秋白花が細く簇つて開く。根に近い皮を取つて用ゐる。

○唐王周金盤草の詩の註――金盤草は寧江、巫山、南陵の林木中に生じ、その根は一年に一節を生ずる。人が採つて服すれば毒を解し得る。その詩に云く、今春南陵從りし、草の金盤と名くるを得たり。金盤仁性あり、生じて林木の端に在り。根節歳に一節、これを食ふに甘くして酸し。風俗競ふて採掇し、人を俾て急難を防がしむ。巴中蛇虺の毒、これを解して走丸の如し。巨葉六出を展べ、軟幹長竿を分つ。搖搖として綠玉活し、褭褭として香荷寒し、世に云ふ酷者の月、鬱として神物の看あり。天の此に產するや、意生民の安きを欲するなり。云云 詩の意を味つて見ると、今の草八角をいつたらしい。その性はまた能く蛇毒を解す。

苦く辛し、溫にして毒あり。痲痺、風毒、打撲瘀血、停積を治す。その氣は猛悍で、能く壅塞を開通し、痛痲が立ろに止む。虛せる人は用ゐることを愼む。

草八角　藥鑑――於潛、昌化の深山中に出る。葉は角が上に仰ぎ、色は黃で、獨莖一葉である。五六月に花を開き、二箇の朶が對を成し、粉紅色であつて下垂して

ゐる。根は圓くして長くない。俗に孩兒撑傘と名ける。

○百草鏡に云く、草八角は高さ一尺ばかり、根に疙瘩が生じ、獨莖一葉で、秋に入つて花を開き、ただ兩朶があつて相對し、粉紅色である。又、紅孩兒と名け、結子が紅色で對を成し、孩兒のやうである。その根は消毒に用ゐられる。藥に入れるには草本のものが良し。根は癰毒を治す。その他の功は木八角に同じ。

○葛祖方――性溫なり。骨內の風を治す。

按ずるに、八角金盤に草、木の二種あつて、木本のものはその葉の尖角が仰起して盤の狀態のやうであり、葉の背の色が黃である。故に金盤といつたのだ。草本のものは葉の尖角が仰がず、葉の背が黃でないので微に區別がある。この藥は性熱であり、力が猛で毒があつて、咀めば味が麻する。壯實なる人でもやはり少量を用ゐるがよし。服藥後には魚腥、猪、羊、牛、馬等の肉を忌む。これを犯せば人をして癲狂せしめる。ただ白菜菔――應昌按ずるに、菜の字は萊の字の訛らしい。さなくば菜字の下に萊の一字を補ふべきであらう――が解し得る。藥に入れるには根に近い皮を用ゐ、酒で煎じて服す。汗を取つて癒える。力の弱きものは發戰し、吐するが、病はやはり癒える。

戚孔昭は、木八角の鬚は乃ち麻黄であるといつたが、確に然るや否や判らない。

烏不宿

俗に老虎草と名け、又、昏樹晩娘棒と名ける。梗は赤くして長さ三四尺、本に刺がある。黄花を開いて穗に成る。その根は蟲を下し、風毒流注を治するに神效がある。

〇網目に楤木は鵲不踏と名けるとあるが、この物とは別である。

性は熱である。風を追ひ、痛を定め、透骨の妙があり、風毒流注、風痺、跌打、勞怯を治す。保生丸に合せれば虚勞を治するに神の如く、胎を下し、分娩を催す。

江連仕采藥書――烏不宿、又、烏不踏と名け、又、刺根白皮と名ける。性は温にして血を行らし、風を追ひ、紫雲風、大麻風、筋骨疼痛を治す。

濟世良方――婦人の將に産せんとするとき、烏不宿の莖、葉を剉碎して一大把に甘草一錢を加へ、酒、水各半で一大鍾に煎じて服すれば出産を容易にし、且つ産後無病である。その葉は杏葉のやうだが枝、梗に刺があり、鳥が宿れないから名けた

ものだ。又、石米刺と名ける。

【跌蹼】百草鏡――烏不宿根皮の鮮なるもの一錢、乾いたもの七分を藥の中に加入して煎服する。汗を取つて極めて妙である。

【難產】家寶方――烏不停葉一兩、甘草五錢を好酒二碗で一碗に煎じ、或は一二回服すれば產する。

敏按ずるに、救生苦海に、茨梧桐、又、晚娘棒と名ける。多く山坳に生じ、最も高いものは四尺ばかりになり、皮の色は桑のやうだ。細いものは太さ大指ほど、老いたるものは大いさ甘蔗ほどである。若し根が曲つて皮の色の紫なものならばその物でない。根を取つて泥を去り、その白皮を剝つて搗いた汁二鍾を用ゐ、米醋一鍾、淸水半鍾を加へて和勻し、それを口中に噙咽すれば、雙單蛾を治し得る。喉閉する場合には、鵝毛で攪けば開く。その時前の如く噙咽すれば、痰涎を三四碗吐出して、能く平常の通りに飲食するやうになるとある。これは色の紫なるものは晚娘棒でないとしてあるが、或は名を同くして物の異なるものか。このまま記載して參考に供する。

破布葉

廣東通志——肇慶、新橋から上は人烟寥落として山路に岐が多い。この邊は三縣の交界をなす地域である。船夫はこの危險地まで來ると夢香を燃く。すると客はみな酣臥昏迷して了ふので、その間に行李を開いてその中の金品を取り、礫塊などにすり替へて故の通りに封識して置く。若し枕邊に一盂の水を置けば迷藥がみな渙散して了ふ。又、破布葉といふ藥があつてその迷藥を解し得る。旅行者の歌に『身に破布葉なければ夢香船に上る莫れ』といつてある。按ずるに、廣志の註に、夢香は船中で胡蔓草で合せた香で、これを焚けば人が直ちに迷悶する。

夢香の毒を解し、能く迷を醒す。

肇慶志——破布葉は陽江、陽春、恩平に產する。形狀は掌のやうで綠色だ。嶺南では、船夫が多く香烟、及び毒水旅客を迷悶させるが、この草を湯に煎じて服すれば立ろに解す。

天成沙

蘇木中に生ずるもので、劈破して取る。但し得難いものだが、染物場へ賴んで置けば豐富に取つてある。多少に拘らず藥に入れて用ゐる。

【卒心痛を治す】救生苦海——天成沙を溫酒で和して服す。心痛を治するに神效がある。

淡竹殼

これは淡竹の嫩い時に萡籜してあるものを解き下したものである。綱目には、竹の條にただ慈竹籜を載せただけで淡竹は略してあるが、實はその性の能く目瞖を去る功は熊膽と同じものだ。故に補記して置く。

此君丹。瞖を治す。一草亭眼科方——淡竹殼を多少に拘らず布で拭つて毛を去り、灰に燒いて性を存し、毎藥一錢に麝香三五釐を加へて共に擂つて細末にし、瞖上に點けるが最も妙である。

桃絲竹二黄

李氏草祕——諸癰瘡、痘、疔の爛れて久しく癒えぬには、桃絲竹の二黄を刮り取り、末にして敷く。

○痰火を降す。煎じて服する功は淡竹茹に勝る。

○蛇咬、天蛇毒を治す。

王安采藥方——發背を治し、肉を長ぜぬ。桃竹茹を取つて餅にして貼る。

○血崩。竹青を取つて炒つて末にし、水で調へて服す。

桃竹笋 六畜の瘡癰で内に蛆あるを治す。湯に煎じて洗へば絶える。（草祕）

○白濁。煎じて服すれば癒える。（草祕）

桃竹笋殼 楊梅瘡を治す 灰に煆いて酒で調へて服す。（王安）

竹衣

これは金竹内の衣膜である。竹を劈いて鮮のものを取つて藥に入れる。

【喉啞勞嗽を治す】張景岳古方因陣――一切の勞瘵痰嗽で聲が啞して出でず、難治なるには、これを服すれば神效がある。鮮竹衣一錢、竹茹を彈子大にして一丸、卽ち金竹の青皮である。それを刮り取る。竹瀝、卽ち金竹を燒いて取る。麥冬二錢、甘草、橘紅各五分、白茯苓、桔梗各一錢、杏仁七粒を皮を去つて研り、水一鍾半に竹葉十四片を加へて七分に煎じ、竹瀝一杯を入れて和勻して服す。

枸橘

今の臭橘である。山野に甚だ多く、實が小さくして殼が薄く、枝には刺が多い、實は臭いので一般には多く棄てて了ふ。綱目では、枸橘の條下に葉、刺、核、樹皮を倶に收錄して、その實だけ略してあるが、葉天士の家抄本草には主治があるから、特に錄出して補つて置く。藥に入れるには陳きものが佳し。

○橘錄――枸橘は色青く、氣が烈しい。小なるものは枳實に似て、大なるものは枳殼に似てゐる。近頃では枳實が得難いので、一般に多く枸橘を籬落の間に植ゑてその實を取收め、割いて乾して藥に和する。味は商州の枳と幾ど眞に逼つて似てゐ

るものだ。

子癧、及び疝氣を療ずる。いづれも整つた固い枸橘を取り、煨いて性を存して研末し、陳酒で送服する。

酒毒を解す。(逢原)

【胃脘の結痛】枸橘の實を取つて煨いて性を存し、酒で方寸匕を服す。內傷の諸痛には、實を醋に浸して膏に熬つて貼る。久しく貼つて置けば復た發らない。その力が能く氣を破り熱を散するものだからである。

葉底紅

これは小木であつて、山土に生ずる。長さは一二尺に過ぎず、葉は石楠のやうだ。四月に蕊が生じて五六朶が簇を成し、垂れて芝麻鈴のやうな狀態で、花は青白色を作し、六七月に天竺子のやうな小子を結び、霜後に色が紅くなつてさながら天竺子のやうだが大きい。俗に矮脚樟と呼ぶ。それは樟葉に似て本が短いからである。山間の人民は每にこれを掘つて盆栽にするものとして賣つてゐる。又、葉下紅と名

ける。

○李氏草祕——葉下紅、一名平地木。長さ五六寸。莖は圓く、葉の下に紅子を生する。山陽等の處に生ずる。

【吐血を治す】楊春涯經驗方——葉底紅、卽ち矮脚樟一兩を用ゐ、洗淨して木槌（もくつゐ）で搗き爛らし、猪肺一個を血を洗淨し、葉をその肺管中に入れ、河、井水各三碗で煮爛し、五更に至つて葉を去つて湯と共に食ふ。一二回で癒える。多く食へば後患を絕つ。

陶殿元が予に語つて云く、某撫軍は宮傳の秘方を得て吐血、勞傷、怯症（きよしやう）の危篤に瀕せるものを治し、久嗽で勞と成つたものは立ろに癒えぬはなかつた。嘗て多くの人に經驗して效果を得てゐる。それは平地木の葉を乾したもの三錢を用ゐ、猪肺を心を連ねて一具を水で血を洗淨して白湯で焯過（しやくくわ）し、瓦片で肺管を排開して葉を包裹し、麻線で適當に縛つて再び水に入れて煮熟し、先づ肺湯を吃し、然る後に葉を去つて肺を食ふ。もし味の淡きを嫌ふときは淸漿を蘸（つ）けて食ふ。一肺を食つて後に病勢が自ら減じ、三肺を食へば癒えぬものがないと。但し用ゐてある平地木は葉下紅

と別なところがあるが、或は一類で相同じく、その性の元來通ずるものかも知れぬ。

【偏墜疝氣を治す】李氏草祕——搗汁を酒に沖して半碗を服す。屢〻奏效した。

茶樹根

爛茶葉　經霜老茶葉

綱目には、茶子、茶油を倶に記載してあるが、ただ茶根、及び爛茶、經霜老茶葉をばまだ收載してなかつた。故に補記する。

【口爛】救生苦海——茶樹根を湯に煎じ、茶に代へて時に拘らず飲む。味が最も苦く、これを食すれば立ろに效がある。

爛茶葉　これは茶の出し殼で急須内に殘るものである。もし乾燥したものの場合は殘茶汁を添入する。久しいものほど妙である。

無名腫毒、犬咬、及び火燒で瘡となつたものを治し、いづれもその效神の如くである。搗き爛らして泥のやうに敷き、乾けば茶汁で潤濕し、抹し去つて再び換へて敷く。五六回で全癒する（救生苦海）

【痘毒】家寶方――泡過茶葉を曬乾して末にし、五棓子と各等分を雞子淸で調へて敷く。

【諸毒の努肉の退かぬもの】保和堂祕方――硫黃を細末に研つて敷けば直ちに退く。再び用ゐて後の收口藥として、爛茶葉五錢、烏梅三箇を灰に燒いて共に末にして敷く。直ちに收まる。

經霜老茶葉【羊癲瘋を治す】家寶方――一兩を末にし、生明礬五錢と共に細末にし、水法丸にして硃砂を衣にし、毎服三錢を白滾湯で送下する。三服で全癒する。

【茶葉を好んで吃ふもの】家寶方――卽ち茶葉を肉汁湯内に入れ、飯鍋上で蒸して吃ふ。二三回で吃ふことを喜まなくなる。

雨前茶

杭の龍井に產するものが佳し。蓮心が第一、旗鎗がこれに次ぐ。土人は穀雨の前に採撮して茗にするからかく名けたのである。三年以上の陳いものを藥に入れる。新しいものには火氣がある。

咽喉を淸し、目を明にし、元氣を補し、心神を益し、七竅を通ずる。性は寒だが烈しくなく、その味が甘いので土を益する。消するが峻でなく、その先春の氣を得てゐるので宿食を消し、氣を下し、噫氣を去り、六經の火を淸する。

【下疳】外科全書――雨前茶、麻黄各一錢五分を、連四紙方七寸ばかりに鉛粉一錢半に擦つたものの上に鋪いて筒に捲き、火で灼いて性を存して研細し、冰片と各一分を研勻ぜて用ゐる。

【偏正頭風】醫方集聽――升麻六錢、生地五錢、雨前茶四錢、黄芩一錢、黄連一錢を水で煎じて服す。

○又、頭風を治して百發百中の方。赤、白首烏各一兩、眞川芎一兩、藁本二錢、細辛一錢、蘇葉一錢。これは邪を散する方である。風寒の甚しき者には、川羌活、川烏を加へて服するがよし。これで邪を散じ、癒えぬときは次の方を進める。眞雨前茶四錢、赤、白首烏各二錢、北細辛四分、米仁一錢五分を炒り、牛膝八分、大川芎一錢五分、甘草五分を用ゐ、藥を煎じるときに病人をして鼻で藥氣を吸引させる。服して後には密室に風を避ける。至つて重きものも四帖にして全癒する。金銀花二

錢を加へれば更に效がある。もし楊梅瘡を生じてゐるものならば、土茯苓四兩の煎湯を加へて藥を煎じる。

【肚脹】集聽――一般に肚脹して食思なきは五虎湯を用ゐて治す。核桃、川芎、紫蘇、雨前茶。以上の藥を先づ煎じ、適當になつたときに老薑、砂糖をその湯中に加へて直ちに服す。

【三陰瘧】集聽――眞雨前茶三錢、胡桃肉五錢を敲き碎き、川芎五分。寒多きには胡椒三分を加へる。未發の前に茶壺中に入れて滾水を沖して泡け、熱に乘じて頻頻と服す。これを吃すること發作時に臨んでも住めてはならぬ。

【諸瘧。新久を論ぜず】慈航活人書――白芥子一兩を炒つて末にし、雨前茶で和して一撮を服す。瘧の久しきものも二回に過ぎずして癒える。

【年久しき痢】鳳聯堂驗方――臭椿皮一兩五錢、雨前茶一錢半、扁柏葉二錢五分、烏梅、棗頭各二箇、酒、水各一碗を好く煎じ、緩緩に服す。泛を恐れる。

【五色痢】慈惠編――陳年年糕、陳雨前茶、冰糖、茉莉花を共に湯に煎じ、一盞を服すれば立ろに癒える。

「消痰止嗽膏」米白糖一觔、猪板油四兩、雨前茶二兩。水四碗で先づ茶葉を二碗半までに煎じ、再び板油を膜を去つて切碎き、苦茶、米糖と共に投下して熬化して聽用し、白滾湯に數匙を沖して服す。

「痔を治す」蜈蚣一條を頂好細茶葉で煎じて服す。身の癢さを度とする。(醫學指南)又、家寶方で痔を治するには、陳年の雨前茶一兩、枳殼三錢を水で煎じ、渣は再び煎じて翌日服す。

「傷寒無汗」彙集——白糖、雨前茶を水に入れて熬つて數沸して服下する。汗が出て癒える。生薑を加へ、又、紅、白痢疾を治す。

「猪癲、羊兒瘋を療ず」陳氏筆記——晉礬一觔、雨煎茶一觔を末にし、茶汁、米飲で丸にし、毎服四十九丸を發作の日の前に二服し、茶で送下する。

「風痰癇病」○生白礬一兩、細茶五錢を末にし、蜜で桐子大の丸にし、一歳に十丸の割合で茶湯で服す。大人は五十丸。久しく服すれば痰が大便から出て病根を斷つ。(指南)

「風沿爛皮」眼科要覽——甘石を童尿に七回淬し、黄連汁に七回淬し、雨前茶に七

回淬し、火氣を出し、冰、麝を入れて研り匀ぜて點ける。

【頭風で頭部全體の痛むもの】家寶方――川芎七錢、明天麻三錢、雨前茶一錢を酒一碗で六分に煎じ、渣をば再び酒一碗で四五分に煎じ、日暮に服す。一夜を過ぎて癒える。

【楊梅瘡】雄黃四兩、雨前茶四兩、生芝麻四兩を共に細末にし、黃米細粉の糊で桐子大の丸にし、毎朝白湯で三錢を服す。（家寶）

【上淸丸】蘇、薄荷二兩、雨前茶、白硼砂七錢、烏梅肉、貝母、訶子各三錢、冰片三分を煉蜜で丸にする。

【風寒の汗なきもの】發熱し、頭痛するには、核桃肉、葱白、雨前茶、生薑等分を水一鍾で七分に煎じ、熱服して衣を覆ふて汗を取る。

【氣虛頭痛】不藥良方――上春茶末を調へて膏にし、瓦盞の中に入れて覆轉し、巴豆四十粒を二回分にして烟に燒いて薰じ、曬乾して細に擂り、毎服一字を別に好茶末を入れて食後に白湯に絞つて服す。立ろに癒える。

【肩背の筋骨痛】醫學指南――槐子、核桃肉、細茶葉、脂麻各五錢を磁礶內に入れ、

二碗で一半に熬つて熱服する。神效がある。

【五虎湯】外邪が表に在り、汗なくして喘するものを治す。麻黄三錢、杏仁を皮、尖を去つて三錢、石膏五錢、甘草一錢、細茶一撮。痰あるには二陳湯、生薑、葱を加へて水で煎じて熱服する。桑白皮一錢を加へれば尤も效がある。（醫學指南）

【千杯の酒にも酔はぬ方】乾葛、橄欖、細茶等分を末にし半酣になつたとき茶で服下する。

普洱茶

雲南の普洱府に出る。團に成つたもので、大、中、小の三等がある。雲南志――普洱山は車里軍民宣慰司の北に在り、その上に産する茶は性温にして味が香しい。普洱茶と名ける。

○南詔備考――普洱府から出る茶は、攸樂、革登、倚邦、莽枝、蠻耑、慢撒の六茶山に産するのだが、倚邦、蠻耑のものが味がやや勝れてゐる。

味苦く、性刻であつて、油膩、牛、羊の毒を解するが、虚せる人は用ゐることを

禁ずる。苦く濇くして痰を逐ひ、氣を下し、腸を刮して通泄する。

按ずるに、普洱茶は大なるものは一團にして五觔あり、人の頭のやうな形態になつてゐるので人頭茶と名ける。毎年入貢するが、民間では容易に得られない。僞作したものがあつて、それは川茶と名ける。乃ち四川省と滇南との境界地域の土人が製造するもので、その餅は堅くなく、色もやはり黄で、普洱茶の淸香獨絶なるに及ばない。普洱茶は漆のやうに膏黑で、酒を醒すに第一である。綠色のものは更に佳く、食を消し、痰を化し、胃を淸し、津を生じ、功力の尤も大なるものである。物理小識に、普雨茶は蒸して團にしてあるもので、狗西番で賣つてゐる。最も能く物を化す。六安と同じとある。――按ずるに、普雨、卽ち普洱である――

普洱茶膏は能く百病を治す。肚脹し、寒を受けたものならば、薑湯を用ゐて發散し汗を出せば癒える。口破れ、喉顙に熱を受けて疼痛するには、五分を口に噙つて一夜を過せば癒する。暑を受け、皮血を擦破せるには、研つて敷けば立ろに癒える。

【悶痞】百草鏡に云く、この症に三あつて、一は風閉、二は食閉、三は火閉であるが、ただ風閉だけが最も危險である。凡そ何の閉なるに拘らず、茄梗を伏月に採

つて風乾したものを室內で焚き、內用としては普洱茶二錢を煎じて服す。少頃して盡く出る。費容齋の子がこれを患つたとき、已に黑黯となつて治療の方法がなかつたが、この方を得て試みると效があつた。

研茶

粤志——東莞地方で芝蔴、藷油を茶葉に雜へて煮煎して製造するものだ。

風濕を去り、食積を解除し、饑を療ず。

龍脊茶

廣西に產する。やはり製造して磚にしたものである。

瘴を除き、毒を解し、赤、白痢を治す。

安化茶

湖南に產する　梗が粗く、葉の大なるもので、必ず水で煎じ、或は滾湯を沖して

禁ずる。苦く濇くして痰を逐ひ、氣を下し、腸を刮して通泄する。

按ずるに、普洱茶は大なるものは一團にして五觔あり、人の頭のやうな形態になつてゐるので人頭茶と名ける。毎年入貢するが、民間では容易に得られない。僞作したものがあつて、それは川茶と名ける。乃ち四川省と滇南との境界地域の土人が製造するもので、その餅は堅くなく、色もやはり黄で、普洱茶の淸香獨絶なるに及ばない。普洱茶は漆のやうに膏黒で、酒を醒すに第一である。綠色のものは更に佳く、食を消し、痰を化し、胃を淸し、津を生じ、功力の尤も大なるものである。物理小識に、普雨茶は蒸して團にしてあるもので、狗西番で賣つてゐる。最も能く物を化す。六安と同じとある。——按ずるに、普雨、卽ち普洱である——

普洱茶膏は能く百病を治す。肚脹し、寒を受けたものならば、薑湯を用ゐて發散し汗を出せば癒える。口破れ、喉顙に熱を受けて疼痛するには、五分を口に噙つて一夜を過せば癒する。暑を受け、皮血を擦破せるには、研つて敷けば立ろに癒える。

【悶痞】百草鏡に云く、この症に三あつて、一は風閉、二は食閉、三は火閉であるが、ただ風閉だけが最も危險である。凡そ何の閉なるに拘らず、茄梗を伏月に採

つて風乾したものを室内で焚き、内用としては普洱茶二錢を煎じて服す。少頃して盡く出る。費容齋の子がこれを患つたとき、已に黒黯となつて治療の方法がなかつたが、この方を得て試みると效があつた。

研茶

粵志――東莞地方で芝蔴、薷油を茶葉に雜へて煮煎して製造するものだ。風濕を去り、食積を解除し、饑を療ず。

龍脊茶

廣西に產する。やはり製造して磚にしたものである。瘴を除き、毒を解し、赤、白痢を治す。

安化茶

湖南に產する　梗が粗く、葉の大なるもので、必ず水で煎じ、或は滾湯を沖して

壺中に入れ、再び火で溫むべきもので、かくして始めて味が出る。その色は濃黑であつて、味は苦中に甘を帶びてゐる。これを食すれば神を淸し、胃を和す。

性は溫、味は苦くして微し甘し。膈氣を下し、滯を消し、寒澼を去る。

湘潭縣志――茶譜にある潭州の鐵色茶といふは卽ち安化縣の茶であつて、今京師ではみな湘潭茶と稱してゐる。

雪茶

滇南に産する。色は白く、久しくすれば色が微黃になる。盞で烹瀹すると淸香の逈に勝れたゝので、形は蓮心に似てゐるが、ただ玉芽の色をしてゐるだけだ。

○平菜仲云く、雪茶は麗江府管轄下の山中の雪地に産するもので、色は白く、味は甘く、性は大溫であつて、寒疾を祛るに神の如きものだ。

甘く苦し、性は溫である。胃氣積病を治し、痢を療ずるに神の如くである。

敏按ずるに、雪茶は雲南永善縣に出る。その地は山が高く、積雪が夏に入つても消えず、雪中にこれが生ずるのであつて、本來茶の類ではない。これは天生の一種の

草の芽であつて、土人が採取して炒り焙じたものだ。そのものが茶に似てゐるからかく名けたのである。その色が白いから雪茶といふのだ。己亥の歳の臘月に餘杭へ往つたとき、劉挹淸少府を訪ねると、少府は雪茶を啜つてゐて『雲南から持つて來た茶だ』といつた。茶片はみな筒子になつてゐて、蜜筒が菊蕊瓣のやうな狀態のものであつた。その主治を詢ねて見ると、少府は、この茶は大いに能く胃を煖める。凡そ嚴寒冰凍の時でも、一盞を啜れば滿腹火の如くである。癆損を患ひ、及び失血過多の人などは腹胃が必ず寒し、茶を食することを最も忌むのであるが、ただこの茶だけは忌まないといつた。そこで兩人で烹瀹して飮んで見たが、果して腹に入ると溫暖で、味はやはり苦冽香美であつて他の茶に比較して更に厚かつた。

大觀茶論――白茶は自ら一種のものであつて、普通の茶とは異ふ。その條は敷闡し、その葉は瑩薄である。崖林の間に偶然生出するもので、人力の致すところのものでない。有るのは四五家に過ぎず、生えてゐるのは一二株に過ぎない。製造するのもただ二三銙に止まるのである。芽英の多くないもので、就中蒸焙が六ヶ敷く、湯火が一旦失てば已に變じて並物となつて了ふ。必ず精造方法を精微にし、取扱ひ

を適當にすれば、表裏昭徹で玉の璞に在るが如きものが出來上る。他のものと同様に論ずるわけに行かぬものだ。

○東溪試茶錄——白葉茶は民間で大いに重ぜられ、近歳園焙に出ることが時にある。産地は山川の遠近によらず、發生は社日の先にはない。芽葉が紙のやうなもので、民間ではこれを茶瑞としてゐる。

武彝茶

福建の崇安に産する。その茶は、色が黒くして味が酸く、最も食を消し、氣を下し、脾を醒し、酒を解す。

○單杜可云く、諸種の茶はいづれも性が寒であつて、胃弱のものがこれを食すれば多く停飲するが、ただ武彝茶だけは性温であつて胃を傷めない。凡て茶澼、停飲のものにこれが適する。

「休息痢を治す」救生苦海——烏梅肉、武彝茶、乾薑を丸にして服す。

松蘿茶

徽州に産する。本經逢原に云く、徽州の松蘿は食を化するに專である。

○秋燈叢話――北方の商人某は江南へ貿易に來てゐたとき、善く猪首を食ひ、數人前の量を食つてゐたので、ある醫術に精しい者がそれを見て、その商人の從僕に訊ねて見ると、僕は『いつもあの通りで、もはや十餘年にもなつた』といふ。醫者は『恐らく病が發つてあらゆる藥でも治し得なくなるだらう』といひ、その歸國する時を俟つて北方まで尾行し、一大經驗の材料として大いに奇貨を得たものと竊に喜んでゐたが、久しく經つても何の恙もなかつたので、復た前の從僕に詳細を詢ねて見ると、僕は『主人は食後に松蘿數甌を必ず滿飲してゐる』といつた。醫者は爽然として『これはその毒がただ松蘿で解し得るのだ』といひ、悵然として返つて來た

姚希周經驗方に云く、凡そ眼患で羊肝を服するものは松蘿茶を服することを忌み、沙苑蒺藜を湯に煎じて茶に代へる。

積滯、油膩を消し、火を淸し、氣を下し、痰を除く。

【病後の大便不通】呉興錢守和の慈惠小編――松蘿茶葉三錢を用ゐ、米白糖半鍾を先づ煎じ滾らして水一碗半を入れ、茶葉と共に一碗までに煎じて服す。直ちに通じて神效がある。

【頭瘡の口の收まらぬもの、或は觸穢して口の收まらぬもの】梁氏集驗――上好の松蘿茶一撮を用ゐ、先づ水で口を漱いでから、茶葉を嚼み爛らして瘡上に敷き、一夜經つて翌日揭げ下し、再び好き人參の細末を油、胭脂に拌ぜて瘡上に塗つて置く。二三日で癒える。

【羊兒瘋】集效方――好松蘿茶末八兩、生礬末四兩を米粥を搗いて丸にし、發作の日に臨んで早朝、及び平常日に各三錢を服し、米湯で送下する。

【水臌、氣臌】彙集――この藥を服すれば鹽醬を忌まず、一服で立ろに消く。活魚一尾、重さ七八兩のものを用ゐ、鱗甲を去り、肚を剖開し腸を去つて淸淨にし、好黑礬五分、松蘿茶三錢、男子は蒜八片、女子は七片を共に魚腹中に入れ、磁器中に入れて蒸熟し、病人をして魚を吃はせる。茶、蒜とを共にみな食すれば更に妙であ

る。魚の頭から吃ひ始めれば頭から消き始め、尾から吃ひ始めれば脚から消き始めて立ろに效がある。

【繡毬風】活人書——五棓子を炒り、松蘿茶と各五錢を研末し、茶で和して敷く。

【黃病】劉羽儀驗方——生芝蔴八合、好松蘿五合、砂仁二合 以上三味を用ゐ、先づ芝蔴を研細し、再び茶葉を烘いて脆くして研り、再び砂仁を研り、各細末にして和勻し、每日常服する。年久しく病深きものの場合は、黃が退いたならば止める。もし茶葉を好んで食つたために黃と成つたものの場合はこの方は用ゐられない。

【一切の頭風で熱を兼るもの】王站柱不藥良方——蓽茇を細末にし、猪膽汁で拌ぜて鼻中に嗃ふ。嚔をして立ろに癒える。もし濕を兼ねるものの場合には、瓜蔕、松蘿茶を末にして鼻中に嗃ふ。黃水を出して立ろに癒える。

【五癭を治す】醫學指南の破結散——海蛤、通草、昆布、海藻、洗膽草、枯礬、松蘿茶各三分、半夏、貝母各二分、麥麪四分を末にし、酒で調へて服す。一日三回。鯽魚、猪肉を忌む。

【痢疾を治する神方】核桃五箇を殼を帶びたまま敲碎し、松蘿茶、生薑、糖各三錢

と水三盞で煎じ、紅痢ならば紅糖を用ゐ、白痢ならば白糖を用ゐ、紅白相兼ねるときは紅白糖各一錢五分を用ゐて煎じて服す。重きものは渣と共に服す。

〔五臟驗方〕松蘿茶を研末し、雞毛管を炒つて研り、各等分を二錢づつ白湯で服す。二十服で全癒する。百日間鹽を忌む。

〔半身不遂〕秘方集驗——白糖、槐豆子、化皮、紅谷子、松蘿茶各五錢を水三鍾で一鍾に煎じて服す。汗を出して癒える。十日後には門外に出られる。

〔小兒の牙疳〕同壽錄——松蘿茶、花椒を目を去り、烏龍尾、食鹽各一錢を童尿一鍾、水一鍾で湯に煎じ、口を漱いで口内に含む。嚥下してはならぬ。

〔白濁〕古今良方——車前草五六科、陳松蘿茶一二錢、燈心一二十根の三味を煎じて服す。止んで後に水陸二仙丸を服して固めるがよし。

〔除瘟救苦丹〕專ら一切の瘟疫時症、傷寒感冒を治し、已傳と未傳とを論ぜず百發百中である。有力者がこの藥を修合して一般人を濟ふならば陰德の最も大なるものだ。李炳文經驗廣集——天麻、麻黄、松蘿茶、綠豆粉各一兩二錢、雄黄、硃砂、甘草各八錢、生大黄二兩を共に細末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、磁器中に收めて氣

の洩れぬやうにし、患者があつたとき、大人は一丸づつ、小兒は半丸づつを涼水で調へて服す。汗を出して癒える。重きものは二服を連進する。まだ發汗せぬ内は絕對に熱湯を飮み熱物を食つてはならぬ。汗が出て後は忌まない。

『爛眼皮を治する方』種福堂方——挂金燈の淨殼を用ゐ、每殼に研細した透明な綠膽礬二釐を摻入し、或は殼を十箇、或は二十箇に裝套して適當にし、外をば淨黃泥で適當に包裹して氣の洩れぬやうにし、炭火で煆いて中間の殼が將に黑灰とならんとするとき、性を存して土地上に放出して碗を蓋せて火を熄め、中間の灰を取つて研細し、適當に包んで一夜地上に放出して火毒を出し、その灰少量づつを用ゐ、茶杯の中に置いて冷えた松蘿茶に浸し、薄棉紙でその茶の面上を蓋ひ、茶がその紙の面に滲出するを俟つてその水を取つて眼皮を洗ふ。每日五六回、二三日で癒える。

『髮を烏くする方』古今旅抄——王守副家傳の烏鬚藥で、甚だ效驗がある。五棓子二錢、皂礬四分八釐、靑鹽六分、紫銅末一分五釐、楡香末六分、松蘿茶三錢を共に末にし、蒸透して用ゐる。

六安茶

張處士の逢原に云く、この茶は能く骨髓中の浮熱を淸する。陳久なるものが良し

○年希堯經驗方に、異傳の終身天花の出ぬ法がある。金銀花を揀り淨めて七兩、六安茶の眞正のもので多年の陳きもの三兩を共に粗い末にし、湯を沖して茶に代へて毎日數回飮む。終身天花が出ない。出てもやはり稀で、極めて效驗がある。

○千金不易方の稀痘丹――新に排泄したばかりの羊の屎一粒、六安茶一錢、甘草節二分、燈心二十七寸、赤、黑、綠豆各二十一粒、珍珠一分、銀簪一本を油氣を洗淨し、水二碗で八分に煎じて溫服する。

【太上五神茶】經驗廣集――傷風咳嗽、發熱頭痛、傷食吐瀉を治す。陳細なる六安茶一觔、山查を蒸熟し、麥芽、紫蘇、陳皮、厚朴、乾薑を倶に炒つて各四兩を末にして磁器に收貯して高燥な場所に置き、大人は三錢づつ、小兒は一錢づつ、感冒風寒には葱薑湯で服し、內傷には薑湯で服し、水瀉痢疾には薑を加へて水で煎じ、一夜露して翌朝空心に溫服する。

【消疽膏】廣集――一切の疽を治する仙方。松香、宮粉、細六安茶各三錢、草麻仁を皮を去つて四十九粒を末にし、先づ草麻を搗き爛らして然る後に藥末を入れて膏にし、乾くときは少し麻油を加へて搗き勻ぜ、青布上に攤して患部に貼り、再び棉紙で大小適當に蓋ふて紮住する。七日で全癒する。

普陀茶

定海縣志――定海の茶は山谷に多いが、野產のものはまた製法も善くないので香味は園茶の美味なるに及ばない。五月の時に重ねて抽き出たものをば二烏といひ、苦澁であつて役に立たぬ。普陀山に產するものを藥に入れるのだが、多く得られない。

血痢、肺癰を治す。

江西岕片

羅岕

宦遊筆記――贛州府寧都縣に產する。製法は江南の岕片と異ふ。茶疏に、岕茶は

炒らずして甑で蒸熱し、然る後に烘焙するとあるが、これは江南のものを指していつたものだ。江西に産するものは葉が大きく、梗が多く、ただ生で曬すので火氣を經てゐないから、槍葉が舒暢して生鮮で美しいものだ。その性は最も消導するもので、貯へてあつた飯をこの茶で泡けて半日置くと、飯が加漲せずして少し消滅してゐる。故に飽食したときはこの茶を飲むとよいのである。別に一種の極細な炒岕があるが、それは他の山で採つて炒焙して好奇者を欺くもので、反つてその眞物でない。かかる次第だから茶はやはり外見だけを取つてはならないものだ。

花岕——岕片は吳興に産する。茶に似てゐるが實は茶の種類ではない。味苦し、性は刻利である。宿食を消し、火を降し、痰を利す。虛せる人は用ゐることを禁ずる。このものは能く生氣を峻伐するからである。

羅岕　茶疏——長興の羅岕とは、古人の顧渚の紫筍をいつたのではないかと思はれる。山に介れた中を岕といふので、羅氏がそれを隱名に用ゐたから羅と名けたのであらう。西吳枝乘——湖人は茗の中で顧渚を數げてあつて羅岕を數げてない。顧渚の佳きものはその風味が已に龍井に遜つてゐる。岕梢は淸儁だが、然し葉が粗く

して草の氣がある。嘉靖長興志――羅岕は互通山の西の土地神の廟の後に在つて、そこに產する茶が最も佳く、吳人がこれを珍重する。凡そ茶は穀雨の前に初生したものが佳いのであるが、ただ羅岕だけは立夏に開園するので、梗が粗く、葉が厚くして微に蕭箬の氣がある。立夏前六七日の雀舌のやうなものは最も得ることが容易でない。然して廟後の山は西向なので佳いと稱されてゐるが、總じて洞山の南向きで、特に陽氣を受けたる仙品と專稱されるただ數十畝中のもののやうなわけには行かない。凡そ茶は、平地に產するものは多く土氣を受けるところからその質は濁つてゐる。羅茗は高山の巖石に產するので、これは風露淸虛の氣があるから床しいのだ。

○長物志に云く、浙の長興のものは佳いが、價も甚だ高い。今最も重ぜられてゐる荆溪のものはやや下る。茶を採るには必ずしも甚だ細に限るものでなく、細ければ芽の初萠であつて味が十分でない。必ずしも甚だ靑きに限るものでなく、靑ければ茶が已に老いてゐて味に嫩さが欠けてゐる。ただ出來上りが葉の綠色を帶びて團厚なものが上等品である。日光で曬し、炭火で焙過して扇ぎ冷しては宜くない。箬

葉を容器に襯いて高い場所に貯へる。蓋し茶は最も溫燥を喜んで冷濕を忌むものである。

味甘く、氣香しく、性は平である。痰を滌ひ、肺を淸し、煩を除き、臌脹を消す。

【咳嗽を治する祕方】醫學指南――川貝母、茶葉各一錢、米糖三錢を用ゐ、共に末にして滾湯で服す。

水沙連茶

臺灣に產する。深山中で、衆木が蔽虧し、霧露濛密で朝日も夕日も當らない場所にあつて、色は綠で松蘿のやうである。每年通事が各番と所在、採收等に就き協議の上で山に入つて焙製する。

性は極めて寒であつて、熱症を療ずるに最も效があり、能く痘を發する。

紅毛茶

臺灣志――草の屬であつて、花は黃色の五瓣、葉は瓜子のやうでやはり五瓣であ

る。根は藤のやうだ。刳り取つて曬す。或は時氣で不快なる場合には、これを煮茶にして飲めば癒える。

角刺茶

徽州に產する。土人は二三月に茶を採るとき、十大功勞葉をも同時に採る。これは俗に老鼠刺葉と名け、苦丁といふ。共に焙製して茶にし、これを尼僧に賣渡す。尼僧は更に富家の婦人達に賣りつけ、婦人がこれを服すれば終身孕まず、斷產するための第一の妙藥だといつて、一觔を銀八錢に賣つてゐる。

味甘く苦く、極めて香しい。兼ねて能く風を逐ひ、血を活し、孕を絕つこと神の如くである。

欒茶

范石湖集――脩江から欒茶が出る。蓋し石楠樹の葉である。毛文錫の茶譜に云く、湘地方では、四月に楊、桐の汁を採つて飯を作り、その時は必ず石楠の芽を採つて

茶に作る。これは能く風を去るものだ。

頭風を治す。

雲芝茶

宦遊筆記——山東の蒙山は蒙陰縣城南三十里に在り、高さ十里ばかり、周圍約三百餘里あつて、茶を産し、雲芝茶といふ。土人は蒙山茶といつて市に賣つてゐる。しかし全然茶の類のものではないので、これは山石中に生ずる苔蘚のやうな屬の石衣である。土人はそれを掬ひ取つて湯を沃いで飲み、勝手に茗荈の仲間に入れてゐるのである。

○五雜俎——蒙山は蜀の雅州に在る。その中峰の頂は尤も險穢を極め、蛇虺、虎狼の棲家である。そこから採取し得た茶はあらゆる疾を除き得る。現に山東人は蒙陰山下の石衣を茶にして蒙山茶に當てるは間違つてゐる。然し蒙陰茶は性冷であつて胃熱の病を治し得るものだ。

性は寒である。能く積滯を消する。綱目には石蕊があつて、性は溫なりとしてあ

るが、積滯を消することをいつてなかつた。

紅花茶

粤西に産する。紅花に似たもので、嫩苗でこれを作る。土人はこれを製して贈物にする。宋の鄒道鄉に詩がある。

膈滯宿食を消し、烟嵐瘴氣を辟ける。

烏藥茶

東莞に産する。芝蔴、藷油を茶に雜ぜたもので、汁にして煎じる。

風濕を去り、食積を破り、饑を療ずる。——應昌按ずるに、烏藥茶は前の研茶と製造、主治みな同じてあつて、一種のものか二種のものか判然せぬ——

瀘茶

四川通志——瀘州に産するものを通じて瀘茶と呼ぶ。

味辛し、性は熱である。飲めば風を療じ得る。

瘟　茶

閩志――福寧府に出る。

瘟を治す。

樂山茶

茶譜――鄂州の樂山に出る茶であつて、黒色で韭のやうだ。

○又、鄂州の東山に出るものを東山茶と名け、色は黒くして韭のやうだ。性は韭と相反する。

これを食へば頭痛を已す。

本草綱目拾遺第六卷　終

本草綱目拾遺

藤部
花部
果部

第七卷

錢唐 趙學敏 恕軒氏輯

本草綱目拾遺藤部目錄

雞血藤膠　七金藤　鹿角藤　買麻藤

紅木香 紅皮藤　雷公藤　藤黄　金鎖銀開

乳藤　蝙蝠藤　皆治藤　無根草

麥裏藤　白毛藤　天毬草　松蘿

松上寄生　楓上寄生　蛇莆藤　李頭藤

龍鬚藤　臭藤根　黄練芽　木龍藤

蔞油

本草綱目拾遺花部目錄

梅花 梅梗　雪荷花 雪芝 雪裏花　水仙花 子　催生蘭

珠蘭　建蘭花 葉 根 草蘭　玫瑰花　金雀花

金蓮花　佛桑花　寶珠山茶　粉團花 根を附す。

玉簪花　玉蘭花　丁香花　紫茉莉 根
野薔薇　秋海棠　茶菊 城頭菊 金鈴菊 金箭頭 菊米 菊根
睡蓮　瑞香花　子午蓮　桃金孃
假素馨　千金花　梧桐花　金鳳毛
十姊妹　雨韭　罌粟子油　佛前舊供花

本草綱目拾遺果部上目錄

延壽果　櫻額　倒吊花　飛松子
茶肭子　椰油 椰中酒 椰膏 椰皮 椰肉　宜母果
天師栗 即ち婆羅子　化州橘紅 橘瓢上絲 糖橘紅 橘餅 藥製柑橘餅 青鹽陳皮 橘苓
荳蔻檳榔　瑣瑣葡萄　南棗 山棗 藏棗　落花生 油
核桃油　阿月渾子　薯良　無漏果
胖大海　藕粉 節粉　菱粉 蒂殼　芡粉

藤部

雞血藤膠

猛緬に產する。雲南の昆明を去る行程一个月餘の地點である。これは藤の汁であつて、土人がその汁を取り、割桼のやうなものを漉し、雞血のやうに殷紅なものを膠にしたものが最も良し。近頃では雲南省にも產する。その藤は長く地上、或は山崖に互蔓して、一莖の長さが數十里になる。土人がそれを得ると刀で斫り斷つと血のやうな汁が出て、一莖から數升の汁が得られる。彼地にはこれを賣つてゐる店があつて、價もやはり高價ではない。乾かせば山羊の血に極めて似たものだ。その藥少量を取つて滾湯中に投入すると雞血のやうな一線が出て走散するものが眞物である。

○雲南志——順寧府に雞血藤を產する。熬つた膏は血症を治し得る。

○滇遊雜記——雲南順寧府の阿度里地方にある一山は、數十里に連亘して藤を產

する。それは甚だ異つたもので、粗ぼ桹梁に類し、細きこと蘆葦のやう、中が竹のやうに空であつて、剖斷すると血のやうな赤色の汁が流れる。故に土人はこれを雞血藤と名けてゐる。毎年端午の日に釜甑を携帶して山に入り、砍り取つて熬煉して膏に作る。酒に泡けて飲めば大いに氣血を補し、老人、婦人に與へると更に益を得る。或は酒を飲まぬものは、朝夕これを水に化開して服す。やはり能く奏效する。

――按ずるに、順寧刊售藥單に云く、順寧府順寧縣阿度吾山にこれを產す。又云く、阿度吾里萬名山寺龍潭の所產。郡志には、二種あつて、その一種は起鼓し丁刺のあるもので尤も佳し。或は地に盤曲し、或は樹に附いて生じ、伐ると中に細竅が通つてゐる。汁は凝つて脂のやうになつてゐるものだ。煮て香のあるものが眞物であるとある。或は、兩種のうち、糯るものは雌であり、散れるものは雄であるともいふ。（應昌附注）――

筋骨を壯にし、酸痛を已す。酒に和して服す。老人に最も宜し。

○老人の氣血虛弱で手足の麻木し癱瘓する等の症を治す。

○男子の虛損で生殖を全ふせぬもの、及び遺精、白濁。

○男女の胃寒痛。

○婦人の經水不調、赤、白帶下。

○婦人の乾血勞、及び子宮虛冷で受胎せぬもの。
○陸象咸云く、嘗て婦人がこの藥を合せて服し、多年子のなかつたものが後にいづれも子を產んだのを實見した。
○滇志——雞血藤膠は風痛、濕痺を治す。性は血を治し、筋を舒べる。患が上部に在るには飽食後に服し、下部に在るには空心に酒で服す。酒を飮まぬものは滾水で調へて服す。その色は微綠を帶び、淸香の氣あるものを酒で服すれば、また能く陽を與す。尤明府佩蓮は、この膠は跌打を治するに神の如きものだといつた。その太夫人がある日偶〻閃跌して臂を傷めて忍び難く痛み、羊血參、三七を用ゐて治療したが多くは效驗がなかつた。ある時客にこの膠を服することを敎へられ、酒を沖して一服すると、その疾は失へる如くになつた。その性の捷に血分に走ることが首肯かれる。

順寧の土人は藥料を加へて雞血膏を煎熬するのであるが、その煎膏するときには妊婦に看られることを忌む。見られると必ず熬つても膏にならぬ。やはりこれも神異の物である。總てあらゆる病を治し、能く血を生じ、血を和し、血を補し、血を

破り、又、能く七孔を通じ、五臟に走り、筋絡を宣するもので、婦人の經水不調を治するには、四物湯に八珍湯を加減し、元胡索を加へて引となし、婦人が氣血を勞傷して筋骨が酸痛し、轉筋するには、牛膝、杜仲、沈香、桂枝、佛手乾、木瓜、穿山甲、五加皮、砂仁、茴香を引となし、大腸下血には、椿根皮の煎湯で送下し、男子の虛弱には八味を加減して引となす。この膠を服するには酸、冷の食物を忌む。

吾杭の龔太守が滇に在官したとき、雞血藤を携帶して歸鄕されたことがあつて、予は親しくそれを實見したが、その藤は皮が細潔で淡黃色をなし、切開して見ると中心に六角稜が現れて菊花のやうな形狀をなし、色は紅くして四圍の色は白く、乾くとその紅い部分が二三分ばかり突出して竟に紅い一朶の菊花のやうになつた。やはり奇なる物である。その藤は最も血を活し、腰膝を暖め、風痪を已すものと聞いたので、戊申の歲、長男の景炎が四川の敘州府にゐて、滇の昭通と界を接した土地だから、往つてこの藤を覓めて貰ひたいと賴んでやつたので、送つて來たものを見ると、外形は殊はないが、中心はただ小紅點になつてゐるだけで、乾してもやはり突起しなかつた。附けて來た手紙に據ると、實は金沙江の土司山中で得たものだと

いふのであつたが、然し龔太守が携帶して來たものとは甚だ相類してゐなかつた。これはこの藤にもやはり二種あるのではあるまいか。此に附記して參考に供する。

(一)辛亥の歳、予が臨安にゐて臂痛を患つたとき、胡春熙明府の父の什といふ人が曾て滇南に仕官して歸鄕されたといふことで、雞血藤膠を頂戴したが、それはみな四角な塊で、毎塊一二兩で一定せず、外を蜃灰で塗つて白色にしてあつたが、剖いて見るとその內部はみな黑色で膏、藥膠のやうな狀態のもので、風癱痺痛に有效なもので、その外面の灰は水に觸れると脫去するといふことであつた。その時の話に據ると、その藤は騰越州銅壁關外の新街の所屬地に產し、山も谷もみなこの物で、新街の守備官が毎年卡兵に命じて斫り取らせ、膏に熬つて上司や僚友に任官のお禮や披露品として贈り、その殘餘を商人に拂下げる。それが行商人の手に渡つて中國へ販賣されるので、その些少な利益も守備官の手に入るのだといふ。彼の人の所有するものは彼の地で買つたものであつた。外面を必ず蜃灰で飾るのは、久しく貯藏しても敗壞せぬやうにしたのである。そこでそれを持ち歸つて忰の景炎に見せたところが、全く見たことのない物だといつた。景炎が曾て昭通の大關司馬白公の家に

寄寓したときに見たその家所藏の雞血藤膠は猩紅で塊にしてあつて、さながら赤玉のやうに光潤美しいものだつたといふ。今相公から頂戴したものは内が黑色になつてゐるが、或は年久しく經つたので色が黯むだものか、それとも新街で產するものと大關のものと區別があるのか、惜いかな親しくその地の實地踏査をして見るわけに行かない。そこで詳細に此に筆錄して後の君子の考訂に俟つ。

乜金藤

性溫にして毒なし。中風痰迷の半身不遂、左癱右瘓、人事不省、痰涎が上壅して心を攻め咽を作すを治す。一錢を白湯で磨つて服す。

○小兒の急慢驚風、大なる者には五分、小なるものには一二分を白湯で磨つて服す。立ろに效があつて神の如くである。

鹿角藤

一名白毛刺。汪連仕方に云く、木本の藤であつて、刺が長く、人の皮、肉を傷め

ると腫疼して休まぬものだ。又、不薪木と名け、山間の住民は砍らない。
性大熱にして氣臭く、痞積を打し、風氣を治するに神の如し。いづれも根を搗いて香糟と共に罨する。
葉　酒で蒸して服すれば能く筋を鑽り骨に透る。
子　これを食へば大いに能く人を醉はす。

買麻藤

職方典——肇慶に出る。樹に縁つて生え、子があり、子は味が苦くして食へる。山を行くときに斷り取つてその汁を飲めば渇を止め得る。
〇粤志——買麻藤は、その莖に水が多く、渇したとき斷つて飲むと、滿腹して後にもなほ水が餘つて半日ほど淋漓として出てゐる。性は柔いもので、容易に履物にもなり、堅靭で麻のやうだ。故にかく名けたので、それは藤を買つて麻を得たといふ意味である。
【蛇咬を治す】鮮のもの、乾いたもの、いづれも效がある。

紅木香

紅皮藤

一名廣福藤、又、紫金皮と名ける。立夏の後に苗を生じて枝、莖が蔓延し、葉は桂に類してやや尖つて軟く、葉の蔕は紅色で、咀めば微香で滑涎がある。根の土に入つた部分を藥に入れて用ゐるもので、水で洗淨して外の粗皮を去り、內皮の色の紅いものを用ゐる。口に入れると氣味が辛く香しくして涼く沁み、龍腦のやうである。

風氣痛、傷力、跌撲損傷、胃氣疼痛、食積、痧脹等の症を治し、いづれも酒で煎じて服す。紫金錠中には必ず缺くべからざるものである。

雷頭風腫痛の貼痛法。紫金皮、獨活、赤芍、白芷、菖蒲、葱頭を濃く膏のやうに煎じて調敷する。藥が到れば立ろに止んで神の如くである。

汪連仕云く、金谷香は、今は一般に緊骨香と呼ぶ。卽ち紅木香であつて、一名を木臘正といひ、紫金皮と名ける。土產のものは功が淺い。膏に入れて用ゐれば血を

行らし、氣を散ずる。

紅皮藤　朱煜齋任城日鈔――錢塘門外の道姑橋下に紅皮藤がある。凡そ半肢風、及び大痲風を患ふものは、藤四兩を取つて無灰酒一大壺に浸し、その壺のまゝ鍋に入れて隔湯で三炷香の間煮て取出して飲む。酒量の好きものは醉ふを度として飲む。酒一碗毎に藥酒三四匙を入れて續けざまに飲む。藥酒全部を飲むに至れば風氣が自ら癒える。その風は指甲の縫中から出るもので、竹紙を几上に鋪いてそれに指尖を對けて驗して見ると、紙が能く吹動する。それは指尖から風が出るのである。

雷公藤

陰山の麓に生ずる。立夏の時に苗を發し、獨莖で蔓生し、莖は葉の心を穿ち、莖上にまた葉が生え、葉は下が闊くして上が尖り、犂耙のやうでもあり、又、三角風に似て枝梗に刺がある。

○物理小識――犂頭刺藤は、その葉が三角で犂頭のやうだ。多く籬邊に生える。瘰癧を治し、また瘡を截れる。一名蕁麻木、方勝板、倒金鉤、烙鐵草、倒挂紫金鉤、

河白草、犁尖草、括耙草、龍仙草、魚尾花、三木棉といふ、江西に產するものは力が大で、土人は採つて魚を毒する。凡て蚌螺の屬までも死ぬ。その性の最も烈しいもので、その草の烟で蠱種を熏ずると生じなくなるので、養蠱家はこれを忌む。山間の住民はこれを採つて壁蝨を熏ずる。

臌脹、水腫、痞積、黃、白疸、瘧疾の久しく癒えぬもの、魚口便毒、瘰癧、跌打を治す。壁蝨を除くには、莖を牀下で燒く。一切の毒蛇傷には、萬病回春に、凡そ蛇傷を受けたときは、板扛歸を多少に拘らず用ゐる。この草は四五月に生え、九月になつて霜を見ると罕になる。葉は尖つて靑く、犁頭の尖のやうな狀態をなし、藤には小刺があり、子は珠のやうに圓く、生では靑く、熟すれば黑く、味は酸い。葉の搗汁を酒で調へて量に隨つて服し、傷處を罨すれば立ろに癒える。

【白火丹】救生苦海——雷公藤五錢、平地木三錢、車前四錢、天靑地白葉、三白草各三錢を煎じて服す。

○又、洗方。雷公藤、河白草を煎じて浴する。

【水腫脹】救生苦海——平地木三錢、雷公藤五錢、車前草四錢、天靑地白草三錢、

路路通五箇を打砕き、煎じて服す。重きものも十服で癒える。

【坐板瘡】秋泉家祕——烏賊骨五錢、雷公藤三錢を共に細末にして搽る。乾くときは菜油で調へて敷く。

汪連仕方——蒸龍草、即ち震龍根。山間の住民は雷公藤と呼ぶ。酒で蒸して服すれば風氣を治す。巴山虎と合せて龍虎丹とし、水に入れて魚の藥とする。人が多く服すれば昏する。

翻胃、噎膈、癉疾、吐血、便血、喉痺、食積、心疼、虚飽腹脹、陰囊腫大、跌打、閃肭、發背、疔瘡、乳癰、產後の遍身浮腫を治す。(王安采藥方)

藤黃

綱目には、主治の條下にただ蛀牙に點ければ自ら落ちると言つただけで、他の治功がない。張石頑は、藤黃は性毒であつて能く毒を攻める。故に牙蟲、蛀齒を治し、點けると落ちるのである。毒が能く骨を損じ腎を傷めるものだから注意を要するといつた。葉氏の得宜本草には、藤黃の藥を服するときは喫烟を忌むといつた。按ず

るに、三黄寶蠟丸、黎峒丸はいづれも藤黄を用ゐてあつて、それで善く毒を解するのである。藤黄に中毒した場合には海蜇を食へば直ちに解す。

○百草鏡――藤黄は外洋、及び粤中に產するもので、これは藤の脂である。形の筆管に似たものが良し。大塊のものは牛屎藤黄と名けるもので佳くない。藥に入れるには、色が嫩くして純明なるものを取り、水で蒸化して滓を濾し去り、磁器に盛つて隔水で煮て、水が少くなつたときは再び添へて煮乾す。三炷香の時間を度とする。かくて帛で磁器の口を紮つて土中に七日間埋めて取出す。かく七回繰返して曬乾して用ゐる。

○粤志――廣中に產する黄藤の熬汁が卽ち藤黄であつて、性は最も寒である。青魚膽で和して眼疾を治す。間ゝ白いものもあり、葉は土茯苓のやうで、身は小さくして長く、外に籜包がある。莖を水に浸して目を洗ふ。並に腫痛を除く。

性は酸濇にして毒あり。癰疽を治し、血を止め、毒を化し、金瘡を斂め、また能く蟲を殺し、刀斧、木石傷、及び湯火傷、竹木刺が肉に入りたるの諸傷を治する

神效膏――眞麻油一觔、藤黄八兩、白蠟八兩を用ゐ、先づ油を銅鍋に入れ、次に藤

黄を搗き碎いて熬り透し、麻布で濾して渣を去り、白蠟を加へ入れて水に滴して珠に成るまでを度として磁礶に貯へる。その膏は夏は老い冬は嫩さを宜しとする。これを敷けば直ちに能く疼を止め、血を止め、口を收め、效を取ること神の如くである。

○金不換——跌打、刀傷を治す。蘇州の周愼庵の傳へたものである。藤黄一兩を細末に研り、麻油四兩、白蠟五錢、黄蠟一兩を用ゐ、二蠟を麻油の中に入れて銅杓で熬り化し、取上げて地上に置き、一人は徐徐に藤黄末をそれに下し、一人は手を住めずに攪勻ぜ、盡きるを以て度とすれば卽ち膏が出來る。患部に敷くには油紙に攤して貼り、綢帕で適當に縛る。一二日で癒える。

【一切の無名腫毒を治する風氣膏】王站柱不藥良方——藤黄四兩、白蠟八兩、小磨麻油十二兩を用ゐ、先づ油を煎じ熟し、珠に成つて水に入れても散ぜぬまでにならんとするとき、再び黄と白とを加へて攪勻ぜ、磁瓶に收めて面上を麻油で養ひ、使用に臨んで攤して貼る。

○【祝氏效方の一筆消】大黄二兩、藤黄一兩、明礬、蟾酥各五錢、麝香、乳香、

沒藥各二錢を用ゐ、蝸牛を搗き爛らしたもので錠にし、小癤毒でまた癤頭の出ぬもののの場合、これを醋で磨り、新しい筆に蘸けて外圍に圈を描いて塗り、癒えるに隨つて段〻圈を小さくし、毒が消盡して止める。

○【又、一筆消方】一切の癰腫を治す。雄黄、膽礬、硼砂、藤黄、銅綠、皮硝、草烏各一兩、麝香二錢を細末にし、蟾酥で和して筆管ほどの大いさの條にして金箔を衣にかけ、使用するときは醋で濃く磨り、新筆に藥を蘸けて毒の四圍に塗る。數回にして癒える。

○【消毒散】癰疽、癤毒、及び初生兒の多骨疽を治す。良方彙選――大黄一兩、芙蓉葉を曬乾して末にし、五棓子と各一兩、麝香、冰片各三分、藤黄三錢、生礬三錢を共に末にし、米醋で厚い糊のやうに調成し、多骨疽の四圍に塗つて中に一頭だけ豆ほどを殘し、醋を鵝翎で時に拘らず掃く。もし掃かずして塗り圍んだままにして置いては益がない。一晝夜にして內消する。その他の癰癤もこれを敷けば神效がある。

又、ある方では、雄黄二兩、麝香三錢、藤黄一兩、人中白五錢、硃砂、白芨、生

白歛各二錢、蟾酥一兩を共に研末し、廣膠三錢を烊化したもので藥末を和して錠にし、毒のあつた場合にこの藥を醋水に磨つて塗る。

○【消毒方】一切の無名腫毒、及び對口、發背を治す。救生苦海――滴花燒酒で藤黄を磨つて敷く。手を住めずに敷けば半日に至らずして消する。

○【無囘丹】一切の疔瘡、腦疽を治す。衆妙方――鹼藤黄、雄黄、大黄各一兩、蟾酥、麝香各二錢、血竭、甲片を炒つて各五錢を醋で磨つて塗る。立ろに效がある。

○【移毒方】救生苦海に云く、もし毒が肢節、穴道などの險要なる場所に生じて漏症と成らねば癈人となる。必ずこの藥を用うべきものである。ただ半圈だけ塗つて置けば一邊に移動して行くものだ。白芨、白蘞、三七、五棓子、大皂角、山茨菰、藤黄各等分を倶に薄片に剉み、藤黄以外の物をみな砂鍋に入れて水で一日浸して汁に煎じ、傾出して水を入れて再び煎じ、かく數囘して濾淨して熬膏し、藤黄を水で蒸し烊して加入して攪勻ぜ、再び熬つて碗に入れて曬乾し、使用するときに雞蛋清で磨つて濃汁を出し、新筆に蘸けて塗る。

又ある方では、藤黄、銀硃等分を醋で和して敷く。毒を趕ふて他の部位に移し、

膿を出す。もし殼樹汁で調へたものならば癬に搽るがよく、一二回で消する。

○【大提藥方】毒の初起を圍へば、凡そ對口、發背、惡疽が四五日で消く。良方彙選――雄黃、藤黃、麝香各一錢、硃砂三分、蓖麻肉三錢、紅昇丹一錢五分を用ゐ、先づ蓖麻を泥のやうに研つて後に各藥を和し、研り爛らして象牙の匣に封藏し、外を虎皮で包んで置く。それで氣が泄れない。

【種福堂提藥方】諸毒の起らぬものを治し、これを敷けば立ろに起きる。藤黃、雄黃各三錢、蟾酥、紅藥各二錢、冰片、麝香各一錢、蓖麻肉一兩を用ゐ、先づ蓖麻肉を皮を去つて魚凍水のやうに打ち、諸藥を入れて膏のやうに打成し、磁礶に收貯して氣を洩れしめぬやうにする。或は、紅藥を三錢にし、冰片、蟾酥は用ゐないでただ麝三分、辰砂一錢を加へるが宜しといふ。

又、黃提藥方。鬱金、雄黃、藤黃各二錢、牛黃、蟾酥、硇砂、冰、麝各五分、巴豆肉八錢、蓖麻肉一兩を共に搗き爛らして磁瓶に貯へ、その症のあつたとき膏藥の上に少量を放つて貼る。一切の惡毒を治し、未が成らぬをば消すべく、已に成りたるはこれを用ゐれば疔毒を化腐して更に妙である。

【諸毒圍藥】祝氏效方——南星を炒つて四兩、五棓子を黑く炒り、白芨を炒つて各二兩、藤黃、薑黃を炒つて各一兩を共に細末にし、醋で調へて塗る。重きものには牛黃一錢、鹿茸五錢を加へる。

又、種福堂方では、膿なきをば消し、膿あるをば潰する。五棓子一兩、白芷六錢、藤黃、百草霜各三錢、生半夏、生南星、白芨、陳山粉、飛麪各四錢を共に末にし、紅醋で調へて敷く。

○【箍毒】活人書——五棓子を略ぼ焙じて一兩、藤黃四兩、銅青小量、小粉を炒つて八兩を錠にし、使用するときに醋で磨つて塗る。

○【一切の無名腫毒】藤黃五錢、五棓子二兩、白蜜、葱頭各一兩を米醋で調へ、患部を圍ふ。頂だけは殘し、敷いてはならぬ。

○【五色蟾酥墨】能く立ろに腫毒を消す。雄黃、銀珠、膽礬、韶粉、藤黃、銅綠、硇砂各一兩、麝香一錢を共に末にし、蟾酥で筆管ほどの大いさの條にし、水で磨つて塗る。

【疔瘡】吳興楊氏便易良方——銀珠、蜒蝣、白甘菊、人中白、苧根內の白心、雄黃、

藤黄、大黄を共に搗いて敷けば退く。

【坐板瘡】仙遺拾珠——藤黄を搗き碎き、雄猪網油、青布一長條を用ゐ、藤黄を網油に糝つて青布で捲いて條子にし、線で緊く紮つて一夜菜油の中に浸し、火で燃して滴下する油を杯に取り積め、土中に一夜埋めて火毒を出して瘡に塗れば卽效がある。

【五黄散】一切の頑癬を治す。雞脚大黄、硫黄、雄黄、薑黄、藤黄各等分を細末にし、菜油で調へて患部に塗る。七日間洗浴せずに置けば全癒する。

【金氏離洞膏】臁瘡を治することと神の如くである。萬應油五兩、藤黄一兩五錢、淨黄蠟二兩を共に熬つて黑椶色にし、攤して貼る。萬應油を熬る法は、香油六十兩、十六兩官秤を標準とし、桃枝一兩、柳枝一兩、槐枝一兩、桑枝一兩、葱一兩、男髮四兩、花椒五錢、草麻二兩、馬前四兩、華撥五錢、桂枝一兩、白芷二兩を夏は三日浸し、冬は七日、春、秋は五日浸し、然る後に渣が枯れるまで熬つて渣を去る。每觔生油を熬つて熟汁八折を得る。この油は凡そ一切の膏藥の下地となるものである。

金鎖銀開

百草鏡に云く、俗に鐵邊箕と名け、處處の山野にある。葉は天門冬の葉に似て、また土茯苓の葉に似てゐるが、ただやや狹小なだけである。藤生で、或は石砌、樹上に緣り、竹林中にもある。海金沙をいふのではない。その根は黑色で兩旁に細刺があり、邊箕のやうな狀態だからかく名けたのである。藥に入れるには根を用ゐる。

敏按ずるに、今俗に用ゐて一切の喉症を治する金鎖銀開なるものは天蕎麥の根であつて、形は欒丸のやうで黏結して塊に成り、山上に產するものは皮が黃であり、汚泥中のものは皮が黑い。百草鏡に言つてあるものと各〻別である。或は同名異物かも知れぬ。

○李氏草祕——天蕎麥は金鎖銀開とも名ける。形が蕎麥のやうなものだ。乳癰、風毒を治し、散毒の諸藥中に入れる。根を取つて二分、生薑一分を水で煎じて服すれば癒える。敗血の久病で痊えぬを治す。又、痔血を洗ふ。いづれも佳し。

○李氏草祕に又云く、小青草は藤上に稻芒のやうに細い倒摘刺があり、粉紅色の

花を開き、藍色の子が生る。蕎麥に似たもので、野蕎麥と名ける。煎じて痔漏を洗ふの聖藥である。

白濁を治するに、根の擣汁を酒に沖して服す。

【喉中の風火】○孫玉庭云く、その根が專ら喉閉を治するところからこの名を得たものだ。喉風、喉毒には、醋で磨つて喉を漱ぐ。涎痰が去つて喉閉が自ら開く。

【痰核瘰癧】何種なるに拘らず癧瘍結核の初起のもの。梁湖陳府祕方――金鎖銀開を用ゐ、必ず鮮なるものを持ち來つて汁に搗き、酒に沖して服す。その莖、葉をば白水で煮爛し、米粉を和して餅餌に作つて食ふ。二三服に過ぎずして立ろに消する。もし破爛したものならば、梁上の烏龍尾を採んで粗屑を去り、瘡中に納れて外に膏藥を貼り、やはり根汁を服し、餅餌を吃ふ。五六回にして自ら結痂して癒える。

痔漏を洗ひ、蛇傷、木蛇毒を治す。搗汁を酒に和して服す。（草祕）

汪連仕采藥書――金鬚斜は俗に金鎖銀開と呼ぶ。その苗は柔だが堅性で斷れない。今は象毛力と名ける。能く堅きを軟にし、痞を化す。米醋を合せて搗いた汁で口を盥げば、能く鎖纏喉風を開く。枯根でもやはり鎖喉を透し得るものだ。

乳藤

粤志——乳藤は蔓が懸鉤のやうに倒に挂り、葉は尖つて長い。斷てば乳のやうな白汁が出る。婦人産後にこの藤の搗汁を米に和して粥を作つて食へば乳湩が自ら通ずる。

○初生の嫩條は食へる。その大實を冬蘗子といひ、大いさは柚子ほどあり、中に瓤瓣があつて瓣が相疊なり、猪脂のやうに白い。炙いて食へばいづれも甘美であつて、身體や衣服が數日間減ぜずに香しい。秋末、冬初の間に採り、客に餉め服食の珍品と矜つてゐる。血を行らし、乳を通ずる。(粤志)

○李氏草祕——乳汁藤は山麓の林中に生じ、高さ二三尺、葉は葡萄に似て子は藍色の一叢である。根皮を搯むと乳のやうな汁が出る。諸乳毒、癰瘡の中の聖藥である。

膿を排し、毒を散じ、肌を生じ、痛を止め、腫を消し、血を益す。忍び難き痛みはこれで罨すれば止まる。已に成つたもの、未だ成らぬもの、已に潰れたもの、未

だ潰れぬもの、始終いづれも缺くべからざるものである。（李氏草祕）

汪連仕草藥方――乳門草、卽ち乳汁草。又、土𧍒𧍒と名ける。性は寒涼であつて、乳汁を行らし、氣を通じて能く血分に入る。根は痢疾を止める。

細藤のものは卽ち遍地金であつて、又、雞盲草と名ける。雞肝と合せて蒸して服すれば、專ら小兒一切の疳眼を治す。

蝙蝠藤

この藤は岩壁、喬木、及び人家の牆茨の側に附生し、葉は葡萄に類して小さく、岐が多く、勁く厚く、靑く滑であつて、甚だ蝙蝠の形に似てゐる。故にかく名けたのだ。

腰疼、瘰癧を治す。

【腰疼】澹寮試效方――蝙蝠藤二兩を用ゐ、老人には三兩を用ゐる。酒で煎じて服す。二劑で痛が止まる。再服してはならぬ。もし一劑を多く服すれば反つて腰が傾倒して支へなくなる。

皆治藤

牆壁の間に蔓延し、長さ一丈餘、葉は泥藤に似たものだ。暑に中つたときは、根、葉で粉を作つて食ふ。虚損のものは豬胃を雜へて煮て服す。

無根草

采藥錄――この草は、根がなく、葉がなくして生え、紫草上に纏結して生える。無根金絲草と名ける。色は紫なるがあり、黄なるがある。

○百草鏡――無根金絲草、一名大焰草。卽ち兎絲の苗であつて、毛豆の莖上に生えたものが佳し。この草は女蘿と相似たもので、色が金のやうに黄で線のやうに細いものが眞物である。もし色が紅紫で、やや燈心に類したものならば女蘿と名けるものだ。又、紫背浮萍も無根草と名けるが、これとは別物である。

○藥鑑――無根金絲草は、莖は細くして赤く、葉がなく根がなくして、ただ靑色の細纍があつて莖際に附いてゐる。蔓延して極めて長く、多く草木の上に纏はる。

その性は涼であり、味は微甘であつて、水を利し、溼熱を治す。三四月に採る。

○李氏草祕——纏豆藤、一名豆馬黄は葉がなくして花、子がある。卽ち兎絲子である。最も血を治し、豆瘡毒を解す。難產には酒で煎じて服す。

藥性考——金絲草は根、葉がなく。苗を用ゐる。この藥の功は血を涼じ、血を散ずるに在り、故に癰疽腫毒の諸症を治す。味は苦く、性は寒であつて、吐、衄、崩、便、咳、咯の諸血はこれを服すればよく止まる。諸藥毒を解す。瘴癘、疔癰、惡瘡。

○臺志——水を利し、淋を通ずる。

○葛祖方——狐臭、騷氣を治し、汗を辟け、瘧を癒す。

○百草鏡——癃淋、濁痢、帶下、黃疸を治し、痘毒を預解し、紅絲疔に敷く。

【消毒保嬰丹】王之才醫便——凡そ小兒のまだ痘瘡の出ぬものは、每春分、秋分を過ぎた日に一丸を服す。その痘毒は次第に消化する。もしただ一二回服しても痘の出ることが稀である。もし三年に六回服するならば永く痘が出ない。この方は屢〻效驗を擧げたものだから萬〻輕視してはならぬ。纏豆藤一兩五錢、その藤は八月に採收して毛豆莢上に纏繞した細い紅絲を取る。採取したならば陰乾してこれを君藥

とする。妙はこの藥に在るのだ。黒豆三十粒、赤豆七十粒、山査肉一兩、新升麻七錢五分、生地黄、荊芥、防風、川獨活、甘草、當歸各五錢、連翹七錢五分、黄連、赤芍藥、桔梗各五錢、牛蒡子一兩、硃砂を別に研つて甘草と共に煮てから甘草を去つて一兩五錢、苦絲瓜二箇各長五寸、年を隔てて霜を經たものが妙である。灰に燒いて性を存する。右の藥を極細末にし、砂糖を拌勻し、共に千餘下搗いて李核大の丸にし、毎服一丸を濃く煎じた甘草湯に化して服す。右前項の藥は預め精良な材料を準備し、春分、秋分、或は正月十五日、或は七月十五日に修合する。十分に熱誠愼重なることを要し、婦人、雞、犬、猫、喪中の者に見られることを忌む。藥と合せるには清淨な室内で香を焚き、太陽に向つて藥を祝つて「神仙眞藥、體合自然、嬰兒呑服、天地齊年、吾奉太上老君、急急如律令勅」といふ呪文を一氣に七遍唱へる。

慈惠小編――小便不通で諸藥の效なきを治す。○金絲草一握を韭菜根頭と共に湯で煎じて小肚を洗へば通ずる。金絲草は多く黄豆萁上に附いてゐるもので、根なく葉なく、棕のやうな色の細絲であつて、水灘に近い諸樹上にみなあるものだ。

麥裹藤

各麥地にいづれもあるが、臨安縣近郷の他方に尤も多い。四月に採る。莖は麥上に纏はり、葉は神仙對坐草に類してやや尖つて微に毛があり、葉は節に對して生える。莖が細く、節が微紫色で葉の小さいものが佳し。葉の大なるものは力がない。

【跌撲】張氏傳方——乾いたもの一錢を酒で煎じて服す。

白毛藤

また天燈籠とも名け、又、和尚頭草と名ける。白毛藤は人家の墻壁上に生え、莖、葉いづれも白毛がある。八九月に藕合色の花を開いて子を結ぶ、子は生では青く熟すれば紅くなり、鳥雀が喜んで食ふ。

○百草鏡——白毛藤は多く人家の園圃中、墻壁上に生え、春生えて冬槁れる。結子は豆ほどの小さいもので軟く、珊瑚のやうに紅い。霜後に葉は枯れるが、ただ赤子だけ纍纍として壁墻の間に綴り懸る。俗に毛藤果と呼ぶ。その藤を採つて乾し、

それを浸した酒は骨節の風溼痛を除けるさうである。

血淋、癧、疝氣を止める。汁を耳中に滴せば膿を止め、乾かぬ。藥内に入れば腫毒を保して大きくならない。癧瘓を治するには、これで牛肉の精なるものを煮て食ふ。

○溼熱を淸し、黃疸、水腫、小兒の蛔結腹痛を治す。

○採藥志に云く、性は熱にして血を活し、風を追ひ、血を生じ、鬼箭を治するに有效である。

【風痛】楊氏驗方――桑黃二兩、白毛藤二兩を切碎き、紹興原罈酒六觔で三炷香の間煎じ、毎日飯碗で一杯を服す。

【黃疸の初起】百草鏡――白毛藤、神仙對坐草、大茵陳、三白草、車前草各等分を白酒で煎じて服す。

【大氣脬】不藥良方――白毛藤を無灰酒で服す。

天毬草

一名盆子草　俗に盆兒藤と呼ぶ。よく水岸、道旁に生じ、苗は高さ三四尺、葉は

波斯のやう、花に小絨があり、五月實を結んで毬になり、毬の中に二片の黑子を生ずる。生の時は青くして老いて黑くなるのだ。その毎片が龜背のやうなので、又、龜兒草と名ける。丹術家はその汁を取つて硫、汞を伏し、根で雌黃、雄黃を伏する。

○百草鏡――鴛鴦木鼈、一名水荔枝、盒兒藤。葉は長く尖つて鋸歯があり、水涯に生えて蔓生し、秋期に實を結ぶ。結實は荔枝のやうな狀態で、色は青くして刺が殼上にあり、中に斷紋があつて兩截が相合して二粒の子を藏してゐる。子の色は黑く、木鼈のやうで小さい。孫氏丹方に、盒子草の子、及び葉は小毒あり、岸旁に蔓生し、葉は尖り、花は白く、子は中に二片あつて盒子のやうだとある。綱目では榼藤の後に附記してあるが、花、實、根の形が倶に甚だ詳でない。

性は小毒あり。蠱毒、及び蛇咬に主效があり、擣いて瘡上に敷けば癒える。

【痞積の初起】百草鏡に云く、鴛鴦木鼈三錢を煎じて服すれば癒える。

敏按ずるに、この草は預知子のやうである。近頃一般には用ゐることが罕だが、吳氏遵程が著した從新には、預知子を、近頃は無いものだとしたが、實は天毬草なのだ。世間で用ゐないので、草醫はまた他の名稱に易へてゐるといつてある。

松　蘿

山川志——武當山に產し、高峰の古木上に生え、長さは一丈餘ある。蛇、虎の傷、湯、火の烙傷、及び頑瘡等の症を治す。

藥性考——松蘿は、甘くして平である。能く肝氣を平にし嗔怒、痰熱、溫瘧、吐痢、頭風、頭瘡、癭瘤結聚を治し、また能く膈痰を探吐し、熱を去る。

松上寄生

水を利し、痰を導き、胸中の熱を除く。

楓上寄生

汪連仕云く、吊殺猢猻、一名上樹猢猻。又、鐵角猻兒と名ける。乃ち楓樹上の風木藤で、年遠くして結成し、連珠の傀儡たるものである。能く風を追ふ。時刻を換へずに酒で蒸して服す。金雀根、土當歸、石床花根、石鹽を加へれば、癱瘓、勾急

を治するの要薬である。

蛇葡藤

職方典——福寧に產する。莖が細く、葉が猴耳のやうなものだ。喉、齒のあらゆる病を治す。

李頭藤

職方考——福寧に產する。その藤の腐朽したものは香の代用になる。嘔血を止め、經絡を活す。

龍鬚藤

粤東小錄——この藤は東莞に產する。鬚のやうに微細なもので、數丈に直起して一の節もない。常に數樹に飛越して千百の游絲のやうに牽き綴つてゐる。紅いものをば紅龍鬚と名け、紫のものをば紫龍鬚と名け、五色ある。かやうにして生えてゐ

るが、根蒂はなく、穢物をそれに投げ込むと、消釋して何處へ往つたか判らなくなる。土人はその液で細土、石灰を和して甕糖釜を塗るが、その堅きこと鐵の如くで、猛火にかけても裂けない。その花と子とはいづれも藥に入れる。酒に浸して服すれば、筋骨を補し、風を袪り、毒を解し、能く脈絡に循つて微として到らざるはない。

藥性考——五色龍鬚藤は髮のやうに細く、生えて根蒂がなく、樹に挂つて長く發育する。

臭藤根

草寶に云く、この草は二月に發苗して地上に蔓延し、樹の間にはなくて草に係る藤である。葉は對生し、臭梧桐の葉と相似てゐる。六七月に花を開き、粉紅色で甚だ牽牛の花に類してゐるが、ただ口が甚しく放開してゐない。その葉を搓むで嗅ぐと臭氣がある。正しい名稱を何といふ物か判らず、一般にその臭いところから名を臭藤といふ。その根を藥に入れる。生えた歳のものは細小だが、二三年のものは太

く、萊菔ほどあつて用ゐられる。

○李氏草祕に云く、臭藤、一名郤節對葉といふ。延蔓するもので、極めて臭い。煎じて腿足の諸風、寒濕痛、拘攣して轉動し得ぬものを洗へば舒びること神の如くである。

○汪氏藥錄――臭葡萄は蔓延して生える。子は葡萄のやうで臭い。風を治す。又云く、野葡萄は氣重く味臭し。功は能く腸、胃の癰を敗る。

【瘰癧を治す】根を酒で煎じて數服すれば自ら癒える。未だ破れぬものは消し、已に潰れたものは斂まる。

風痛、腸癰、跌打損傷の流注、風火瘡毒を治し、鬱氣を散ずる。痂を洗ふには紫蘇と合せて湯に煎じる。（汪連仕方）

黃練芽

今は黃連芽と呼び、一名を黃楝頭といふ。春初に嫩芽を采り、小兒が生で食ふ。その清香が口によきを取るのである。味に苦濇を帶びて黃連のやうだからかく名け

たのだ。また鹽湯で焯て食ふもよく、漉し出して曝乾し、鹽菜にして暑期に食ふもよし。

○百草鏡――この物は藤生であつて、大樹上に蔓を引き、葉は桑寄生のやうで尖つて長く、柔滑にして頗る光潤、肥厚である。二三月に枯枝に芽を生じ、淡紅色で椿の芽のやうだ。生で食ふと苦中に甘を帶び、口に入ると津を生ずる。安徽地方では、人家で多く醃けて菜にし、芹芽、椿芽、蘆芽と共にいづれも重んじてゐる。

○藥性考に云く、葉は槐に似て尖り、嫩い時に揉み乾して茶の代りにすると茗に勝る。木は甚だ細膩なものだ。苦中に甘を帶び、味が橄欖のやうだ。鹽で食ふと酸く甜く、喉痛、咽哽を解し、熱を消し、酒を醒す。舌爛、口糜には汁を嚼めば解する。

味は苦く澁く、性は寒である。暑を解し、渇を止め、便を利す。(食物宜忌) 津を生じ、目を明にし、積熱を淸し、毒を解す。(藥檢)

斂按ずるに、方以智の物理小識に、黄楝頭、一名回味。俗に黄連頭樹と呼ぶ。葉が分れて椿のやう、大なるは一抱ほどある。春その葉を采る。味は苦くして甘し。

皮は香に合せられる。藥に入れば痢、及び霍亂を治すとある。綱目にはこれを遺して收載しなかつたが、方氏の言ふところのやうだとすれば木であつて、百草鏡にいふところと互に異つてゐる。或はその土地に因つて相異があるのかも知れぬ。それともその物に本來二種あるものか、竝に存して考究に俟つ。

木龍藤

周益生家寶方——この藤は錢塘の横山に出る。喜く人家の牆壁、及び石崖上に沿ふてゐるもので、土地の者は多く識つてゐる。

肺癰、肚癰、腸癰、脇癰の四症を治するに、擣汁を老酒に沖して服す。冬期には酒で搗いて汁を取り、二碗を服すれば立ろに消する。

蔞油

按ずるに、蔞とは扶留藤のことである。

蔞、卽ち蒟である。嶺南地方では、その葉を取つて檳榔と合せて食ふ。今は一般

に棉葉と名ける。その葉を封固し、曬して半載にして收貯して何時でも使用し得るやうにして置けば、數十年貯へて置ける。獨り積滯を疏し、瘴癘を消するだけでなく、治病の功がまた夥しいものだが、ただそれは西洋人だけが持つてゐる。
手足の紅腫して或は疼くを治す。蔓葉を油で揉んで擦り、布で包裹する。耳に滴せば耳痛を治す。刀傷、蛕傷には、棉花を蔓油に浸して傷處を貼り裹む。又、背癰、及び瘰毒を治し、これを貼れば初起のものは直ちに散じ、已に成つたものは速に潰膿する。また楊梅毒瘡、漏痔にも敷貼される。（以上俱に泰西熫振鐸本草補）

花部

梅花

梅梗

綱目には梅花を記載してあるが治方がなく、ただ湯に點て、粥に煮て雅致を助けることを言つたに止まり、食物宜忌には、梅花は味酸く澁し、性は平なりとあつて、いづれも主治がない。やはり梅花を使用することを知らなかつたかと思はれるが、藥に入れることが最も廣くして功效もまた最も大なるものだ。

百草鏡――梅花は冬蕋があつて春開き、その花は霜雪を畏れず、花の後に葉を發し、先天の氣を得ることが最も十分だ。故に能く先天胎毒を解す。紅、白、綠の萼、千葉、單葉の區別があるが、ただ單葉、綠萼のものだけが藥に入れて尤も良し。採るときは人の手に觸れぬやうにしたものが更に佳し。含苞のものは力が勝れてゐる。性は寒である。或は平だともいふ。味は酸く澁く、淸香があつて胃を開き、鬱を散

ずる。粥に煮て食へば淸陽の氣を助け、蒸溜した露水で茶を點てれば渴を止め、津を生じ、暑を解し、煩を滌ふ。

○談撰——卉木はみな春の氣を感じて生ずるのであるが、獨り梅だけは冬に開く。蓋し東方の動は風を以てし、風は木を生ずる。故に曲直酸を作すのであつて見れば酸は木の性であるが、ただ梅の味だけが最も酸い。これは氣の正を得て、北方の水がその母となつて生ずるので感じ易いのだ。故に梅は衆木に先じて華さくのである。癸辛雜識に、梅花には仰いで開くものがない。蓋しまた自ら能く巧に風雪を避けるのだとあるが、實際を驗するに確にその通りである。

粤志——ただ嶺南だけ梅花が最も早く、冬至に雷が地中に動くと梅が地上に開く。蓋しその時が火の氣が地に不足にしてその最初の精華を發するのである。故に梅の開くは水の氣が上は天に足りてその最初の滋潤を施すのだ。故に雪が落ちる。雪は洩であつて、肅殺の中からその一陽の精を洩して、以て來春の生生を爲すのである。雪が深ければ水氣が足り、梅が早ければ火氣が足りる。火氣が足りて天地に於ける陽生の始、陰殺の終を爲し、萬物をしてみなその元に復らしめる。梅の德の大なり

となす所以であつて、天地一陽の復するは見るわけにゆかぬが、梅でそれが見られる。またその氣の先を得てゐるのだ。韶州では梅が長くして已花に至り、臘月に復た開き、尤も盛にして舊蔕に新花を著けるものがある。その地が嶺北に屬するが故に梅が臘を以てし、正月を以てするので、氣が盛なれば開いてまた開くのである。瓊州の梅には六出のものがある。予が謂ふに、梅の五出なるは、五は陽の數であつて、冬至には一陽が始めて復し、梅が花を吐するは陽の先を得たものである。今ここに六出のものあるは、これは陰の數を得てゐる。蓋し地の氣を以て變じ、嚴寒に苦むところから、五を用ゐずして六を用ゐ、雪花に同じいのであつて、梅を以て體となし、雪を以て用となしてゐるのである。一般人はその六を見てその五を見ないが、五は六の中に藏されてゐるのだ。やはり河圖の五は十の中に在るやうなものであつて、河圖の一は水を生じ、梅は水の氣の先を得てゐるから花が冬至に於てし、雪と同時なのである。雪は水氣の凝るところのものであり、梅は水の形の結するところのものであつて、卦はいづれも坎に屬する。水が天に在つて凝つて雪となり、水が地に在つて發して梅となる。水の數は六であり、寒極れば雪花となり、梅とい

づれも六出であつてその數に應じてゐる。

花は微し酸く澁し、毒なし。頭、目を淸し、肺氣を利し、痰の壅滯上熱を去る。

（本草原始）神を安じ、魂を定め、先天痘毒、凡そ一切の中毒を解す。

【瘰癧を治す】雞蛋に一孔を開けて綠萼梅花の將に開かんとするもの七朶を入れて口を封じ、飯の上で蒸熟し、梅花を去つて蛋を食ふ。毎日一箇づつ七日で全癒する。

【唇に瘡を生じたるもの】赤水玄珠――白梅瓣を貼るが神效がある。もし開裂して出血するときは止める。

【紫金錠】端午の日に製合すべきものである。飛硃砂、紅芽大戟、處州山茨菇、千金霜、川文蛤の淨粉、草河車、以上の六味を各二兩、珍珠、琥珀、明雄黃、氷片、陳金墨各五錢、梅花蕋、西牛黃各一兩、川麝香四錢、右の各藥を末にし、乳篩して極細にし、糯米粉糊で杵いて丸にし、研つて用ゐる。

【稀痘神方】白梅花蕋三錢、十分綻びたものを採つて預め曬乾して準備すべきものである。生地黃三錢、當歸三錢、生甘草一錢、臍帶、小兒本人から落下した時に

灰、或は礬を去つて新瓦で炙いて性を存して極細の末にし、共に煎じた濃汁を濾し清て熬膏し、一日分として全部を吃はす。その小兒は永く痘が出ない。萬病回春の記載に、尹蓬頭混元丹は小兒の諸虚百損を治す。梅花と混へ衣とを合せるとあり、注に、梅花は痘、先天の毒を解すとある。

【九仙奪命丹】集聽に云く、又、十聖丹と名け、七十二般の無名腫毒、惡瘡、流注火痺等の症を治す。硃砂三錢、雄黃、乳香、沒藥、氷片、血竭各二錢、石膽礬、銅青、麝香、枯礬、熊膽、飛過黃丹各一錢五分、蜈蚣、蜒蚰、殭蠶各二條を微し炒つて黃色にして嘴を去り、梅花一升、寒水石、牛黃、蟾酥、白宮粉、硇砂各一錢、全蠍九個、蝸牛七條、以上廿三味を末にして極細に研り、硃砂一錢五分を衣にする。その修合の法は、先づ蟾酥を乳汁で化開してそれで共に丸にし、もし丸にならぬときはやや糯糊を加へて桐子大ほどにする。一丸づつを服して、病人をして口に生葱一根を嚼んで咽下さしめ、又、一根を嚼んで極めて爛らし、それを手の心に吐いてそれで藥を裹み、滾熱した老酒で呑下す。時候の冷暖を量つて被を蓋ふて汗を出す。もし病人が嚼めぬときは他人が代つて嚼んでもよし。もし汗のないときは一丸を再服

すれば自ら癒える。凡そ諸毒は、醫が遲れると毒が心に走攻して必ず救ひやうがなくなるものだ。若し汗の來ることが遲ければ熱酒で催す。手で患處を摸摩してはならぬ。もし癢いときは舊い木梳で梳けば自ら止む。

【稀痘】集聽――綠萼梅花七朶を用ゐる。預め花瓶内で養ふべきものである。春分の日に花の半開のものを摘み、ただ淨蕋だけを搗き爛らし、白糖三匙と滾水で服す。毒は全く消して痘の出るを免れる。小兒の滿一个月後には服ませるがよし。

【梅花點舌丹】集驗――一切の疔毒、及び惡瘡の初起、天行瘟毒、咽喉腫痛等の症を治し、輕きは二粒、重きは四粒を、先づ無根水で送下し、次に一粒を取つて舌下に噙んで化す。乳香を油を去つて二兩、珍珠を豆腐で煮過し、麝香を水飛し、熊膽と各六分、沒藥を油を去り、京牛黃、葶藶、硃砂、硼砂、蟾酥を人乳に泡け、血竭、雄黃を水飛して各二錢、片腦一錢を別に研り、沈香一錢、白梅花を陰乾して一錢二分と共に細末にし、人乳で化した蟾酥で黍米大の丸にして金箔を衣にかける。

【預め痘疹を稀にする】不藥良方――每年臘月の淸晨に露を帶びた綠萼梅蕋一百を摘み、上白糖を加へて搗いて小餅にして食はせる。

【三花丹】赤水玄珠――將に痘が出んとするときこれを用ゐれば能く痘を稀にする。梅花、桃花、梨花を已に開いたもの、未だ開かぬもの、開き盛つたものを取つて陰乾して末にし、等分を兎腦で丸にして雄黄を衣にかけ、赤小豆、菉豆、黒大豆の湯で送下する。

【梅桃丹】赤水玄珠――痘の已に出たもの、未だ出ぬもの、起たず發せずして皮膚に隱在するものを治し、竝に痲症、斑症を治す　梅花一兩、桃仁、辰砂、甘草各二錢、絲瓜五錢を末にし、每服五分を參蘇湯で服す。痘の前後を問はず、凡そ黒陷し、牙を咬んで寒戰するには、梅花六錢、穿山甲一兩、仙靈脾五分、麝香一錢を末にし、每服三五分を、咬牙寒戰には人牙二三釐を加へて內托散で送下する。

【青梅散】錫山衣德堂稀痘良方――生青果核七箇を打碎いて仁を去り、曬乾して極細末に研り、火で焙じてはならぬ。又、生水で沾してはならぬ。再び玉蝶梅花二十一朶を蔕を去り、白蜜を茶匙で二匙と共に濃く搗き、丁度春分に交る時に小兒に與へて服せる。永く痘が出ない。出ても三粒に過ぎない。この方は江甯の王培德の家から傳はつたもので、已に九世の間痘殤の兒がなかつた。眞に異方である。

【二氣丸】新安の汪偉公先生の傳へたもので、その家の親戚、友人の小兒の凡てがこの丸を服して永く痘が出なかつた。その方は卽ち前の稀痘神方で、臍帶をば坎氣といふ　梅花は先天の氣だから二氣丸と名けたのだ。

【七仙丹】張琰の種痘新書――痘の氣、血兩ら虛して灰白水泡が癢塌する等の症を治す　黃芪二兩、人參一兩、甘草五錢、紫河車一兩、梅花一兩五錢、鹿茸一兩、天靈蓋一個を共に末にし、八九分づつを內托散の煎湯で送下する。氣の實せるものには山査、陳皮各五錢を加へる。――應昌按ずるに、天靈蓋は卽ち或は益が有るかも知れぬが、やはり用ゐられない。況や二方の功效が全く此にないではないか――

【二花散】種痘新書に云く、能く五陷を起す。黃蠟梅花、素心のものが尤も良し、陰乾し、多少に拘らず毛殼を去つて礶に盛つて聽用する。桃花を陰乾し、山査を核を去つて炒つて末にし、小絲瓜を陰乾して末にし、陳皮を白を去り、人參、黃芪を炙き、甘草を炙き、硃砂、紫河車を酒で洗つて蒸して焙じ乾し、鹿茸を酒、酥で炙き、穿山甲を首、尾、四足のものを取つて炒り、仙靈脾を四弦刺を去つて酒で焙じ、人牙を火で煆いて韭汁に七回焠し、天靈蓋を洗淨して酥を去り、各〻末にして用ゐ

る。

○按ずるに、綱目には、梅花の條下に竝に主治がないが、蠟梅花の條下にやはり僅に暑を解し、津を生ずとだけ言つてある。實は臘梅はやはり竝に梅の種ではなく、その主治もまた廣く、僅に痘を治するだけのものではない。

【龍腦骨】種痘新書に云く、痘が出て未だ透らず、心狂して鬼を見、陷伏する等の症を治す。梅花を用ゐ、多少に拘らず曬乾して末にし、氷片少量を加へて共に研つて末にし、猪心血で和勻して丸にし、狂譫するものには燈心湯を引にし、紫陷するものには紫草の煎湯で調へ、酒を數茶匙加へて化して服す。

【絶痘】楊春涯驗方——南方の綠蕚梅蕋の未だ放かぬものを採り貯へて風乾して用ゐ、四時、八節に逢つたとき、節の前一日に、雞蛋一箇に孔を穴けて蕋を入れ、紙を好く糊つて飯上で蒸熟して吃ふ。數回で永く痘が出ない。出ても數粒に過ぎぬ。

【痘毒を解す】劉氏得效方——立春前後三日に紅梅蕋の半含半開のもの一鍾を採り、蒂を去つて鍾の中に置き、磁楪で蓋をし、一晝夜完全に置いて氣汁を升上させ、

まだ五辛を擂つたことのない新擂盆で擣き研つて泥のやうにし、揫成して餅のやうな狀態にし、明硃砂を水飛して一錢をその上にむらなく糝つて緩緩に研り勻ぜ、白蜜少量を加へて彈子ほどの丸にし、曬して半乾きのとき金箔を衣にし、四絶の日に遇つたとき一丸づつを甘草湯で服す。鐵器、葷、腥を忌む。一丸を服して後、その日の晩は微に發熱し、翌日全身に細瘰を發出する。これはその藥の效驗である。

○種福堂方の梅花丸――痘疹を治するに起死囘生の功がある。又、換痘丹中には、梅蕋、犀角、麻黄膏を並用してある。

朱禹功の仙傳稀痘方――赤豆、黑豆、菉豆各一兩を研末して新竹筒中に入れる。皮を削り、節を留め、孔を鑿つて藥を入れ、杉木で緊く塞いで蠟で封固する。それを臘月中一个月間厠の中に浸し、取出して風乾し、每藥に梅花片三錢を配し、一錢づつを霜を經た絲瓜藤筋の煎湯で服す。神效がある。

【千里梅花丸】旅行携帶用のものである。醫學指南――枇杷葉、乾葛末、百藥煎、烏梅肉、臘梅花、甘草各等分を末にし、二三百杵いて雞豆實ほどの大いさの丸にし、夏期の長途旅行に一丸を含み化す。津液が頓に生じ、寒香が腹に滿ち、妙言ふべか

らざるものである。

梅梗　諸梅樹いづれも用ゐられるが、綠萼のものを佳しとする。凡そ梅には氣條といふ青翠色のものがある。この條には葉がなくてただ光るものだ。梗は枝髈から出るのである。薛微君生白は曾て、これを用ゐて上下膈氣を通ずるに有效だつたといつたが、それは氣條であつて梗ではなかつた。梗を用ゐるには葉を帶びて枝に成るものを藥に入れる。綱目には、梅の部に梅實、及び核仁、根、葉を記載して獨り梗にだけ言ひ及ばなかつた。

【保產神效方】道聽集に云く、婦人が妊娠三个月になると習慣となつて小產し、あらゆる藥も效なきには、梅梗三五條を煎じた濃湯を飲み、復た龍眼湯を飲む。それで胎を保たぬものがない。

雪荷花

雪芝　雪裏花

伊犂の西北、及び金川等の地に產する。大寒の地で、積雪が春、夏も散ぜず、そ

の雪中に草があつて、荷花に類して獨莖で亭亭と雪の間に伸び、美しいものだ。戊戌の歲の春、史太守の處で親しくそれを見たが、荷花に比較してやや細く、その瓣は薄くして狹く、長さは三四寸ばかり、筆頭に甚だ似てゐる。酒に浸せば色が微紅になり、彼の地方の土人はこれを服して助陽の要藥とするさうである。

憶舊遊詩話――雪蓮花は千年不化の元雪の深い處にある。形は蓮花に似て高さ一丈ばかり、取つて酒を釀せば倍〻春色を增す。蓋し陰極つて陽生ずるの意味なのだ。また巴里坤等の地方にも產する。

西北域記――雪蓮は積雪中に產し、一莖に蒂を竝べてあるものだ。酒に浸せば色が碧で、性は熱である。世間ではその功が仙茅、枸杞と同じだと稱するが、實は禍たるや砒、鴆と同じものである。蝦蟇比蓮が尤も甚しい。

予の甥の屠澗南が哈密から歸つて雪荷花を持つて來たので、その功效を訪ねて見た。その話に據ると、その地に天山といふがあつて、冬、夏積雪があり、雪中に蓮があるのだ。天山の峰頂に產するものを第一とするが、しかし得られない。山の腰部のものがそれに次ぐものだ。この物が生えるには雌雄があつて、土人はこれを採り、

乾して對にして賣る。性は大熱であつて、能く陰を補し、陽を益し、老人の陽絶したものは酒に浸して服する。能く八十歳のものをして子を生ませるといふことであつた。

性は大熱であつて、一切の寒症を治す。この物は極冷の地に産するもので、乃ち陰極つて陽生ずるからである。

朱排山の柑園小識――雪蓮は西藏に生ずる。西藏國内は積雪が消えぬので、暮春、初夏に雪中に生える。形狀は雞冠花のやうで、葉は(一)逼肖し、花は尖り、色は深紅である。性大熱であつて、能く冷疾を除き、陽道を助ける。富豪の家で爭つてこれを求め、房中の藥に調合する。

灤陽銷夏錄――塞外には雪蓮といふがあつて、崇い山の積雪中に生ずる。狀態は今の洋菊のやうなもので、名が蓮といふだけである。その生えるには必ず雙つで、雄はやや大きく、雌は小さい。しかし並んで生えるのではなく、また同根でもなく、必ず一二丈隔てて生えてゐるもので、その一を見つけて更に他の一を搜せば必ず無いといふことがないものだ。蓋し兎絲と茯苓とのやうに、一の氣から化したもので

(一)逼肖トハ狹ク衰徴セル貌。

氣が相屬してゐるのだ。凡そこの花を望見したならば、無言で往つて採れば獲られるが、若しそれを指して『見つかつた』などといふと、雪中に縮入して杳として痕迹がなくなり、雪を掘つて捜してもやはり獲られない。草木にして意識があるといふことは理屈からでは不可解だ。土人は山神が惜むのだといつてゐるが、或はさうかも知れぬ。この物は寒極の地に生じて性は熱である。二氣に偏勝があつて偏絶が無く、積陰が外に凝つて純陽が内に結するのだ。坎の卦は一陽を以て二陰の中に陷し、剝、復の二卦は一陽を以て五陰の上下に居く。これがその象である。されば酒に浸して補劑となるは、多くは血が熱して妄行するのである。或はこれを用ゐて媚藥と合せるが、その禍は尤も烈しい。蓋し天地、陰陽が均調して萬物が生れ、人身の陰陽が均調して百脈が和するのである。故に素問に『亢するときは害ひ、承くれば制する』といつたのだ。丹溪が、陽は常に餘あり、陰は常に足らずとの說を立ててから、醫家はその本旨を失つて、往往にして苦、寒を以て生氣を伐ひ、張介賓の輩が矯枉過直で、遂に補陽に偏して參、耆、桂、附の流弊がまた人を殺すに至つてゐる。これは未だ易道の陽を扶けて乾の上九はまた以て亢陽の悔あることを戒めて

あることを知らないのだ。嗜慾日に盛にして羸弱の者多く、溫補の劑が小效を見易いので堅く信ずるものが遂に衆くなつたのである。故に余は謂ふ、偏に陽を伐るものは韓非刑名の學であり、偏に陽を補すにものは商鞅富强の術である。用ゐた當初にはいづれも功があるが、そのまゝ積重して返ることがなければその根本を損傷することは同一であると。雪蓮の功が恩を補せぬのもやはりこの理である。

痘の起發せぬもの、及び悶痞し、悶痘するを治す。ただ一瓣を用ゐて煎藥中に入れば立ろに效がある。屢〻試みていづれも效驗があつた。――陳海曙の話――

雪芝 南中紀聞――衡岳の間にある。これは冰霰の結したもので、歲久しく蒸積して成るものだ。陰崖絕壁の間に產し、晶瑩玉の如く、峻坂に懸挂してあるので、蘿を攀ぢ岩を越えて登らねば摘み取れない。

肺疾を療じ、火を降し、心を淸する。

雪裏花 朱楚良は鎭海にゐたが、その話に、土人に雪裏花を采るものがあつた。冬期嚴寒の時にこの花が始めて生じ、招寶山の龍潭の旁に生えて、渚を環つて發苗し、甚だ短小で、六月雪の狀態のやうで高さ二寸ばかりに過ぎず、毎雪時に豆の大

いさほどの白花を開く。土人はこれを采つて乾して藥に入れる。

〔痔瘡に敷く〕雪裏花を末にし、濕へるには乾いたものを摻り、乾けるには麻油で調へて搽る。一二度でその痔は消縮する。

水仙花子

能く風を去り、肌膚を澤にし、毛鬚を潤し、五心の煩熱、嘈雜不寧を治す。荷葉、芍藥と共に末にして服す。

催生蘭

粤志――一名報喜蘭。風蘭の族であるが、竝に風蘭ではない。花は蠟梅のやうだが、色は紅紫である。香味もまた同じ。莖毎に七八枝をなし、樹間に懸つてゐるもので、地氣に觸れない。吉事がある場合に開くもので、(二)寤生は花を戶上に懸けると生れる。

○關涵嶺南隨筆――報喜は吉事に遇つて始めて開く。種法は、空を根となし、露

(二)寤生トハ逆產ヲイフ。

を命となす。風蘭と同じ。

催生の主效がある。

珠蘭

藥性考——珍珠蘭は、味は辛し、茶を窨へば香が郁しい。その根は有毒である。磨つて癰癤に敷くがよし。

今は雞爪蘭と名ける。花經に云く、眞珠蘭、一名魚子蘭。枝、葉は茉莉に似て、花は長條、細蕋を發き、建蘭と同時であつて、香もやはり相似てゐるが、濃郁なることはそれに過ぎてゐる。好淸者はその蕋を取つて茶を焙じるが、尤も妙である。但し性は毒であつて、ただその香氣を取るに止むべきものだ。故に藥には入れない。張篁壬云く、中條山に老道士がゐて、人に教へて狐魅を治してゐたが、ある一人の女が雄狐に祟られたとき、珠蘭根を搗き爛らして寢臺の傍に置き、狐が來て交接せんとするとき、その陰莖にこれを塗らせた。すると狐は大いに嗥えて竄れ去つたが、翌日野外に一匹の狐の死骸があつた。道士は、この根は狐の肉に沾ふと死ぬもので、

性能く狐を毒し、尤も捷效があるゝのだといつた。

建蘭花

葉　根　草蘭

建蘭には、長葉、短葉、闊葉の諸種があり、その花には五色を備へるもので、色の黑いものは墨蘭と名け、容易に得られない。乾して瞽目を治し得るもので、能く瞳神を生ずる。青盲を治するに最も效がある。紅花のゝのは紅蘭と名け、氣が臭濁で藥には入れない。黃花のものは蜜蘭と名け、瀉を止めるに用ゐられる、靑色のものはただ點茶の役に立つだけであるが、或は蜜に浸してその甘芳が氣分を通ずるを取る。素心のものは素心蘭と名け、藥に入れるに最ゝ佳し。蓋し建蘭は一莖に數花あるもので、實は蕙であつて蘭ではない。綱目には、薰草を蕙、卽ち今の零陵香となし、蘭草下の正誤の條に說明して、蘭草は佩ぶべきもの、乃ち孩兒菊であつて、古の都梁香と名けたゝのがそれだとし、且つ寇氏、丹溪の二家の解說の蘭草を世俗の蘭花に混入するを非なりとして斥け、蘭花を幽蘭として蘭草とは逈に異ふといつ

たが、然らば何ゆゑに幽蘭の一條を立てなかつたのであらうか、缺略の憾なきを得ない。因て急にこれを補つて置く。

素心建蘭花は、乾して催生に用ゐられる。宿氣を除き、鬱を解す。靑蘭花を蜜に漬けて茶に點じて飮めば、氣血を調和し、中を寛にし、酒を醒す。——閩小記に、建寧では人家で蘭花を蜜に漬け、冬期に茶を點てる。芳香が初めて摘んだもののやうになるとある。——

葉　丹溪云く、建蘭の葉は金水の氣を稟けて火を有するに似たものだが、實はこの物は能く久積、陳鬱の氣を散ずるに甚だ有力であつて、當今の醫者はこれを用ゐて經絡を通舒し、風邪を宣洩するが、やはり佳し。

○本草匯に云く、蘭葉は金水淸芬の氣を稟け、火を有するに似て、特に氣に走つて西方に道入し、それで辛金を淸くする。獨り胃を開き、肺を淸し、痰を消するだけではなく、能く積久、陳鬱の結氣を散ずるものだ。今一般にただ花香を賞するだけで葉を用ゐることを知らないのはまた缺典である。況や藥味は內經に記載されたものは甚だ少くして蘭だけが獨り名を擅にし、所謂、乙を治するに蘭を以てして陳氣を除くといつてある。故に東垣の方中には每にこれを用ゐて、藿香、枇杷葉、

石斛、竹茹、橘紅と共に胃氣を開くの神品としてある。沈香、鬱金、白蔻、蘇子、蘆根汁を入れば噎膈の將に成らんとするものを治す。閩中に產したものは力が勝れ、江浙の諸種は力が薄い。

辛平、甘寒にして陰中の陽であり、手の太陰、足の陽明の經に入り、また足の太陰、厥陰の經に入り、津を生じ、渴を止め、胃を開き、鬱を解し、肌肉を潤ほし、月經を調へ、營氣を養ふ。本經に水道を利することを主るとあるは、その氣道に走るに因つてであつて、故に能く水を利し、渴を消し、胸中の痰癖を除き、蠱毒、不祥の氣を殺すものである。蓋し肺は氣を主るもので、肺氣が鬱結すれば上竅が閉ぢて下竅が不通となり、胃は水穀を納めることを主るもので、胃氣が凝滯すれば水穀が一定の時に消化せずして痰癖、蠱毒、不祥の氣となるのであるが、辛、平は能く結滯を散じ、芬芳は能く穢惡を除くので上記の症が自から除けるのである。(本草滙)

按ずるに、綱目では蘭草の條は幽蘭を指してないが、本草滙では草部に蘭草があつて、その說明はいづれも建蘭、卽ち瀨湖のいつた幽蘭そのものを指してゐる。此

にはその說に從つて補つて置く。

根　土續斷と名け、跌打を治して血を和す。――物理小識に、幽蘭、建蘭の根は甘し、藥に入れるに宜し。その花は茹へる。葉を油に浸せば髮を黑くするといひ、又、都梁蘭の根は土續斷と名けるといつてある。これはこの物のことであらう。〇五雜俎には、蘭根を食へば能く人を殺す。內服を忌むとある――

痰嗽後の吐血を治す。〇劉羽儀經驗方に云く、先に痰嗽し後に吐血して氣急するものには、天冬、麥冬、生地、白芍、紫苑、山梔、桑皮、地骨皮等の藥を用ゐ、もし氣急するときは、天冬を去つて眞蘇子を加へ、蘭花根の搗汁を取つて沖して服するが尤も妙である。

〇江夏程雲鵬著の慈幼筏の痘門に記載してある淸地散花飮――凡そ痘が標に現れて三日にはこの方を主とする。疹を夾むものがあるには、蘭花根を加へ、額上の灰滯色なるには、菊花、蘭花、梅花を加へ、或は蘭花根もよし。又、玉液春膏飮中には、背寮不足を治するに酒で炒つた土蘭花を加へてある。

草蘭　葉は短くして狹小である。春花あるものを春蘭と名け、秋花あるものを秋蘭と名ける。いづれも一幹に一花である。一幹に數花のものをば九節蘭と名ける。

その蕚中に紅斑點なき色の純なるものをば草素と名け、尤も香しい。藥に入れては一幹一花のものが良し。

根　瘋狗咬を治す。行篋檢祕——根を取つて四兩を水で淨め、黄酒二碗を入れて煎じて一碗となして全部を服す。その毒は大、小便に從つて血に化して出る。

玫瑰花

紫、白の二種あつて、紫のものは血分に入り、白きものは氣分に入る。莖に刺があり、葉は月季のやうで鋸齒が多く、高さは三四尺ある。その花の色は紫である。藥に入れるには花瓣を用ゐる。火を見せてはならぬ。

○百草鏡に云く、玫瑰花は立夏の前に含苞のまだ放かぬものを採つて陰乾して用ゐる。火を見せることを忌む。

氣は香しく、性は溫であり、味は甘くして微し苦い。脾、肝の經に入り、血を和し、血を行らし、氣を理し、風痺を治す。

○藥性考に云く、玫瑰は、性は溫にして血を行らし、積を破る。損傷瘀痛には酒

に浸して飲めば益がある。

【吐血を治する玫瑰膏】救生苦海――玫瑰花一百朶、初めて開いたものを用ゐ、心、蒂を去り、河水二碗で半に煎じ、再び河水一碗で半に煎じ、渣を去つて和匀して合せて一碗半とし、復た煎じて一碗までにし、白糖一觔を入れて膏に調成し、時に拘らず服す。

【噤口痢】玫瑰花を陰乾して煎じて服す。

【乳癰を治す】玫瑰花七朶、母丁香七粒を無灰酒で煎じて服すれば自ら癒える。

【腫毒の初起】百草鏡――玫瑰花を心、蒂を去り、焙じて末にして一錢を好酒で和して服す。

【乳癰の初起】鬱症にこれが宜し。百草鏡――玫瑰花の初開のものを陰乾し、燥いたもの三十朶を心、蒂を去つて酒で煎じ、食後に服す。

【肝、胃の氣痛】玫瑰花を陰乾し、湯を沖して茶に代へて服す。

【新、久の風痺】百草鏡――玫瑰花を蕋蒂を去り淨めて陰乾して三錢、紅花、全當歸各一錢を水で煎じて渣を去り、好酒で和して服す。七劑にして根を除き、永く再

（一）吐紅、卽チ吐血。

發せぬ。

【(一)吐紅】集聽――玫瑰花を多少に拘らず用ゐ、蔕を去つて搗いた汁を熬膏して瓶中に貯へ、毎朝空心に茶匙で挑げ取つて四五匙に白滾水を沖して服す。一二日で癒える。

少林拳經――玫瑰花は能く跌打損傷を治す。

【風痺藥酒】救生苦海――白槿花、大紅月季花、玫瑰花を蔕を去り各一兩、鬧羊花五錢、風茄花五朶、龍眼肉、北棗肉各一兩を紹酒五壺に浸して七日間封じ、隔水で煮る。罈上に白米一撮を置いて米が熟して飯になるを度とする。取出して二三杯づつを服し、暖に蓋ひ臥して風を避ければ癒える。

【保眞丸】朱排山柑園小識の保眞丸――能く經絡を通じ、百脈を和し、腰腎を壯にし、脾、胃を健にし、食慾を增進し、歩行を健にし、一切の痼疾を除き、能く眞元を固くする。玫瑰花を蔕を去つて瓣を摘み取り、竹紙で貼つた袋に裝入し、薄く攤して曬乾して取つた淨末一觔を用ゐる。火を見せてはならぬ。この花は、色は能く血を益し、香は能く氣を補し、述べ盡し難い妙がある。補骨脂一觔を泥土を淘淨し、

甘草、朮、芪、苓各五錢の煎汁一碗を拌ぜて曬し、汁が盡きるまで曬燥して炒り、兎絲子一觔を芎、歸、芍、生地各五錢の煎汁を渣を去つたもので煮て、兎絲子が絲を吐くまでを度とし、曬し乾して炒り、胡桃仁六兩を皮のあるまゝ泥のやうに搗き、杜仲四兩を鹽水で炒つて絲を去り、韭子四兩を淘淨して微火で炒り、各〻細末にして煉蜜で桐子ほどの大いさの丸にし、毎朝空心に四錢を白湯で服す。羊肉、蕓薹を忌む。并に諸血の一方として、魚膘四兩を加へる。男、女共に服してよし、子を產むがその極效である。或は鹿角膠、枸杞子を加へる。

金雀花

一名黃雀花。六月雪に似て本が高い。正、二月に黃色の花を開く。梗に刺がある。根を藥に入れる。

○花鏡――金雀花は、枝柯は迎春に似て、葉は槐のやうで小刺がある。仲春に黃花を開き、その形は尖つて旁に兩瓣を開き、姿勢が飛雀のやうで愛すべきものである。その花を鹽湯で焯て控乾し、茶に入れて供する。

○百草鏡――金雀花は山土中に生じ、雨水の時に花を開き、黄色で香しく、形は雀に酷似してゐる。白花のものをば銀雀と名け、最も得難い。その莖には白點があり、花の後に葉が發き、碎小な葉で下に軟刺がある。根を取つて藥に入れるもので、外の黑皮、及び內骨を去つて用ゐる。別に霞雀花といふがあるが、これは一層得られないものだ。

○嘉興府志――金雀、一名飛來鳳。鹽で浸し、それで茶に點するがよし。

○成化四明志――金雀兒花は奉化に產する。

○丁未の歲、余が奉化の劉明府の官舍に寄寓し、幼孫が痘を患つて起發しなかつたとき、醫者は金雀花を用ゐた。そのわけを詢ねて見ると、この藥は大いに能く痘瘡を透發するものだ。その物が先春の氣を得てゐるから能く毒を解し、邪を攻めるのだといつた。花を用ゐる。

性は平である。血を和し、風を祛り、肝、脾の二經に入る。また乳癰の藥にも入れて用ゐる。

百草鏡――跌撲傷損には、金雀花の乾いたものを研つて一錢を酒で服す。

根　跌打損傷を治し、又、咳嗽を治し、筋骨を煖め、痛風を療じ、性能く風を追ひ、血を活し、兼ねて血脈を通じ、結毒を消する。

○濟世良方——金雀根の擣汁を酒に和して服し、渣で傷處を罨すれば跌打損傷を治す。

金蓮花

廣羣芳譜——山西の五臺山に產し、塞外に尤も多い。花の色は金黃で七瓣が兩層となり、花心もやはり黃色の碎けたもので、蕋は平正で尖り、小さく長く狹くして黃瓣がその心を環繞してゐる。一莖に數朶あつて、蓮のやうで小さい。六月に盛に開き、望見すると地上一面に金色爛然たるものだ。秋になると花が乾いて落ちない。結子は粟米ほどで黑い。その葉は綠色で、瘦せ尖つて長く、五尖、或は七尖である。

○五臺山志——山に旱金蓮といふがあり、眞金のやうで陸地に挺生してゐる。此處は文殊菩薩の聖蹟と言ひ傳へられてゐる。

○張壽莊云く、五臺山には金蓮花が出る。寺僧はそれを摘み採つて乾し、禮物と

して客に餉め、或は寺に入ると馳走してくれる花の盞中に一二朶を浮べてある。南方の地にある茶菊のやうなわけである。これを食へば人を益するといふことだ。

査愼行人海記――旱金蓮花は五臺山に出る。蕣は池蓮のやうでやや小さく、色は眞金のやうである。曝乾すれば遠方への贈物にもなる。その贈物を受けたものがあつて、點茶一甌に花一朶を置いて出したが、花が沸湯中に開いて新鮮愛すべきものであつた。後に聖駕に扈從して古北口から出たとき見ると、外塞の山に多くこれがあつた。花は五六月の間に開き、一たび秋に入ると莖、株倶に萎える。

○金蓮花は五臺山に出る。又、旱地蓮と名け、一名金芙蓉といふ。色は深黄、味は滑で苦く、毒なし。性寒であつて、口瘡、喉腫、浮熱、牙宣、耳疼、目痛を治するに、これを煎じて茗に代へる。

目を明にし、嵐瘴を解す（怨軒）疔瘡大毒、諸風（山海草函）

佛桑花

粤語――佛桑は、枝葉は桑に類し、花が丹色であつて、朱槿と名け、一名福桑と

いひ、又、扶桑と名ける。重臺のものをば愛老といひ、多く蔬にする。綱目には、木槿の後に扶桑の條があつて、ただ外治を記載したに止つたから補記して置く。

吳震方嶺南雜記――扶桑は粤中の處處にある。葉は桑に似てやや小さく、大紅、淺紅、黃の三色があつて、大なるものは開泛して芍藥の如く、朝開いて暮に落ち、落ちて了ふと復た開き、三月から十月まで絕えない。佛桑は扶桑と正に相似てゐるが、中心に樓が起つて多くは一層の花瓣である。今一般に扶桑と佛桑とを混一するは正しくない。紗、緞の黑色が褪めて黃に變じたときは、扶桑花を搗いて汁を塗れば復た黑色が新しいやうになる。容貌を潤し、血を補す。（粤語）顏を美くし、血を潤す。――陳遠齋の瑣語に、朱槿花を醋で蒸して食ふ。粤中の婦女は多くこれで容姿を美くするとある――

敏按ずるに、兩粤瑣語に記載してある朱槿と佛桑とは皮に微しの異がある。そのいふところは、朱槿一名日及。また舜英ともいふ。葉は桑のやうで、光潤で厚く、高さは四五尺に止つて婆娑たるものだ。仲春から仲冬まで一叢の上に日日に數百朶を開き、朝開いて暮に落ち、色は深紅で、五出で大いさ蜀葵ほどあり、瓣が捲き上

つて姿勢が飛颺してゐるやうに見え、層出して樓子のやうになり、蕋が一條あつて、瓣に比較してやや長く、上に金屑を綴つてゐるのが、日光に爍映すると火焰かと見擬ふやうだ。粵の女は多くこれを種ゑるが、枝を挿せば生きるものだ。蘇子瞻の詩に、焰焰空を燒く紅佛桑といつたのは朱槿のことだ。然し佛桑もまた殷紅、水紅、紅紫の各色があつて、朱槿に比較するとやや小さく、小牡丹と稱し、四時花がある。白いものは蔬菜にもなり、甜美にして口當りがよい。女子はこれを食ふが尤もよしといふのである。この陳淰齋のいふところに據れば、佛桑と朱槿とは一類の二物であつて、要するにその功用もまた甚しく遠くはない。故に粵記にこれを朱槿としたのである。此には竝にその功用を附錄して李氏の未だ備さならざりしところを補つて置く。

寶珠山茶

雲溪方——地に落ちた花の仰いでゐるものを貴しとする。山茶は多種であるが、千葉で大紅なるものを勝れたものとして藥に入れる。

○百草鏡――山茶は多種であるが、ただ寶珠を藥に入れる。その花は甚だ紅い四瓣で、大瓣の中にまた碎けた瓣を極めて多く生ずる。味は澁し。二月、三月に採つて陰乾して用ゐる。若し全部が大瓣千葉のものならば、それは洋茶と名けるもので藥には入れない。單瓣のもの藥に入れない。羣芳譜に、寶珠山茶は鬱金の代用となり、研末して麻油で調へて湯火灼傷に塗るとある。

味は微し辛く甘し、性は寒である。血を破り、癰を消す。跌打、吐血の症にこれを用ゐる。又、腸風瀉血、湯火傷、鼻衄、灸瘡を治するには、均しく焙じて七朶を研り、空心に酒で服す。

○百草鏡に云く、血を涼じ、血を破り、血を止める濇劑であつて、癰腫、跌撲を消し、久痢、腸風下血、崩帶、血淋、鼻衄、吐血を斷つ。灸瘡に敷く。

【赤痢】救生苦海――大紅寶珠山茶花を用ゐ、陰乾して末にし、白糖を加へて拌勻し、飯鍋上で蒸して三四回服す。

【鼻中の出血】何明遠方――千葉の大紅山茶花を二三月に採つて陰乾し、使用する時に五六朶を取つて煎じて服すれば止る。

又、張氏必效方――鼻衂には、寶珠山茶の大紅なるものを用ゐ、焙じ研つて三五錢を砂糖、滾水に和して服す。

【吐血咳嗽】不藥良方――寶珠山茶を瓦で黑色に焙じ、紅砂糖で調へて日日に服す。多少に拘らぬ。

又ある方。寶珠山茶十朶、紅花五錢、白芨一兩、紅棗四兩を水で一碗に煎じて服し、滓を再服し、紅棗を時に拘らずまた取つて食ふ。

蔣儀藥鏡拾遺賦――山茶花は吐血、衂血、腸風下血の良將である。

宋春暉云く、曾て、ある人が乳頭を患ひ、花が開いたやうになり、墜ちんとするほどの非常な疼痛であつたが、ある人に寶珠山茶を用ゐることを敎へられて、焙じ研つて末にし、麻油で調へて搽ると立ろに癒えたのを見たことがある。

【痔瘡出血】汪子明方――寶珠山茶を研末して沖して服す。

粉團花

根を附す。

大、小の二種あつて、その花は千瓣簇を成す。大なるものをば玉粉團といひ、初は青いが後に白くなる。小なるものをば洋粉團といひ、青色が白く轉じ、白が後に紅藍色に轉ずる。藥に入れるには大なるものを用ゐる。

性は寒である。臭蟲を熏ずるに、水龍骨、雷公藤と共に和して燒熏すれば立ろに除ける。（百草鏡）

【腎囊風を洗ふ】姚伯玉方——粉團花七朶を水で煎じて洗ふ。

○良方集要——蛇牀子、牆上の野莧、琇球花を用ゐて洗ふ。

根 【喉爛を治す】傳效方——土中に入つてゐるものを取つて好醋で磨り、翎毛に蘸けて患處に掃く。涎が出て癒える。

玉簪花

綱目には、玉簪の條に根、葉の用を記載したが、獨りその花をいつてなかつた。

今は一般にその含蘂を取つてその中に鉛粉を塡實し、飯鍋上で蒸し、かくすれば能く鉛氣を去り、且つ香が粉中に透るので婦人がこれを顔に傅ければ皯、痣の患がな

いといつてゐる。——その葉を乾して壁蝨を熏ずれば跡を絶つ——

花の性は微毒がある。小便不通を治す。彙集方の玉龍散中に用ゐてある。

【治癬第一靈丹】寶誌遺方——鮮の玉簪花三百朶を泥にし、母丁香六兩、沈香四兩、氷片三錢、麝三錢、山西城磚十二兩を共に末にし、眞麻油三觔半で熬熟し、陳年の石灰半觔を用ゐて水に滴して珠に成るを度とし、冷えるを候つて磁罐內に收め、黃蠟で封固して土中に二十一日間埋め、取出して患處に敷けば自ら癒える。この藥は久しく貯へられるものだが、氣を洩らしめてはならぬ。

【杖破を治す】玉簪花を手で排熱して傷處に貼る。

【淸涼膏】張卿子祕方——耳の瘋毒に貼る。大黃、黃柏、黃連、黃芩、鬱金、皮硝、白芨、獨脚蓮、天花粉、玉簪花を共に細末に硏り、雞子淸で調へて敷き、頂を殘して置く。

又、二香追毒飲——肚心の癰を治す。羌活、連翹、紫蘇、甘草、白芷、防風、銀花、天花粉、肉桂、黃芪、乳香、木香、沈香、芍藥、生地、枳殼、黃芩、柴胡、前胡、茯苓、玉簪花を水で煎じ、食後に服す。

山海草函――玉簪花を詔粉中に入れて疳瘡蚘蛕に敷く。

【玉龍散】小便不通を治す。玉簪花、蛇蛻各二錢、丁香一錢を共に末にし、毎服一錢を酒で調へて送下する。（醫學指南）

玉蘭花

瀕湖の綱目には、辛夷の集解下に、ただ花の白いものがあつて、世間では玉蘭と呼んでゐるといつただけで別に主治を立てず、卽ち辛夷も苞蕋を用うとあるがこの花の效用には言及しなかつた。此に龍柏藥性考を采つて補記して置く。

性は溫にして香、滑である。痰を消し、肺を益し、氣を和す。蜜に漬けるが尤も良し。

【月經時に痛み、妊娠せぬもの】良方集要――玉蘭花の將に開かんとしてまだ十分ならぬものを毎年一朶づつ取り、毎日早朝空心に水で煎じて服す。

丁香花

形狀未詳——藥性考。

味辛くして微温なり。罨つた茶の弔露は頭、目を淸利する。

紫茉莉

この草は二三月に發苗し、莖は節に逢ふと骨節のやうな狀態に粗くなる。葉は長く尖り、光綠で、前は銳く後が大い。小暑後に花を開き、紫、白、黃の三色があり、又、一本に五色のものがあつて、花は朝開いて暮に合する。結實は外に苞があり內に靑子を含んで簇を成し、大いさ豌豆ほどのもので、久しくすると黑くなり、子の內に白粉がある。宿根を三年取らずに置けば牛蒡ほどの太さになり、味は微甘で山藥に類してゐる。

陳扶搖の花鏡には、紫茉莉、一名狀元紅は、本は甚だ高くなく、ただ婆娑として蔓衍し、生じ易い。葉は蔓靑に似てゐる。

○按ずるに、紫茉莉は夏に入つて花を開き、深秋に至つても已まぬ。白花のものは香が尤も酷烈である。その花は日を見ると直ちに斂まり、日が入つて後に復た

開く、やはり久しくは持たぬもので、一日で萎える。西方の地にはこれを食ふものがあつて、その外皮を去り、鹽に漬けて副食物とし、能く風を去り、血を活し、濁淋等の症がなくなるといつてゐる。しかしその性は純陰を稟り、柔の中に利を帯ぶるのだ。久しく食へば恐らく骨軟になる。陽虚の人は尤もこれを忌む。性鐵を惡むもので、凡そ取つて用ゐるには鐵器を忌む。

根は乳癰、白濁を治す。花は酒に浸すがよし。子を土山柰と名ける。その粉を取つて面上の皯痣、粉刺を去り得る。性は寒である。（藥性考）

野薔薇

百草鏡——山野も人家に種ゑるものと異はなく、ただ形が大きくなく、花はみな粉紅色で、單瓣であつて千葉のものがない。春期に山間の住民がその花を採つて化粧品店に賣り、それで粉を蒸した製品が婦人の面藥となつて賣られる。その香は汗を辟け、䵟黒を去るものだといふ。

○花鏡——野薔薇、一名雪客。葉は細くして花が小さく、その本には刺蔓が多い。

籬落の間に生じ、花には純紅、粉紅の二色あつて、いづれも單瓣で見榮えがない。ただ香は最も甜く、玫瑰に似てゐる。世間では多く取つて露を蒸溜する。含蕋を採つて茶に拌ぜるも佳し、瘧を患ふものは烹て飮めば癒える。

六研齋筆記――通元子の服餌法は、春期の薔薇の嫩頭を服すること一个月にしてよし。毎日服して三日目に三釐づつ漸增して一分に至れば、水に入つて坐臥しても病まぬやうになる。かくして一年經てば、蠟を身體に塗り、利刃を挾んで江湖に潛遊し、驪龍の珠を刼すことを得られ、珠を得て空を行くこと自如たり、石に觸れても礙られず、三界、八寰も自由自在に往來し得る。これは飛仙の業であつて、薔薇頭を嚙むことから始まるのだ。これを客に話すと、盧胡として笑はぬものはない。

花　瘧を治す。○伍涵芬讀書志――白野薔薇花を茶に拌ぜて煎じて服すれば瘧鬼を驅り得る。

○婦人の鬱結吐血。○劉克中云く、香烈にして大いに眞氣を耗する。虛せるものは服することを忌む。

根　肺癰の膿痰を吐くを治するに、酒で煎じて服す。口瘡には湯に煎じて口を漱

ぐ。

子　石珊瑚と名ける。産後の軟癱を治す。〇婦人の禿髪には、薔薇の嫩枝と猴薑との煎汁を刷く。

秋海棠

嶺南隨筆——海棠はもと香がない。ただ清遠の歸猿洞の秋海棠、肇慶の羚羊峽の春海棠はその香が特に盛だ。

〇羣芳譜——一名八月春。草本で、花は色が粉紅で甚だ嬌艶だ。葉は綠で翠羽のやうである。この花には二種あつて、葉の下に紅筋のあるものは普通の品だが、綠筋のあるものは花が開くと更に雅趣がある。

〇大觀錄——秋海棠はまた斷腸草と名ける。その根、葉は有毒で、犬、馬が食ふと死ぬ。花を浸した水を飲めば人を害する。

〇漳州府志——秋海棠は歳毎に苗が生え、その莖は甚だ脆く、葉は背が紅亂紋を作してゐる。これは相思血といふもので、昔、ある人が深き思に惱んで血を階下に

噴いたのが、遂にこの物になつて生えたのだと語り傳へてある。故にまた相思草とも名ける。その花は一朶が落ちると旁に二朶を生じ、二が四を生じ、四が八を生ずる。大極の象を具へたもので、特別に雅艶なものだ。

○花鏡——秋海棠、一名八月春。秋色中の第一である。本は矮くして葉が大きく、背に紅絲が多くして臙脂で界紋を描いたやうだ。花は四出で、次第に末朶まで開き、鈴子を結んで極枝に生ずる。花は嬌冶柔媚なもので、その異種に黄、白の二色がある。一名を斷腸花といふ。

○周開郭云く、秋海棠は、俗にその花の中の黄心には大毒があつて、人が食へば多くは死ぬと言ひ傳へてゐるが、予はある日悞つてこれを食ひ、一夜の間非常に心配したが、旅館内にはそれを解すべき藥もなかつたので、ただ運に任せてゐると、翌日もやはり恙なかつた。丁憲榮は、秋海棠の葉の初生は、山左地方では小兒が爭つて採つて食ふ。味は酸くして津を生じ、能く唇の色を益して朱を塗つたかのやうにするといつた。これで見るとその毒のないことが判る。

○藥性考——海棠は喜んで背陰にして生える。故に性は寒であつて、凡そ大熱の

症に用ゐられる。

味酸し、性は寒にして毒なし。蜜に和して顔に搽れば肌を澤にし、肉を潤ほす。その幹の搗汁は咽喉痛を治す。(藥性考)

百草鏡に云く、癬に擦れば蟲を殺す。葉、花を蜜に浸して婦人の面藥に入れて用ゐる。

○物理小識――銀を白くするには、烏梅、三葉酸、秋海棠葉いづれもよし。

【海棠蜜】救生苦海――紅秋海棠を花を採つて心を去り、白蜜を拌勻し、十回蒸曬して化けるを度とし、冬期の早朝に洗面後に敷く。能く色を豔にし、幷に吹花癬、痱癗を治す。

○慈航活人書にある海棠蜜の製法――上白蜜一大杯を用ゐ、紅秋海棠の現に取つた花片を蜜の中に拌ぜ入れ、花を略ぼ搗き爛らして日日に曬し、或は數回蒸して白ら泥のやうに爛らす。その蜜は海棠のやうな色になる。或は好き芙蓉粉少量を加入すれば光が甚だ美しくなり、且つ面皮の凍裂を免れる。

茶菊

城頭菊　金鈴菊　金箭頭　菊米　菊根

茶菊は家菊に比較すると朶が小さく、心が多い。黄、白の二色がある。杭州銭塘の管内の良渚、檜葬地方では、郷人が多く菊を種ゑるを業とし、秋十月に花を採取して、擔つて城市に入つて賣つてゐる。黄色のものには高脚黄等の名があり、紫蒂のものをば紫蒂盤桓と名け、白色千葉のものをば千葉玲瓏と名ける。徽地方の茶舗では多く買つて、焙乾して點茶用とする。常中丞安の宦遊筆記に、鳳凰山に產する菊花は甚だ大きくなく、蒂が紫である。味は甘い。取つて茶に點てるに甚だ佳し。又、浙省城頭一帶に產する菊をば城頭菊と名け、いづれも城上の石縫中に生じ、秋になつて花を開く。花は茶菊よりも小さく、香氣が腹に沁む。茶に點てて更に佳しとある。これは茶菊の野生のもので、性、味は同じくない。臨安の山中に產する野菊は金鈴花と名ける。花は小さくして豆ほどのもので、城頭菊と彷彿たるものだ。山間の住民は多く採つて藥舗に入れ、野菊花として用ゐてゐるが、實は野菊とまた同じく

ない。野菊を食へば人を瀉せしめるが、鈴菊はまた瀉を作さない。野菊は瓣が疏らだが、これは旁瓣が密で別である。瀕湖の綱目には菊を家と野とに分けたが、この數種にだけまだ言及してなかつた。現に杭地方の俗間では茶菊を客への馳走や贈物にしてその利用が最も廣い。予はそれ故にくどいやうだがこれを説明して、兼て瀕湖のまだ完備しなかつた點を補つて置く。

○百草鏡に云く、甘菊、即ち茶菊は浙江、江西に產するものが佳し。形は細小だが香しい。亳州に產するものは用ゐられない。白くして微し臭い。近頃では杭州の筧橋、安徽の池州、紹興、新昌、唐公市、湖北(缺)州にいづれも產する。藥に入れるには、陰乾したものを蔕を去り、白朮、枸杞子、地骨皮を使とする。河魨、及び無鱗魚と反する。園菊は花が大きく、藥には入れない。ただ枕に裝入すると風を去るだけである。その根は疔腫を治するに却て效がある。

○羣芳譜――一名眞菊、一名家菊、一名茶菊。花は正黃で小さくして指頂ほど、外は尖瓣で內に細蕊があり、柄は細くして長い。味は甘くして辛く、氣は香しくして烈しい。葉は小金鈴に似て更に亞が多く、淺い氣味が薄荷に似てゐる。枝、幹は

嫩いときは靑くして老いると紫になる。實は葶藶のやうで細く、これを種ゑても苗が生える。人家で種ゑて蔬茹に供する。凡そ菊の葉はみな深綠で厚く、味は極めて苦く、或は毛があるが、ただこの葉は淡綠で莖が柔く、味が微し甘く、咀嚼すると香味俱に勝れてゐる。摘つて羹にし、及び茶に泛べると極めて風致がある。

○萬曆嘉善縣志――花が黄、梗が紫のものは甘菊であつて最も良し。野菊は叢生して花が小さく、性は涼である。家菊は花が大きくして氣が聚つてゐない。

○黄茶菊は紫蔕のものを佳しとする。目を明にし、風を去り、肝氣を搜し、頭暈、目眩を治し、血を益し、容を潤し、血分に入る。

○食物宜忌――黄菊花、卽ち甘菊は、味は苦くして微し甘し、性は平である。肺、腎を益し、風を去り、熱を除き、血を補し、目を養ひ、眩運、頭風を淸する。

○白茶菊は千葉のものが佳し。肺氣を通じ、欬逆を止め、三焦の鬱火を淸し、肌熱を療じ、氣分に入る。その根は疔腫、喉疔、喉癬を治す。

○海寧に產する茶菊は金井玉欄杆と名ける。その花は心が黄で邊が白い。點茶に甚だ佳し。

○聖惠方に云く、黄甘菊は、能く濕を燥し、風を祛るけれども、また能く火を助け、氣を泄する。

性は平なり。專ら陽の分に入る。諸風、頭眩を治し、酒毒、疔腫を解す。

【撲打損傷】○王阮亭居易錄に云く、四川提督吳英の說。昔、撲打損傷の祕方を得た。瀕死の重傷でも、ただ一絲の脈がまだ絕えぬものならば、灌ぎ下せば立ろに甦る。その方は十一月に野菊花を枝、葉を連ねて採つて陰乾し、用ゐる時に一兩を取り、童尿、無灰酒各一碗と共に煎じて熱服する。

【紅絲疔】立效驗方――白菊花の葉を用ゐる。白いもののないときは別の菊でもよし。冬期で葉のないときは根を取る。雄黃一錢ばかり、蜒蚰二條を加へて共に搗いて極めて爛らし、頭から絲の盡きる處まで敷いて止め、絹條で緊く裹む。一夜隔てれば淸になる。眞に神方である。

城頭菊　朱排山柑園小識――杭城の石罅に生ずる菊は枝、葉が極めて瘦せて小さく、九月に豆ほどの花を開き、香しくして且つ甘い。雍正の初年、人を禁じてこれを採り、それを貢品に充てた。大奧でそれを枕にしたのである。城上の菊は旣に野

生であつて味が甘いのは、やはり一の奇現象である。蘇頌圖經に、一種あり、小小の花を開き、瓣下は珠子の如し、これを珠子菊と謂ふとあるはこの菊をいつたのではあるまいか。

目を明にし、頭風、喉痺、癧毒を去り、血を涼ずる。その枝、葉の鮮なものを生で搗いて疔瘡を罨し、幷にその汁を服すれば兼て蛇咬、瘰癧、梅瘡、眼瘡を治す。煎じて天泡瘡を洗へばやはり效がある。

金鈴菊　百草鏡に云く、花を采つて乾して枕に作れば、頭風、目疾、內熱を除く。風火眼を洗ひ、熱瀉を止める。擣いて一切の腫毒、諸蟲咬螫を罨すれば效がある。胃虛で便が滑し、實熱なきものは用ゐることを忌む。その苦、寒が胃を傷めて能く瀉を作すからである。

○羣芳譜の記載に、金鈴菊は、花は小さくして鈴の如く、その幹は長くして人と等しい。凡そ菊の葉はみな五出であるが、この葉だけが尖長な七出で、花と葉と層層として相間り、枝頭だけに生ずるのでないとあるが、これは家種の金鈴菊のことで、野生の金鈴菊ではない。けれども功用はやはり彷彿たるものだ。

金箭頭　馬伯州菊譜――花は長くして末が鋭く、枝、葉は茹へる。金箭頭と名け、又、風藥菊と名ける。專ら頭風を治して他の菊に比し十倍する。

菊米　處州に出る一種であつて、山中の野菊である。土人はその蕋を採つて乾す。半粒の菉豆ほどの大いさのもので、甚だ香しくして輕く圓い。黃亮は、毒を敗り、疔を散じ、風を去り、火を淸し、目を明にする第一のものだといつた。遂昌縣の石練山に產する。

菊根　張介賓本草正に云く、白菊根は善く水を利す。搗汁を酒に和して服すれば、大いに癃閉を治す。

【瘰癧の未だ破れぬもの】醫學指南――野菊根を採つて搗爛らし、酒で煎じて服し、渣を塗れば自消する。消せねば自ら破れる。

睡蓮

廣志――睡蓮は葉を數重に布き、葉は荇のやうで大きく、花に五色がある。夏期中に晝開き、夜は縮んで水底に入り、晝になるとまた出る。夢草の晝は地に入り夜

になつてまた出るのと反對である。廣州にこれがあつて、諺に、睡蓮を佩るな、好く眠らされるといふことがある。綱目には、蔬部に睡菜を記載したが、睡蓮だけを遺してあるから補つて置く。

○張黴大觀錄——綽菜は夏期に池沼の間に生ずる。葉は茨菰に類し、根は藕條のやうだ。これを食へば人をして睡を思はしめる。又、瞑菜と名ける。

○嶺南雜記——睡蓮菜、一名瑞蓮花。瓣は外が紫で內が白く、幹は釵股ほど、心は雞頭に似てゐる。水の深淺に因つて長短をなし、晝は沈んで夜浮ぶ。必ず雞鳴のときに采れば得られるものだ。高州に產する。

これを佩びれば多く好く眠る。(廣志) 淸香爽脆にして暑を消し、酲を解す。(嶺南雜記)

瑞香花

粤語——乳源に白瑞香が多い。冬期に盛に開いて雪のやうだ。故に雪花と名ける。刈つて薪にし、山蘭、芎藭などの屬と雜へて燒くので何處の家でもみな香しい。その種は擘枝なるを上とする。紫色のものがあつて、香が尤も烈しい。衆くの花の中

へ雜へると、衆くの花が往往にして香がなくなる。皆この花に奪はれるのだ。一名を奪香花といふ。乾いたものを藥に入れて用ゐる。綱目には、芳草の內の瑞香の條にただその根を記載して、急喉風を治するに、白花のものを用ゐて水に硏つて灌ぐといつただけで、やはりその花の功用はいつてなかつた。故に補つて置く。

藥性考——瑞香花は馥糖餞芳で甘し、頭目を淸利する。齒痛には含むが宜し。

子午蓮

綱目では、水草の部に蘋を入れて、この物が卽ち大葉の蘋とし、古人はこれを食品とした。祭に用ゐた蘋蘩とはこの物だとしてある。今は浙地方では子午蓮と呼ぶ。水澤の陂蕩中に生じ、葉は荷に比較して小さく、口が缺けて圓くない。夏に入ると白花を開き、午の刻に開いて子の刻に斂まり、子の刻に開いて午の刻に斂まるからかく名けたのだ。花を採つて藥に入れる。

小兒の急慢驚風を治するに、湯に煎じて服す。七朶、或は十四朶を用ゐる。杭城の張子元肩店では多年これを施して人を救つてゐる。

桃金孃

粤志——草の花で孃なる名のあるものに桃金孃がある。野間に叢生し、梅に似て末が微し鋭く、桃に似て色が倍す頳く、中莖は純紫で深黄の絲を綴つて金粟のやうだから桃金孃と名けられたのだ。八九月に實が熟し、靑紺で牛乳のやうな狀態だ。桂林に產し、今は廣州にも多くある。粤の歌に『南山の陽に手を携へて、花を采ればば香筐に滿つ。妾は留求子を愛し、郎は桃金孃を愛す』といふがある。

○花鏡——金絲桃、一名桃金孃。桂林郡に產する。花は桃に似て大きく、その色は更に頳く、中莖は純紫で、心に黃鬚を吐いて花外に鋪散し、さながら金絲のやうだ。八九月に實が熟し、靑紺で牛乳のやうな狀態だ。味は甘し、藥に入れて用ゐられる。もしこれを分種せんとするときは、根下から劈開して土で覆ふて置くがよし、それを來年になつて移植すれば活きる。

花　血を行らす。

子　味甘し、脾に入る。血を養ひ、目を明にする。

假素馨

廣中に產する。青藤仔の花である。

○粵語——青藤仔は、葉は長さ三四寸、芒刺多く、莖は太さ指ほどで堅く靭い。人家でこれを日用することは、やはり北方の地で柳條を用ゐるやうである。煎湯で瘡疥を洗ふが良し。

千金花

これは千金草の花で、千金草、卽ち本經の蘭草、今呼ぶところの孩兒菊、省頭草がそれである。二月に宿根から再び發苗し、莖は紫、枝は素、節は赤、葉は綠で節に對して生え、光澤にして岐があり、嫩いときは挼めるもので、佩ぶるによし。八九月には次第に老いて枝頭に穗に成つた花を著け、紅白で、狀態は雞蘇に似てゐる。久しくすると花瓣が白に轉じ、絨が裂けて毬のやうになり、毬の中には一粒の子があり、絨は子上に著いて色が黑い。味は苦く臭く、香氣が烈しい。卽ち千金花であ

る。瀕湖の綱目には、僅にその葉の功用を記載しただけだが、本草乘雅に、千金花を酒で煮ると臭氣が木香に類し、苦いことは黄連よりも甚しい。これを用ゐて滯痢を治するに效を獲ること頗る捷だとある。予は故にその說を采つて花部に入れ、未だ備らなかつた點を補つた。

花　氣は香しく、味は苦し。酒に浸して滯下を治す。それは能く不祥を闢辟し、水道を利し、氣を宣して四達せしむるの功に因るのである。(乘雅)

梧桐花

山海草函――杖丹、癩頭、湯火傷を治す。

金鳳毛

汪連仕云く、今は一般に翠翎草と呼ぶ。翠に遶つて翎のやうであり、細葉は地に塌して生え、翠雲草、鳳尾とは同じくない。

敘按ずるに、この種は卽ち蔦蘿である。今世間で竹を編んで亭臺を作り、これを

盆に植ゑる。中秋に甚だ紅な小花を開くものがそれである。

耳疔、痔漏を治す。

十姉妹

一名佛見笑(ぶつけんせう)といふ。汪連仕云く、その根、葉を取つて陰乾して末にし、蜜糖湯で調へて服すれば、傷寒の危篤なるを治するに立ろに效がある。これは元升觀の祕方である。

雨韭

汪連仕草藥方に云く、雨韭(うきう)は水澤の旁に生ずる。卽ち靑茨菇(せいしこ)の花であつて、濕を去るの功は茵陳(いんちん)に同じ。

一切の疔腫を散じ、痔漏を消し、目を明にする。

罌粟子油

精を固くする。(物理小識)

佛前舊供花

雲谷醫抄――癧瘡、爛腿を治するに、佛前の多年の陳久なる供花を用ゐる。取つて來て香油に浸して貼れば愈える。

果部 上

延壽果

これは鹿銜草の子である。又、松潘衞志に延壽果があつて、果は土に生じ、味甜くして山藥に似たり。竝に無樹果なりとあるが、これは或は同名異物であらう。

○按ずるに、鹿銜は、千金方には、鹿藥草と名け、その葉が大きくして表面が綠、背面の靑きものが眞物であるとあり、蘇恭は、大、小の二種あるといひ、保昇は、葉は茺蔚に似て叢生する。毛あるものは吳風草である。この草は秦地に生ずるものだけは子がある。土人は名けて延壽果といふといつた。

仁恕堂筆記――張掖、河西の地に、草根で形が黃連のやうな一種のものがある。盤根が屈曲して、有若（缺）然。その邊境の人民はこれを取つて籩豆に實て、これを贈進物にし、名けて延壽果といふ。俗にまた鹿跑草と稱する。その味は甚だ甜し。血中の邪濕を理し、下元を溫補し、風痺、歷節痛を去る。小兒がこれを食へば驚

悸を定める。（三邊紀畧）

本草逢原に云く、味は微し濇くして甘し。ただ老人を益するばかりでなく、嬰兒の先天不足のものに尤も上藥である。惜いかな南方では得ることが罕だ。

櫻額

果の屬であつて、關東の烏喇口外に產する。その樹は叢生し、果の形は野黑葡萄のやうでやや小さく、鮮の實は甚だ美しい。曬乾して末にする。遠方へも送れるものだ。

○盛京志——一名稠梨子。實は黑くして澀い。土人はこれを珍重し、間これを麪にする。暑期に水で調へて服すれば瀉を止め得る。

按ずるに、宦遊筆記に、郁李、卽ち棠棣。結子は櫻桃のやうだ。南方の產は酸く澀くして食はれない。盛京に產するものはまた櫻額と名け、味は甘鮮である。曬乾して末にするが更に佳しとある。

味甘く澀し。性は溫にして脾を煖補し、洩瀉を止める。

倒弔果

御製幾暇格物編――俗に弔搭果と名ける。形は山梨に似て小さく、體は微し長い。味は酢く、肉は多く沙し、蒂が長い。諸果は始めて生つたときはみな上を向くが、この果は花も實もみな下垂してゐるからかく名けたものだ。生の時は堅く澀いが熟すると沙である。樹は枝、葉倶に梨のやうだ。秦中の物産となつてゐるが、今は遵化の沿邊にある。而るに之を諸種の文獻に就いて考窮するに、草木の諸譜にはいづれも倒弔なる名稱の記載がない。ただ上林賦に『答遝離支』といつてあつて、答遝の發音は打拉と近く、張揖の注に、答遝は果名なりとある。按ずるに、梅堯臣の牡丹の詩に打拉の二字を用ゐてあり、北方人の方言に、欹垂せる貌を打拉といふ。ここに答遝を果に名けたのは、或はその下垂してゐるに因つたものであらう。說文、海篇倶に榙樑果としてある。今の名の弔搭は、或は答遝の發音の轉訛なのだ。

性は暖にして胸膈を利し、脾を健にし、食を消す。

飛松子

雲南土司志――邊境の各土司の深山中に一種の飛松子といふを產する。結實が熟したとき、人が取らうとすると子が飛び去つて了ひ、夜になると根下に歸つて來る。土人はその場所に標記をして置いて、夜になるのを待ち、子の刻を過ぎてからその根を掘つて取る。贈進物としての珍品としてあるが、味は甚だ香美である。

○徐霞客遊記――飛松、一名孤實、また梧實とも書く。さながら梧桐子のやうだが大いさはそれに倍し、色、味もやはり梧桐子のやうだが、殼が薄くして剝ぎ易い。寄樹中に藏れて、一見すると直ぐ樹を伐れば得られるが、遲れると樹はあつても子はみな飛び去つて空株となつて了ふ。故に飛松といふのである。ただ巔塘關外の野人の境にある。その葉は柳のやうで、味は甚だ土豆に類する。

○滇略――梧の實で、大いさは豆ほど、殼は脆くして剝ぎ易い。他の地のものと類似せぬものだ。俗にこれを山松子といひ、また飛松ともいふ。

○朱排山柑園小識――飛松は滇南に產する。梧桐子に似てやや大きくして微し長

く、內外、色味俱に背てゐるが、香美はそれに過ぎてゐる。松樹上に蔓生し、土人は甚だ珍重してゐる。

氣を下し、痰を消し、血脈を通和し、能く魂を返す。凡そ人の魂神不安、及び、驚越して魂を失し、神がその舍を守らぬ等一切の症があつたときはこれが要藥である。故に靈壁趙氏の天王補心丹は怔忡を治するもので、これを用ゐてあり、張菉猗は、十香返魂丹は飛松子殼を加へれば更に效があるといつた。

茶 枘 子

邊輿考——その樹は遼東の塞外に產し、高さは三尺ばかりあり、葉は南方の楝樹のやうで背に黃白點があり、花は四出で形が手のやうで碧色だ。或は八出のものもある。結子は大いさ拳ほどで、熟すると食へる。その甘さは飴のやうなものだ。その樹を浸した水は油として燈に燃し得る。藥に入れるには子を用ゐる。一切の病を治す。遼塞には藥がないので、土人は病者があると茶枘子を取つて啖ふ。それで癒える。

椰油

椰中酒　椰膏　椰皮　椰肉

臺灣使槎錄に云く、膏火の佐となる。或は、火で椰を炙くとその油が自ら出るといふ。凡そ椰子を揀るには、手で搖つて見て水の聲が清亮に聽えるものならば心が大きくして甜く、その肉が厚い。水聲の濁つてゐるものはさうでない。

○滬水燕談錄――椰子は安南、及び海外の諸國に生ずる。木は椶櫚のやうで、大なるものは高さ百餘尺あり、花は白くして千葉の芙蓉のやう、一本の花に三五顆に過ぎず、その大いさは斗ほどからやや小さいものまである。外には黃毛、軟皮があつて中に殼があり、正に檳榔に類し、殼上に二穴があつて牙が穴中から出てゐる。殼內は蘿菔に類し、皮は味が苦く、肉は極めて甘く脆い。蠻人は甚だこれを珍重する。

○劉恂嶺表錄異――椰の殼中には液が數合あつて、乳のやうでやはり飮める。冷にして氣を動ずる。

○廣果錄――椰樹は高さ六七丈、直く竦つて枝がなく、木の末のところに蒲を束ねたやうな長さ二三尺の葉があり、花は千葉の芙蓉のやうで色白く、一年中絶えない。葉の間に瓠が繋つてゐるやうな實が生り、房房が連累してゐて、一房に二十七八實、或は三十實ある。大なるものは斗ほどあり、皮があつて厚く苞んでゐる。それを椰衣皮といふ。中に核があつて甚だ堅く、膚、肉とみな緊く著いてゐる。皮の厚さは半寸ばかりで雪のやうに白い。味は脆くして甘い。膚の中は空虛で、また一升ばかりの淸漿があり、味は蜜よりも美で微に酒氣があり、椰酒といふ。蘇軾の詩に『美酒林に生じ儀狄を待たず』とある。それは椰の中には自然の酒があつて、儀狄に作つて貰ふまでもないといふ意味だ。

○廣東名勝志――文昌縣の玉陽山には椰子が最も多い。太さ三四圍、高さ二三丈で通身に枝がなく、三百餘年に至つて纔に葉があり、三月に花があつて實房を連著する。房は三十、或は二十七八子で、六月に至つて熟し、七月に採收する。

齒疾、凍瘡を療ずる（粤志）著氣を祛る。（華夷花木考）消渇を治す。髭髮に塗れば立ろに黑くなる。（瀧水燕談錄）

椰中酒　食物考――緬甸に樹頭酒といふのがある。卽ち椰子中の漿汁である。華夷花木考の記載に、林邑王が南越王と怨があつて、刺客を遣してその首を取り、それを樹上に梟したのが化して椰子樹となつたので、王が刺された當時大いに醉つてゐたので椰の漿も酒のやうで、人が飮めば醉ふのだとある。

風を祛り、水腫を消し、吐血を止める。頭に塗れば髮が黑くなる。然し多食すれば人を昏し、動氣し、渴を增す。性が温だからである。久しく服すれば鬚を烏し得る。（食物考）

椰膏　粤載――土人が椰子殼を取つて熬膏したもので、色は漆のやうに黑い。癬に塗るが良し。

椰皮　煮汁は血を止め、吐逆を療ずる。（滬水燕談錄）

椰肉　氣を益し、風を生ずる。（滬水燕談錄）

【楊梅下疳、筋骨疼痛】不藥良方――椰子殼を燒いて性を存し、燒いた時に臨んで滾酒に泡けて二三錢を服し、暖に臥して汗を取る。その痛は直ちに止まる。

宜母果

嶺南雜記——橘に似て酸し。又、宜濛子と名ける。

〇元の呉萊に宜濛熱水の歌がある。

〇粤語——宜母子は橙に似て小さく、二三月に熟して黄色になる。味は極めて酸い。妊婦の肝虚のものがこれを嗜むところから宜母といふのだ。元の時に廣州の茘支灣に御果園を作つて、里木樹大、小八百株を栽種して渇水を作つた。里木、卽ち宜母子であつて、一名黎濛子といふ。呉萊の詩は『廣州の園官渇水を進む。天風、夏熱の宜濛子。百花醞し作す甘露の漿、南園烹成す赤龍髓』といふので、蓋し里木子から搾つた水で煎じた糖である。蒙古人はこれを舍里別といふ。卽ち渇水であつて、一名藥果といふ。熟した當時、人家で競つてそれを買ひ、多く貯藏する。歳を經ること久しくしてやはり汁になり、醋に代へられる。大紅を染めるにその汁で調へるを上とする。

〇藥性考——黎朦子は、大いさは梅ほど、形は橘に似てゐる。妊婦は食ふがよし。

能く暑を辟ける。卽ち宜濛子である。妊婦がこれを食へば能く胎を安ずるので、又、宜母と名ける。

醃けて食へば氣を下し、胃を和す。懷妊不安はこれを食ふが良し、製して漿としたものは酷暑を辟け、又、能く渴を解す。

○宜母子は鹽で醃ければ歲久しくして色が黑くなる。傷寒、痰火を治し得るものだ。(粤語)

天師栗

卽ち娑羅子。

一名娑羅子。胃痛を治するに最も效驗がある。綱目には主治下に記載を缺いてゐる。

○通雅――娑羅は外國の交讓木であつて、葉は柟に、皮が玉蘭に似て、色が葱白で最も潔く、鳥が棲まず、蟲が生ぜぬ。子は能く氣を下す。

○益部方物記――峩嵋山中に生ずる。枇杷に類し、數箇の葩が合して房をなし、

春開いて葉は表に在り花が内に在る。或は、根は徙されぬものだといふ。

○呉船錄木——葉は海桐のやう、また楊梅に似て、花は色が白く、春、夏の間に開く。長安の客の話に、臥佛寺内の娑羅樹二株は、子は橡栗のやうで、心疾を療じ得るといふ。

○宸垣識略——娑羅の花は苞の大いさ拳ほどあり、葉は批杷に似て、凡そ二十餘葉が相沓つて苞を捧げ、桐花に類してゐる。一簇に三十餘朶あつて、月を經て落ちる。

○留青日札——娑羅樹は西番、海中に出る。予が潯州にゐたとき、官圃に甚だ巨大な一株があつて。毎枝に七片の葉が生え、花は穗が甚だ長く、黄にして栗花のやう、秋後に實を結び、栗のやうで食へるものだつた。正に所謂七葉樹である。藥性考に、娑羅子は一枝に七葉、九葉で、苞は人面のやう、花は牡丹に似て香しく白いとある。

肉は味苦くして微涼である。中を寛にし、氣を下し、胃脘、肝膈の膨脹、疳積、瘧痢、吐血、勞傷を治す。胃を平にし、絡を通ずるに、陰陽丸で炙いて灰にし、或

は酒で煨いて食へば倶に效がある。單用するもので、他の藥には入れない。或は天師栗と稱するは誤だといふ。

○葛祖遺方——味は甘し、溫にして毒なし。心、胃の寒痛、蟲痛を治す　性溫にして蟲を殺す。

【胃痛】○百草鏡——莎婆子を用ゐる。卽ち娑羅子である。一箇を殼を去つて搗き碎き、煎じて服す。能く蟲をして大便に從つて出しめ、三服にして根を除く。

【九種の心痛】楊春涯驗方——娑羅子、卽ち武吉を灰に燒き、酒を沖して服す。

化州橘紅

橘瓤上絲　糖橘紅　橘餅　藥製柑橘餅　靑鹽陳皮　橘苓

嶺南雜記——化州の仙橘は、羅辨といふ仙人が橘を石龍の腹に種ゑたのが、今でもなほただこの一株だけ存在してゐるのだと言ひ傳へてゐる。蘇澤堂に在るものを最とし、淸風樓のものがそれに次ぐ。その實は橘ではない。皮は厚く、肉が酸く、食ふわけに行かないものだ。その皮は正しく五片、七片に成るもので偶數にはなら

ない。眞物は一片の價格が一金に値する。毎年結ぶところのものをば法規に循(したが)つて文書で官廳へ報告し、その時期には督撫が親しく現場へ出張を命ぜられて一一檢分して採り、それを製造官に渡すことになつてゐるので、その土地の者でもやはり多く得られない。彼の土地の者は、凡そ州廳に近くして譙樓(せうろう)の更鼓を始めて聞いたものはその皮がやはり佳いのだといふ。故に化州皮は贋物が多くして眞物は甚だ得難い。

○關涵嶺南隨筆――化州の官署の橘樹は一月に一子を生じ、その皮を藥に入れると痰が立ろに解した。後に風に折られてからその地に補植したが、氣味は殊(ちが)つた。今稱する化州橘紅は、いづれも增城の香柚の皮で僞作したものをこれに代へてある。能く物を化するが自ら化することは不能だ。

○粤語――化州にある橘は一株官署にあるので、一个月に一子を生ずる。その皮で作つた橘紅を瀹(に)た湯を飲めば痰が立ろに消する。曩(さき)にはやはり皇帝の御料になつてゐた。今では大風に拔かれて新に一株を種ゑたが、味は及ばない。化州ではそれ故に多く橘紅を嶺內へ賣出してゐるが、官署中に產したものだけが特に異つてゐる

のだ。

○本草乘雅に云く、橘柚は、專ら精なるものは實であり、實の復た專ら精なるものは皮である。皮には全面に細竅があつて、さながら人の皮膚のやうだ。卽ち脈絡、肉理、筋膜、子核各〻屬するものがあるのである。故に力が能く轉た入つて升となり、轉た升して合となり、卽ち轉た合して開となるのであつて、種種の形證は悉く從つて入り從つて合するのである。故に胸中の瘕熱、水穀の失宣、神明の不通、氣逆、及び氣臭、耳下の氣の者は出已つて降る。玉衡機轉の妙用である。

○識藥辨微に云く、橘紅は、近頃廣中から來るものはみな單片を束ねて象眼塊とし、或は三十、五十片で、兩頭を紅繩で紮つて一把としてあるが、外皮は淡紅色、內腹の皮は白色で全身を周る。また猪鬃皮もある。この種はいづれも柚皮であつて、やはり能く痰を消する。又、ある一種は世間で重じてゐるもので、每個五片、爪のやうで、中に化州の印を用ゐてあり、五爪橘紅と名けてある。やはり柚皮で製したもので、掌片に比較しては佳いが、よく究めて見ると眞のものとは遠いこと甚しい。眞の化州橘紅は煎じると甜く香しくなり、その汁一滴を痰盂の中へ入れると痰がみ

な變じて水となる。それが上品なのである。

○梁氏家藏蘇澤堂化州橘紅は、一箇毎七に破れ、それを反摺して七岐に作り、曬乾した氣の甚だ香烈のもので、橘紅の歌がある。歌は『石龍靈異測るべからず、首は青霄に向ひ尾は澤に潛み、ある時は聲吼洪にして鵝の如く、ある時は噴沙白きこと雪に似たり。鳴て或は宰相期生に應じ、鳴て或は科甲蟬翼を聯ね、由來州牧その常を履む。惟恐る怪奇愚俗を駭すことを。亭碑鼓吹その頭を鎮め、重鑊虆石その穴を塡む。天生の靈異憑る可きなし、譎奇屈曲化して橘となる。橘の性たるや溫且つ平、能く傷寒と積食とを愈し、痰を消し嗽を止め功更に奇なり。誰か先づこの眞龍の脈を辨ず。價値黃金求易からず、語寄す人間浪に擲つことを休めよ』といふのである。

痰症を治すること神の如し、油膩、穀食の積を消し、酒を醒し、中を寛にする。氣虛のものは服することを忌む。蟹の毒を解す。——慈惠編に、食蟹中毒には、橘紅の煎湯を服すとある——

「辰砂五香丸」翻胃、噎膈、嘔吐を治す　張氏經效方——血竭、乳香、沒藥、辰砂

各一錢五分、元胡一錢、化州橘紅一錢を用ゐ、共に末にして三分を酒で服す。

【羊癲瘋】良方集要——雄黄、天竺黄、川貝母各五錢、眞琥珀一錢、麝香一錢、陳膽星一兩、以上を各別に研り、全蝎十四箇を足を去つて酒で洗ひ、遠志肉を甘草汁で製し、鈎藤、防風、化州橘紅、薑衣、羌活、茯苓、天麻、石菖蒲各五錢、以上を火を見せずに曬乾し、蟬退三十箇、白附子六錢と共に末にして煉蜜で龍眼ほどの大いさの丸にし、毎服一丸を水に開いて服す。

按ずるに、百草鏡に、廣東高州府化州に出る陳皮の白を去つたものを橘紅と名ける。今はやはり罕に得るものだ。土人は柚皮をこれに代へて賣出すので、價もやはり高くはない。これを辨別する法は、必ず先づ皮の色と筋の味を看る。もし皮が皺んで粗く、色が黄にして厚く、内に白膜が多く、味は反つて甜くして辛を帶ぶるものならば乳柑皮であつて、ただ茶に點てるだけで藥に入れるには堪へない。皮が極めて厚くして泡鬆であり、紋が極めて粗くして色が黄に、内に膜が多くして筋がなく、味は甜が多くして辛が少いものならば柚子皮であつて、性は冷服を忌む。紋が細く、色が紅く潤ふて皮が薄く、多く筋脈があり、味が苦く辛く、口に入れて芳香

なものならば眞の化州橘紅であつて、藥に入れるにはこの種を貴しとする。然しその性は峻削であつて能く生氣を伐ふ。痰を消することは捷ではあるが、氣を破り、人を損するものだから輕々しく用ゐてはならない。近頃では仁和塘棲鎮に産する蜜橘の皮で製した一種があつて、甜橘紅といひ、淸香が肺に入つて脾を醒し、痰を消する。功は化州の産に下らずして性が峻削でない。名稱を香金板といふ。南方人の體の弱いものにはこれが適する。

○本草乘雅――武林の棲水から蜜橘を凡そ數十品産するが、金錢穿心と名けるものは色は秀で美しいが、また佛肚臍の形が小さく皮が薄で甘美にして口當りのよきに及ばない。霜が降りてから採ると氣が十分であり、味が十分であり、窖に貯藏して置いて、春になつてから皮を剖き脈を抽き出し囊を破つて汁を吮ふと、やはり精神を振醒するものだ。句を得て疑を破るの助とする。

橘瓤上絲　金御乘云く、橘絲は專ら能く經絡の滯氣を宣通する。予は屢々用ゐて、衞氣が肺に適するの脹膿を治して甚だ效があつた。綱目には、橘瓤上の筋膜に就いて、ただ大明の、口渇を治し、酒を吐するといふのを引用しただけで、その專なる

功力を沒したのは何事であらうか。故にその說に倣つて補つて置く。

經絡の滯氣、脹脹を通じ、皮裏膜外の積痰を驅り、血を活す。

糖橘紅　仁和塘棲鎭のものが佳し、白を去つて皮を小塊に切り、糖霜を用ゐて製したものだ。

味甘く辛し、性は溫である。氣を理し、膈を快くし、嗽を治し、痰を消す。（食物宜忌）

橘餅　閩中の漳泉のものが佳く、麥芽橘餅と名ける。圓徑四五寸のものだ。これは大福橘を選んで蜜糖で釀製して成つたものを乾したので、表面に白霜があるからかく名けたのだ。肉厚く、味重くして天下第一である。浙で製するものは衢橘で作るもので、圓徑は三寸ほどもなく、且つ皮の色が黯黑で肉が薄く、味もやはり苦くして劣る。塘棲に產するものは蜜橘餅といふもので、味はやや勝るやうだが、やはり閩中のものに及ばない。又、興化に產する金錢橘餅といふは、金橘を取つて製したものだ。錢ほどに小さく、琥珀のやうに明で、食を消し、氣を下し、膈を開くことは砂仁、荳蔲よりも捷だ。また酒を醒すもので、醉後に茶に點てて供するに妙な

るものとなつてゐる。

味甘く、性は溫である。氣を下し、中を寬にし、痰を消し、食物を運化する。（食物宜忌）黃疸、臌脹。膈を除き、消を止める。（經驗廣集）

【諸色痢を治す】行篋檢祕——橘餅一兩、圓眼肉五錢、氷糖五錢、水二碗を一碗に煎じ、一夜露して溫服する。露さなくもよし。至つて重きものも二三服に過ぎずして神驗を現さぬはない。

【瀉を治す】梁氏集驗——夏期に瓜菓を喫ひ過すと多くは洩瀉を作して休まぬものだ。漳州の好橘餅一枚を細に薄片に切つて二回分にし、茶鍾中に置いて沖して服する。

○橘餅湯。經驗廣集——生、冷、瓜菓の傷食で泄瀉して休まぬには、橘一個を薄片に切り、碗內に置いて沸湯をかけて蓋をし、泡汁を出して湯を飲み餅を食ふ。一餅を數回に服するがよし。

【百菓酒】香櫞、佛手各二箇、核桃肉、圓眼肉、蓮肉、橘餅各半觔、柏子仁四兩、松子三兩、紅棗二十兩、黑糖三觔を乾燒酒五十觔に浸す。この酒は虛を補し、腎を

益するもので、河中の李太守の祕方である。

藥製柑橘餅　北硯食規——元明粉、半夏、青鹽、百藥草、天花粉、白茯苓各五錢、訶子、甘草、烏梅を核を去つて各二錢、硼砂、桔梗各三錢、以上を倶に雪水で煎じ、半乾にして渣を去り澄淸して取つた湯で柑橘を煮る。炭墼の微火で烘き、一日に二囘翻し、翻す毎に輕く細に捻つて藥味を皮の內部へ盡く入らせる。捻り破つては妙でない。能く火を淸し、痰を化し、中を寛にし、氣を降す。

青鹽陳皮　百草鏡——青鹽陳皮を製する法は、卽ち蘇州の宋公祠の遺法である。陳皮二觔を河水で一日浸し、竹刀で輕く浮白を刮り去り、竹筵中に貯へて三四囘沸湯を淋し、苦くなくなるまで冷河水で洗淨して半乾になるまで曬すと淨皮一觔を得られる。それを初囘には甘草、烏梅肉各四兩の濃煎汁を拌ぜて晝曬し夜露し、酥して捻り碎けて豆ほどの大いさになるを俟つて、再び川貝母を心を去つて四兩、青鹽三兩を研つた細末を拌勻して曬露して乾して取收める。

痰を消し、氣を下し、津を生じ、鬱を開き、脾を運し、胃を調へ、毒を解し、神を安ずる。

橘苓　橘樹上に生ずる。木蕈のやうなもので、皮は棗のやうで紅色だ。
乳癰を治するに酒で煎じて服す。

荳蔲檳榔

これは綱目の檳榔の註の中にある蒳子そのものだ。形は雞心のやうで、一頭が尖つて一頭が圓く、僅に小指ほどの大さで、外は殼があつて包み、殼は白色で荳蔲のやう、形は尖つて橄欖のやうで、長さは半寸ほどもない。藥肆では每に荳蔲の中からこれを檢出するが、荳蔲一觔について數粒に過ぎず、價はやはり廣南檳榔の倍である。やはりこの物を專門に賣る店はない。或は、この種は始めは雞心檳榔としたといふが、廣南で賣つてゐるものはいづれも山檳榔、及び大腹子だけである。時珍は竺氏の說に循つて山檳榔を蒳子としたが、恐らく悞である。

反胃、噎膈を治す。その他の功は廣檳榔と同じ。

按ずるに、百草鏡に、檳榔は、現に藥肆で賣つてゐるものは形が扁くして圓く大きい。これは大腹子であつて、俗に雞檳榔と名けるものだ。廣東文昌縣に出るもの

をば文昌子と名け、尖つて小さいものを主賜檳榔と名け、又、喫子と名ける。その形は長く尖つて雞心のやうな狀態で、內に錦紋がある。また雞心檳榔と名ける。卽ち雄檳榔である。別に一種の雞心檳榔で外國商船で來るものがある。これは白荳蔻の中から揀り出すもので、極めて罕に有る。形はやはり長く尖つて極めて小さく、外に殼があつてさながら棗核のやうだ。故にまた棗核檳榔とも呼ぶ。藥に入れて最も勝れたものだ。

【耳聾の灸法】經驗廣集――雞心檳榔一個を用ゐ、臍中に錢眼大の一竅を挖けて麝香を實て、患耳の中に置いて艾炷で灸する。三四回に過ぎずして效がある。

【小兒の疳癪】胡開甫方――史君子を五個を生、五個を熟で用ゐ、荳蔻の中の檳榔を薑湯で汁に磨り、その汁を空心に史君子肉に蘸けて食ふ。一二回で癒える。

【聤耳の膿を出すもの】荳蔻檳榔を末にして吹入れば立ろに癒える。（救生苦海）

【口瘡】荳蔻の中の檳榔を煆いて性を存し、輕粉を加へて敷く。（廣果錄）

瑣瑣葡萄

土魯番に産し、北京で賣つてゐる。形は胡椒のやうで、葡萄の別種に係るものだ。

回疆志――葡萄は一根に數本の藤蔓が長く牽き、花は極めて細かくして黃白色だ。その實は紫、白、青、黑の數種があり、形には圓、長、大、小があり、味には酸、甜があつて同じくない。一種は色が綠で核がなく、黃豆に比較して微に大きく、味が甘美である。一種は色が紫で胡椒ほどに小さい。卽ち瑣瑣葡萄である。一種は色が黑く、形が長くして一寸ばかりある。一種は色が白くして大きい。いづれも七八月に熟する。晾し乾して遠方へ送れる。

○本經逢原に云く、瑣瑣葡萄とは葡萄に似て瑣細なものだから名けたのだ。漠北に生じ、南方にもやはり間〻ある。その幹は木に類してゐるが藤本であつて、その子は生では青く、熟すれば赤くなり、乾かせば紫黑になる。能く精氣を攝めて腎臟に歸宿するものだ。五味子と功用が甚だ相遠くない。凡そ藤蔓の類はみな筋に屬し、草木の實はみな藏に達するもので、獨りこの一味のみがさうだといふのではない。この物は食品として供し餉めるもので、湯藥には入れないから本草に記載がないのだ。近頃は北方地方でこれを以て腎を强くし、南方地方ではこれを以て痘を稀にし、

それぞれ結果を得てゐる。

〇五雜俎――西域の白蒲桃は、生では見られないが、その乾したものは味が殊に奇甘である。兎眼蒲桃といふ核のないものがあり、又、瑣瑣蒲桃といふ形が茱萸のやうなものがあつて、小兒が食へば能く痘毒を解す。于文定筆塵に、瑣瑣とは駁婆の訛だといつてある。

〇黎媿曾仁恕堂筆記――瑣瑣葡萄は、于文定は西京羽獵賦を引いて、瑣瑣は駁婆のことだらうといつたが、それは全く附會して考へたもので、別に一種があるのでやはり河西の葡萄ではない。根を引き蔓を牽くことに異はないけれども、しかし土中に實を結ぶもので、太く長くして馬乳の如く、色は深紫で味はまた甚だ甘く、一枝に千百顆あつて、大なるものが上に在り、細なるものが下に垂れてゐる。取つて乾して大なるものを白葡萄とし、細なるものを瑣瑣と名けるので、兩種ではない。故に俗に呼んで公領孫といふ。ただ綠葡萄は西域から來るもので中國にあるものでない。

味甘し、核は細くして微し鹹し。〇痘學眞傳に云く、味甘く酸し、性は平、溫なり。

〇百草鏡に云く、性は熱なり。脾、腎の二經に入る。酒に作れば彌よ佳く、筋骨濕痛を治す。水を利することが甚だ捷で、遍身浮腫を除く。痘瘡の出ぬには、酒で研つて飲に和す。神效がある。

【腎を强くする】 瑣瑣葡萄、人參各一錢を火酒で一夜浸し、早朝に手の心に塗つて腰、脊を摩擦する。能く脊力を助けて强壯にする。もし就寢時に腰脊を摩擦すれば陽事を力助して堅强にするに尤も有效である。

【痘を稀にする】 瑣瑣葡萄を一歳に一錢の割合とし、神黃豆を一歳に一粒の割合とし、杵いて細末にし、一陽の夜蜜水で調へて服し、幷に心窩、腰眼に擦る。能く腎を助け、邪を祛る。北地の方物を以て專ら東南生氣の不足を助けるのである。然しただ稟質の素弱なものがこれを用ゐれば有益であるが、もし氣壯、偏陽のものならば服してはならぬ。恐らくこの物は淫火の毒を助長する。

按ずるに、紫桃軒雜綴に、瑣瑣葡萄は神農九草の一であつて、中國に久しく有つたものだ。博望が西域から携帶して來るを俟たないのである。吾が鄕里の東塔の朱買臣の墓にこれがあつた。戊子の歲、余が平湖を通つたとき、幕署に一枝あつて滿

架に蔓延してゐた　夏瑣碎な花を開いて菉豆ほどの實を結び、遠目には見えない　吾杭の螺螄山の汪姓の家にもこれがあつた。然しこれを食つて見ると味が薄く、甘肅のものの味の厚いやうなわけには行かない　藥に入れるには西北のものが優れてゐる。

南棗

山棗　藏棗

金華の東陽縣の茶場に產する。透明にして血の如く、七箇の長さ一尺のものが佳し。陳いものを藥に入れる。

○宦遊筆記――金華東陽縣茶場に產する棗は、その大いさ拳ほどあり、核は尖つて細く、黍のやうで、決くと脫ちる。淸甘香脆であつて、それで名が天下に聞えたのだ。明朝の中頃まではまだ數本あつたが、今ではこの種は絕えて了つた。ただ東南の諸鄉で高阜地に種ゑてあつて、茶場のものには及ばないが、やはりその美なること他の地に甲たるものだ。その製法は一定してゐないが、未熟のうちに擊ち取り、

湯を沃いで變色させたものを湯紅といひ、乾けばその色は紫になる。已に熟したものを樹頭紅といひ、乾けばその色が丹になる。過熱したものは煮た餘汁で煮ると色味が蔗糖のやうになる。これは糖棗といひ、煮たときに食ふが美味なのであつて、乾し作ることはしない。又、一種の棘でやや小さくして圓く、味の殊に棗に勝るものがある。

○物理小識に――南棗は蘭溪に產する。搖つて見るとその肉が核を離れるので判る。味甘く微し酸し、性は溫にして補す。赤は心に入り、酸は肝を斂める。

博記單方――眼疾中に紅線鎖目と名ける目の乾く一種がある。治法は、南棗核二十一粒を取り、核を兩斷して仁を去り、その中を淨めて銅綠を入れ、それぞれ核を合せて紙で粘封し、一時に爐中に入れて紅く燒き、取出して碗で蓋ふて性を存し、每日ただ七箇づつを極細末に研り、男兒を分娩した母の乳水で調へて抹する。三日にして立ろに效がある。

【腸紅下血】南棗五箇を黃芪二錢と共に湯に煎じて五更に服す。神效がある。

○又ある方。不藥良方――南棗十箇、槐米一兩を共に煎じ、米を去つて棗を食ふ。

一日三回。それで癒える。

【痔瘡】救生苦海——南棗一箇を核を去り、鼈頭骨一箇を擣き碎いたものと銅青をその棗の中へ裝入して緊く紮り、火で煅いて烟の盡きたとき伏土して性を存して研細し、秋海棠を煎じて洗つた後に、右の藥を水で和して敷く。三日で消する。

【壁蝨を除く】集聽——大南棗を核を去り、水銀を入れて火で煨いて熏ずる。

【走馬牙疳】不藥良方——陳年の南棗核を灰に燒き、研末して摻る。

【棗參丸】醒園錄——大南棗十箇を用ゐ、軟に蒸して皮、核を去り、人參一錢を配して布で包藏し、飯鍋の中で蒸爛して搗き勻ぜ、彈子大の丸にして收貯する。これを用ゐれば氣を補するに最も捷である。

【仙果不饑方】醒園錄——大南棗一觔、好柹餅一塊、芝蔴半觔を皮を去つて炒り、糯米粉半觔を炒り、芝蔴を研つて細末にして棗、柹と共に飯中で蒸熟して取出し、皮、核、子、蔕を去つて搗いて極めて爛し、蔴、米の二粉を和して再び搗き勻ぜ、丸にして曬乾して收貯する。參を加へるが更に妙である。

本經逢原に云く、古方中に大棗を用うとあるは、いづれも紅棗であつて、生の能

く表を散するを取つたものだ。補脾藥に入れるには南棗を用ゐるが宜し、甘の能く津を益するを取るのである。その黑棗といふは、濕中の火を助けて齒を損じ、蟲を生ずる。藥に入れるに適したものでない。

山棗 廣西の肇慶府に產する。葉は梅のやう、果は荔支に似て、九月に熟する。食へるものだ。

○柳貫打棗譜――山棗は、形狀は棗のやうで圓く、色は靑黃で味は甘く酸い。廣州に出る。

甘し、溫にして毒なし、脾、胃を和し、血を益し、神を壯にする。

藏棗 朱排山柑園小識――藏棗は西藏から來るが、實は天竺に產するもので、大なるは長さ二寸ばかり、形、味は甚だ南棗に似たもので、能く氣を補するの功は人參と同じである、西藏國內でもやはり容易に手に入らぬ。その核は蠶蛹の形に似て仁が無い。

虛勞を補し、神志を定め、怯を治するに神の如くである。

落花生

油

一名を長生果といふ。福清縣志――外國に産したもので、昔は無かつた。園中に蔓生し、花が謝る時は、その中心に絲があつて垂れて地に入つて實を結ぶ。故にかく名けたのである。房に二三粒ばかりあつて、炒つて食へば味が甚だ香美である。康熙の初年、僧應元が扶桑へ往つて種を覔めて持ち回つた。やはり油を搾取し得るものである。現に閩省に産するものは、興化に産するものを第一とし、黄土と名け、味は甜くして粒が滿ちてゐる。臺灣に産するものをば白土と名け、味は澀くして粒が細い。その油を煎じて不熟のときに食へば人をして瀉せしめる。一名を土豆といふ。

○彙書――近頃落花生と名ける一種のものがある。莖、葉はいづれも荳に類し、その花も荳の花に似て色は黄だが、枝上に實を結ばない。その花が地に落ちて實を泥土中に結ぶ。やはり奇物である。實はやはり荳莢に似てやや堅く硬い。炒熟して

食へば松子の味がある。この種はいづれも閩中から來るものだ。

○物理小識――番豆。落花生、土露子と名ける。二三月にこれを種ゑると、一畦に數子種ゑただけで枝が一面に擴がり、蕹菜、虎耳のやうだ。藤の横枝を土を取つて壓して置くと、藤上に花を開き、絲が土に落ちて實となる。冬後に土を掘つてそれを取るのであるが、殼に紋があり、豆は黄白色で、炒熟すると甘香で松子の味に似てゐる。又、番豆といふ。花は空に透つて土に入つて豆を結ぶのだから、臟腑に通潤するものであらう。

○酉陽雜俎――又、一種の形は香芋のやうなものがある。蔓生で、栽培者は小棚を架けてそれに蔓らせる。花は開いてまた土に落ちて子を結ぶ。香芋のやうなものだ。また花生とも名ける。

○花鏡――落花生、一名香芋は、藤蔓を引いて葉を生じ、極に小さい白花を開き、花が地に落ちて根に實が生り、それが土中に牽き連つて纍纍として斷えぬ。冬盡く掘取る。煮て食ふと香しく甜くして口當りがよい。南浙に多く產する。

○萬曆仙居縣志――落花生はもと福建に產したものだが、近頃ではその種を得て

植ゑてゐる。

○嶺南隨筆——花と葉と相見えぬは換錦花であり、莢と蔕と相見えぬのは落花生である。種植法は、沙で横枝を壓して置くと蔓に花を生じて莢を生じない。莢は別に根莖の間に著く。また落花生とも稱する。

○逢原に云く、長生花は閩地に產する。花が土中に落ちて生えるものだ。古からこれは無かつたもので、近頃始めて有る。味は甘く、氣は香しく、能く脾、胃を健にする。飮食物の消化の十分でないものに適する。或は、黃瓜と相反するといふことだが、予は曾てこの二者を同時に食つたが何の害も蒙らなかつた。因て此に記載して置く。花生殼は、韓柳生は、焙じて極細末に研り、それを身體に著ければ、肉に沾して奇癢を生ずるといつた。

○敏按ずるに、劉啓堂經驗祕方に、長生果、一名落花生といひ、又、落地生と名ける。黃熟瓜と共に吃つてはならぬ。吃へば立ろに死ぬとある。黃熟瓜、卽ち香瓜であつて、長くして色の白い醃けて吃ふ黃瓜をいふのではない。始めて俗傳の誤が判つた。

〇雨蓑翁食物便覽——香芋、一名落花生。久しく服すれば男子を多く生む。多食すれば翻胃を治す。然しその性は能く火を動じ、痰を生ずる。普通人はただ少し吃ふが宜し。

從新に云く、辛く甘くして香し。肺を潤し、脾を補し、和、平にして結構なものだ。

食物宜忌に云く、性は平、味は甘し、脾を舒べる。

廣志に云く、胃を暖める。

藥性考に云く、生で研つて用ゐれば痰を下す。炒熟して用ゐれば胃を開き、脾を醒し、腸を滑する。乾嗽のものは餐ふが宜し。燥を滋し、火を潤す。

按ずるに、落花生なるものは、花が謝して土に落ち、土の氣を感じて成る實である。故に脾に入り、胃を和するの功があるのだ。又、能く肺氣を通ずるもので、曾て興化の令王翁の一子が酷しくこの物を嗜み、後に軟癱を患つたのを見た。これは火を動じ、痰を生ずるの明驗ではあるまいか。近頃は世間で花生を糖湯に入れて煮て、醬油に浸してそのまま供するものにしてあるを見るが、一層痰を生ずるやう

になつてゐる。老人は就中多食せぬがよし。

兪友梁に鬚を黒くする簡便方がある。ただ落花生を用ゐ、淨肉を炒つて極めて黒く焦して極細に研り、鬚に撚る。一二日後には色が漆のやうに黒くなる。

【四日兩頭瘧】——卽ち三陰瘧である—— 安定臣云く、昔、曾てこれを患ひ、諸方も療效を擧げなかつたが、ある人に敎へられて、炒熟した花生を服し、毎日一二兩づつ食つて半月ならずして癒えた。

玉神庵の尼淸慧の話に、花生は、世間では服すると痰を生ずるといふが、ある大家の嫁が咳嗽で痰が多く、醫師も匙を投げて治療しなかつたとき、庵尼雲上が勸めて花生を服させ、毎日二三兩づつ食ふと次第に稀少なるを覺え、半年ならずして花生二十餘觔を服し、咳嗽と痰喘とみな除けたといふ。想ふにやはり從治の法であつた。童鹿芥の話に、花生はもと痰を滌ふの功がある。予が家では、凡そ咳嗽を患ふと、ただ生の花生を殼膜を去つて淨肉を取り、湯を沖して服する。それで痰嗽は自ら平安になるといつた。これでは痰を化するの功が瓜蔞、貝母よりも善いではあるまいか。世俗では火で炒つて食ふので反つて能く痰を生ずるのだ。又、凡そ馬に踢ら

れて傷いたものは花生を服するを忌む。これを服すれば瘡がいよいよ増して痛む。

【花生油】一名果油。色白く、甘くして平であり、氣は腥い。腸を滑し、積を下し、膈を膩し、痰を生ずる。

核桃油

好きものは火を補す。もし壞れた核桃から搾取したものならば有毒であつて味が劣る。食つてはならぬ。

阿月渾子

榛子と同類であつて、性は更に溫良である。能く痢を止め、腎を煖め、胃を開き、腸の癥積を除く。木香、山茱萸と配合すれば能く陽を興す。

薯良

形は柚のやうで圓く、蔓生で紅色だ。酒に浸して服すれば能く血を活す。（藥性考）

無漏果

これは海椶であつて、鳳尾蕉の子である。或は、棗の實だと稱するものもあるが、棗ではない。刀で青皮を剝ぎ去り、石灰湯で瀹で、蜜で浸して瓶に封じて置けば、久しく藏し、遠方へも送られ、腐敗しない。

味は甘美であり、性は温である。食を消し、中を寬にし、痰を除き、嗽を止め、氣を益し、顏を潤ほす。久しく食すれば人をして肥美ならしめる。

胖大海

安南の大洞山に出る。至陰の地に產するもので、その性は純陰である。故に能く六經の火を治す。土人は名けて安南子といひ、又、大洞果と名ける。形は乾青果に似て、皮は色が黒黄で皺紋が起つてゐる。水で泡けると層層が脹大して浮藻のやうになり、中に軟核があり、殼の中に二瓣の仁がある。

味甘く淡し。火閉痘を治し、これを服すれば立ろに起つ。並に一切の熱症、勞傷、

吐衄、下血を治し、毒を消し、暑を去る。時行赤眼、風火牙疼、蟲積下食、痔瘡漏管、乾咳で痰なきもの、骨蒸内熱、三焦の火症、諸瘡いづれも效があり、その功は盡く述べ難い。

藕粉

節粉

冬の日に老藕を掘取り、擣汁を澄して粉にして乾し、刀で片に削ると鶴の羽のやうに潔白である。食品に入れるには、先づ冷水少量で和して匀調し、次に滾水を沖入すると凝結して膠のやうになり、色は紅玉のやうに美しくなる、白糖霜を加へ摻つて食ふ。大いに能く營衞を和し、津を生ずる。綱目には、藕の條下にただ澄粉を食物にすれば身を輕くし、天年を延べると記載しただけだが、實はその功用は更に專ら血を益し、血を止めるものであつて、凡そ一切の症いづれも忌まずして服されるものだ。養餘月令に澄藕粉法がある。粗藕を多少を限らず取つて洗淨し、截斷して三晝夜水を換へて浸し、注意して極めて淸淨にし、漉し出して泥のやうに搗き、

布で淨汁を絞り、また藕渣を細に搗いてまた絞り、汁が盡きて輕くなつたとき渾脚を濾し去り、清水を少し和して攪ぜ、然る後に澄して清水を去り、その好粉を曬乾して收貯するのである。糯粉、白糖を和して食ひ、或は白糖を化開した水を沖して服し、いづれもよし。菱粉、芡粉いづれもこの方法を用ゐる。

味甘く、氣は芬芳であり、性は平である。中を調へ、胃を開き、髓を補し、血を益し、氣分を通じ、表熱を淸す。常食すれば神を安じ、智慧を生じ、暑を解し、津を生じ、食を消し、瀉を止める。

節粉　淮安に產し、寶應の一帶に多くある。乃ち藕節を擣いて澄し取つた粉を曬乾したもので、その價は藕粉に比較して數倍である。

味甘く微し苦を帶び、性は平である。膈を開き、腰腎を補し、血脈を和し、一切の瘀血を散じ、一切の新血を生ずる。產後、及び吐血のものはこれを食ふが尤も佳し。

宦遊筆記――淮以南は澤國であつて、居住民は藕を栽培して暇があると濾して粉に作る。淘汰して既に淨去した渣滓にはその甘液が殘つてゐて、風に吹かれ日に曬

されて次第に碎珠に成る。それに湯を沃いで食ふと、純ら天然に任つて別に風味があり、また野物としての結構なものである。尤も著名なるものをば片粉といふ、澤藕の極めて佳きものを淘り曬すので、人工は普通のものの十倍を要するが、出來上りは白雲の片片として纖塵も染まぬやうなもので、味もやはり絶勝である。これは餘程の有力者でなければその製造に從事し得ない。

【八仙藕粉】經驗廣集――この粉は胃を滋し、元を保し、一切の虚勞、雜症を治す。白花藕粉、白茯苓、白扁豆を炒り、蓮肉、川貝母、山藥、白蜜各等分を、人乳を別に滾水を入れたものを沖して時に拘らず食ふ。

【人紅丸】濟世養生集――專ら童子の勞怯を治して神驗の極である。人龍二十一條――卽ち蚘蟲である。童尿で洗淨して瓦で焙じる。黑くしてはならぬ。研末する――皮の破れぬ紅棗三十箇――飯上で蒸熟して皮、核を去る――蘿蔔子一錢五分を炒つて研り、大熟地五錢を煮爛して膏に杵き、眞藕粉一兩五錢を研り、川連六分を酒を拌ぜて研末し、紅棗肉、熟地膏で諸藥末を和して搗き勻ぜて桐子大の丸にし、毎朝滾湯で七粒を送下し、逐日二粒づつを增加して二十一粒までになつて止める。以後は必ず再び加服しない。

一料で全癒する。予は屢〻試みていづれも效を擧げた。切に輕視してはならない。

菱粉

菱殼

湖州府志——菱はもと兩角のもので、果菱といふやや小さいものがあり、湖趺菱といふ色が紅くして大きいものがあり、青菱といふ色が青く角が曲つて利いものがある。四角のものは野菱であつて、最も小さいものは角が極めて銛い。泰州菱といふ實の豊にして美なるものがある。近頃はまた角の無いものがあつて、餛飩菱と名ける。德淸には雞腿菱、文武菱がある。

菱には多種あるが、老いるといづれも粉が作れる。粉を製造する法は藕粉を製造する法と同じ。菱粉を食つて腹脹するときは、薑湯、或は酒を用ゐて解す。

脾、胃を補し、脚膝を强くし、力を健にし、氣を益し、饑に耐へ、水を行り、暑を去り、毒を解す。

蔕　疕子の俗に飯饐と名けるものは、鮮の水菱蔕を一二回搽れば自ら落ちる。

殼 頭面の黃水瘡を治す。醫宗彙編――隔年の老菱殼を燒いて性を存し、痲油で調へて敷けば癒える。

【無名腫毒】 販翁醫要――老菱殼を灰に燒き、香油で調へて敷けば癒える。幷に天泡瘡を治す。

【指に生じた天蛇】 醫宗彙編――風菱角を燈火上で灰に燒いて性を存して硏末し、香油で調へて敷く。未だ潰れぬものは散じ、已に潰れたものは痛が止んで立ろに癒える。

【脫肛を治す】 張氏必驗方――先づ痲油で腸上を潤濕して自ら浮衣を去り、再び風菱殼水で淨れば卽刻に縮上して脫しない。

芡粉

嘉泰會稽志――芡、一名雞頭。山陰梅市にこれを產すること最も盛である。數等あつて、小白皮のものが最も佳く、大白皮、中白皮はその皮が甚だ堅くして齧み難い。黃嫩のものは甚だ軟い。いづれも小白皮に及ばない。粉を製造する法は藕、菱

と同一方法である。

精氣を益し、智力を强くし、耳目を靈にし、精を固め、髓を添へる。（養餘月令）

【九龍丹】販翁醫要——腎水の不足で邪火が淫動する遺精、淋濁等の症を治す。枸杞子を酒で蒸し、金櫻子を焙じ、山査肉を炒り、石蓮肉を炒り、蓮鬚を焙じ、熟地を膏に搗き、芡粉を炒り、白茯苓、當歸等分を共に末にし、煉蜜で桐子大の丸にし、三錢づつを空心に白滾湯で服す。

本草綱目拾遺第七卷　終

本草綱目拾遺

果部
諸穀部
諸蔬部

第八卷

錢塘 趙學敏 恕軒氏輯

本草綱目拾遺果部下目錄

諸荔殼　龍眼核殼　蜜望　蒲桃樹
荸薺粉　野荸薺　櫻桃核山櫻桃　栗殼
刺菱沙角　烏欖仁　刺梨　枇杷核
羊桃　倒捻子　甘蔗滓皮　猴闥子
瓜子殼　蒲桃殼　橙餅　津符子
必思答　黃皮果　甘劍子　楊搖子
海梧子　木竹子　橹罟子　榁子
羅晃子　夫編子　白緣子　繫彌子
人面子　四味果　千歲子　侯騷子
仙掌子　酒杯藤子　藥果　萠子
楸子　隈支　呂宋果

本草綱目拾遺諸穀部目錄

沙米　西國米 珠兒粉 竹米 陳倉米 朱公米 山穀
青稞黃稞　米油　鍋焦 陳久年糕　阿迷酒
酒釀 酒蕈　神黃豆 新豆 回回豆 青花豆 眞寧豆 穭豆 葉を附す。
蠶豆殼　醬油 精油　腐 漿 沫 渣 皮 乳 鍋巴 泔水 麻腐
芝麻殼

本草綱目拾遺諸蔬部目錄

甘儲 粳粉 甘儲酒　山百合　石衣 石耳　野芋艿 青芋 土芋藤
野芋頭 鬼芋　野毛豆　野蘿蔔 地骷髏 三生蘿蔔
南瓜蒂 穰を附す。　辣茄　刀豆根 殼を附す。　地腎
葛乳　鮮草果　眞珠菜　鵓鴣菜
葛仙米　黃矮菜　白茄 葉 蒂　天茄

牛心茄子　緬茄　醬茄　糟茄　玉瓜
節瓜　穿腸瓜　天骷髏　鬼骷髏
白鼓釘　三寶薑　彎薑　川薑
沙葱　風葱　番蒜　蒜梗
刺兒菜　波斯菜　乾冬菜　陳冬菜滷　陳芥菜滷　葵金子
麒麟菜　諸筍　乾筍　紅海粉

果部　下

諸　茘

殼

陳定九茘枝譜――能く病を治する奇茘があつて、兵燹を經て後にもやはり僅に存するものがあつた。今これを左に錄して以て用に備へる。

粤語――南方離火から出るところの茘枝は離の火を多く得てゐる。故に一名離枝といひ、また麗枝ともいふ。麗は離であつて、文字は兩箇の日に從ふ。天地の數は水一にして火二であるから、麗は兩の日に從つたのだ。日は五行の華、月は六氣の精である。日の麗なりといふ意味であらう。支は之といふやうな意味であらう。日は扶桑に出るものであり、麗枝は乃ち震木の大なるものである。震木は扶桑を以て宗子とするので、麗支はその支子である。故に麗支といつたのだ。日は離に出で、離の盡るは午中である。故に麗支は夏至を以て熟する。離は坤の中であつて、その色は黃

である、故に黄離といふ。麗支の核の外赤く内黄なるは黄離の美であつて、坤の中はその味が甘い、故に甘節といふ。麗支の肉の少し酸くして多く甘きは甘節の吉である。茘支は臘を以て蕚が生じ、春を以て華さき、夏至になつて翕然として子が赤く木に生じ、火に於いて成るのである。皮が紅く、肉が白くして核が復た純丹なるは、火がその外を包んで復たその中に孕むのである。肉の白きは金であり、金を内として外に火で煉られてあるから味が醇和にして甘く、その液は乃ち金水の精であつて、甘はまた土に屬し、五行の粹美を備へて火を以て主となしたものであり、粤は火德を以て王たるのである。凡そ花に朱色多きはみな火花であり、實に朱實多きはみな火實であつて、太陽の烈氣の結するところである。火實の屬は凡そ百種あるが、茘支が長であつて、火を母とする茘支は卽ち火の長子である。茘支は多食しても未だ嘗て人を傷めず、蜜一杯を飲めば解し、或は青鹽を白火酒で調へて飲む。或は茘支酒を飲んで醉ひ過ぎたときは、茘支殼を水に浸して飲む　又、茘支は露が多いもので、過食したことがあつたときは、味爽に樹間へ行つて先づその露を吸ひ、次にその香を嗅む。氤氳として醉ひるが如くならしめ、五内が淸涼になる。そこで

肺氣を消し、眞陰を滋くし、老を卻けて童に還す。

○荔支は歳初に蕾が生じて二月に花が發き、發くときに雷が多ければ花が落ちて實が小さい。雨が多ければ花が腐る。雨が少ければ花液が相膠著して實らない。これを商取引するものは、その花を視てその實の多少を判斷する。荔支を貯藏する法は、樹から完好なるものを摘み取り蒂を一寸ばかり附けて蠟で封じ、そこで蒂を剪り去り、剪口を蠟で封じ、蜜水で滿浸する。數月を經ても味、色が變らぬ。

保和枝。泉郡の北の陳巖山の蓮花峯に產する。實が大きくして色が黄である。胸膈の煩悶を消し、逆氣を調へ、營衛を導き得るものだ。その核を灰に燒いて酒で服すれば痢を已し、腹痛を止め得る。

回春果。漳郡の東仙祠に產する。葉は大いさ掌ほどあり、色は翠で衆くの荔と殊ふ。その實は味苦く澀く酸く辣くして口當りがよくない。採つて酒に浸せば能く風を已し、瘧を去り、癩を治するに神の如くである。葉もやはりさうである。――以上は閩產――

紫玉環。四川の瀘州に產する。曝乾して一箇を喫へば瘴癘を除けるもので、早朝

大霧中を通行しても嵐氣に侵されない。——以上は川産——

玉露霜。廣東新會の崖門山に産する。殼が白く、肉が丹く、摘まずに置けば冬を經ても落ちない。その味は甘く酸し。これを啖へば嗽を止め、肺火を降し、怯症を療ずる。

妃子笑。佛山に産する。色は琥珀のやうで大いさは鵞卵ほどあり、核は小さくして豆ほどである。漿は滑で乳のやうだ。これを啖へば能く口氣を除き、齒牙をして一夜經つてもなほ香からしめる。

牟尼香。潮州の大浦山中に産する。味は乳のやうだ。これを飮めば功は參、苓と同じ。——以上は廣東産——

墨荔。廣西平樂の萬山中に産する。皮、肉倶に墨のやうに黑く、味は臭く苦く辣くして啖はれない。或は、賀縣の山中に出るといひ、或は、荔浦、脩仁の二邑中に多くあるといふ。味は臭くして大毒あり。誤つてこれを食へば必ず心が腐り腸が爛れて死ぬ。

按ずるに、荔支は名品が最多く、綠皮のもの、綠核のものがあり、黃皮のもの、

白皮のものがあつて、三月、四月、七月に熟するものがさうである。その性は大體相同じものだが、ただこの數品は治療がそれぞれ異つてゐる。故にこれに類及した。

殼　痘が出て漿がなく、心の爽快ならぬには、茘支殼の煎湯を飲む。――不藥良方。

王聖俞云く、茘殼は能く血を理して分標に透發する。凡そ一切の疹瘄の透達不能のもの、痘が出て一面に摸糊たるものは、これ以外のものでは表を解して漿を成し得ない――

【血崩】同壽錄――茘支殼を灰に燒いて性を存して研末し、好酒で空心に二錢づつを調へて服す。輕きものは一服で止まり、重きものも三服で癒える。

龍眼核

殼を附す。

綱目では、龍眼核の主治に就いて、その肉を多く說明してある。その核の功用に至つては最も廣いのだが、ただその能く胡臭を治するだけを記載したに止り、他はみな言及してない。又、その殼にも說明が及んでない。今悉く他の文獻から採錄して補つて置く。

【腦漏】黄氏醫抄――廣東の圓眼核を銅爐中に入れて燒き、烟が起つたとき筒で疾患のある方の鼻孔中に熏入する。數回で癒える。

【一切の瘡疥】高只元傳世方――龍眼核を煆いて性を存し、麻油で調へて敷けば癒える。

【癬を治す】祝氏效方――圓眼核二箇を外黑皮を去つて搥き碎き、雄黄、硫黄、陀僧、枯礬、川椒末各三分と共に細末にし、生薑に蘸けて患處を擦れば癒える。

○集聽方――癬を患ふには、龍眼核の外黑殼を去つて中の核米を用ゐ、醋で磨つて搽る。

【斑を滅し、髮を生ずる】張覲齋云く、桂圓核仁。凡そ人家に小兒女のあるものは必備のものである。顔面を或は磕傷し、及び刃傷を受けたものがあつた場合には、これを敷けば疼を定め、血を止め、肌を生じ、癒えて後に瘢がない。鬢髮の生際を傷けた場合の如きは、癒えて後に更に能く髮を生ずる。他の藥のやうに癒えて後に髮の生長せぬやうなものでない。

【小腸疝氣】不藥良方――茘支核、龍眼核各七箇を倶に灰に燒き、大茴二粒を炒

り、共に末にして酒で調へて服す。外用には生薑を搗き爛らして腎に敷く。直ちに消する。

○經驗廣集――疝氣偏墜、小腸氣痛を治して神效がある。茘支核を炒り、龍眼核を炒り、小茴香を炒り、各等分を細末にし、空心に一錢を服し、升麻一錢を水、酒で煮たもので送下する。

【念珠丸】張氏必效方――陰疝偏腫、嚢中疼痛の忍び難きを治す。乳香を油を去り淨めて二錢、圓眼核三錢、黄蠟二兩で藥末を和して彈子大の丸にし、一百八丸に分けて蛤粉を衣にかけ、線を通して一夜露して收貯し、その症のあつたとき三丸づつを乳香湯で服す。

【小便不通】龍眼核を外黑殼を去つて打碎き、水で煎じて服す。もし通じて後に脱せんとするときは、圓肉湯を飲む。

【足指の痒爛】藥鏡――桂圓核を灰に燒いて摻れば立ろに效がある。

【無名種毒】黄氏醫抄――桂圓核を水で調へて塗る。いづれも效があり、能く折傷出血を止め、金創を療じて斑を滅する。

【烟筒で喉を傷めたもの】萬近蓬云く、凡そ烟管で誤つて喉を戳傷し、出血して止まぬには、桂圓核を外黒皮を去つてただ內の核仁を取り、焙じ擣いて極細末とし、喉中の傷處を看て、筆管に末を置いて吹く。疼を定め、血を止めて癒える。屢〻試みて果して效驗があつた。

【刀傷出血を治す】殷仁趾傳方——龍眼核を炒つて擣き、細に磨つて敷く。

【刀斧傷】黄販翁醫抄——桂圓核を多少に拘らず火で燒き枯して性を存して末にし、患處に摻れば癒える。

按ずるに、陳杰囘生集に、大輿の李振祖西平云く、龍眼核を末にして金刃傷に敷く。昔、西秦、及び巴里坤の軍營にゐたとき、多くの人をこれで救治した。本草綱目にも別集本草にもいづれもまだ記載されてないところを見ると、世間でこの有用の材を古より今に至るまで如何ほど湮沒したものか判らない。

龍眼殼　○これは龍眼肉を外部から裹んだ殼であつて、本來は黧黄色なものだが、閩地方で、その蛀がつき易いのを恐れて薑黄末を拌ぜ、且つ見かけの好いやうにしてあるのだ。廣地方にある桂圓は多く薑黄を拌ぜてない。故に今でも廣圓はその本

色がそのまま存してゐる。藥に殼を入れて用ゐるには、必ず外の色の黃なるものを洗ひ去る。

【湯泡傷に敷く】行篋檢祕――圓眼殼を煆いて性を存して末にし、桐油で調へて患處へ塗る。痛を止め、癒えて後にまた斑痕がない。眞に良方である。

泉州府志――龍眼の最も小なるものを鬼眼龍眼といふ。これはその中のものだらうと思ふが、今では一向に識別されぬ。

蜜望

粤志――その子は、五月には色が黃で味が甜く酸くなり、洋上に飄流したものが乘て金で購ふ。天桃といふ似寄つたものがあつて、六七月に熟し、大いさは木瓜ほどで、味は甜く酢い。これは鯗魚に用ゐるに尤も善し。航海中にこれを食へば激浪にも嘔かない。

肇慶志――蜜望子、一名莽果。樹は高さ數丈、花は極めて繁く開く。蜜蜂がこれを望見して喜ぶところからかく名けたものだ。交廣錄に、蜜望は二月花を開き、五

月に子が熟して色が黄になる、一名望果といふ、その類に天桃といふがあつて、正月に花を開いて六七月に子が熟し、凶作の歳には結實が愈よ多い。粤地方の民謠に『米價が高くて天桃を食ふ』といふがある、故に廣地方では一般に望果を貴んで天桃を賤しむ。貴いから望むのであつて、蜂はその花を望み、人はその果を望むわけだ。

船暈を止める。

按ずるに、船暈を北方では苦船といふ、苦の音は庫(ク)であつて、この症は多く嘔吐して物を食へず、岸に登ると已える。胃弱の人に多くある。蜜望果は甘く酸くして能く胃氣を益するから能く嘔暈を止めるのだ。

蒲桃樹

羅浮志——蒲桃樹は高さ二三丈、その葉は桂のやうで四時花があり、花は叢鬚で瓣がない。剪つて出して見ると絲毬があり、長さ一寸ばかり、色は黄と綠とを兼ねてゐる。結實は蘋果のやうで、殼は半指ほどの厚さがあり、甚だ香しくして甜い。

核と殼と連屬してゐないので、搖つて見ると響がある。羅浮の澗中に多くあつて、猿や鳥が含啄した殘りが流に隨つて出て來る、それを山間の住民が水を阻めて取るのであるが、動もすると數斛に盈つることがあり、これで酒を釀して蒲桃春といふ。歳を經ても香氣が滅じない。膏にしたものは就中美味である。

荸薺粉

童北硯食規——江西に產する。虔南地方民は藕粉を製するやうな方法で製粉し、遠方へ食品として賣出す。一名を烏芋粉といひ、又、黑三稜粉と名ける。

甘し、寒にして毒なし。銅を毀ち、堅を銷し、腹中の痞積、丹石蠱毒を除き、心を淸し、瞖を開き、肺、胃の經の濕熱、過飲、傷風、失聲を去る。瘡毒の紫に乾いたものはこれで起發する。(北硯食規)

野荸薺

山土中に生ずる。春苗があり、三葉で韭に似て細く、葉上に光がある。その根は

豆ほどの太さだが、年久しく經てばいよいよ太くなる。藥に入れるには根を用ゐる。一名を山荸薺といふ。

水中に磨つた粉を濾過して曬乾し、それを眼に點ければ瞖障を去ること神の如くである。——粉を取るには鐵器を忌む——

按ずるに、山荸薺は燥を喜むものだ。その生えるは必ず高原であつて、乾土に就中最も蕃衍し易い。ある人が園圃に移し入れると、一たび汗濕に遇ふと直ちに朽爛して了つたさうだ。さやうな次第で生えても容易に成長せぬもので、百年にして纔に錢ほどの太さになるだけだ。昔、東甌へ旅行したとき、馬氏の點眼藥粉は天下第一だといふことを聞いたので、その調製するところを見ると、この磨粉と海鰍の目珠の粉を合せて藥中に加入したもので、異常に著效のあるものであつた。その性は能く靣𪐴、斑痣を去り、痞を消し、目星、努肉を去るもので、池澤に產するものに比較して尤も峻利だといふことである。

【磨光散】種福堂方の點眼神藥——野荸薺粉を用ゐ、洗淨して皮を去り、石臼中で搗き爛らし、密絹で汁を絞つて藕粉の製法のやうにし、再び淸水で飛して曬乾し、

爐甘石を黄連、黄柏、黄芩、甘菊、薄荷を水で煎じたものを用ゐて煆き、再び童尿を用ゐて一回煆て藥水で飛して曬乾し、珍珠を豆腐の中に入れて煮て研細して水で飛し、荸薺の乾粉一兩に對して右の製過した甘石五錢、珠末三錢を配合して各〻磁瓶に收貯し、使用する時に臨んで漸漸に配和し、冰片少量を加へて點ける。

【明目去瞖の祕方】種福堂方——錦紋大黄一兩、北細辛四兩の二味を、上高泉水一百二十兩に入れて砂鍋で煎じ、二十兩までになつたとき細絹で渣を濾し去り、大銀碗一箇にその藥を盛り、その碗の下に三塊の磚を据ゑ、下から燈盞に麻油を注いで燈草七根で燈を燃して碗の底を熏じ、碗內の煎藥が膏になつて水に滴して珠に成るやうにし、その膏一兩に對して野荸薺粉五錢、——些しは多少があつても差支ない——冰片三分を用ゐ、和勻して錠にする。多年の瞖の厚きものには每兩に水飛した蟬退末五分を加へる。必ず頭、足、泥沙を洗つて曬乾して末にしたものを三回水飛して用ゐる。

○又ある方。野荸薺粉、猪胰各等分を搗き和し、雞子殼半箇の中へその藥を置き、就寢時にそれを印堂の上に合せ、水が流れて目中に入るを俟つ。瞖は淚に隨つて出

て二十日にして癒える。幷に田螺頭眼を治す。

櫻桃核

今は一般に疹瘠を洗ふに常用する。これを服してもやはり瘖痘を發透するものだ。これは春氣を得ることが早くして性が熱であり、善く表に達するものだからである。綱目に記載しなかつたのは、風熱を發するからではなかつたらうか。逢原には、櫻桃核は、今は一般に痲斑を升發するに用ゐるが、力が能く火を助けて大いに適當なものでない。春、夏期には尤も忌むとある。藥に入れるには山櫻桃核を用ゐるがよし。

【痘が出て喉の啞するもの】王永光方——甜櫻桃核二十箇を用ゐ、砂鍋中で黄色に焙じ、湯に煎じて服す。

【眼皮に生じた瘤】醫學指南——櫻桃核を水に磨つて搽る。その瘤は次第に自消する。

山櫻桃

毛があるもので、櫻桃とは別の一種である。

辛し、平であつて味は劣る。瀉、腸澼を止め、熱を除き、中を調へる。

栗殼

綱目には、この物の反胃（ほんゐ）、消渇、瀉血を治することを記載した以外には何もないが、實はその物は能く參の力を解すること萊菔（らいふく）に勝るものだ。故に急にこれを錄して置く。

○楊春崖驗方――人參を解するには、栗子殼の煎湯を服するが良し。

刺菱

沙角

これは小菱であつて、杭の西湖中の六橋一帶に多く生えてゐる。その四角の尖が

針芒のやうに手を刺すからかく名けたのだ。春の蠢きんとする頃、兒童が採取して問屋へ賣る。菱は水中に生え、根、苗は大菱と異はないが、その葉の下に氣管がある。故にその性は肝、腎を通ずる。凡そ一切の病は多くは生、冷のものを忌むものだが、ただこの菱だけは忌まない。最も能く胃を開き、津を生ずる。その菱は大なるは蠶豆ほど、小なるは黄豆ほど、味は甚だ鮮美なもので、秋が老いる頃になつてもやはり甚しく大きくはならない。蓋し土地の關係に因るのである。誠に水の仙としての佳種である。

○陳淏花鏡――一種の最も小さくして四角に刺あるものを刺菱といふ。野生であつて人の植ゑたものではない。花は紫色である。一般にその實を曝して菱米とする。それは點茶によし。

味は甘鮮である。性は平にして毒なし。生で食へば脾を補し、胃を健にし、渴を止め、津を生じ、肝氣を平にし、腎水を通じ、血を益し、食を消す。老いたるものを煮て食へば脾を健にし、洩痢を止める。

根　水を利し、淋を通ずる。

沙角　これは菱中の一種の小なるもので、ただ兩角だけである。平湖に臨んだ一帶に多く產する。嘉興から出るものは餛飩靑と名ける。それは餛飩に似てゐるからで、他の菱に比較して體が小さく、味が甘い。沙角は餛飩菱に比較して尤も小さく、色は紅く、味が非常に甘い。

味甘し、平なり。大いに脾を補し、滯氣せぬ。餛飩靑は性寒であつて、生で食へば積著煩熱を解し、津を生ずる。煮て食へば脾を健にし、胃を和し、氣を益す。——花鏡に云く、遲く熟して甘く肥えたものを餛飩菱と名ける。藥性考には、餛飩沙角は生、熟倶によし。老いると甘く香しくして中を補し、氣を益す。生のものは酒を解し、能く丹石を壓すとある——

烏欖仁

廣東に產し、今は果物商がいづれも賣つてゐるものである。皮は黃黑色で、肉は白くして文があり、層疊して海螵蛸の狀態のやうである。酒筵中にこれを豆籩の食品とする。綱目では、集解下に、烏欖は靑黑で、肉は爛れて甘い。肉を取つて搥き碎き、放乾すると自ら白鹽のやうな霜が出る。これを欖醬といふ。その仁は肥大な

もので、欖仁と名けるといつたが、主治の記載には、悉く白欖、即ち現に常食してゐる青果のことを言つてゐる。又、その記載に欖仁は吻燥を治し得るとあるものも、また青果の核中仁を指して言つてゐるので、烏欖仁を指してゐない。此には嶺南果錄中から採錄してその遺を補つて置く。按ずるに、粤志木語に、橄欖には青と烏との二種あつて、閩地方では白いものを青果と名けるが、粤中ではただ白欖と名けるだけで青果とはいはない。白欖は利益がないので一般に種ゑるものがないとあり、烏欖下の記載に、番禺の諸郷でいづれもこれを種ゑてゐる。種ゑて二年目にはその秧が長さ八九尺になり、十分に扞つて置くと實を結ぶ。扞つて三年目までは子の收穫が少いが、十年目になると大いに收穫がある。その樹は本が高くして端直で、多くは獨幹であつて、頂に至つて枝柯を布く。雌と雄とあつて、雄が主となり雌が客となり、やはり妻が夫に隨つてゐるやうだ。子は棗ほどで長さ一寸ばかり、光つて稜瓣がない。先に生つたものは下を向き、後に生つたものは上を向き、八九月に熟する。梯子をかけ長竿で撃つのであるが、或はその幹の東を一寸ばかり刻んで紅鹽を納れて置けばその幹の東の子が落ち、その幹の西を刻み、或は南、北を刻んでもや

はりその通りだ。古詩に『紛紛たる青子紅鹽に落つ』とはそれである。烏欖は子が大きくして肉は厚く、その性は温である。故に味は濇く甘い。温水で泡けて軟にし、紫脂を浮き上つて溢出させてから食ふがよし。水が冷なれば膠が生じ、熱なれば肌膚が反つて實する。故に必ず温水を用ゐれば和にして醇なるもので、その性にはやはり婉諫の意味合があるものだとある。この二種の欖の説を綜括して見ると、白欖は雄であつて烏欖は雌である。白は陽に屬して烏は陰に屬する。陽なるが故に色は白くして氣を行らし、陰なるが故に色が紅くして血を補するのであるが、ただ烏は陰なるが故に仁があつて食へるが、白は陽なるが故に仁が小さくして物に成らない。これがその區別である。

仁は味甘く淡し。肺を潤し、氣を下し、血を補し、諸魚の毒を殺す。

刺梨

宦遊筆記――刺梨は形は棠梨のやうだが、芒刺が多くして觸られない。味は甘くして酸く濇し、その汁に漬け蜜と共に煎じて膏にするがよし、正に樝梨に劣らない

ものだ。夏に花があり、秋に實り、花には單瓣、重臺の別があり、名けて送春歸といふ。蕚が密にして英が繁り、紅紫相間つてゐて、園林に植ゑて玩賞に供される。獨り黔中だけに有るもので、他の地へ移すと生えない。これはやはり優曇花が獨り南滇だけで見られるに類するやうだ。

これを食へば悶を已し、積滯を消す。（筆記）

枇杷核

本經逢原に云く、枇杷は、その核は大寒にして肝、脾を伐ふ。これを落蘇と共に麩醬に入れると色が青翠になる。蟹と共に鍋に入れると至つて熟しても赤くならない。性寒にして肝に走ることが首肯かれる。

敏按ずるに、石頑の所說は、その核の能く色を駐めて變ぜぬを以て斷じて性寒なりとしたのだが、實は枇杷は獨り先天四時の氣を具へてその性は溫、平であり、その核は能く一切の毛羽を化すものだ。花卉栽培者が雞、鵝の毛の水を貯へてそれを花に灌いでゐるのを觀ると、その化け難いので困るとき、枇杷核數箇を擣いて缸水中

（一）丁トハ魚腸中ノ骨チイフ。

に投じて置くと三日ならずして雞、鵝の毛がみな爛化する。その直ちに厥陰に走つて更に捷利なることが判る。

肝の有餘の諸症で氣の實せるものを治するに用ゐるがよし。

斂按ずるに、祝士枚の游戲方に、枇杷核で蛤蜊を煮れば能く（一）丁を脫するとあるを見ると、その性はまた善く離すものだ。蓋し枇杷は四時の全氣を具へたもので、その實は能く分れたるを合せしめるものだ。故に肺嗽が能く斂まる。核は能く合せるものを離れしめるものだ。故に肝實を疎し得るのだ。一合一離、正に互に乘除の妙が見える。物理小識に、枇杷核は能く黴垢を去るとある。故に能く痰を化するのである。

羊桃

粤語——その種は大洋から來たもので、一に洋桃といふ。高さは五六丈、大なるものは數圍ある。花は紅色で一蔕に數子があり、七八月の間に熟して色が蠟のやうである。一名を斂子といひ、また山斂ともいふ。斂（レン）は稜（リン）であつて、俗語

に稜が誤つて斂となつたので、またその味が酸くして能く顏色を斂めるからでもある。五稜あるものを五斂と名け、糯米水を澆ぐと甜くなるので糯羊桃と名ける。廣地方ではこれを蔬とする。綱目では、五斂子、卽ち羊桃として、ただその主治に風熱、生津、止渴だけをいひ、その他の功效にはみな言及しなかつたが、此に學語に依つて補つて置く。

○爾雅に『長楚は銚芅なり』とあり、注に、今の羊桃であつて、或は鬼桃といふ。葉は桃に似て、花は白く、子は小麥のやうでまた桃にも似てゐるといひ、陸機の疏には、葉は長くして狹く、花は紫赤色だ。その枝、莖は弱くして一尺に過ぎ、蔓を草上に引くとあり、鄭氏は、藤生で、子は赤くして狀態が鼠糞のやうだ。故にまた鼠矢とも名ける。兒童が食ふ。一名羊腸、一名御弋といふといひ、蜀本圖經には、子は細くして棗核の如く、苗は長く弱くして蔓生して樹となれぬ。今は細子と呼ぶ。根は牡丹に似たものだとあり、羣芳譜には、羊桃は、福州の產はその花が五瓣で色が靑黃である。詩の檜風に『隰有萇楚、猗儺其枝』とあるはこれを指したのだとある。

酸く甘し、濇、平にして毒なし。久しく食すれは能く嵐瘴の毒を辟ける。中蠱のものは擣いて自然汁を飲めば毒を吐出する。これを脯にし、或は白蜜に漬けるが、北方に持つて來ることは不可能だ。水土と瘧とのものは皆治し得る。

○嶺南雜記――猪肉を食つて咽喉腫痛する場合には、羊桃を食へば解す。

藥性考――羊桃は生の時は極めて酸くして食へないが、熟すると甘を帶びる。過食すれば中を塞する。内熱のものに宜し。多食すれば脾、胃を冷し、洩澼を動する。曬乾するがよし。歌に『獼猴桃は寒なり、酸、甘にして渴を止め、中を調へ氣を下し、煩を解し熱と骨節風痛を除き、能く丹石を壓し、淋を通じ痔を療ず。瓤は煎て食ふ可し』とある。

倒捻子

綱目では、都念子、卽ち倒捻子として、僅にその痰嗽、噦氣を治し、腹臟を暖め、肌肉を益することを言つただけで、時珍は、これを食ふには必ずその蒂を倒に捻るから倒捻子といつたのを訛つて都念子となつたので味甚だ甘くして軟かだといつた

が、粤語には、都念子は樸嗽として叢生し、花は芍薬のやうで小さく、春期に開き、紅、白の二種がある。子は軟柹のやうで、外が紫で内が赤く、やはり小さい、四葉があつて承けてゐる。汁は胭脂のやうに物を染められ、花は酒になり、葉は麴になり、皮は漬けると膠が出來て柹に代へられる。蘇子瞻は名けて海漆とした。漆に非ずして漆といふは、その乙木の液を得て凝つて血となり、人の血を補ひ得るものだ。漆と同功であつて功は靑黏に逾える。故にかく名けたのである。その用途が甚だ衆く、食治にみな需めるから都念と名けたのだ。羅浮に產するものは高さ一丈ばかりあり、子が尤も美である。嶺南の酒には花で釀して諸果を雜ぜたものがあるが、花では檳榔花を最とし、果では倒捻子を最とする。倒捻子はまた黏子と名け、暮春に花さき、盛夏に實る。諺に『六月六黏子熟』といふ。熟したのを酒にすると色が紅くして味が甘い。人と猿猴と爭つて食ふ。到る處さうだとある。

東坡雜記——吾が南海に謫居したときは、五日に陸を出て滕州へ著いたが、滕から儋までは野花が道を夾んでゐた。芍薬のやうで小さく、紅鮮愛すべきもので、樸樕として叢生してゐる。土人は倒黏子の花だといつた。儋へ到著して見ると已に子を

結んで、爛紫になつてゐて食へた。甚だ甘美なもので、中に細核があり、それを嚼むと毖毖として聲がある。やはり頗る苦沁であつた。兒童はこれを食つて大便難になる。野人は夏、秋に下痢すると葉を食つて已やす。
子は血を活し、血を補す。研り濾して膏にして餌ふ。また腸滑を止める。

甘蔗滓 皮

綱目の甘蔗の條に、瀕湖は特に蔗滓を補記して、その小兒の白禿を治し、燒烟が目に入ると目を暗からしめることを言つたが、その他は未だ悉してゐなかつた。今更に廣く記すことにする。

救生苦海――口を收め、肉を長ずる。背疽惡瘡にこれを用ゐて屢〻奏效した。甘蔗滓を取收めて曬燥し、煅いて性を存して極細に研り、瘡口の大いさほどの小竹管一箇の上に夏布を緊く紮つたものを用ゐ、それで藥を瘡孔内に篩ひ滿てて膏藥で蓋ひ住める。自ら能く口を收める。

瞖鍵に云く、對口、一名梟疽。甘蔗滓を焙じ燥して末にし、白色狗の屎を焙じた

末と和匀し、竹管一箇の管頭を稀い絹で包んだ中へ藥を入れて篩ひ込み、膏藥を上に貼る。垂死のものも亦生きる。

〔痘疔〕經驗單方――甘蔗滓を曬乾し、眞香油で點けた燈で燒いて灰にし、津液で調匀し、銀簪で挑破して上に點ける。立ろに效がある。ある方では、珍珠油、胭脂を加へて調へて塗る。更に效がある。

○敏按ずるに、蔗には數種あつて、紫皮のものをば崑崙蔗といふ。青皮のものは乃ち扶風蔗である。黃海若は、凡そ痘疹の出ぬもの、及び悶痘して發せず、毒が盛で脹滿するもの、これは痘の急症に屬するものだ。青皮甘蔗の搾汁を與へて食はすが宜し。不時に頻りに進めれば痘が立ろに起つ。その寒、散にして毒を解するの功は蚯蚓、白鴿に過ぎるものだ。惜いかな一般にその功用が知られてゐない。藥に入れるに滓を用ゐる場合もやはり青皮蔗滓を上とすべきである。

蔗皮　綱目には、ただ口瘡を治することを記載したに止まるが、實はその皮は香料に入れられるもので、海外三珠にある四棄香餅は乃ち蔗皮を用ゐたものだ。又、乾いたものに(二)墊臥すれば鬱熱を去り得る。本草滙にある接氣沐龍湯もやはりその

(二) 墊ハ茵褥、卽チ寢床ナリ。

皮を用ゐてある。故にその說を補記して置く。

〔朧梨の初起〕百草鏡――紫甘蔗の皮を煆いて性を存し、香油で調へて搽る。

〔接氣沐龍湯〕專ら陽萎久痿、滑精を治するには、內服を用ゐずしてただ外治を主とする。概してこれを患ふ者は、或は性來の虛弱に由り、或は情慾の無節制に由り、或は憂鬱から發り、或は心、腎の關係の不圓滑に由るものである。これを用ゐるが最も妙である。紫梢花、甘草、甘遂、良薑、文蛤、母丁香、巴戟天、川烏、附子、吳茱萸、川椒、細辛、淫羊藿、蛇床子、楝樹子、甘松各一兩、瑣陽、蓯蓉、官桂、羊皮、紅蔗皮、滿山紅、罌粟殼を水に泡け筋を去つて各二兩、紅豆七十粒――酒藥の中に用ゐた辣きものを擇るに限る――白頸蚯蚓七條を灸き、倭鉛八兩を薄片に切り、勻ぜて七劑とし、每日一劑を瓦鍋中で湯に煎じ、先づ熏じて後に洗ひ、冷えるを度とし、晚に重ねて藥湯を溫めて再び洗ふ。かくて七日間房事を禁ずる。

〔坐板瘡〕甘蔗皮を燒いて性を存し、香油で調へて塗る。(家寶方)

〔竹衣乖〕經驗廣集――この藥は竹衣乖、幷に皮膚なくして膿血が淋離たる赤剝楊梅、一切の胎毒を治す。爐甘石を煆いて黃連汁に淬入すること三回、童尿に四回

淬して一兩、黄柏を七囘豬膽を塗つて炙き、紫甘蔗皮を燒いて性を存し、孩兒茶、赤石脂各五錢、菉豆粉を炒つて七分、氷片五分を末にし、先づ麻油で雞蛋黄を黑く煎じて黄を去り、冷えるを候つて調へて塗れば癒える。

猴闥子

宦遊筆記――臨海の深山の茅草中の土に出るもので、仙茅果と名ける。秋生えて冬實り、樵人が採つて食ふ。幷に粉に磨れるものだ。その性は溫にして補す。然し都會にはやはりこれを食ふものがない。綱目にある猴騷子は、形がこれと別である。又、臨海に猴總子、一名土柹が出る。毎年九十月の間に生え、形は紅柹と同じだが、いづれも一物ではない。臨海異物志に、猴闥子は指頭ほどの大いさで、味は苦くして食へる。他の地には無いものだとある。

性は溫にして丹田を暖め、五臟を益し、脾を健にし、氣力を增す。

瓜子殼

傳信方――腸紅を治し、新、久を論ぜず三服で全癒する。地楡を黒く炒つて一錢、白薇一錢五分、蒲黄を黒く炒つて一錢、桑白皮一錢五分、瓜子殼二兩を湯に煎じて水に代へる。――不藥良方では、瓜子殼一味を單用し、煎じ服して腸風下血を治す――

【吐血】不藥良方――瓜子殼を一茶鍾で煎じた湯一碗を吃下すれば血が直ちに止まる。

蒲桃殼

呃忒を止めること神の如くである。

橙餅

同壽錄にある橙餅の製法。半黄にして傷損なき橙子を擇り、――甚だ青きものは性硬くして酥し難い――小刀で稜を划成し、淨水に入れて浸して酸澀の水を去り、一二日間毎日必ず水を換へ、軟になるを待つて取出して核を擠し去り、再び一二日浸し、取出して簪脚を毎縫に挿入して內瓤を觸碎し、然る後に鍋に入れて清水で煮

る。焦してはならない。約七八分爛れたとき取出して上潔白の洋糖を拌ぜ、熱に乗じて拌ぜて卽日曬し、糖が(一)吃進するを待つて再び摻つて再び曬し、糖をして十分に吃せしめ、乾いた糖を再び橙肚内に塞入し、略ぼ扁たく壓して瓶に入れて貯へて用ゐる。やはり湯に點てて服するがよし。

頑痰を消し、氣を降し、中を和し、胃を開き、膈を寛にし、脾を健にし、魚蠏の毒を解し、酒を醒す。氣虛、瘰癧のものの場合は服してはならぬ。

津符子

緬甸に產する。記載は千金方にある。

味苦し、平にして性は滑する。主として心血を益し、肺金を養ひ、渴を止め、津液を生ずる。多食すれば口が爽つて滋味を失する。五臟を安和し、久しく食すれば身を輕くし、目を明にする。瀉痢の止まぬもの、男、女の虛勞咳嗽で膿血を吐するものを治す。肺癰、肺痿て聲啞して死せんとするものは、每日十箇づつ一个月間斷なく喫へば癒える。

(一)吃トハ緊ク受ケ入レルコト、吃進、卽チ滲ミ込ムコトナリ。

必思答

回回國の地に產する。忽必烈飮膳正要に記載がある。

味甘し、毒なし。治功は中を調へ、氣を順にし、肺金を滋くし、喘急を定める。久しく食すれば人を利す。

【三陰瘧】あらゆる藥の效なきには、必思答三箇を酒一盞で半に煎じて飮めば止まる。

【難產】分身せず、或は子が腹中にて死したるには、必思答七箇を酒で煎じて服すれば直ちに分身する。又、胞衣不下を治す。

黃皮果

廣志——黃皮果は、形狀は金彈のやうで六月に熟する。その漿は酸く甘くして葡萄に似てゐる。茘支と並び進め、茘支の饜飫を黃皮果で解す。諺に、饑ゑて茘支を食ひ、飽きて黃皮を食ふといふ。綱目では、果部の附錄諸果の條下に於て、僅に海

槎錄を引いて、廣西の横州に出る。形狀は楝子、及び小棗のやうで、味は酸いといつただけで、その功用に至つては竝に言及してなかつた。今廣志に依つて補つて置く。

食を消し、氣を順にし、暑熱を除く。(廣志) 酸し、平にして毒なし。嘔逆痰水、胸膈滿痛、蚘蟲が上攻して心下の痛むものに主效がある。(食物本草)

斂按ずるに、廣東瑣語の記載に、果中に白蠟子といふがあり、黃皮果と甚だ相似てゐるが味が尤も勝れてゐる。諺に、黃皮、白蠟、甜酸相雜るといふがある。想ふに功效もやはり甚だ遠いものでない。

廣東通志――黃皮果は大いさは龍眼ほどのもので、又、黃彈子と名ける。皮は黃白で微毛があり、瓤は肪のやうに白く、數箇の靑核があり、甚だ酸く澀い。荔支を食つて多過ぎたときは黃皮果を用ゐて解す。

甘劍子

形狀は巴欖子のやうで、仁は肉に附き、白鹽がある。食つてはならない。能く人

の病を發するものだ。北方の地では海胡桃と呼んでゐる。

味甘くして氣は烈しい。脾、胃の虛寒で食が少く、洩利して止まず、形體が尩羸し、洩下虛脫してあらゆる方も效なきを治す。甘劍子七箇を殼のまま煆いて末にし、空心に酒で服す。三服で止まる。再び調理の藥を服す。

揚搖子

閩、越に生ずる。その子は樹皮中に生じ、體に脊があり、形の甚だ奇怪なもので、長さは四五寸である。

味甘し、毒なし。百脈を通じ、筋骨を强くし、中を和し、氣を益し、肌膚を潤し、顏色を好くする。

○花鏡――この果は長さ五寸、色靑く、核がない。

臨海異物志――揚搖は七脊があり、子は樹皮中に生じ、その體は異なものだが味には奇なところがなく、長さ四五寸で色は靑黃、味は甘い。

海梧子

林邑に出る。樹は梧桐に似て色白く、葉は青桐に似てゐる。子は栗のやうで、肥美にして食へるものだ。

○南方草木狀――占城、卽ち林邑に海梧子を產する。中國の松子と同じだが、但だ結實が肥大で形が小栗のやう、三角で肥えて甘い。樽俎の間の佳果である。

味平にして毒なし。大腸、小腸を利し、智慧を益し、心胸を開き、耳目を明にする。心下の怔忡で夜中惡夢多く、健忘なるには、毎日空心に海梧子十數箇を食ふ。月餘にして自ら癒える。

疝氣で囊が斗の如く大なるには、海梧子七箇を灰に燒いて服すれば癒える。

木竹子

廣西に出る。皮色、形狀は大なる枇杷のやうで、肉は味が甘美である。秋、冬に實が熟する。

味甘し、性は平である。吐逆で食事不能のもの、關格閉拒して通ぜぬもの、脾虛下陷、肛門が墜脫して收まらぬものを治し、熱を淸し、大腸を涼し、積血を去り、百脈を利し、水臟を通調し、渴を止め、津を生じ、暑を解し、酒を消し、耳目を利し、咳嗽上逆を治す。

櫓罟子

桂陽虞衡志――廣西に出る。大いさは半升の碗ほどで、數十房が攢聚して毬を成し、房毎に縫がある。冬生つて靑く、夏になると紅く熟する。

味甘し、脾、胃を補し、元氣を固め、亢陽を制伏し、衰土を扶持し、精神を壯にし、血を益し、痞を寬にし、痰を消し、酒毒を解し、酒後の發渴を止め、頭目を利し、心を開き、志を益する。

婦人の不姙症には、櫓罟子を好き酒に三日浸し、日日に飮む。百日で姙娠する。又、目に瞖障を生じて次第に昏暗し、物を視て明ならぬには、櫓罟子を白蜜中に浸し、毎日蜜と共に一箇を喫ふ。一个月で退く。

樝子

九眞・交趾に出る。子は桃實のやうで長さは一寸餘、二月に花を開いて連つた子を著け、五月に熟し、色は黄である。鹽藏してこれを食へば味が酸くして梅のやうである。

性は涼、平である。心を淸し、肺を潤し、渴を止め、津を生じ、亢極の陽光を制し、炎蒸の暑氣を消し、又、三焦の實火を降り、鼻中の出血を治す。又、牙宣、牙齦の出血には、樝子核を仁を連ねて燒いて性を存し、水で調へて含咽すれば止まる。

羅晃子

廣西に出る。夏熟し、味は栗のやう、形狀は橄欖のやうで、その皮は七層になつてゐる。橫州に產するものは皮が九層で、九層まで剝いて行くと肉が見はれるところから、また九層皮果と名ける。

思恩府志——羅晃子は俗に九層皮と名ける。形は蠶豆に類し、茹になる。味は煨

栗のやうで、外に黒殼があり、肉に連つて皮が九層あるところからかく名けたのだ。山樹中に産する。

味甘し、性は温である。臟腑に蟲を生じたるもの、及び小兒が泥土を食つて腹痛するもの、癬、痞、積硬を治す。

肝、膽を養ひ、目を明にし、翳を去り、渴を止め、熱を退け、風邪を解利し、煩を消し、火を降す。翻胃吐食で或は食物が下ると吐き、或は朝食つて夕に吐き、夕食つて朝に吐くには、羅晃子七箇を斷つて性を存し、毎日酒で方寸匕を調へて服す。服し盡すを度として癒える。

腹中の蚘蟲が上攻し、心下が痛んで死せんとし、顏面に白斑の生ずるには、羅晃子、牽牛子各七箇を水で煎じて服す。蟲は自ら下る。

夫編子

南方草木狀――交趾の武平の山谷中に産する。三月花を開いて連つて子を著け、五六月に熟する。雞、魚、猪、鴨の羹の中に入れると味が最も美である。鹽にして

食へる。

味甘し、性は平である。主治は、心志を寧くし、血脈を養ひ、暑渇を解し、水道を利し、津液を生じ、逆氣、喘急を止め、煩を除き、熱を淸し、肺を潤ほし、命門を滋くし、元氣を益す。骨蒸勞熱で四肢が痩削し、枯柴の如くなりたるには、夫編子を白鴨と共に爛煮し、鹽醬を用ゐずして日日に喫ふ。鴨三頭を吃へば效が見はれる。

白緣子

交趾に產する。樹は高さ一丈餘。味は甘美にして胡桃のやうだ。

味甘し、平なり。主治は、肺を潤し、渴を止め、熱を淸し、食を消し、風、暑濕の氣を祛り、疝癖、及び山嵐瘴氣に侵されて變じて痎瘧となり、寒熱往來し、頭痛し、痰逆するを治す。

足膝が屈弱して步行困難なる寒濕邪氣に侵されたものには、白緣子一片を舂き爛らして酒に浸し、一日に一回飮む。一个月餘にして全癒する。

繫彌子

廣志——形狀は圓くして細く、色は赤くして軟棗のやうである。その味は初は苦く後に甘く、食へるものだ。

味平にして毒なし。主として五臟を益し、人の顏面を悅澤にし、頭面の諸風を去る。

產後痢疾の止まぬには、繫彌子一合を酒、水各一盞で八分に煎じ、空心に服下する。片刻にして效がある。

人面子

海南に產し、又、廣中に產する。樹は含桃に似て子は桃實のやうだ。春花さき夏實り、春に至つて方に熟する。蜜煎にすれば甘く酸くして食へる。その核は兩邊俱に人の顏に似て耳、目、口、鼻、畢く具はらざるはない。

廣志——人面子は大いさ梅、李ほどで、その核は人面に類し、兩目、口、鼻、い

づれも具つてゐる。肉は甘く酸く、蜜煎仁にするが宜く、甚だ美味なもので、點茶に用ゐると梅花片のやうに光澤で美しく、茶の色香はやはり變らない。增城の水東に產したものを佳しとし、その核中の仁は搖れば脫去する。他の地の產ではさう行かない。この樹は最も沙土に適し、沙土を鬆かに發し易くして置けば、數歲にして婆娑として蔽ひ蓋さるやうになる。山間の住民はこれを栽培して利益を擧げてゐる。

味甘し、性は平にして毒なし。酒を醒し、毒を解し、風毒が人の全身に著いて疙瘩が瘖となり、或は痛み、或は癢きを治し、これを食へば癒える。

【難產で分身せぬもの】產母の手に人面子一箇を握る。奇數日には右手に握り、偶數日には左手に握る。卽ちに分身する。

嶺南雜記——人面子は、肉、及び鴨を煮るに必ず用ゐる。搥爛らして熬膏すれば甘く酸くして津を益す。

四味果

祁連山に出る。木生で棗のやうだ。剖くに竹刀を用ゐれば甘く、鐵刀を用ゐれば

苦く、木刀を用ゐれば酸く、蘆刀を用ゐれば辛い。旅行中にこれを得れば能く饑渇を止める。

味甘く辛く酸し、毒なし。目を明にし、肝を養ひ、神を寧くし、志を定め、胃を和して食を進め、氣を下し、欬を止める。

腎虚腰痛で反側不能なるには、四味果を狗腰子と共に煮熟して竝に食ふ。毎日一回、一个月で癒える。

紋按ずるに、東方朔神異經に、南方大荒に樹あり、如何結子と名ける　味は飴の如く、核あり、形は棗子の如し。長さ五尺、圍は長さの如し、金刀にて剖けば酸く、蘆刀にて剖けば辛し。これを食ふ者は地仙となり、水、火、白刃を畏れずとあり。又、啓蒙記に、如何は刀に隨つて味を改める。或は、これ仙經に所謂大棗であるといふとある。この二說に據ると、卽ち今の四味果のことだ。

千歲子

南方草木狀——交趾に産する蔓生で、子は根下の鬚に在り、織るが如くに綠色

が交加し、一苞に恒に二百餘顆ある。皮殼は青黄色で、殼中に栗のやうな實があり、味もやはり似たものだ。乾くと殼と肉とが相離れ、撼つて見ると聲があり、肉荳蔻のやうだ。

○關涵嶺南隨筆――千歲子は子が多く、根鬚が乾けば殼と肉とが相離れ、撼ると聲がある。

味甘し、平なり。主治は中を和し、胃を益し、肺を利し、熱を除き、渴を止め、酒を醒し、署を解す。

【小便閉塞】千歲子十數箇を打碎き、水で煎じて濤して飲下す。直ちに通利する。

【發背惡瘡】千歲子を多少に拘らず泥のやうに擣き爛らして調へて塗る。三囘にして效が現れる。

侯騷子

蔓生で、大いさ雞卵ほどのものだ。味甘し、性は冷である。酒を消し、身を輕くする。王太僕が嘗てこれを天子に獻じたことは酉陽雜俎に記載がある。

甘し、寒にして毒なし。これを食へば饑ゑず、天年を延べ、强健となる。酒を消し、濕を除き、黄疸の小便不利で尿が黄金の如き色となるもの、口渇煩熱、齒痛、牙宣で出血の止まぬものを治す。

【小兒の重舌、木舌】侯騷子核を灰に燒いて擦る。或は蜜で調へて塗るもよし。

【浮癰發背】侯騷子の煎湯を飲み、更に擣いて塗る。大いに效がある。

仙掌子

乃ち仙人掌上に生ずる子である。粤語に、仙人掌は多く石壁に依つて生じ、葉は勁くして長く、齟齬せるものの如き狀態をなし、さながら鳳のやうな形の花を開き、子は花下に生ずる。名けて鳳栗といひ、鳳尾竻といふ。苞を發いて見ると、外は芋渠に類し、内に瓣が攢り、球が各〻子珠を掌に擎げたやうで、一枝に一掌あり、下から上に子が生つて靑赤から黄になり、重殼があつて外が厚く内が薄く、その仁は食へば味が甜くして芡、栗を兼ねてゐる。食へば天年を延べ得る。又、千歲子と名ける。この草は火を辟けるもので、廣地方では一般に多く家屋の側に植ゑる。性沙

土に適し、肥膩を悪む。

○明の黄佐の仙人掌賦の序に『仙人掌は奇草なり、多く石壁に貼して生じ、惟だ羅浮の黄龍金沙洞に之有り、葉は勁くして長く、齟齬の狀の如し。苞を發する時、外は芋魁に類し、內に瓣を攢め、翠球の如く、各〻子珠を擎げて掌の如く然り。青赤より黄に轉じ、而して重殼あり、これを剖けば厚きもの外に在つて小椰の如く、匕勺と爲す可し。薄きもの裏に在つて銀杏衣の如くにして圓肉を裹む。煨てこれを食へば味芡、栗を兼ぬ。諸虛を補すべく、久服すれば身を輕くし、年を延ぶ』とある。俗に呼んで千歲子といつてゐるが、この物と蔓生のものとは同名異物である。

○雲南通志――仙人掌は、葉は肥えて厚く、掌のやうで刺が多く、相接して枝となつてゐる。花を玉英と名け、色は紅黄である。實は山瓜に似て、食へるものだ。味甘し、性は平なり。脾を補し、胃を健にし、脚力を益し、久瀉を除く。

敍按ずるに、羣芳譜に、仙人掌は閩、粤から出る。草でもなく、木でもなく、また果蔬でもない。枝がなく、葉がなく、又、幷に花がなく、土中に一片を突發して手掌と異らない。その膚色は青綠で光潤観るべきものがある。掌上に米を生じ、色

は細點である。毎年ただ一葉を頂に生じ、今年左に長くなれば來年は右に長くなり、層纍として上る。これを屋敷中に植ゑれば火災を鎮める。もし傳種せんとするときは、その一片を取つて三四塊に切り、肥土に植ゑて置けば自ら全掌が生ずる。近頃は南浙にもあるとある。この記載に據るとこれは別の一種でなければならない。此にいふ物とは全く別である。或は同名異物かも知れない。

酒杯藤子

西域に產する。藤の太さは臂ほどのもので、花は堅硬で酒を酌めるものだ。美しい模樣が映徹してゐる。實は大いさは指ほどのものだ。味は荳蔻のやうである。これを食へば酒を消する。傳說に據ると、張騫がその種を大宛から持つて來たものだといふ。

甘く辛し、平にして毒なし。食を消し、氣を下し、酒を消し、渴を止め、邪瘧を辟け、癰腫を消し、蚘蟲を殺し、尸疰、勞瘵、蟲蠱、瘰癧、瘿瘤、結核、癰疽潰爛を治す。果物を食つて積となりたるには、酒杯藤子を灰に燒き、糖を拌ぜて五七錢

を服下する。自ら效がある。

飲酒過量で病と成りたるには、酒杯藤子を煎じて服するが極めて效驗がある。

藥果

關涵嶺南隨筆――藥果は橙に似て味が酸い。物を紅く染め得るものだ。噦を治す。

蔄子

交趾、合浦に產する。藤が樹木に緣つて正月に花を開き、四五月に熟して梨の如く、雞冠のやうに赤い。核は魚鱗のやうである。

甘し、平にして毒なし。主治は、中惡氣、飛尸邪蠱、心腹卒痛、狂邪鬼神、鬼疫、瘟瘧、夢寐邪惡の氣で心神顚倒し、不安、昏冒して癡の如きもの。

【驚癇を治す】恍惚として或は言語が常軌を逸し、歌笑して意味不明の騷をなすものには、蔄子核七箇を燒いて末にし、硃砂少量を入れ、薑湯で方寸匕を服すれば自

ら癒える。

楸子

食物考——甘く酸し。沙果よりも小さく、色は黄紅黒で櫻桃類のやうだ。代北に産する。味は頗る清香なもので、脯にし、茶に點じていづれもよし。この物は林禽とは同名異類である。本草にはまだ區別してないからこれを正して置く。多く食へば氣を滯し、人をして好く睡らしめる。子は去るべきものであつて、盡く食つて了へば心を煩するものである。

隈支

益部方物略記——邛州の山谷中に生ずる。樹は高さ一丈餘、枝は長くして弱く、白花を開き、實は大いさ雀卵ほどで、形狀は茘支肉のやうで、膚は黄である。味は甘い。

味甘し、毒なし。七種の疝氣、及び一切の瘡瘍、疥癬を治す。

以上津符子から隈支に至るまでの諸果品は、綱目には、附錄諸果の後に僅にその形狀を記載しただけでその主治をば記錄しなかつた。しかし沈雲將の食纂に、諸果の都て外國、及び邊瘴の地方に產するものは、通常目に付かぬものではあるが、但しいづれも異品に屬し、口に可いだけのものでなく、兼て百病を療治し得るものだ。凡そ遠方を行歷するものは、その種を携帶して來て中國へ傳播せしむべきものであると思ふ。世に功あること少なからざるものである。故に附錄して、兼てその主治の詳細を企てたといつてある。予は因てこれを取つて李氏の遺を補ふことにした。その形狀に至つては、綱目に已に詳載してあるものをも復た列記したが、それはやはり讀者をして一見了解に便じた次第で、後日實物に遭遇した場合に名實を能く知るやうにこの意味から重贅を厭はなかつたのである。

呂宋果

本草補――呂宋島中に加穵弄と名ける一果を產する。外は肉で內に核があり、味

は苦くして食ふに堪へない。その初はただ一个處だけに有り、深山峻嶺にこの樹が生え、甚だ高大なものであつて、土人の多くは識らなかつた。旅人がこの島へ著くやうになつて百年後に始めてその中の果の用う可きことを知り、三十年近頃、頗るこの各病を療治するに極めて奇驗のあることが發見されて、遂に携帶して中國に入るやうになつたのである。果の皮、肉の如きはその效尤も捷なので、寶豆とさへ呼ぶものがある。豆とは果の形狀から言つたもの、寶とはその貴重なることを意味したものである。

【中毒、服毒を治す】果を或は磨り、或は刮り、淸水、或は淸油で調へて服す。毒は直ちに吐く。蛇蝎、蜈蚣等の傷には、淸水に磨つて服す。幷に刮つて患處に敷く。疫疾、中風昏仆には水に磨つて服す。腹痛瀉利には水に磨つて服す。痳疾は初め作つた時に水に磨つて服す。

○刀斧傷の血滿には、末に刮つて患處に敷けば直ちて血を止め痛を止める。

○蛔蟲疳積には、水に磨つて服すれば蟲を直ちに吐出する。

○難産には、水に磨つて服す。

○頭瘡瘙爛には、臘梨を切碎き、この果を油で煎じて熱に乘じて徧く搽り、火に向つて暖を取り、隨つて布を火に向け熱を取つて病人の身體を覆ふて睡らす。又、寢具を蓋ふて生風に當らぬやうにする。直ちに癒える。

○潮熱には、水に磨つて服すれば漸減して癒える。

諸穀部

沙米

延綏鎮志——苗莖は麻のやう、葉は艾に類してやや圓く、刺がある。高さは一尺ばかり。子は房を成し、粒は細くして黍ほとである。杵いて皮を去り、羊を用ゐて羹に作つて食服すれば饑ゑない。邊外の地では黍喇棘と名ける。

○瀚海記——沙蓬米は凡そ沙地にいづれもあるが、鄂爾多斯に尤も多くこれを産する。枝葉が叢生し蓬の如く、米は胡麻に似て小さく、性は暖であつて、脾、胃を益し、消化し易く、好く吐するものは多くこれを食へば益がある。粥にすると滑膩で食へるものだ。或は屑にして餅餌にもなり、茶食の料にもなる。

○人海記——張家口内の保安沙城一帶の地に沙蓬を産する。實は蒺藜のやうで中に稗子のやうな米があり、これを食へば人を益する。

○薬性考に云く、蓬蒿の實を名けて沙米といふ。熱を淸し、風を消す。凶作の場

合の食物として旨いものだ。

西國米

珠兒粉　竹米

嶺南雜記——西洋の西の國に產する。煮ても化けずして色が紫であり、柔滑なるものが眞物である。僞物は葛粉で作つてある。

○通雅——現に南楚、兩粤では、專ら葛粉を採つて粉食に作る。その粉は丸にして葛粉丸といひ、廣地方ではこれを西國米に僞せる。能く酒を醒す。

○朱排山柑園小識——西國米は閩、廣から外國船で來る。大いさは綠豆ほどで、色が紫で煮ても化けぬものが眞物である。脾を健にし、胃を運らし、その功最も捷なものであつて、久病虛乏のものはこれを粥に煮て食ふが最も宜し。

胃を益し、脾を和す。病の癒えて起きる頃の者が食ふに適する。

珠兒粉　外國船舶の齎し來るもので、粤の澳門、杭の寧波、乍浦の貿易商店にいづれもある。形は甚だ細かくして蘇子のやう、平均して圓く白い。これは外洋人が

葛根、及び薇箕根を採り、或は茹粉で製造したものだといふ。これを煮るには、滾水を沖して泡けると粒粒が分明で魚子のやうな狀態になり、極めて柔く滑である。糖霜で和して食ひ、或は淡食する。

氣は淸香にして味は甘く滑である。目を明にし、脾を運し、胃を開き、酒を解し、津を生ずる。久しく服すれば尤も能く腎を强くする。

東西洋考――大泥、卽ち古の浡泥は今は暹邏に隷屬し、土産に西國米がある。また沙孤米とも名けるものだ。その樹は沙孤と名け、身は蕉のやうで心が空である。その裏皮を取り、削つて水で搗き、それを舂いて粉にし、細なるものは王の食料米とする最も精なるものであり、粗なるものは民家で食料とし、これを以て穀物に代へる。現に商船で來るものは、波濤で濕るのを慮りただその粉を携へて來るので、自ら和して丸にする。

○庚申の歲の十月、予は陳夔友の家に在つて胡西菽を玻璃の小筆管瓶中に盛つてあるのを見たが、菽は白くして細かく、珠兒粉と異りがない。王撫軍から貰つたものださうで、藥に入れられ、大いに能く痰を消し、その甥女がある夜肺風を痰喘を

患ひて極めて危篤に陷つたとき、小兒科醫は多く救はれぬといつたが、このもの一錢を薑汁で調へて灌ぎ下すと、その痰が失へたる如くになつたさうである。

竹米　物理小識——竹の結實であつて、斑文が兩兩相比んでゐる。これを竹米といふ。

積を下すこと神の如くである。

陳倉米

朱公米

嶺南記——武昌の漢陽門内は舊陳友諒が倉庫を建ててあつて蹟で、甲子の年に黑米を掘取したことがあつた。色は漆のやうで石のやうに堅いが、炒ると鬆になつた。

〇秋燈叢話——康熙甲子の歲に武昌郡の廣福坊で黑米を數十斛掘り出した。石のやうに堅いもので、炒り研つて末にし、膈症を治するに神の如くであつた。其處は僞政權の陳友諒が食料を蓄へてあつた場所だと言ひ傳へてある。又、天門學宮は前明朝に改めて北郭倉を建てた場所で、やはり黑米を掘出したが、治病に頗る效驗が

あつた。乾隆丙申の歳、黄州で郡の學校を修繕したとき、學校敷地附屬の池を浚渫して深く掘り下げると、池底から貯藏してあつた米が甚だ夥しく出て來た。多は漆のやうで堅かつた。治病に前記のやうな效があるので、一般人が爭つてそれを取つたが、太守の王廷棟公が、恐らく前代の人が鎮壓のために埋めたものだらうと考へて、取ることを禁止して掩ひ埋めた。

斂按ずるに、酉陽雜俎に、乾陁國の尸毗王の倉庫が昔火災で燒けたときその中の粳米の焦げたものが今でも殘つてゐる。一粒を服すると永く瘧を患はないとある。炒り研つて膈症を治するに神の如くである。不藥良方——陳年の倉米は卒心痛を治す。灰に燒いて蜜で和して服すれば止まる。

朱公米　南中紀聞——靖州の南二十里にある飛山砦は、傳說に、元朝の末に朱都督が屯兵した場所とされてゐるが、熇礫に時に米粒があつて、色は微黑だが腐らないである。これは朱公が遺して置いた兵糧だといふことで、游歷者などは神祠に參詣してそれを取つてゐるが、今でもそれがある。

脾疾を療する。

山穀

宦遊筆記――塞外へ出た土地ではこれを烏爾格納と名ける。莖は長さ一尺餘で草のやうに細く。節は竹のやう、葉もやはり竹のやうで二節毎に一葉が秀で、穗は蓼花に類し、結粒は穀に似て色が紅い。これを採つて曬乾し、その皮を去つて粥に煮るが、粥は穀のやうで香しい。蒙古ではこれを用ゐて饑を充て、兼て麪に碎いて茶に合せる。商民は粟に均雜して食つてゐるが、色が紅藍で美しくして味も穀と區別がない。故にこれを名けて山穀といふのだが、實は水濱、或は山溝に生ずるものなのだ。

味甘く香し。氣を行り、水を利し、大、小腸の火を淸し、また脾、胃を補す。

根　蒙古人は黑克爾と名ける。外皮は微細で内に實する粉が白く、味は甘味である。蒙古では生で喫ふ。商民は内に合せて熬つて食ふ。秋、冬の頃、蒙古では鼠の穴を搜し掘つて食物を取り、それを筐中に盈てて置くが、それは多くはこの物であつて、長さは二三寸である。いづれも野鼠が嚙み截り、運んで來て貯藏してあつた

ものだ。

味甘し。津を生じ、血脈を滋潤し、營衞を調へ、水を利す。

青稞黄稞

藥性考――青稞黄稞は仁が外に露れてゐるものだ。川、陝、滇、黔地方で多くこれを種ゑる。味は鹹く、糟を醸して吊酒し得るもので、形は大麥と同じく、皮は薄く、麪は脆い。西南夷地方ではこれを正食とする。

氣を正し、中を寛にし、筋を壯にし、力を益す。性は平、涼であつて、濕を除き、汗を發し、洩を止める。多食すれば髪が脱ち、顔色を損する。

米油

これは粥を滾らす鍋の中に煎起する沫醶で膏油のやうに滑かなもののことだ。その力は能く毛竅を實し、最も人を肥すものだ。能く五升以上の米を煮れる大鍋を用ゐたものはその油が良い。越の醫師全丹若は、黒痩するものは、これを食ふこと百

日すれば肥白になる。それはその滋陰の功に因るのであつて、熟地に勝るものだ。毎日一碗を撇出して淡服するが最佳しといつた。近頃は一般に熟粥から汁を絞つて米油だといつてゐるが、やはり力の薄いことを免れない。

味甘し、性は平なり。陰を滋し、力を長じ、五臟、百竅を肥し、小便を利し、淋を通ずる。

【精が湍んで孕まぬもの】紫林單方——米粥を煮て鍋の中に滾らし、表面に出る米沫の浮んだものを取起し、煉過した食鹽少量を加へて空心に服下する。その精が自ら濃くなつて孕む。

鍋焦

陳久年糕

一名を黃金粉といふ。これは人家で飯を煮て鍋底に焦げたものをいふのである。僧寺中の米の多く焦げて厚いものが藥に入れて良し。

味苦く甘し、性は平なり。氣を補し、脾を運し、食を消し、泄瀉を止める。八珍

粉に入れて用ゐる。

【鍋焦丸】小兒が常用すれば脾を健にし、食を消す。家寶方――鍋焦を黄に炒つて三觔、神麴を炒つて四兩、砂仁を炒つて二兩、山査四兩、蓮肉を蒸して心を去つて四兩、雞肫皮一兩を炒り、共に細末にし、白糖、米粉を加へて和勻し、焙じて餅にして用ゐる。

【老幼の脾瀉で久しく癒えぬもの】梁侯瀛集驗方――鍋焦を末にして四兩、蓮肉を心を去つて淨末四兩、白糖四兩を共に和勻し、三五匙づつを、一日三回食事と時間を隔てて服す。

【白瀉の止まぬもの】種福堂方――乾飯鍋粑二兩、松花二兩を炒り、臘肉骨頭五錢を脆く烘き、共に末にし、砂糖で調へて時に拘らず服す。

【脾、胃の健ならぬもの】祝氏效方――鍋焦二觔、蓮肉一觔、白糖半觔、蜜一觔を桐子大の丸にし、數十丸づつを空心に白湯で服す。

【玉露霜】老人の脾泄を治するに最も效がある。白朮を炒つて二兩、陳皮一兩五錢、蓮肉を心を去つて四兩、薏苡仁四兩を炒り、糯米一升を炒り、菉豆一升を炒熟

し、陳米鍋粑一升を炒り、糖霜を適當に量つて加へ、共に末にし、二三錢づつを滾水で調勻して服す。(行篋檢祕)

【預め痘疹を稀にする】不藥良方——銀花——金のものは用ゐない——を陰乾し、鍋粑一升に對して銀花一兩を入れて共に研末し、洋糖を用ゐて或は糕餅に作り、或は水に開いて調和し、毎日小兒に食はせる。

陳久年糕　灰に燒いて痢を治す。

阿迷酒

東洋に產する。氣味が香冽で頗る釅厚だ。毎服半盞に過ぎずして大いに能く元氣を助け、精神を驟長する。商船が携帶して來るもので、凡そ督撫大官は多くこれを貯して不時の必要に備へてゐる。重要な事實で疲憊したときに、一滴を口に入れると精神が百倍する、鴉片に比較して尤も捷なものだ。

○小物小識——吉利重酎は紅花、芐、胡桃を麴に入れて釀したもので、尿の頻數を醫するに效がある。

味甘く辛し、竄達して能く百脈を捷通し、元を益し、氣を生ずる。毎日少量を飲む。一二滴にして怯を理すること神の如くである。

酒釀

酒葷

俗に酒窩と名け、又、浮蛆と名ける。乃ちまだ酒を放出しない米酵である。味は醲厚なもので、多く飲めば腹瀉を起す。性善く升透するもので、凡そ火の上行するものにはこれを忌む。

味甘く辛し、性は温である。佐藥として痘漿を發し、血を行らし、髓脈を益し、津液を生ずる。

〔赤眼淹纏〕祝氏效方――杜仲、厚朴、桑白皮、檳榔各一錢、雄雞肝一箇を取つて水に觸れずに紅筋を去り、白酒釀六兩に入れて隔湯で蒸熱し、滓を去り、湯で肝を食ひ、二日を隔てて一回再服すれば全癒する。

〔小兒の鼻風、吹乳腫痛〕劉起堂經驗方――酒釀を菊花葉に和して敷けば立ろに癒

える。葉がないときは根を用ゐる。甘菊葉が尤も佳し、搗汁を沖和して服するが更に效がある。

【吹乳方】周氏家寶――苧麻根の嫩いものを炒り、白酒釀少量を和して共に搗き爛らして患處に敷く。一晝夜で消する。發動するものを忌む。

【頭風】蒼耳子、白芷、穀精草各五錢、川芎三錢、甜酒釀四兩を老酒二碗で一碗に煎じて服す。(妙淨方)

【夢遺白濁】酸梅草二錢、孩兒菊二錢を搗いて取つた汁に水を見ぬ酒釀を加へて空心に量に隨つて服す。(救世靑囊)

【難產】酒釀、麻油、蜂蜜、童尿、雞子白各半盞を煎じて溫服すれば分身する。

【痘が出て起たぬもの】不藥良方――狗蠅七箇――冬期には蠅を取つて狗の耳中に置く――を搗き爛らし、酒釀を和して服す。即日に發起し、美しく紅潤する。

○【痘瘡不起】良方集要――荸薺の搗汁に白酒釀を和し、頓に溫服する。但し頓に大熱にしてはならぬ。大熱にすれば反つて妙でないから注意を要する。

【保元丹】千金不易方――この方は張氏の家傳で、已に五世に及んだものだ。黃精

一觔、甘枸杞四兩、酒釀五觔、好黄油五觔を罎に入れて一炷香の間煮て、一茶杯づつを飲み、藥渣をば搗いて丸にし、胡桃肉八兩、大黑棗八兩、青州柿餅一觔を加へる。

酒蕈　酒罎中に生ずるもので、恒にあるものではない。凡そ酒を貯藏する家で千百の罎酒の間に一罎ある位のもので、開いて見ると中が空で酒がなく、その中には蕈が結してゐる。これが結する當初には、酒上に薄く凝つて衣膜のやうだが、久しくすると次第に厚く一二寸になり、さうなると能く酒を滲むやうになり、酒中の精華、醇釀の氣が盡く膜中に吸收され、膜は漸次に厚くなると同時に酒はやはり漸次に少くなり、久しくすると酒が乾いて十分の一もなくなるのである。それを開いて見ると、その膜は鮮なる海蟄のやうで、濡潤して軟く、嗅けば酒の香があつて微し黴蒸の香を帶びてゐる。それと氣の付くものはそれを取つて焙乾して置くのであるが、乾いたものは瓜のやうになり、皮面は青黑で背が肉紅色をなし、棉のやうに濕軟なものであつて、藥に入れられる。蓋し酒に能く蕈を生ずるのは、必ず罎が窖から出たばかりで火氣が脱けてないものに限るので、酒を置く場所もまた濕熱で蒸さ

れると中が變じてかやうな物となるのである。故に造釀家で罈を用ゐるには舊きを貴んで新しきを貴ばない。金御乘は慈谿から持つて來た酒罈があつて見せてくれたが、その話では、彼の地でもやはり珍らしいもので、どうかするとこれがあるが、然し多くは見られないといふことであつた。

一切の酒傷、酒勞、酒疸を治し、酒に原因して病となつた諸症は、これを服すれば立ろに效がある。

神黃豆

緬豆　回回豆　靑花豆　眞寧豆

池北偶譚——滇の南徼の西南夷中に産する。形は槐角子のやうで、普通の豆として視ればやや巨きい。筒瓦を用ゐて火で焙じてその黑殼を去り、末に碾つて白水で服すれば、永く小兒の痘毒を除き得る。服法は、毎月の初二日、十六日を期とし、半歲の兒は半粒づつを服し、一歲の兒は一粒づつを服し、一歲半は一粒半を服し、三歲で三粒を服するに至れば終身出ない。或は、二十四氣を按じて服し、二十四粒

を度とするともいひ、或は、水、畢、閉の日に服するともいふ。
○珍異藥品に云く、雲南に産し、近西地方では、痘が將に發せんとしてまた發せぬ時に、神黄豆を殼のまま焙じ炒り燥し、豆を解細して水で服す。
○本經逢原に云く、補黄豆は緬甸に産する。形は槐子のやうだ。近頃の稀痘方これを用ゐ、一陽の日に清水に磨つて服す。
○痘學眞傳に云く、神黄豆は雲南に出る。能く痘を稀にする。生、熟各一粒を甘草湯で咀んで服す。
○寧陽張琰種痘新書に云く、凡そ痘は、胸から以上、臍から以下にいづれもあつて、中間だけを限つて全く無いものを兩頭痘と名ける。これは氣血が上下に貫通する能はずして腰臍の間が寒毒のために毒が凝滯するのである。急に治療せねば、七日の後に必ず灰白の症に變ずる。點の現れたとき、急に生芪、當歸、赤芍、桔梗、防風、荊芥、厚朴、續斷、白芷、山査、木通、神黄豆三十粒を用ゐる。これを服すれば中間にも痘が出で危險がなくなる。
南詔備考――善洱府、及び永昌府に出る。神黄豆は能く痘を稀にし、青花豆は瘡

を治し得る。商人が滇産の神黄豆を持つて來たことがあるが、その形は細竹筒のやうで長さ三四寸ばかり、搖ると聲があり、その中は竹節のやうで片片が相疊り、剖いて出すと棋子のやうな狀態で色白く、包裹した中に一豆を含んでゐる。黄色で亮に光り、形は瓠子のやうで中に線痕があり、堅く實して扁いものであつた。これを服すれば痘毒を解す。

按ずるに、神黄豆に二種ある。百草鏡に云く、雲南普洱府に産する。又、四川にも産し、莢は連翹のやうでやや短く、内に豆があつて微し紅色である。雲南に産するものは、形は槐角子のやうで、蠶豆に比較するとやや大きい。瓦上で焙乾して外の黑殼を去つて用ゐる。二種の形狀に不同のあるのは、その土地の關係で各〻別になつたので、その物の痘を稀にし、毒を解するの性は一である。

○寶筏方――痘の將に出んとするとき、神黄を用ゐる。年齡を按じて一歲に一粒を用ゐ、外殼、幷に内皮を剝き去り、瓦で焙じて一半を熟一半を生で留め、芫荽湯で調へて服す。毒の重きものは稀になり、毒の輕きものは更に稀になる。十餘歲のものも七粒に過ぎず。もしまだ痘の出ぬものも、やはり法の如くにして水で調へて

服すれば竟に痘が出ない。三月三、五月五、七月七、九月九等の日に服すべきものである。

緬豆　滇略――緬豆は豆のやうで蔓生し、子は大いさ栗ほどあり、斑文が點點たるものだ。これを咀んで惡瘡に傅けるが良し。然し性が迅惡なものだから、誤つてこれを服すれば吐瀉して死ぬことがある。五雜爼に云く、滇中にある神黃豆は五棓子に似たもので、能く兒童をして痘を稀ならしめる。然しやはり甚しい效驗はない。

回回豆　五雜爼に云く、西域に產する。形狀は椿子のやうだ。磨つて麪中に入れると極めて香しく、能く麪毒を解す。

青花豆　宦遊筆記――雲南永昌府に青花豆がある。外地に產し、夷人が携帶して來て他の貨物と交換して行く。瘡を治す。

眞寧豆　陝西慶陽の眞寧の地に產する。味は甘し、平である。能く諸藥毒を解す。

穭　豆　藥を附す。

逢原に云く、細黑豆、一名穭豆。俗に料豆と名ける。今は一般にこれを馬の飼料

にする。故に俗にまた馬料豆と呼ぶ。

○杭州府志——黑豆の細なものを穭豆といひ、細くして扁いものを零烏豆といひ、俗に馬料豆と名ける。馬を肥やすものだ。

○從新に云く、黑大豆の小なるものを馬料豆としてゐるが、實は料豆は小さくとも形が長くして微し扁く、黑豆とは形が逈に區別のあるものだ。當然別の一種でなければならぬ。綱目には、穭豆の條下に僅にその能く賊風、風痺を去り、婦人産後の冷血を記載しただけで、その他一切の功用は全く言及されてゐない。此に補つて置く。

味甘し、溫にして毒なし。筋骨を壯にし、盜汗を止め、腎を補し、血を活し、目を明にし、精を益し、腎の經の血分に入る。青鹽、旱蓮草、何首烏と共に蒸熟してただ黑豆のみを食へば鬚髮が白くならぬ。その補腎の功が首肯されるのである。今は一般に製した何首烏を取つて腎の經に引入してゐる。炒焦しして酒を淋すれば、頭風、脚氣を治す。それは直ちに腎の經の血分に入るからである。煮汁を服すれば、烏附、丹石の藥毒を解す。

藥性考——本經の黑大豆は卽ち今の馬料豆である。その色は黑くして形が人の腰のやうだ。故に腎の經に入つて水を益し、目を明にするのである。多く服すれば人をして身を重からしめるが、一年後には原に復する。久しく服すれば身が輕くなる。花豆中の黑大豆ではない。凡そ豆を服するには、萆麻子、厚朴、猪肉を忌む。歌に云く、

　黑大豆は甘くして、腰子の樣式あり。所以に腎を補す、藥餌に宜しく入るべし。卽ち是れ馬料にして、煮れば寒、炒れば熱なり。
中を調へ氣を下し、痢、攣急を止め、水を利し脹を除き、風を追ひ舌を活す。
生にて研つて腫に敷き、呑めば煩渴を止める。
一切の毒を解するには、甘草と汁に煎ず。
傷中、淋露、產後の諸疾。
目を明にし顏を悅しめる。製して服するに益あり。

○又云く、穭豆は卽ち小黑豆であつて、その粒が細いので驢豆と稱して馬料と區別したのだ。產後の血風、冷痛を治す。その粒は細くして馬料に及ばない。歌に云

く

穭豆は黑小にして、甘くして邪風を逐ふ。

冷痺血滯には、酒に浸して融和す。

○雨簑翁食記――小黑豆に鹽を入れて煮て、久しく食へば大いに能く腎を補す。

○事親述見――穭豆は五臟を補し、中を益し、十二經脈を助け、中を調へ、腸、胃を煖め、鬼氣を殺し、筋を舒べる。

○紫處子呑豆法――黑料豆を淘淨し、曬乾して淨瓶に裝入し、初服には、每に日に一粒を白湯で生で呑む。次には日に二粒を呑む。每日一粒を增加して百日に百粒を呑み、それより每日百粒を呑む。但しこれを初めて服した時には腸、胃がまだ剛くないから、排便の度每に必ず豆が消化してゐるか否かを看る。消化してゐるときは漸次に增加し、もしまだ消化してゐないときはその粒數のまま繼續し、必ずこれを食つて能く消化するを待つて、然る後に增加し、百粒までを度として服す。能く精を益し、髓を補し、力を壯にし、肌を潤し、髮の白きものは後に黑くなり、久しくすれば老いたるを轉じて少くし、その身を終るまで疾病がない。

救生苦海にある嫦娥奔月方は紫虚の呑豆法と同じだが、但しその法は、月の盈虧の數を按じ、初一日は一粒を呑み、逐日一粒を加へ、滿月の日に十五粒に至つて止め、十六日からまた逐日一粒を減じ、晦に一粒に至つて止め、月初からまた加へ始める。紫虚の法と微に不同がある。幷に附記して用に備へる。

煮料豆方。明の太醫劉浴德に增補内經拾遺四巻の著書があつて、その種子論の後の記載に料豆を煮る藥方がある。云く、老人がこれを服すれば能く鬚を烏くし、髮を黒くし、齒を固くし、目を明にする。當歸四錢、川芎、甘草、廣皮、白朮、白芍、丹皮、菊花各一錢、杜仲を炒り、黄芪と各二錢、膝牛、生地、熟地各四錢、青鹽六錢、首烏、枸杞子各八錢を馬料豆と共に曬透して曬乾し、藥を去つて豆を服す

○又、義復方——馬料豆五升、桑椹半觔、枸杞子四兩、肉蓯蓉半觔を竹刀で切つて筋を去り、青鹽、龍骨各二兩を豆と共に煮熟し、藥と共に曬乾して礶に貯へて用ゐ、常食すれば大いに補益がある。

○又、方呂逸偏傳方——何首烏一觔を馬料豆汁で煮る。或は老酒でもよし、それを必ず九蒸九曬し、枸杞一觔を酒で蒸して乾藥末を搗匀ぜて曬し、馬料豆一斗を、

再び料豆五升を汁に煮て、その汁で豆を煮て曬乾して九蒸九曬し、或は好酒で煮てもよし。兎絲子一觔を酒で煮て曬し焙じ、補骨脂一觔を酒で洗つて焙じ、川椒四兩を曬洪し、青鹽二兩、川牛膝一觔を酒で煮て焙じ、以上を煉蜜で丸にして服す。

○又ある方。何首烏二觔、青鹽一兩、棗仁、杜仲、枸杞各二兩、遠志、小茴香、陳皮各一兩、肉蓯蓉、苡仁、香附、白茯苓、川芎各二兩、五味子、牛膝、補骨脂、木瓜各一兩五錢、歸身三兩、肉桂五錢、防已一兩二錢、甘草八錢、小黑豆一斗を用ゐ水で藥を煎じて數十滾し、渣を瀝出し、その藥汁で豆を煮て藥汁の盡るを度とし、曬し乾す。每服百粒を水に開かして服す。

【延齡廣嗣の仙方】淮生地を酒で製し、何首烏を酒で煮、旱蓮草、鹿銜草――これは眞のものが甚だ少いから仙靈脾を代用する――以上各三兩を四時を按じて用ゐ、乾山藥に乳を拌ぜ、白茯苓に乳を拌ぜ、當歸身を酒で炒り、眞青鹽と以上各一兩を季節の分と至とを按じて用ゐ、石菖蒲、兎絲子、肉蓯蓉を酒に浸して膜を去り、補骨脂、五加皮、骨碎補、淮手膝、白甘菊、原杜仲を酒で炒つて絲を斷ち、枸杞子、蛇床子、槐角子、金櫻子、覆盆子、川黃柏、建澤瀉、以上各五錢を十六節を按じて

用ゐ、以上の二十四味を俱に二十四氣に合せ、青鹽を除去して置いて鍋に入れて汁が半になるまでに煎じて渣を漉し、再び渣を過半に煎じて淸を漉し、沖和して濃く煎じた中へ馬料豆三升七合、女貞子一升七合を入れて陰陽二氣、二至、二分に按じ、年、月、日、時、週天の度數に合せ、一合半をば閏の分として取つて置き、煮て數十滾してから靑鹽を研細して傾け入れ、共に汁が盡きるまでを度として煎じ、豆を取つて曬乾して磁瓶に收貯し、毎朝四錢を滾湯で送下する。もし外出して饑餓した場合にはこれを嚼んで食つて點心に代へる。この豆は、愼重に陰陽二十四氣を按じ、週天の度數に合し、製法が中和補益の妙を得たもので、久しく服すれば人をして鬚髮を再び黑からしめ、齒の落ちたるを更生し、耳目が聰明となり、手足が便利し、陽を壯にし、腎を補し、本を固めて元に還し、多く子息を生ましめ、多く壽命を增す。不斷に常服すれば地仙と成れる。凡そ腎虛目暗、上盛下虛には尤も適切なものである。

【四寶大神丹】家寶方――能く五勞、七傷を治す。服藥後に腥、臭、發物、房事を忌む。馬料豆五升を混堂油で九回製し、黃芪八兩を人乳で七回製し、白當歸を酒で

洗つて四兩、金櫻子二斗を內子と毛とを去り、外に刺を去つて淘淨して熬膏し、取收めるときに童尿一二盞を加へて聽用し、以上の物を用ゐて、前の三味を金櫻膏で和して梧子大の丸にし、毎服三錢を桂圓湯で服す。

〔目を明にし、腎を補し、兼て筋骨疼痛を治す〕○不藥良方――小紅棗十二箇を冷水で洗淨して蒂を去り、甘州枸杞子三錢、小馬料豆四錢、水二碗を一碗に煎じ、早朝空心に湯と共に食ふ。

〔絕瘧〕首烏を製するに用ゐて剩した黑料豆は瘧を絕つて用ゐられる。凡そ四日兩頭瘧は豆の煎湯を服すれば癒える。

○〔三日瘧を截る〕祝穆效方――常山、雲苓、官桂、甘草、檳榔各三錢、小黑豆四十九粒を酒、水各二碗で慢火で二碗に煎じ、當晚先づ一碗を服して暖に蓋ふて睡り、殘りの一碗をば翌日將に發せんとするを須つて二時間ほど早く服す。熱服することを要する。暖に蓋ふて臥し瘧の發作の時を待つ。發作時に至つてもやはり輕鬆なもので、また當日に癒えるものもある。癒えて後は房事を忌み、生、冷の物を食ひ、勞働し、風霜に當ることを戒め、半月間は雞、羊、牛、蛋、白扁豆を食ふこと

を忌む。永く截つて祭らない。

○又、祕方集驗――瘧を治す。檳榔、蘿蔔子、常山、甘草各一錢、紅棗四箇、烏梅七箇、馬料豆を年齡一歲に對して一粒づつを水二碗で一碗に煎じて服す。三日間葷、油を忌む。永く再發せぬ。

「痰喘氣急」同壽錄――梨を中心を刳空けて小黑豆を滿て納れ、蓋合して緊く紮り、糠火で煨熟して搗いて餅にし、毎日食ふ。

「中風口噤」文堂集驗方――馬料豆一升を飴のやうな濃汁に煮て、口中にその汁を含む。それで言語が自由になる。

「黑白丸」痞積を治し、胃を開き、食を消し、脾を健にし、腎を補す。○百草鏡方――馬料豆、白蒺藜を刺を去り、各一觔を炒つて末に磨り、蜜で梧子大の丸にし、二三錢づつを水に開いて服す。

「陰症の手足紫黑を治す」集驗方――黑料豆三合を炒熟し、好酒で烹滾らして熱服する　葱鬚を加へて共に烹るが更に妙である。

「盜汗」文堂集驗方――蓮子七粒、黑棗七箇、浮麥、馬料豆各一合を水で煎じて服

す。三回で癒える。

【腎虛腰痛】幷に陰虧目昏を治す。活人書——腰式烏豇豆、馬料豆各一兩を煮た湯に鹽少量を入れ、五更時に熱に乘じて服す。鐵器を忌む。

【陰虧目昏、老眼失明】活人書——馬料豆、枸杞、女貞子各十兩——陰虧目昏には女貞子を除く——を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、朝、夕二三錢を服す。自ら效がある。

【赤、白帶下】白果を皮を煮熟して蜜餞にし、毎日早朝に七箇を吃ひ、再び炒つた馬料豆一兩を食つて白滾水で送下する。數日にして癒える。

【妊娠中の腰痛、酸軟】產家要覽——馬料豆二合を炒焦し、熱白酒一大碗で七分までに煎じて空心に服す。

【產後の中風で口噤し、目瞪し、角弓反張するを治す】姚希周集驗——黑料豆を鍋で炒つて極めて焦し、熱した黃酒中に沖入して服す。立ろに效がある。再び回生丹を服すれば全癒する。

【華眞君三豆湯】痘を稀にする。楊春涯驗方——綠豆、赤飯豆、馬料豆等分を、毎日湯に煮て小兒に與へて吃はす。痘の出ることが自ら稀である。もし痘毒に過つた

ときでもこの湯を飲み、擣いて搽敷すればその毒は自ら消する。

【痘風爛眼】集驗に云く、風爛眼には、腌白梅一箇を核を去り、中に綠礬少量、川椒三十粒を入れて五銖錢二枚で夾み、苧蔴で紮住し、無根水に浸して洗へば自ら癒える。もし痘が出てこの症を起したときは、再び馬料豆を年齡一歲に對し一粒を加へてその水の中に投ずる。

【眼藥丸の方】周氏家寶――馬料豆一升を炒り、蟬退四兩を酒で洗つて頭、足を去り、木賊草四兩を節を去り、菟絲子一觔を炒り、甘菊花四兩を曬乾、白蒺藜一觔を各〻末にし、水法で丸にし、毎服二三錢を、晚に滾湯で服す。もし老年者の場合には桂圓湯で服す。

【各種の癬】別駕陳彬は曾て太醫院官に任ぜられた人だ。その各種の癬を治する方――馬料豆を多少に拘らず瓦礶內に裝入し、罐の口を銅絲で罩めて格定し、豆が倒れても出ないやうにし、然る後に大きい邊の高い火盆一箇に一孔を鑿つて罐を倒にしてその孔上に合せ、四圍を乾いた馬糞で壅ふて火を罐の底に燃し、盆の底には磚を墊いて空け、碗一箇を置いて油を接する。火で罐內が煨けると豆が自ら焦げ、

油が出て盃の底から碗中に滴入する。色は膠、漆のやうなものだ。これを三囘癬に搽れば直ちに癒える。

【藥毒を解す】凡そ服藥過多は、ために頭面が浮腫し、唇が裂けて流血し、或は心腹が飽悶し、臍下の撮痛等を起すものである、馬料豆、菉豆各四兩を合せて煎じた汁を豆共に服す。病の好きを度とする。

【附子、川烏、天雄、斑蝥の中毒】不藥良方——馬料豆の煎汁を服すれば解す。

稽豆葉は瘤を治す。急救方——頸後の粉瘤には、馬料豆葉、辟麝香草を共に搗いて患處に敷く。その瘤は次第に軟になつて消する。破れたときは手で粉疙瘩を擠し去る。破れたそのままにして自消する。

蠶豆殼

【瘰癧を治す】行篋檢祕——油鹽蠶豆殼一鍾を麻油に一晝夜浸して取出し、豆殼を瓦上で焙じて末に研り、麻油で調へて患處に搽る。立ろに癒える。

【膈食】指南に云く、蠶豆の麻粉を紅糖で調へて食ふ。數回で癒える。

【小便が日久しく不通で忍び難く、死せんとするもの】慈航活人書――蠶豆殼三兩を湯に煎じて服す。もし鮮の殼がないときは乾殼を取つて代へる。

【黄水溜瘡】毛世洪經驗集に云く、凡そ大人、小兒の頭面の黄水瘡で、流れて行くところに生じて蔓延してやまぬには、蠶豆殼を炒つて炭にして研細し、東丹少量を加へて和勻し、眞菜油で調へて塗り、頻りに油で潤ほす。三日にして癒える。

【漏を治す】種福堂方――蠶豆殼を炒熟して末に磨り、毎服三四錢に沙糖少量を加へて調へて服す

【禿瘡】張卿子外科祕方――鮮の蠶豆を泥のやうに搗いて瘡上に塗り、乾けば換へる。三五回で癒える。もし鮮のものがないときは、乾いた豆を水で泡胖して敷くも效がある

【吐血】張卿子方――新蠶豆殼を、四五年の陳きものが妙である。湯に煎じて飲めば癒える。

【天泡瘡】蠶豆黑殼を灰に燒いて性を存して研末し、枯礬少量を加へて菜油で調へて敷く。一回で癒える。

藥性考に云く、蠶豆苗は能く酒を醒す。

醬油

糟油

麪、豆を拌ぜで罨ふて黄にし、鹽水に漬けて造る。伏造したものは味が厚いが、秋油は味が薄い、陳久なるものが藥に入れるに良し。

味鹹し、性は冷である。一切の魚肉、菜蔬蕈の毒を殺す。湯火傷に塗る。多食すれば嗽を發し、渴を作す。

【茘を食つて脹となりたるを解す】陳年の醬油を少量を飲めば消する。

【輕粉の中毒】三年の陳醬油を水に化して頻りに漱ぐ（集簡方）

糟油　藥性考――風瘙、腰膝痛を摩す。胃を開き、臟を暖め、嘔噦を止め、蔬菜の毒を解す。

腐

漿　沫　渣　皮　乳　鍋巴　泔水　麻腐

瀬湖の綱目では、荳腐の集解に於て、腐皮は饌に入れるに堪へると註してあるが、漿、乳はいづれも遺し、又、胡麻もやはり腐に作れるものだが、綱目では、胡麻の條にやはり遺した。今悉く補記して、一括して標名を腐といつた。

腐漿　味甘く微し鹹し、性は平である。咽を清し、膩を祛り、鹽滷の毒を解す。藥性考に云く、味甘く微し、性は涼なり。熱を清し、氣を下し、便を利し、腸を通ずる。能く淋濁を止めるには銀杏を漿に研る。

【傷寒で十日汗せぬもの】張卿子妙方——未だ點ぜぬ腐漿一大碗で好白蜜を調へて熱服する。汗が出て癒える。神效がある。

【脚氣腫痛】走り難きには、豆腐漿を熱し、松香末を加へて搗き勻ぜて敷く。一夜を過せば好く行走し、永く後患がない。

【大便下血】古今良方——荸薺一觔、或は半觔、豆腐漿のまだ水に沖せぬもの一大碗を用ゐ、腐漿を頓に極熱し、荸薺を搗いた汁を熱に乘じて沖入して飲む。

【鹽哮】救生苦海——豆腐漿に糖少量を點てて日日に朝一碗を服し、百日間間斷なく服すれば自ら癒える。

【黃疸を治す】劉羽儀驗方——毎日空心に生豆腐漿一碗を冷で吃ふ。四五回吃へば自ら癒える。生蘿蔔を食ふことを忌む。

【痰火吼喘】經驗廣集——飴糖二兩を豆腐漿一碗に煮化して頓服すれば癒える。

【勞、及び自汗を治す】回生集方——黑豆を淘淨して磨つて腐漿にし、鍋で煮熟して皮を結成し、一枚づつを食つて熱黑豆漿で送下すれば效がある。

○凡そ人は、毎日早朝に黑豆腐漿を吃へば大いに補益があり、それで癆病の患を免れ得るものだ。

【肺癰、肺痿】芥菜滷の陳年のものを用ゐ、毎日酒杯で半杯を豆腐漿に沖して服す、服して後、胸中に一塊があつて上に塞り下に塞る、數回塞つてから能く惡膿を吐出し、日日に服すれば結局癒える。

【血崩】不藥良方——生豆腐碗一碗に生菜汁半碗を入れて一二回空心に服す。

【五妙湯】産後、幷に弱症を治す。郁文虎傳方——頭鍋腐漿一碗、腐皮一枚に生雞蛋一箇を打碎いて漿中に沖入し、再び圓眼肉十四箇、白糖一兩をその漿中に入れて滾して服し、五更に空心に食ふ。

陳廷慶云く、豆腐漿は陰の分に入り、火を瀉し、淋濁を通ずる。凡そ淋症には、六一散を腐漿に沖して食ふが最も妙である。五更に雞蛋、白糖を沖して點服すれば、嗽を寧くし、血を補す。粤地方では腐漿で粥を煮て食ひ、甜漿粥と名ける。大いに能く虛羸を補するものだ。

腐沫 卽ち豆腐の泔水上に結する沫がそれである。鵝掌癬の手掌、及び足掌に層層として生じ、皮を剝げば血肉の外に露れるものを治す。この沫を熱して洗へば癒える。

腐渣 これは豆腐を造る時に剩出する渣である。一般にこれを猪の飼料にする。藥に入れるには必ず生の腐渣を用ゐる。

一切の惡瘡、無名腫毒を治するに神效がある。不藥良方――豆腐渣を砂鍋中で焙熱し、紅腫せる部分の大小を看て、餅にして上に貼り、冷えれば換へる。癒えるを度とする。

【大便下血】古今良方――水に觸れない豆腐渣を黃に炒り、淸茶で調へて服すれば癒える。

【臁瘡、裙邊瘡の爛臭して起沿するを治す】養素園方——生豆腐渣を捏つて瘡の大小ほどの餅にし、先づ清茶で洗淨して絹帛で拭ひ乾し、然る後に貼つて帛で纏ひ、一日に一回換へる。その瘡は次第に小さくなり、肉が次第に平になる。これは費啓彰が親しく試みて有效だつた方である。又、脚蛀に敷くもよし。

【脚上の皮蛀】水孔を生じて皮の濕爛するものである。不藥良方——豆腐渣を貼れば三日で癒える。生水を落すを要しない。

【腸風下血】慈航活人書——雪花菜、即ち豆腐渣を、まだ漿を濾さずして水を帶びて鍋中にあるものを用ゐ、炒り燥して末にし、毎服三錢を、紫血塊のものは白糖湯で服し、紅血塊のものは砂糖湯で服す。一日三回、年久しくて危篤に垂たるものもこれを服すれば神效がある。

腐皮　味甘し、性は平なり。胃を養ひ、胎を滑し、毒を解す。

【小兒の全身に起る羅綱蜘蛛瘡】臊癢して忍び離きものである。仁惠編——豆腐皮を燒いて性を存し、香油で調へて搽れば自ら癒える。

【落頭疽】慈惠小編——壁上の蟢子五六箇を腐皮で包んで全部を吃ふ。直ちに癒

える。

【冷嗽】劉羽儀驗方——乾豆腐衣を燒いて性を存して末にし、熱陳酒で調へて服す。四五十枚を吃へば癒える。

【水鼓脹】種福堂方——陳芭蕉扇を筋を去つて灰に燒いて性を存して五分、千金子を油殼を去つて二分五釐、滑石二分を共に細末にし、腐衣で包んで滾水で送下する。十服で癒える。

腐乳 一名菽乳。豆腐を醃けて酒糟、或は醬を加へて製したものである。味鹹く甘し、性は平である。胃を養ひ、中を調へる。

腐粑 これは腐漿の鍋の底に結する焦巴である。藥に入れるには、曬し焙じて研末し、或は生で擣いて丸にする。いづれも用ゐられる。藥性考——鍋炙と名け、胃を開き、滯を消し、積を逐ふ。

【淋濁を治して血を補す】慈航活人書にある五效丸——豆腐鍋粑一兩に川連一錢を加へて共に搗いて桐子大の丸にし、每服五錢を、赤帶には蜜糖の滾水で呑下し、白帶には砂糖湯で服し、熱淋尿血には白湯で服し、腸風下血には陳酒で服す。血風

瘡には、先づ豆腐の泔に浸して靨を洗ひ去り、布で拭ひ乾してから前の末藥——卽ち川連、腐杷の粉末をまだ丸にせぬ時に一半を殘して置く——を眞麻油で調へて搽り、乾けば再び塗る。三四回で自ら癒える。

【翻胃】神方珍記——豆腐鍋巴を用ゐ、黃色のものを佳しとする。炒つて硏末し、每服三錢を沙糖湯で調へて白湯で服す。

【痢疾】神方珍記——陳冬米を炒り、豆腐鍋巴と二味各等分を細末にし、空心に白湯で二三錢を調へて服し、後に半日間饑を忍んでゐるがよし。自ら癒える。

腐泔　卽ち豆腐を瀝下した後の水である。藥性考に云く、豆腐には鹽滷を點するものがあり、石膏を點するものがあるが、倶に能く熱を淸する。

性は淸涼にして能く便を通じ、痰を下し、癃閉を通ずる。衣を洗へば垢膩を去る。

蔴腐　これは胡麻の小粉で造るものである　味甘く、性は平である。肌を潤し、腸を滑し、毒を解す。蔣儀藥鏡の滋生賦に云く、蔴腐豆粉は腸を淸し胃を淸す。

芝蔴殼

これは芝麻の外殼である。綱目には、その苗を記載して靑蘘といひ。又、麻枯餅、麻花、麻楷があるが、麻殼がないから補つて置く。

【湯火傷】楊春涯驗方——芝麻殼を燒いて性を存して研細し、火傷があつた場合に、麻油で調へて搽れば癒える。もし潰爛するときは乾いたものを摻る。

【半身不遂】千金不易方——芝麻殼五錢を酒で煎じて服す。汗を出して癒える。

諸蔬部

甘儲

粳粉　甘儲酒

一に甘薯と書く。又、朱薯と名ける。それはその皮に紅いものがあるからだ。一名を金薯といふ。今は俗に通じて番薯と呼び、或は番茹(はんじよ)と書く。紅皮、白皮の二色があつて、紅皮のものは心が黄で味が甜く、白皮のものは心が白くして味が淡(あは)い。南方の各省ではいづれもこれを栽培し、沿海、及び島中の居民はこれを穀物の代用とする。その藥に入れての功用も廣いのである。諸家の本草にいづれもまだ記載がなく、李瀕湖だけが綱目中に補列したが、惜むらくはその言ふところがただ虚乏を補し、氣力を益し、脾、胃を健にし、腎陰を强くするといふだけで、それ以外にはいづれも未だ及んでゐなかつた。乾隆五十一年冬、今上皇帝は閣學侍郎張若渟の請を允(ゆる)され、直省に勅して廣く甘薯を栽培して救荒の備とすることを奬勵し、中丞

陸燿に甘薯錄なる編輯ものがあつて、それに記載してある衞生の一門は實に李時珍の未だ及ばなかつたところを補ふに足るものがある。因てこれを採錄してその遺を補ふ。

陸公の原序に云く、

甘薯、即ち薯蕷の屬なり。陳祈暢の異物志、嵇含の南方草木狀に見ゆ、中土の此物あるその來る舊し矣。第だ貴重せず、栽植する者少し。明季に閩人陳經綸なるものあり、復た呂宋よりその種を移して歸り、巡撫金公學曾氏に勸めて樹藝せしむ。閩人之を德として號して金薯となす。然れども、是より長樂の謝肇淛、黃州の李時珍、新城の王象晉、各論述あれども、皆經綸の事に及ばず。而してその裔孫世元父子復た金薯傳習錄を爲り、盛にその先世が呂宋より傳へたるの功を侈り、一に中國素と產する所に非る者に似たるは、此れ考證の疎なり。夫れ以ふに、一物の微なる、以て荒に備へ疾を療するに足り、而して又功力を費さず。其の民食に功を爲すや實に淺尠ならず。前任布政使李公渭、嘗て舉げて以て山東の民に敎ゆ。其の性又沙土高地を喜み、山海の區に於て尤も相

宜きに屬す。

五雜俎に、百穀の外、以て穀に當つ可き者あり、芋也、薯蕷也。而して閩中に蕃薯あり、山藥に似て肥白は之に過ぐ。沙地に種ゑれば生じ易くして極めて蕃衍す。饑饉の民多く賴つて活を全ふす。此の物北方にも亦種ゆ可しとあり。

羣芳譜に、朱薯、一名蕃薯、大なる者は玉枕薯と名く。形圓くして長く、本末皆鋭く、皮は紫、肉は白、質理膩潤にして、芋、及び薯蕷と自ら是れ各種なり。氣香く、生なる時は桂花に似て、熟せる者は薔薇露に似たり。地に撲れて纏生し、一莖數十百莖に蔓延し、節節に根を生ず。一畝の種ゑること數十石、穀を種ゑるに勝ること二十倍す。閩廣人は以て米穀に當つ。性冷なりと謂ふ者あるは非なり。二三月、及び七八月倶に種ゆ可し。但だ卵に大小あるのみ。卵は八九月始めて生じ、冬に至つて乃ち止む。生にて便ち食ふ可し。若し未だ大ならざる者は頓に掘ること勿れ。居中に居らしむれば日に漸く大なり。冬至に到つて須く盡く掘出すべし。不れば則ち敗爛すとあり。

金氏學會曰く、薯は外番より傳ふ。因て番薯と名く。形は王瓜、藕臂の如く、

拳の如く、指の如く、卵の如く、棗の如く、大小一ならず。實同じくして種別に、皮に紫あり、白あり、深淺紅あり、濃淡黄あり。肉も亦之の如し。蒸熟すれば勻く膩なること脂の如し。甘く平にして胃を益す。性は薯蕷に同じ。海隅人は以て養殖に供す。蔓延すること極めて速にして、節節に根あり、地に入つて即ち結ぶ。毎畝數千觔を得可し、五穀を種ゑるに勝ること幾倍す。

徐氏元扈曰く、昔人謂ふ、蔓菁に六利あり、柹に七絶ありと。予謂ふに、甘藷に十二勝あり。收入多き一也。白色にして味甘く、諸土種中に特に夐絶たる二也。人を益して薯蕷と同功なる三也。徧地に傳生し、莖を剪つて種と作せば、今歳一莖にして次年は便ち數十畝を種ゆ可き四也。枝葉地に附いて節に隨つて根を生じ、風雨も侵損し能はざる五也。米に當つ可く、凶歳も災する能はざる六也。籩實に充つ可き七也。酒に釀す可き八也。乾して久しく收藏し、之を屑とし旋めて餅餌となせば餳、蜜を用うるに勝る九也。生、熟、いづれも食ふ可き十也。地を用うること少くして灌漑し易き十一也。春、夏種を下し、初冬に收入し、枝葉極めて盛にして草穢を容れず。但だ須く壅培すべくして鋤耘を用

ゐず、農を妨げざる十二也。
陸公薯錄にある灌漑、種栽、貯藏、製造の諸法は、薬、病には關係はないけれども、備荒には有益なことだから幷に錄して置く。

薯を種ゆるは高地沙地に宜しく、起脊尺餘にして種を脊上に在く。旱に遇はば井を汲んで澆灌すべし。即し澇年に遇ふて、若し水の退くこと七月中に在り、氣候既に五穀を蓺ゆるに及ばざるときは、即ち藤を剪つて薯を種ゆ可し。蝗蝻の害を爲すに至つては、草禾蕩盡すれども、惟だ薯根は地に在つて薦食し及ばず。縱令莖葉皆盡くとも尙ほ能く發生す。若し蝗信到るの時は、急に人をして土を發して偏く壅はしむ。蝗去つて後滋生すること更に易し。是れ天災、物害皆これが損を爲す能はざるなり。

人家凡そ隙地の但只數尺にして天日を仰ぎ見るあらば、便ち種ゑて石許を得可し。此れ救荒の第一義也。歲前に深く耕して大糞を以て之を壅ひ、春分後に種を下す。若し地沙土に非るときは、先づ柴灰、或は牛馬糞を用ゐて土中に和し、土脈を散緩せしめて沙土と同じからしめば根を行る可し。重て耕起して極

深なることを要す。薯根を將つて毎段三四寸長に截り、土を覆ふこと深さ半寸許り、毎株相去ること縱七八尺、横二三尺。蔓生じて既に盛に、苗長一丈なるを俟ち、二尺を留めて老根を作し、餘は剪つて三葉を一段となし、土中に挿入す。毎栽苗相去ること一尺。大約二分を土に入れ、一分を外に在けば、卽ち又薯を生ず。隨つて長じ、隨つて剪り、隨つて種ゑ、隨つて生じ、蔓延して原種の者と異らず。凡そ薯を栽ゆるには、須く順に栽ゆべし。若し倒に栽ゆれば則ち生ぜず。節土上に土上に在れば則ち枝を生じ、土下に在れば則ち卵を生ず。約そ各節に根を生ぜば、卽ち其の連綴する處に從つて之を斷ち、各根苗を成さしむ。毎節卵三五枚を得可し。凡そ藤蔓の已に地に遍くして容る能はざるものは卽ち游藤と爲す、宜く之を剪去るべし。根を掘る時に及んでは、藤蔓を捲去つて倶に牛羊豕を飼ふ可し。或は曬乾して冬月喂はしむ。皆能く肥脂ならしむ。

二三月種ゆる者は、毎株に地方二歩有半を用う。而して卵徧し。毎官畝に約そ薯三十六株を用う。四五月種ゆる者は、地方二歩、而して卵徧し。畝約六十株なり。六月に種ゆる者は、地方一歩有半、而して卵徧し。約そ一百六株有奇

なり。七月に種ゆる者は、地方三尺以內、卵を得ること細小なり。畝約そ九百六十株なり。種を種ゆるの疎密は略ぼ此を以て之を準ず。九月に畦種して卵を生ずること箸の如く棗の如きは、種と作さんと擬するものにして、此れ松江の法也。

金氏曰く、薯苗は地に入れば卽ち活く。東西南北、地として宜からざるはなし。沙土高地を得れば結すること尤も多し。天時旱澇倶に能く秋あり。養苗の地は宜く鬆に耕過し、須く町を起つべし、高さ四五寸。春分後、薯の種科を取つて町內に置き、土を發し薄く蓋ひ、縱橫相去ること尺許り。半月にして卽ち芽を發し、日に漸く蔓延して一丈、或は五六尺に長ず。割いて七八寸を一莖と爲す。割き盡すこと勿れ、半寸許を留めよ。割きたる處に當つて復た發し、生生息まず。若し蔓を養ふて苗と作さんとせば、須く稍長じて尺許なるを用うべし。密密に栽ゑて、豎にし、葱蒜を養ふ法の如くす。莖を栽ゆるには、牛を使て町を耕さしめ、寛二尺許、高五六寸にし、莖を將て斜に町心に揷み、約七分を町內に在き、三分を町外に在く。町內の者は實を結び、町外の者は滋蔓し、

毎莖相去ること一尺餘なり。十餘日にして町の兩旁を牛を使て耕し開いて壟さしめ、又七八日にして糞を以て之を壅ひ、仍て牛を使て上を培はしむ。毎町薯三四觔を得可し　若し雨多ければ、須く蔓を將て町上に撥り、浮根として匝地せしむること毋れ。然らば實地内に結し、蟲災すること能はず。葉、如し食盡るも亦能く復發す。早く栽ゆるには宜く稀にすべく、晩く栽ゆるには宜く密にすべし。三四月栽ゆる者は實粗大なり。七八月に栽ゆる者は實細小なり。秋末實始めて大を加ふ　冬至前に當に掘り盡すべし。掘り盡さざるも亦大なる能はず。熟せる時、須く先づ蔓を割いて町下に置き、乾くを俟つて捲起し、冬月剉んで牲畜に喂すべし、若し北地にして早く寒きときは、則ち遲きこと一個月にして栽ゑ、早きこと一個月にして掘る。遲かる宜きと早かる宜きとは亦た天氣の寒暖を看るのみ。

甘薯疏に云く　江南の田の汙下なる者は薯に宜からず。若し高仰の地ならば、平時藍を種ゑ豆を種ゆる者、易へて以て薯を種ゑば數倍の獲あらん。大江以北は土更に高く地更に廣し。卽ち其の利百倍も啻らず。倘し天旱を慮るときは、

則ち此を畝に種ゑば十石を收む。數口の家止だ一畝を種ゑ、縱し旱甚しければ、而も井を汲んで灌漑す。一たび成熟に至れば、終歳食ふに足る。又何の不可あらん。

種を取るの法、羣芳譜に云く、九月、十月の間、薯卵の根に近き先に生ぜる者を掘る。損傷せしむること勿れ。軟草を以て包裹し、通風の處に掛けて陰乾す。

一法、八月中に於て根に近き老藤を揀び、七八寸の長に剪り、毎七八根を一小束と作し、地を耕して畦と作し、藤束を將て栽ゑ、韭を栽ゆる法の如くす。月餘を過ぎて毎條下に小卵を生じ、蒜頭の狀の如し。冬月寒を畏る。稍や草を用ゐて蓋覆し、來春に至つて分種す。

一法、霜降前に根に近き卵の稍や堅實せる者を取つて陰乾し、輭草を以て襯と作し、另に輭草を以て之を裹み、無風和暖にして霜雪に近かず冰凍を受けざる處に置く

一法、霜降前に根藤を收取し、曬して乾かしめ、竈下に於て窖を掘ること深

さ一尺五六寸、先づ稻糠三四寸を用ゐ、次に種を其の上に置き、更に稻糠三四寸を加へ、土を以て之を蓋ふ。

一法、七八月に老藤種を取り、木筩、或は磁瓦器中に入れ、霜降前に至り、草窩中に置き、稻糠を以て襯し、陽に向ひ火に近き處に置き、春分後に至つて前法に依つて種ゆ。

金氏曰く、薯を存するの法は一ならず、人に在つて變通す。或は木斛、草囤、磁甕、竹籠中に存す、倶に可なり。但だ性寒を畏れ、又、熱を畏る。風を避け、和暖の處に置き、草を用ゐて浮蓋し、氣を通ぜ俾む。若し封固すれば、則ち發熱壞爛す。

余（學敏）は前に東甌の玉環にゐたとき、その島民が穀食が少くして多くは茹を粮にしてゐるのを見た。彼の地のある地方では率ね茹を多く種ゑてゐるが、土人の話では、その利害は穀物に十倍するので、茹糧の多い者が富者となつてゐるといふことだつた。その茹を貯藏する方法は、多くは曝乾して條に切り、竹席で圍つて囤のやうにする。かくして儲へると久しく經つても蛀がつかない。用ゐるには水で煮て

飯の代りにするのだ。これを食へば力を多くし、病を鮮くするといふ。蓋しその味が甘くして能く脾土を補するからである。金氏は、薯は初め結したときから食へるもので、味が淡く汁が多いが、一定の時に達すると甜くなる 煨いて食ひ、煮て食ひ、煿いて食ひ、蒸して食ひ、また生でも食へる。切片して曬乾し、碾つて饘粥になり、磨つて粉餌になり、滾水で灼して丸になり、麴を拌ぜて酒になり、細に舂いて水で渣を濾し去つて澄し曬せば粉になり、その葉は蔬にもなるといつた。

○范咸臺灣府志――長くして白きものは舊種であり、圓くして黄赤なるものは、文來國から出るもので、金姓の者が携へて歸つたものだ。故に金薯と名ける。

○諸羅縣志――他の物は、種を下すには必ず子を用ゐ、仁、或は原物の根、芽を用ゐるのであるが、獨り薯だけはさうでない。一條を取つて片片に切り、ただ皮を一面留め、それを種ゑると根が生え苗が生える。ただ一の奇異なるものだ。

氣味は甘し、平にして毒なし。主治は中を補し、血を和し、胃を暖め、五臟を肥す。白皮のものは肺氣を益し、津を生ずる。中滿の者には宜くない。多食すれば能く氣を壅する 煮る時に生薑一片を加へれば中を調へ、薑、棗と同功である。紅花

で煮て食へば脾血を理して外洩せしめぬやうにする。――敬按ずるに、甘儲は、俗い言ひ傳へに、能く諸病を發し、痔漏を患ふ者は癒えて後にこれを食へば再發するといふ。やはり性が能く下行して氣を滯らすものだからである――

【痢疾下血】傳習錄に云く、痢疾の起るは、多くは脾、胃が先づ虛して後に積滯するが原因となつて痢となるのである。その脾氣が甚だ虛し、中焦を健にせんとするものあるには、必ず甘、溫の藥が宜く、その命門が暖ならず、下焦を實せんとするものあるには、必ず純熱の藥が宜し。若し溼熱から起つた煩熱、口燥、腹痛、純紅、小水黃赤から下血するものの場合には、此を用ゐる。薯を蒸熟し、芍藥湯で頻頻と嚼んで服す。或は薯粉を冬蜜で調へて服しても癒える。

【酒積熱瀉】傳習錄に云く、泄瀉の症は一定してゐない。或は水土が相亂れ、併に大腸に歸して瀉し、或は土が水を制せず、淸濁が分れずして瀉し、或は小腸に傷を受けて氣化に調節を缺いて瀉し、或は眞陰が虧損し、元陽が枯涸して瀉するものである。これはいづれも各〻その類に從つて治するもので、もし酒溼が脾に入り、それがために飱泄するものにはこれを用ゐる。薯を煨熟して食ふ。

【溼熱黃疸】黃疸の症に四ある。一を陰黃といふ。氣由の敗るに因るものである。一を表邪發黃といふ。卽ち傷寒の症である。一を膽黃といふ。驚恐から起るものである。更に陽黃といふ一症がある。或は風溼の外感、或は酒食の內傷で、溼に因つて熱を成し、熱に因つて黃を成すものである。この方を用ゐる。薯を煮て食ふ。その黃は自ら退く。

【遺精淋濁】遺精と淋濁の症とは不同がある。故に治療もやはり同じくないわけだが、大體に於いて心、脾、腎に中心を置く。故に凡そこの症のものの場合は、夢あると夢なきと、火あると火なきと、或は氣淋、血淋、膏淋、勞淋たるとを論ぜず、すべて心、脾を調養すべきものである。每日朝夕この粉を調へて服すれば大いに奇功がある。

【血虛で月經の亂るるもの】婦人の氣虛は、或は遲れ、或は早くして經が多くは不定である。故に陽虛にはその陽を補し、陰虛にはその陰を補し、氣滯にはその氣を順にする。その辛燥、寒涼に宜しからずして淸和に宜しきもののあるには、この方を用ゐる。薯を養殖として頻りに服し、その脾を調養する。脾をして生化作用を健

ならしめれば經期か自ら定まるものだ。

【小兒の疳疾】疳は乾であつて、小兒に在ては五疳となり、大人に在ては五勞となる。その病は乾燥せる物を哺食し、肥厚の物を嗜み啖ひ、妄に峻利の藥を服して津液の乾涸を致し、延て疳と成るのである。これには、薯は最も能く燥を潤まし、津を生じ、神を安じ、胃を養ふものだから、常服せざれば舊積が化して疳が癒える。

甘薯粳　羣芳譜――一造粳法は、糯米を水に五七日浸して米が酸くなるを度とし、淘淨して曬乾し、搗いて細粉にし、晴天の日を看て、糯米粉に生水を入れて和して杯口ほどの大いさの團子に作り、また薯根と皮を拭ひ去り、沙石土を洗淨して徐徐に磨つて極細の漿にし、水を攙ぜてはならぬ。前の糯團を煮熟して瓶中に撈入し、木杖で力を盡して攪きまぜて糜にし、大體手を入れられる程度の熱度になるを候つて右の薯漿を傾け入れる。割合は糯粉三度に對して薯漿一觔を入れ、極めてむらなく攪きまぜ、先づ乾いて少量の粉を平板上に篩ひならし、次に糜をその粉の上に置き、また乾いた粉を著けて薄く捍り、曬して半乾きになつたとき切つて骰子のやうな形式にし、曬して極めて乾して收藏する。使用する時には、慢火で鍋を燒い

て熱したとき二合ばかりを入れて慢火で炒る。少時して次第に軟になり、次第に發して圓い球子に成つたとき、白糖、芝蔴を下し、或は香料を加へて炒り勻ぜ、冷めて極めて浮脆になるを候つ。每粳二升で一斗に炒れるものだ。芋漿、山藥漿いづれを用ゐても作れる。按ずるに、この物を食へば腸、胃を厚くし、脚力を健にし、痰涎を縮め、毒を解し、血を活すに甚だ妙なものである。

甘藷粉　功は甘藷に同じ。製造法は、藷根を粗布で拭つて皮を去り、水で洗淨し、水を和して水中に細に磨り入れ、浮渣を淘り去つて澄んだ下の細粉を取つて曬乾す。豆粉と共にこの粉を用ゐて水で丸にすれば珍珠沙谷米と異がない。按ずるに、この粉は、余が閩中、及び玉環にゐた頃、いづれも土人にこれを製造して販賣し、遠方まで行商するものがあつたが、近日では寧波、及び乍浦にこれを取扱ふ商人が多くある。粉の市上價格が麵粉より安いので、近頃餅餌商店では多くこれを買つて麥麪中に攙和して果餌に作つて賣つてゐる。その粉はやはり價格に高低が一定せぬが、淨粉といふがあつて、それは前記の方法で製造したもので、滾水を沖するとさながら藕粉のやうなところから、藕粉店中にもやはり多くこれを買つて攙和するものが

あり、その智識のないものでは辨別がつかぬ。行粉といふがあつて、これは浮渣も共に一切みな細に磨り和して入れたもので、ただ餅餌(へいじ)を作るに用ゐられる。その色もやはり黄で白くない。さやうな次第で、それにまた甜、苦の二種があり、沙土に作つた細潔なものならばその茹は粉にして甜いが、倘(も)し前一年に烟草を種ゑた畑へ翌年茹を種ゑたものでは苦く澁くして一般に賣れない。ただ粉に作れるだけで、味はやはり苦い。但だ味が甘くして清香があり、化開して色が玉のやうなものが佳し。

甘薯酒　脾を和し、胃を暖め、瀉を止め、精を益す。釀造法は、薯根を多少に拘らず寸斷して曬乾し、甑で炊(た)き熟して取出し、揉み爛らして瓶中に入れ、酒藥を研細して攪和し、按實して中に小坎(せうかん)を作り、漿がそらに溜るを俟ち老いるを看て適當に水を投下し、絹袋を用ゐて濾過し、或は生で、或は煮熟し、それは任意にして用ゐる。その甑に入れてからの寒暖や、酒藥の分兩や、入れる水の量や、或は麴蘖(きくげつ)を用ゐ、或は藥物を加へる等のことは悉く米酒の場合と同一方法である。燒酒を造らんとする場合には、薯酒を鍋に入れて一定の方法のやうにして滴糟すれば頭子燒酒が出來る。卽ち薯糟を用ゐて造つたものを用うべきで、燒酒とやはり酒糟で燒酒を造ると

同じである。

この酒は福建に最多く、土人は土瓜酒と名け、燒酒をば土瓜燒といふ。その酒は味微し苦を帶びて峻烈であり、善き飲物ではない。これを飲めば頭目が微に昏眩するが、やはり大害はない。閩中では紹酒の價が高く、この酒は値が安いので、土人は相率ゐてこれを飲み、また客にも餉める。

山百合

これは百合の野生のもので、瓣が狹く長くして味が甘い。山間の住民が採つて賣つてゐる。

○藻異に云く、百合には三種あつて、一を山百合と名け、花が遲くして香しくない。二を檀香百合と名け、これは食へる。三を虎皮百合と名け、これを食へば人を食す。

○百草鏡――百合は白花のものを藥に入れる。紅花のものは山丹と名け、黃花のものは夜合と名け、今はただ盆栽にするだけで藥に入れない。百合は野生のものを

良とし、甜、苦の二種あつて、甜きものを用ゐるがよし。荷花の如く蘚に蒂なく、根なきものを取るが佳し。能く二便を利す。氣虛下陷のものはこれを忌む。

逢原に云く、余は親しく包山の土罅中で蚓が百合に化し、また完全に變化しきらぬものあるを實見した。大略野生の百合は蚓が變化して生ずるので、その熱を淸し、毒を解し、積を散し、瘀を消するは、乃ち蚓の本性なのだ。

○應驗方――癰疽の頭なきには、野百合を鹽と共に搗き爛らして敷く。

甘し。肺に入つて痰火を淸し、虛損を補す。肺癰を治するに、救生苦海では、白花のものを取り、三兩を搗爛らして白酒を和し、絞り取つた汁一碗を時に拘らず服す。七服で全癒する。

石衣

石耳

台州の仙居にこれがあつて、峻嶺の絕壁、海崖の高處に生えてゐる。これは陰陽、雨露の氣を受け、漸漬して石上に年久しくして生える衣である。鮮なるものは翠碧

（一）買路錢ハ冥途ヘノ旅費、我國ノ昔俗ニアリタル六文錢ノ如シ。

愛すべく、乾けるものは表面が黝黒で背面は雪のやうに白い。土人はこれで羹を作つて客に勧め、最も珍品としてゐる。煮る法は、滾水一碗に鹽少量を投じ、石衣をその中で泡け、手で細に揉んでその細砂を去り、綿のやうに軟になつてその細砂がなくなると、淨い色が紫に變じて玫瑰のやうになる。必ず鹽水を使へば銜んでゐた細砂を始めて能く吐き盡すもので、再び清水を二三回かけ、雞湯にそれを入れて食ふ。滑く脆く、鮮美にして味が最も香く甘い。山蔬としての第一である。台州の六管轄中でただ仙居だけにこれがある。或は、各處の深山にいづれもあるのだが、仙居の人でなければ取れないのだ。故に仙居の人これを專業として生計を立ててゐるものがあつて、近くは一二百里、遠くは數百里の深巖危壑に入り、人跡の能く躋攀するものなき壁上で始めてこの物を取るのであるが、そのこれを取る方法は、人は藤兜、飛架し、雞毳を衣て鞋蹻を躡み、捷きこと猿の猱るが如く、取るには銛鈎、鋒鏟、輪紅を用ゐ、山に入るには祭をして（一）買路錢の用意までしてかからねばならぬのだから、仙土の人でなければ到底思ひ切つた術が出來ないのである。さやうな次第で、彼等には仲間が多いのであるが、その採取にはただ一人が直接當るだけで、

二人竝んで採ることが出來ぬことになつてゐて、これまた異つたところがある。それがために毎年必ず人命を損ずるのでその値を昂(たか)くして利を貪つてゐる　それでやはり競つてその業に就かうとするものがあるのだ

味甘く氣淸なり　寒にして毒なし。膈熱を淸し、小水を利し、痰を化し、癭結(えいけつ)、滯氣を消し、血を補し、日を明にする功がある。婦人がこれを食へば、能く子宮を潔にして受胎し易く、男子が食へば精を益し、髓を增す。

石耳　羣芳譜――石耳、一名靈芝。天台、四明、河南宣州の黄山、西邊徼(せいへんけう)の諸山の石崖上に生じ、遠望すると烟のやうにある。廬山にもやはりあつて、形狀は地耳のやうだ。山僧はられを採つて曝して遠方への贈進物にする。沙土を洗ひ去つて茹にすれば木耳に勝るものだ。

○粤志――韶陽(せうやう)の諸洞には石耳が多く。その物の生えるは必ず靑石であつて、大雪後に當つて石が滋潤し、微に日の色を見ると石に耳が生えるのである。大なるは片を成して蘚苔(せんたい)のやうに碧色で、これを望むと烟のやうである。やはり微に蒂があつて、大小朶朶(だだ)として花のやうだ。これを烹ると表面は靑紫で芙蓉のやう、底は黒

くして皺んでゐる。毎に夜明け頃に摭り取れば肥厚だが、日を見ると次第に薄くなり、また微化して水になる。凡そ香蕈は陰溼の氣を感じて成るもので、善く冷氣を發する。多く生薑を和して食へば良いのであるが、ただ石耳は味が甘腴、性は平にして毒なし。多食すれば人を飫にし、能く肌を潤して童顏にする。木耳、地耳の上位に在るものだ。

〇南粤瑣記――凡そ青石は烈日に照されると汗が出て、汗が凝結すると耳に成るのである。青は木の氣だから耳が生ずるので、白石では生じない。或は、これもやはり蕈の類で、厚いものは蕈、薄いものは耳だといひ、或は、乳牀は必ず石脈に因つて出るもので、頑石からは出ない。その陰洞に在るものは乳牀となり、陽崖に在るものは石耳となるのだといふ。石耳の美なることは伊尹に稱されて、その言に、漢上の石耳といつてあるほどだから、蓋し上古から已に珍とされてゐたものである。

〇藥性考――石耳は寒、平である。石崖の懸珥は氣が竝に靈芝であつて、久しく食すれば色美にして精を益し、神を悅しめ、老に至つても毀れず、瀉血、脫肛は灰性寒なり。或は、平なりといふ。味甘腴にして毒なし。

を服すれば癒える。

○名勝志——安吉州梅溪の石門中に石耳を産するこれを食へば熱を止める。

野芋芳

青芋　土芋藤　野芋頭　鬼芋

氾勝之農書——芋に六種あつて、五には野芋、六には青芋である。野芋は大毒があつて人を殺す。凡そ芋は三年取らずに置けば野芋となる。性は滑にして石毒を下す。服食にはみなこれを忌む。青芋もやはり有毒だから、必ず灰汁を用ゐ、水を易へて煮てから食へるものだ。ただ蒸してこれを喫ふが宜し。野芋の毒に中れば人の喉を刺戟して音啞し、煩悶して頻死ならしめるものだ。大豆漿、或は糞汁でこれを解す。薑汁もよし。

葛祖遺方——麻藥と合せれば跌打損傷、痔漏、麻風を治す。腫毒に敷けば痛を止める。瘡癬を治す。搗いて蛇傷に敷く。

【乳癰】野芋頭に香糟を和して搗いて敷く。

青芋　冷熱を療じ、渇を止める。

土芋藤　土芋、卽ち黃獨。俗に香芋と名ける。肉は白く皮は黃で、形は小芋のやうだ。一名土卵といふ。野芋とは同じくない。綱目には、野芋を家芋の內に附錄し、土芋を別に一條を立てて記述したのでも判る。然しその引證したものは僅に陳藏器の一說に據つただけだが、實はその功は能く痘を稀にするもので、小兒が熟して食へば大いに痘毒を解す。その藤を灰に燒いて痘が爛れて瘡となつたものに傅ければ瘢痕をなくする。

○羣芳譜――土芋は、その根がただ一顆で色が黃だ。故に黃獨と名ける。

野芋頭　文堂集驗――一名仙人掌といふ。同じく野芋の一種だが、但だこの種は葉がやや小さく、略ぼ茨菇に似て葉に尖がある。これはまた草本で形が鞋底のやうなものとは同じくない。――仙人掌は形が鞋底のやうだ――

諸物の食積で已に痞塊となりたるを治す。野芋頭を磨り爛らし、糯米粉を和して粥に淡煮し、毎早朝、一茶鍾を油、鹽を用ゐずして食ふ。十服すれば後にその積が自ら消する。試驗の結果無害である。（集驗）

鬼芋　羅浮志——深谷中に產する物で、薯、芋のやうな狀態である。山間の住民は、これを取ると剖いて四片にし、砂盆に入れて磨つて膠漿にし、鍋で煮て膏にし、冷えて餠のやうに凝結して一塊となるを待ち、復た剖いて四片にし、再び煮て膏にし、膏に成るとまた前のやうにして三煮、四煮し、かくて食へば飽かしめるやうになる。一箇の芋で煮たもので數十人の腹を充てるやうになる。故に鬼芋と稱するのだ。この芋には四の不思議がある。初生は根、苗を藉らず、葉上の朝露が地に著いて種子となるが不思議の一、採つて製するとき、婦人、雞、狗に見られてはならぬもので、見られると化して水となるが不思議の二、磨るとき、煮る時には匕で順に旋さねばならぬもので、逆に旋せば化して水となるが不思議の三、一箇の芋から成つて、一から四に、四から十六に、十六から六十四に自乘して易の卦象のやうに倍加するが不思議の四である。聞くところに據ると、盧山、衡嶽にも各〻鬼芋があるが、採取、製造の方法がまた同じくないといふことだ。

野毛豆

野毛豆は園隰中に生じて蔓生し、枝は細く弱く、葉は細く尖つて兩兩枝に排して對生し、清明の後に淡紫の細花を開き、結實は毛豆のやうだ。立夏の後に採るがよし。初生の苗は甚だ金鳳花に、花、葉、その莢(さや)はさながら角蒿(かくかう)に似て、中に二粒の子があつて、圓くして小菉豆のやうだ。小滿の前後にみな黑く老いて枯落する。

○田塍(でんじよう)の間に生じ、莖、葉、及び莢は家豆に比較して細小なものだ。一名を勞豆といふ。

沈氏效方——性は微寒なり。肝を平にし、痞疾、目疾を治す。

○百草鏡——黄、白疽を治す。性能く汗を發する。

○救生苦海——痘毒を治す。八九月の時に田塍(でんしやう)の邊で採つて莖、根を連ねて用ゐ、煆(や)いて性を存して研り、單にその豆を用ゐるが更に妙である。麻油で和して敷けば、初起と日久しきとを問はず、未だ潰(つぶ)れぬにも已に潰れたるにも倶に效がある。

按ずるに、通雅に、焦弱侯がいつた野田の小豆を藔といふ。音は勞(ラウ)であるといふを引いてある。陳留耆舊傳に、赤眉は藔豆を以て桓牧に與へたとあり、隋末に子通が江都を攻めたとき、夏侯端が藔豆を採つて食つたといふ。身之は、野豆で

あつて、魯刀の切（ラウ）勞豆、或は蹽、豋二字の訛であるといつた。然し古今註を參考して見るに、豋豆、一名治豆、葉は葛に似て、實は長さ一尺餘、蒸して食へる。一名豋菽（らうしゆく）とある。綱目には、鹿藿、一名豋豆。又、鹿豆と名ける。卽ち今の野菉豆だとある。爾雅の釋草には、蔨（けん）は鹿藿なりとあつて、註に、今の鹿豆なりとある。唐書の夏侯端傳には、豋豆を摭（と）つて以て食ふとある。して見るとまた野毛豆の屬ではないやうである。今の野毛豆はやはり勞豆と名けるが、これは同名異物ではあるまいか。竝に書して考證に俟つ。

【肝疳の初起】百草鏡——野毛豆の鮮（なま）のもの七錢、乾いたもの五錢、雞（一）疳一具を共に煮て食ふ。煎じて服するもよし。

野蘿蔔

地骷髏　三生蘿蔔

一名紫金皮、又、巴壁虎（はへきこ）と名ける。

○百草鏡に云く、野萊菔（やらいふく）は、苗、葉、根の形は家種のものと異（かはり）はなく、肉が白い

（一）原文、疳ハ肝ノ訛ナラン。

けれども皮の色に黄を帶びてゐるだけの相異である。

○王氏博濟方に、乾萊菔を以て仙人骨とし、俗に又、地骷髏と呼ぶとある。

雁山志――山蘿菔は性は寒である。形狀は畑に種ゑたもののやうだ。土人は癧疝を治するに用ゐ、擣汁を服す。渣を塗るもよし。――庚戌の歳、予が臨安の署内へ來て見ると、廢圃があつて商陸が多くあつた。土人はそれを山蘿蔔と呼んでゐたが、此にいふ物とは同名異物である――

【肺癰を治す】百草鏡――七箇の擣汁を服す。

地骷髏 按ずるに、地骷髏とは萊菔を刈る時に偶ゝ遺れて置いて、まだ根が盡きぬもので、根が地に入つて瘦せて肉がなく、老いて筋が多く、骷髏のやうな狀態だからかく名けたものだ。能く大いに肺氣を通じ、煤炭で熏じられた毒を解す。乾萊菔ではない。王偶中の言つたことはまだ明晰でない。

【痞塊】醫宗彙編――陳年の木瓜(一箇)地骷髏(即ち蘿蔔種の枯根。四箇)の煎汁を時に一小盞づつ常服する。數日にして根を除き。氣痞、食痞いづれも治す。

【萬應丹】海昌方――黄疸が變じて臌脹となり、氣喘するもの、翻胃、胸膈飽悶、中脘疼痛、竝に小兒の疳疾結熱、噤口痢疾、結胸傷寒、傷力黄腫、竝に脫力黄の各

症を治す。人中白を用ゐ　路天で糞に觸れぬものが佳し、火で煆き醋に淬すこと七回して一兩、神麯、白蔔子、地骷髏、卽ち土中の蘿蔔各五錢、砂仁二錢、以上を倶に炒り、陳香圓一個と共に末にし、蜜で桐子大の丸にし、毎服三五七丸を、或は燈草湯で服し、或は酒で服す。

三生蘿蔔　これは人工で製造したものである。唐正聲傳に、この法を祕傳として得たものだとある。水蘿蔔一箇を取り、周圍に七孔を鑽けて巴豆七粒を入れ、それを土に入れて種ゑ、その子を結ぶを待つて子を取つてまた種ゑ、蘿蔔になるのを待ち、七孔を鑽け巴豆七粒を入れて再び種ゑ、かく三回、乃至四回繰返し、將に花を開かんとするとき根を連ねて抜き取り、陰乾して罐内に敗貯する。鼓脹のもののあつたとき、一箇を取つて搥き碎き、湯に煎じて服す。極めて重きものも二箇にして立ろに癒える。

南瓜蒂

穰を附す。

綱目では、南瓜の主治にただ中を補し、氣を益することを言つたに止るが、その子に至つては、食へば髪が脱ちる。今一般に蔬として多食し、反つて壅氣滯膈する。昔は一般にみな知られなかつたことだ。吳秀峯は、凡そ瓜は熟すればいづれも蔕が落ちるが、ただ南瓜だけはその蔕が堅牢で脱れない。昔の人は曾て用ゐて保胎藥中に入れて大いに妙であつたといふが、蓋し東方甲乙の木は肝に屬して氣を生ずる。その味は酸である。胎は必ず肝血を藉りて滋養するもので、胎が墮ちんとするは腹の酸、肝の氣が離れるのだ。南瓜は色が黃で味が甘く、中央脾土の精であつて、能く肝氣を生じ、肝血を益する。故に保胎に有效なのだといつた。

【神妙湯】胎を保す。黃牛鼻一條を灰に煨いて性を存し、南瓜蔕一兩と湯に煎じて服す。永く墮ちない。

【疔瘡】行篋檢祕――老南瓜蔕數箇を焙じ研つて末にし、麻油で調へて塗る。立ろに效がある。

南瓜穰　湯火傷を治す。慈航活人書――伏月に老南瓜穰を子を連ねて採つて瓶中に裝入して置く。久しきものほど佳し。凡そ湯火傷のあつた場合には、これを敷け

ば直ちに疼が定ること神の如くである。

辣茄

人家の園圃に多く種ゑてあつて、深秋に山間の住民が擔つて市中へ賣りに來る。これは辣醬を熬り、及び凍瘡を洗ふに用ゐ、用途の甚だ廣いものだが、綱目にはその功用の記載がない。陳炅堯食物宜忌に云く、食茱萸、卽ち辣茄、陳きものが良し。その種類は大小、方圓、黃紅、一樣でないが、ただ尖長で象牙辣茄と名ける一種を藥に入れて用ゐる。

○又、一種の木本のものを番薑と名ける。范咸臺灣府志――番薑は木本で、種は荷蘭から來たものだ。白瓣の花を開き、實は綠で尖長だが、熟すると朱紅目を奪ふやうになる。中に子があつて辛辣である。番人は殼のまま啖ふ。內地では番椒と名ける。更に一種あつて、それは結實は圓くして微し尖り、柰に似てゐる。種は咬𠺕吧から出たもので內地には無いものだ。

○藥檢に云く、辣茄、一名臘茄。臘月に熟するから名けたのである。やはり食料

に入れる。苗、葉は茄葉に似て小さく、莖は高さ一尺ばかり、夏になると白花で五出の花を開き、倒に垂れて茄花のやうだ。結實は色青く、その實は柿のやうな形のもの、秤錘のやうな形のものがあり、小さくして豆ほどのものがあり、大きくして橘ほどのものがあり、頂に仰いで生ずるものがあり、倒に葉下に垂れるものがあり、種種一定せぬが、藥に入れるにはただ細長くして象牙のやうなもの、又、人の指のやうなものを取る。食料に作るにいづれも用ゐられる。

食物宜忌に云く、性辛く苦し、大熱なり。中を溫め、氣を下し、寒を散じ、溼を除き、鬱を開き、痰を去り、食を消し、蟲を殺し、毒を解し、嘔逆を治し、噎膈を療じ、瀉痢を止め、脚氣を祛る。これを食へば風を走し、火を動じ、目を病み、瘡痔を發する。凡そ虛で火あるものは服することを忌む。

○藥檢に云く、味辛し、性は大熱なり。口に入れば直ちに舌に辣し。能く風を祛り、血を行し、寒を散じ、鬱を解し、滯を導き、搜瀉を止める。癬に擦る。

百草鏡――壁蝨を薰じ、凍瘃を洗ひ、冷瘀を溶する。大腸の經の寒澼を瀉す。

【外痔】百草鏡――象牙辣茄の紅熟せるものを細に剉み、甜醬を拌ぜて食ふ。

【毒蛇傷】百草鏡――辣茄を生で十一二箇を嚼む。それで腫を消し、痛を定め、傷處に小泡を起し黄水を出して癒える。これを食へば味が反つて甘くして辣くない。或は嚼み爛らして傷口に敷く。やはり腫を消し痛を定める。

【臭蟲を祛る方】經驗廣集――羊骨頭一個、秦椒半觔を共に火盆に入れて鋸木屑と共に燒き、門窻を緊く閉ぢて烟の出ぬやうにする。その蟲は自ら死ぬ。敍按ずるに、木屑は樟木のものを用ゐるが佳し。

【凍瘃】蔡雲白方――辣茄の皮を剝いて貼れば癒える。

【痢積水瀉】醫宗彙編――辣茄一個を衣にして淸晨に熱豆腐を皮で裹んで呑下せば癒える。

敍按ずるに、花鏡に、番椒、一名海瘋藤。俗に辣茄と呼ぶ、本の高さは一二尺、叢生し、花は白く、秋になつて子を結び、さながら禿筆頭のやうで倒に垂れ、初は綠で後に朱紅になり、懸掛してゐるさまが美しい。その味は最も辣いもので、一般に多く採つて極細に硏り、冬期に胡椒の代用にする。蓋しその性は熱にして散じ、能く心、脾の二經に入り、また能く水瀉を祛るとある。癸亥の歲、予が臨安にゐた

とき、ある小僕が暑中に冷水を飲んで陰地に臥してゐたために、秋になつて瘧が發り、あらゆる薬も效がなかつたが、やがて初冬になつて偶〻辣醬を食ふと、頗る口に適つたので毎食事にこれを食ひ、又、これで粥を煎して食つてゐたが、幾ばくもなくして瘧は自ら癒えた。如何にも胸膈の積水變じて冷痰となり、辛を得て以て散ずるとはこのことで、それで湯を雪に沃ぐが如くであつたのだ。又、秦椒と名け、李成裕の遂載に、秦椒、一名番椒。形は馬乳の如く、色は珊瑚に似たりとあるが、これは本草の秦地の花椒をいふのではなく、中國の辣茄のことだ。

龍柏藥性考――秦(一)地、乃ち草本の辣茄である。綱目諸註に誤つて秦地の花椒としたが、實は卽今の辣茄であつて、又、辣虎と名ける。性は熱、味は辣であつて、中を溫め、寒を散じ、風を除き、汗を發し、冷癖を去り、痰を行り、辣を逐ふ。多食すれば眩旋するは火を動ずるからである。久しく食すれば痔を發し、人をして齒痛、咽腫せしめる。

(一)原文、地字恐ラク椒字ノ訛ナラン。

刀豆根

殼を附す。

綱目には、穀部刀豆の條の發明下の註に、刀豆は本草には記載が缺けてゐて、ただ近頃の零碎な文書に、その煖にして元陽を補することが記載されてあるだけだが、近頃ある人がその子を燒いて性を存し、白湯で調へて服し、呃逆を止めるに有效だつたとあり、それ故に瀕湖は特に增入したのであつた。しかし實はその用途の甚だ廣いものだ。今悉く補記して置く。

【頭風を治す】集聽に云く、刀豆根なるものは頭風を治するの神藥である。五錢づつを酒で煎じて服す。

【鼻淵を治す】年希堯集驗方——老刀豆を文火で焙乾して末にし、酒で三錢を服す。重きも三服に過ぎずして癒える。

殼【腰痛を治す】萬氏家抄——刀豆殼を灰に化して好酒で調へて服し、外用には皂角を燒いて烟で薰ずる。

【牙根臭爛】洪氏一盤珠——刀豆殼を灰に燒き、氷片を加へて擦る。涎が出て平安になる。

【久痢を治す】種福堂方——刀豆莢を飯上で蒸熟し、洋糖を蘸けて食ふ。一二日で癒える。

【婦人の經閉で腹脇脹痛して死せんとするもの】幷に血痞を消す。經驗廣集——陳年の刀豆殼を焙乾して末にし、好酒で一錢を服す。麝香五釐を加へるがやはり妙である。

【喉癬】張氏必效方——刀豆殼を灰に燒き、一二三釐を吹けば立ろに效がある。

【楊梅瘡】萬氏濟生方——當歸、川芎、苡仁、木通、木瓜、生地、熟地、金銀花、防已、防風、荊芥、黃柏、白芷、知母、甘草、皂莢、猪苓を皮を去り各二兩、人參二錢、山紅花、刀豆殼各五錢、硬飯團二兩を水で一鍋の濃汁に煎じ、時に拘らず茶に當てて服す。魚、腥、生、冷の物を忌む。四劑で全癒する。

地膽

粤志——羅浮に地腎が多い。一名、松黄。但し松黄のまだ落ちぬものは松實であり、已に落ちて英華が未だ散ぜぬものが地腎である。その形狀は彈丸のやうで、大なるは雞卵ほどあり、紅黄相錯つて一一晶瑩である。熟して料理に入れられる。この物の生えるには根蔕がなく、松下に散布し、土が鬆で石の潤ふた處にある。或は、やはり松蕈の類だといふ。乍浦九山補志に、松花蕈は山の松のあるところにはみな產するが、ただ陳山の東麓だけに多い。三月の間に松花が土に入り、四五月に至つて雨を經て後に生じ、八九月に至つてまた生ずる。鮮肥、滑嫩で、精進料理の上味であるとある。

味甘し、性は平である。津を生じ、痰を消し、溲濁不禁を治す。

葛乳

一名を葛花菜といふ。名山にいづれもあり、また高州にも產する。粤志に高州では多く葛を種ゑ、雷州人がそれを買つて(一)絺綌にする。秋霜の時に葛乳といふものがあつて地上に涌生し、芝のやう、菌のやうで色が赤く、味は甘く、脆くして微し

(一)絺ハ麻ノ細布、綌ハ粗布ナリ。

苦い。これは葛の精華である。また葛蕈ともいふとある。瀕湖は僅に太和山志に據つて、その酒を醒すと酒積で成つた病に關することを記載したが、その他はみな言及してない。故に特に補記して置く。

性は涼である。肌熱を解し、風火、及び陽明の風熱、癍疹を散ずる。

鮮草果

粤志——一般にこれを多く種ゑて香料とする。卽ち杜若であつて、藥中の草果ではない。その苗は縮砂に似たもので、三月に花を開いて穗に成り、色は白くして微し紅い、六月に子を結ぶ。その根は藥に勝る。

味辛くして溫なり。能く瘴氣を除く。久しく服すれば精を益し、目を明にし、人をして忘れざらしめる。

眞珠菜

六安にある眞珠菜は眞珠のやうだ。

○益部方物畧記——眞珠菜は戎、瀘等の州にある。水中の石上に生じ、翠縷、纖蔓で首に珠を貫いてゐる。蜀地では一般に蜜で熬つて食ふ。或は醯で煮れば千里の遠方へ送つても敗壞しない。

○黃山志——眞珠菜は藤本で蔓生し、暮春に發芽し、毎芽の端に綴る一二の蕋は圓く白くして珠のやうだ。葉は翠綠で茶のやうである。蕋葉を連ねて腊にすると、香しく甘く鮮滑で、他の蔬菜はその美に敵はない。

水を利し、淋結を通じ、腹脹を消し、氣を下し、癃閉を治す。

鷓鴣菜

連江志——海石上に生ずる。色は微黑である。

○漳州府志——鷓鴣菜は散碎な花で微黑である。漳浦に出る。

小兒の腹中蟲積を療ず。これを食へば直ちに下ること神の如くである。

葛仙米

湖廣の溪に沿ふた山穴の石上に生ずる。大雨に遇つて穴口が衝開されると、この米が流に隨つて出て來る。それを土人が撈取するのであつて、取つた當初には小さい鮮の木耳のやうで紫綠色だ。醋を拌ぜると、肥脆になつて食へる。その地ではそれを天仙菜と名け、乾したものを天仙米と名け、また葛仙米と名ける。水で浸して肉と共に煮ると木耳の味がする。大體山洞内の石髓が石に滴つて成るもので、性は寒である。多食するは宜しくない。四川にもあり、必ず水に激搖されたときにあるもので、毎年常に有るものではない。他の地でも深山の背陰の場所には大雨の後に石上にやはり間〻生える。然し形質が甚だ薄く、日を見ると化け、或は乾すと紙のやうになつて食はれない。

○梧州府志——葛仙米は北流縣の勾漏洞に出る。石上が水に漬けられて出來るもので、石耳の類である。採つて曝乾したものを水に漬けると米のやうな狀態になる。酒にこれを泛ると清爽人を襲ふものだ。これは元來穀類でなくて名を米と呼ばれるが、傳說に、晉の葛洪が此處に隱れたとき、食料に乏しくてこれを採つて食物としたからかく名けたのだといふ。

○嶺南雜記――韶州仁化縣の丹霞山には仙米を產し、一面に生じてゐる。粒は粟のやうで色は綠だ。煮熟すると大いさが米ほどになり、その味は淸腴である。概して南方の深山中にはいづれもある。

○宦遊筆記――粵東に產する。葛仙洞の外には流泉があつて石上に噴薄し、それが苔菌の類を生ずるのであつて、その狀態は米のやうで色が靑い。羹にして啜めると味が極めて鮮美である。土人はそれを葛仙米と呼ぶ。まだそれを識らないものが見ると靑螺かと疑ふほどだ。按ずるに韶州府志に、丹霞山に出るとある仙米は頗るこれと相類してゐるが、但だ一は沙土に生じ、一は水石に生ずるだけの異がある、

○陸祚蕃粵西偶記――道書にいふ寶圭洞天は卽ち今の北流縣の勾漏山のことで、洞口の前後に葛仙米を產する。採つて乾すと粒が圓く、黍のやうである。麵を揉み合せて酒に釀すと極めて芳香である。

性は寒にして味甘く爽である。熱を解し、膈を淸し、腸、胃を利す。

按ずるに、葛仙米はもと石耳の類に屬するものだ。庚子の歲に曾て劉明府の饗應を受けたときこれを食つたことを憶ひ出したが、そのとき羹にしてあつたのはさな

から青螺のやうな狀態で、翠碧愛すべく、味は極めて甘鮮であり、滑脆で口當りが好かつた。蔬に入れて宜いものである。

藥性考に云く、神を淸し、熱を解し、痰火を能く療ずる。或は、久しく服すれば天年を延べるといふが、蓋しこれも能く臟熱を淸するからだ。

黃矮菜

一名黃芽菜。咸淳臨安志には、冬期に巨菜を取つて草で覆ひ、久しく經つてその腐葉を去つて見ると黃白鮮瑩になつてゐる。故に黃芽と名けたのだとあり、萬歷杭州府志には、杭地方では訛つて黃雅菜といふとあり、戒庵慢筆には、黃矮菜を杭州では花交菜と呼ぶとある。

〇羣芳譜——燕京の栽培者は、馬糞を窖に入れて菘菜を壅培し、風、日を見せぬやうにして置く。かくて長生する苗、葉はみな嫩黃色で、脆美で滓がない。これを黃芽菜といふ。乃ち白菜の別種で莖、葉がみな匾い。甘し、溫にして毒なし。腸、胃を利し、胸煩を除き、酒渇を解し、大小便を利し、

中を和し、嗽を止める。冬の汁が尤も佳し。
○食物宜忌――味甘し、性は溫、滑にして竅を利す。
○陳堯士云く、虛羸を補す。
按ずるに、黃矮菜には南、北の二種あるので、南產のものは、ただ杭城太平門外の沙地の產を最とする。他の場所では悉く高大粗鬆になつて、絕えて捲心密葉がなく、味もやや劣る。此產は糓物船で持つて來るものが味が更に美であり、質が更に細く、且つ粗筋がない。一顆の重量十餘觔に至るものがあるが、南方の地では到底得られない。陳確齋は、これを食へば肌膚を潤ほし、五臟を利し、且つ能く氣を降し、音聲を淸くする。ただ性は滑洩で、痢を患ふ人は服されないといつた。

白茄

葉　蒂

汪連仕方――一名玉盤茄。大、小の二種あつて、大なるものは雞卵ほど、小なるものは指頭ほどで、初生には色が白く、老いると皮が黃になる。能く骨に入つて風

を追ひ、一切の癱瘓を治す。根は白風藤と名け、酒を合せて蒸して服す。茄實に硫黄を蘸けて白點風に擦る。大麻風を除くものだ。東粤の茄子畑に産するものが良く、茄丸と名ける。

葉　腸紅、大便下血を治す。劉羽儀驗方——白茄子葉を霜を經てから採り、毛を刷き淨め、焦黄葉を去つて陰乾し、三四葉を取つて濃湯に煎じ、かくして三四回吃へばその血が止まつて永く再發しない。この方は嘗て邪犬に咬まれたことのある人は服してはならぬ。

蔕　發背、及び一切の毒癰の初起を治す。味水軒雜記——白茄蔕七箇、生首烏等分を用ゐ、酒で煎じて服すれば消する。

天茄

廣中に産する。大拇指ほどで、その形は茄のやうで稜があり、黑色で石のやうに堅く、擊つても碎けない。その蔕は黄黑で醬の色のやうだ。一種は牽牛花の嫩子で、蘇州地方で採つて蜜餞にし、食品に入れてゐるものであつて、やはり天茄と名け、

大いに能く氣を破るものだが、これとは逈に別物である。

【胃脘痛】救生苦海――水に磨つて服す。一服一箇で效が現れる。

【蠍毒】五雜俎――閩中に天茄といふがあつて、蠍毒を治し得る。

牛心茄子

瓊州に產する。一核のものは口に入れると立ろに死ぬ。兩核のものは糞淸を用ゐれば解し得る。外科の膏藥に入れ、麻藥を用ゐる場合にこの藥を用ゐて、ただ外敷するだけで、內服はされない。

緬茄

高濂珍異藥品に云く、緬茄は一に沔茄と書く。形は大栗のやうで上に囊皮のやうな罩幅がある。滇南、緬甸地方に產し、石のやうに堅いものだ。

○滇帬――緬茄は、枝、葉はみな家茄に類し、結實は荔枝核に似て蒂がある。土人はその表面に彫刻して繫ける。それで眼を拭へば翳を去り、また瘡毒を解

す。

○滇南雜記——緬茄は緬甸に產する。大きくして色が紫だ。蒂が圓く整つて蠟色のものが佳し。

○粤志——廣東高州府に出る木茄は、上に四角な蒂がある。眼を拭へば昏瘴を去る。卽ち緬茄である。

水に磨つて塗れば牙疼を治す。眼眶に抹すれば火毒を去る。又、能くあらゆる藥の毒を解す。

【疔瘡走黃を治す】良朋彙集——この方は寶坻張相公から出たもので、百發百中、眞に神效の方である。凡そ疔瘡走黃で毒攻が內に入り、人事不省となり、ただ呼吸だけあるものならば救ひ得る。緬茄一箇を用ゐ磁碗に黃酒を盛り、その碗內に茄を置いて磨り下す。磨り下せぬときは兎も角酒一鍾の中で凡そ茶が熟するほどの間磨り、その酒を長頸の錫壺に入れ、再び鬚付きの葱二本を牙で咬み斷れぬやうに咬み、白豇豆七粒と共にその壺中に入れ、蕎麥の花の開いてゐる時期には蕎麥七粒を加へ、それ以外の時は用ゐない。又、小麥を大勢の人の口で嚼ませて麪筋にして壺

の口を封固し、それを水鍋の中へ置いて一炷香(しゆかう)の間煮て取出し、熱服する。汗を出して癒える。

醬茄

糟茄

これは人家の醬中の食茄で、藥に入れるには陳年のものを用ゐるが佳し。

【耳が癢くして膿の出るを治す】妙藥方――醬茄を擠(お)して汁を滴(たら)す。

【牙疼を治す】周氏家寶方――醬茄を灰に燒いて性を存して末にし、患處を揩ふ。

【腹内の鼈瘕(べつか)】壽域方――陳年の醬茄を燒いて性を存し、麝香、輕粉少量を入れ、脂で調へて貼る。

糟茄　山海草函――灰に燒き性を存して鵞口瘡を治す。

玉瓜

卽ち廣昌土瓜であつて、江西に産する。常中丞宦遊筆記――廣昌土瓜は、本草に

は記載がない。形は甚だ拙圓なもので、瓠の如く、或は磊砢の如く、贅疣の如く、瓣もなく、瓤もなく、沙土中に生長し、外が汙く内が潔く、肌が細く理が密で、剖いて見ると氷玉のやうに白い。口に入れると淸く甘くして滓がなく、煩を消し、滯を釋く。或は熟して食ふも佳し。殆ど瓜中の異品である。その性は蔓生するもので、春種ゑて秋成り、冬初に始めて市中に入る。種がないので、春深くして後に瓜を皮のまま切つて小塊にし沙土で覆ふて久しく室内に置けば芽が生える。そこで沙地に深く寬く窖を作り、それに茅を藉き、その中を通じて根が四邊に擴がるやうにする。かくするとやがて生長し、蜜葉が蔓生して纍纍となつたとき、竹を挿して引いて上行させ、それを雞糞で培つて置けば繁榮するのである。土人はまた玉瓜と名ける。抱朴子に、五原の蔡誕は山に入り、還つて家人に語つていふには、予は崑崙へ往つて玉瓜といふものを得た。玉瓜を井水で洗ふと軟で食へるといつたとあるが、これはその遺種ではあるまいか。江西の他縣にもやはり產するものはあるが、然し小さくして渣が多い。ただ廣昌の附郭五里以内が佳いのである。予は元宵の後に食つたが、それの美味だつたのが忘れられず、郡へ往つて覓めたところ、東風が暖を

迨つて、瓜はそれまで持てなかつた。

味甘し、性は平である。中を調へ、氣を益し、鬱を舒べ、滯を化し、食を消し、大、小腸の火を淸し、津を生じ、血を滋くし、營衞を和す。熟して食へば脾を補し、胃を健にする。

節瓜

粤草志——節瓜なるものは冬瓜中の一種の小なるもので、皮は白い。地に蔓生して一節に一瓜を生じ、水氣を最も多く得てゐるものだ。故に著毒を解す。渴を止め、津を生じ、暑を驅り、脾を健にし、大、小腸を利す。

穿腸瓜

吉雲旅鈔——穿腸瓜なるものは、大便から解出した甜瓜の子から苗が生えて結んだ實のことであつて、土人は糞甜瓜と名ける。大、小に拘らずいづれも薬に入れられる。採つて來て曬乾し、新瓦で焙じ焦して末にし、乳鉢で極細に硏り、地上に攤し

て火毒を出して貯藏して聽用する。但しこの瓜は容易に無いから人力で製造せねばならぬものだ。その法は、將に爛熟せんとする甜瓜を七八歳の小兒に與へ、空心に子のあるまゝその子を嚼み碎かぬやうに食はせ、翌日解出した大便の子を糞に裹んで糞を帶びたまゝ曬乾する。時が早ければその年の內にその種を下せば出るが、もし時が晩くして瓜を生ずるに及ばなければ、花もやはり用ゐられるが、さなくば翌年まで貯藏して置いて種を下すが更に好し。大人の便出した子もやはり種ゑられる。この瓜は夏秋に生えて在るものだから、もし春、冬に用ゐんとするには必ず預め備へて置かねばならぬ。

【痔漏を治す】吉雲旅鈔にある祕授消痔神方――發病後年久しきものと日淺きものとを論ぜず、痔漏は三服で根を除く。穿腸瓜を焙じて性を存して末にし、その末一兩毎に蟬退末三錢五分を加へ、金錢花五錢を酒に一二日浸して煎じて數滾したもので藥末を調へ、毎服二錢七分を空心に金銀花酒で服し、外用として白海南の花、竝に根、葉の煎湯で不時に先づ熏じて後に洗ふ。三日にして愈える。海南花は春、冬は鮮のものがないから、預め採收し陰乾して準備する。蓋し痔漏なるものは、大腸

の鬱火、臟腑の積熱が發して腫となり、痛となり、瘡となり、久しくして管となるのである。今この藥を用ゐれば、それで火を散じ、毒を消し、積を去り、壅を除くので、その管が自ら退くのであつて、新、久を問はず、屢〻試みて屢〻效驗を擧げた。房事、惱怒、煎じ、炒つたもの、辛辣のもの、熱のもの、並に氣を發する類のものを百日間忌む。永く再發しない。この方は西洋の僧から傳はつたもので、ある西洋人が痔漏で痛み甚しく、海船に乘込むことが不能であつたとき、その僧がこの藥を出し與へて服ませると、三日にして癒えた。その方を求めるについて、洋布十疋、黃金五兩を送つて始めてこの方を得たのであつた。用ゐて奏效せぬといふものがない。

天骷髏

これは田舍村の桑樹、及び屋籬の上に掛つてゐる霜に打たれた絲瓜であつて、その子を烏牛子と名ける。

婦人の白帶、血淋、臌脹、積聚、一切の筋骨疼痛を治す。いづれもこれを服する

が宜し（汪連仕方）

鬼骷髏

汪連仕云く、これは殘老した向日葵のことで、その子は性烈しく、氣を通じ、膿を透す。麝香、急性子と合せて搗爛らし、膏にして臍に貼れば能く胎を落す。敏按ずるに、冬期に桃畑の中にある樹上に乾枯して殘つた桃もまた鬼骷髏と名けるが、これとは同名異物である。

白鼓釘

宦遊筆記――口外の白鼓釘といふは、卽ち內地の蒲公英だが、葉に鋸齒があつて婆娑として地に鋪き、內地に生ずるものと迥に殊ふ。內地のものは花が早くして單蕚を開き、沙漠に生ずるものは花が夏至前に開き、さながら菊花に似て、一望燦然として地に滿ち、その蕚、蕚は重疊して顏色嬌娟なものだ。暮春にこの草が甫めて萌芽し、口外ではこれを啖つて味用の竭きざること春韭、秋菘も啻ならぬのである。

これを採つて食へば火を淸す、やはり通淋の妙品である。その莖は中を折斷すると白汁があつて、諸蟲は盛夏の繁殖期に人が手を觸れると疾になり、あらゆる藥も奏效し難いものだが、この汁を取つて厚く塗ると癒える。鄭方升は、一莖に兩花あり、高さ一尺餘のものは、數尺掘下げると拳ほどの太さの根があり、旁に人が抱きかかへたやうな形のものがある。搗汁を酒で服すれば噎膈を治するに神の如きものだといつた。按ずるに、前記の事實はいづれも綱目にまだ言及してなかつたものであり、且つ口外に產するものはまた內地のものと異ふ。綱目では、蒲公英を柔滑類に入れて草部に歸したが、現に沙漠に產するものは、その地方で菜茹としてゐるのだから菜部に入れた。やはり各〻その類に從つたのである。

火毒、鬱熱を淸し、乳を通じ、淋を通じ、腫を消し、膈噎を治し、一切の毒蟲、蛇傷を療ず。

三寶薑

香祖筆記——臺灣の鳳山縣に產する。傳說には、明の初に三寶太監が植ゑたもの

で、あらゆる病に效があるといふ。

彎　薑

滇程記——雲南の百夷中に產する。一刀圭を餌ひばその一生涯を通じて性慾が斷絕する。土人は牡馬をこれで飼つて去勢しない。

川　薑

四川に產する。屈曲して枯枝の如く、味は最も辛辣で、甚だ薑の形に類しない。やはり食料に入れて用ゐられる。

〇包汝楫南中紀聞に、扶叢郷の猺人が木薑と土茶を持つて來てくれたので、余はその木薑を貰つた。囊にして見ると味は茱萸醬のやうだつたとあるは卽ちこの物である。

味辛し、性は熱である。胃寒を治し、冷積寒澼、痰氣を散ず。

沙葱

西北遊記――口外の沙石中に生ずる野葱であつて、一名楞葱、一名沙葱といふ。石楞中に產したものを楞と名け、沙磧中に產したものを沙と名けるので、その葉は家葱と同じだが更に一段と大きく、味は家葱よりも辣い。根は甚だ蒜頭に似て大いさは更にそれに過ぎ、味はやはり蒜よりも辣く、辣辛なるものを善く食ふものでも一箇を全部は食ひ罄せぬ。細くして草のやうではあるが、莛が沙磧に攢生して甚だ密である。これを醃けて羹に調へれば韭に勝り、雉羹、兎羹に就中宜し。又、沙葱草といふがあつて、沙葱と似たものだが、人がこれを食へば心が迷悶し、馬が食へば腹が隱痛する。ただ駱駝だけに宜し。採るには折つて見判けるので、沙葱は本が脆かで易れば斷れ易いが、この草は柔韌で折れ難いものだ。藥に入れるには根を取る。

○西域聞見錄――丕雅斯は野蒜に類し、頭の大いさは雞子ほどあり、葉は葱のやうだが中が空でない。味は辛し、甘肅地方では沙葱と呼び、回人がこれを嗜む。

中を寛にし、氣を下し、食を消し、肌を解し、血を活し、汗、表の風寒を發し、宿滯を滌ふ。

風葱

臺志――臺灣に産する。風疾を療ずる。

番蒜

徐昆柳崖外編――番蒜は臺灣の番地に産する。外形は木瓜に似て中は柿に似てゐる。浮山の張氏といふがあつて、閩に在官中、一人の婢が鼈肉を食つて後に誤つて莧を食ひ、それがために病となつて面黄し、腹脹して磽稜として死せんとすること數ゝであつたが、半年後に番蒜を贈つてくれたものがあつて、婢が偶ゝそれを食ふと大いに瀉し、その中に小さい鼈のやうなものが數十出て、少頃して爽然として疾が失つたやうになつたといふ。それで番蒜が鼈、莧の毒を治し得るものだといふことが判る。

鼈瘕を治し、食毒、水毒を解す。

蒜梗

これは大蒜の瓣に近い部分の中心の短梗であつて、乾したものを藥に入れて用ゐる。

【瘡の管となりたるを治す】年希堯集驗方——大蒜梗を灰に燒いて性を存し、患處に搽る。その管は自ら消する。

【坐板瘡】黃氏醫方——蒜梗を灰に燒いて末にし、先づ洗淨して靨を去つてから藥末を搽る。

【漏を洗ふに立ろに效驗がある】良明彙集に云く、夏應遴が效果を試みた。防風、荊芥、地骨皮、川椒、蘄艾、瓦松各五錢、槐條一兩、陳蒜梗二兩を共に麻布の袋に入れ、熬滾して熱盪する。疼を止めて神效がある。

【痔瘡を熏する】救生苦海——蒜梗を陰乾し、火盆に微火を置いて梗を投入し、火盆を木桶中に移し、患者をそれに坐らせて熏じ、四圍を衣被で緊く塞いで烟の走洩

せぬやうにする。三回で自ら癒える。

【凍瘡】種福堂方――大蒜の煎湯で洗ふ。

刺兒菜

西北遊記――即ち内地の紫花地丁であつて、その地の俗間では刺兒菜と呼び、葉は柳のやうで刺毛がある。夏紫花を開き、平地に生えては莖が起ち、溝壑に生えては蔓が起つものは内地の處處にあるが、口外の沙漠に生ずるものは、花が夏至後に開き、大いさは蒜頭ほど、色は紫で美しい。その地方では多くそれを採つて食ふので、暮春に萌芽した際に挖る。その根の形狀は大枝人參のやうで、それに比較しては微し白く、巨なるものは蘆菔ほどあり、烹て調理すると口に適する。誠に塞外での鮮品である。さやうな次第で、乾したその根をば回回の地へ持つて往つて藥に入れるのだが、その火を淸するの功は金銀花に勝り、解毒の功用は更に山茨菇よりも捷だ。かやうに一物にして二物の用を兼ねるものである。

火を淸し、風を疎し、痰を豁し、一切の疔瘡、癰疽、腫毒を解するに神の如し。

波斯菜

卽ち今の紅菜であつて、一名を洋菜といふ。汪連仕曰く、海陽に生長したものが佳し。根の本は紅豔で色が鮮麗である。血を止める。刑杖の瘀血が攻心するを治するには、搗汁を酒に沖して服すれば直ちに散ずる。跌打を理し得る。

乾冬菜

陳冬菜滷　陳芥菜滷　甕金子

冬菜とは白菜のことである。杭地方の俗慣として、一般家庭で、小雪の前後に一様に白菜を買ひ込み鹽で腌けて虀にし、それを貯藏して禦冬といふ。春期になつてそれを食ひ、名けて冬菜といふ。頗る膈を利し、氣を下すものだ。その滷汁で豆、及び豆腐を煮て食へば、能く火を淸し、肺を益す。誠に食物中での佳品である。春分後になり、氣候が次第に暖になると、菜はやはり次第に變じて黑色となり、味が

苦くして食へなくなるが、その時は曬して乾物にし、飯鍋上で黒く蒸し、再び曬して再び蒸し、かく數回繰返してから曬して極めて燥し、缶器中に貯へれば敗壞せずに久しく貯藏し得るもので、名けて黴乾菜といふ。これが乾冬菜である。年久しきものは出して見ると頗る香烈であつて、胃を開く。噤口痢、及び産蓐には、これを粥に投ずれば大いて補益がある。蓋し白菜の本來は能く中を和し、氣を下し、三焦を利し、二便を通ずるもので、土徳の精を含み、金を生ずる作用を有つてゐる。これを乾せば苦いのは、その初に返り母化に從ふのであつて、久蒸久曬すれば味が反て甘くなり、その德を全ふする。故に中和の運功あることは參、耆と等しいのであるが、惜いかな、世間では多く忽にしてそれを知らない。余はそれ故に特にこれを表したのである。瀕湖の綱目が菘の條下に乾菜の功用がないのは甚だ缺略である。近頃、筧橋人が賣つてゐるものは蘿蔔英を乾したもので、芥菜を乾して蒸曬して作つたものと共にみな藥に入れない。必ず人家で冬白菜を醃けたものを蒸曬した年久しきものを佳しとする。

○羣芳譜にある黑醃虀を造る法――白菜を法の如くに醃け透して取出し、桁上に

挂けて曬して極めて乾かしめ、甑に上せて蒸熱し、再び曬乾して取收める。極めて久しき貯藏に耐へる。夏期にこの虀を肉に和して炒れば、久しく置いても臭くならない。卽ち今の乾冬菜である。

胃を開き、氣を下し、血を益し、津を生じ、虛勞を補し、痰嗽を已す。年久しきものを湯に泡けて飮めば聲音の出ぬを治す。酒に和して搗爛らして湯火傷に塗る。

【白火丹】黃氏傳方——この症は、形は水腫のやうで肢體が倶に腫れ、皮膚の色が白く、飽脹して物が食へず、燈火を見るを畏れる。冬菜を用ゐ、水に落さずして陰乾した三年陳きものを用ゐるがよく、陳いほど妙である。湯に煎じて洗浴し、幷に煎じて服す。立ろに消して神の如くである。

陳冬菜滷汁　肺火痰嗽を淸し、咽喉腫痛を解す。

物理小識——鹽乾菜水を蜈蚣に滴せば死ぬ。鹽菜で炒つた雞は蜈蚣がやはり食はない。

陳芥菜滷汁　味鹹し、性は涼である。肺癰喘脹を治するには、陳久にして色の泉水の如きものを用ゐ、緩かに呷ふ。痰を下し、熱を淸し、嗽を定め、眞に能く起死回生する。

○製造法は、芥滷を甕中に貯へ、人の往來する場所に三五年間埋めて取出して用ゐる。

糞金子　凡ゆ油白菜は、子を取つて種にして作つたものには、その中心の老根内に必ず一子があつて、枯れたとき搖つて見ると聲がある。それを剖出したものを糞金子と名ける。その物は糞力を得て花が幹中に實つた子だからで、又、菜の生氣を得て大いに能く人を益するので金子といふ。これを重んずる意味である。畑に種ゑたものはその子が更に佳し。

○王聖俞云く、糞金子は、菜の種子を取る時にその中幹内から剖出するもので、形は鼠糞のやうで色が黑く、麥粒ほどの大いさのものだ。千百の幹中に數十粒に過ぎぬ。蓋し生ずるものと生ぜぬものとの別があるので、どの幹にもみな產するわけではない。

【血症を治す】三錢を取つて炒つて研り、白湯で調へて服す。立ろに癒える。慢驚を治するに神效がある。（王聖俞）

麒麟菜

海濱の石上に産する。やはり瑀枝のやうなもので、菜の類である。瓊州府の海濱にも産する。周海山墟の琉璃國志の記載に、雞脚菜、麒麟菜はいづれも海邊の沙地上に生ずる。又、鹿角菜と名け、現に一般に蔬食中に多くこれを用ゐ、煮て食ふ。やはり酥脆である。又、煮化して膏にし、片に切つて食ふとある。綱目では、鹿角菜を、甘し、大寒にして滑すといつたが、陳芝山の食物宜忌には、微し鹹し、性は平なり。大いに痰を消する功用があるといつた。瀕湖は反て孟詵の一説を引いて、これを微毒あり。久しく食つてはならぬ。能く癇疾を發するとし、且つその主治としては、ただ食を下す。風氣、小兒の骨蒸。丹石の熱結を治し、麪毒を解すと記載したに止つたが、かやうにもその效用の知識がなかつたものであらうか。玆に特にこれを表して置く。

〇朱排山柑園小識――石花菜は海中の沙石の間に生ずる。高さは二三寸、狀態は珊瑚のやうで、紅、白の二種ある。沙土を洗ひ去り、煮化して膏に凝成し、糟、醬

にしていづれも佳し。又、細くして牛毛のやうなものがあり、それを牛毛石花と呼ぶ。味はやや劣る。郭璞の海賦に所謂、土肉石華とあるはこの物だ。

味鹹し、性は平である。痰を消すること神の如く、能く一切の痰結。痞積、痔毒を化す。

○敍按ずるに、盛京志に、龍鬚菜は東南海邊の石上に生じて叢生し、形狀は柳根の如く、長さは一尺餘に達し、色は白い。醋で浸して食ふ。やはり佳蔬である。土人は麒麟菜と呼び、金州の海邊に產する。鹿角菜は東南海中に產し、太さは鐵線ほど、丫が鹿角のやうに分れ、紫黃色である。これを乾して海錯にする。水で洗ひ醋を拌ぜれば新しいやうな味になる。現に金州の海邊にあるとある。志の記事に據れば一類の二種のやうだ。

【石花膏】毛世洪養生集――辛苦勞碌の人が、或は酒を嗜み、多慾にして忽ち外痔を生じ、發作疼痛し、歩行困難なるを治す。これを服すれば、或は大便を一回瀉出し、或は瀉せずしてやはり直ちに痛が止み、歩行が自由になる。再び搽、洗等の藥を用ゐれば自ら能く根を斷つ。麒麟菜を灰を洗ひ去つて一兩を天泉水で煮烊し、白

糖五錢を和して食ふ。この方は李治運臬司が靈隱寺の僧から傳へられたもので、杭人蕭成子がこの症を患つたとき、この僧が往つて候て、この方を授けて服ませると隨つて癒えた。予はこれを記憶して、後に數人を治して多く奏效した。

諸筍

乾筍

綱目では、竹を苞木類に入れ、筍をば菜部に附した。その記載もまた苦竹、筀竹、淡竹、冬竹の諸筍に止まり、且つ義類に於て多くはまだ詳を盡してないが、實は春と冬とその出時に因つて性がそれぞれ別であり、鮮と乾との諸品は味がやはり迥に殊ふのであつて見れば、經絡に入り、主として目を治すと合一するわけには行かぬのである。陳芝山食品、眞一筍譜、及び食纂の記載が比較的詳かで頗る時尙に近いから、それを取つて補つて置く。

春筍　筍譜——その佳きものを猪蹄紅といふ。冬期に生え、頭を土中に埋めてゐるものを鋤で掘り取る。三寸ばかりのものである。その味は極めて鮮かで、他の筍の

上位にある。まだ土から出ぬものを猪蹄紅と名け、長さ一尺ばかりになるとその籜(たく)が圓くなるから一般に圓筍と名け、また蚕筍(さつじゅん)と名ける。蓋し諸筍の眞先に出るものである。

　味甘し、性は微寒にして氣を下し、血を養ひ、膈を利し、痰を消し、熱を化し、胃を爽(さわやか)にし、渇を解し、水を利し、風邪を療じ、喘嗽を止める。

毛筍　即ち茅竹筍で、筍の大なるものである。筍譜――毛筍は諸筍の王であつて、その籜に毛があるからかく名けたのである。俗に猫筍と呼ぶは非である。大なるは重さ二十餘觔に近い。まだ土から出ぬものは肉が白くして霜の如く、地に墮せば碎け、指で掐(つま)めばその軟嫩なること腐の如く、嗅げば蘭花の香がある。毛筍の大なるものは清明後に有るので、その臘月、及び正月に出るものは、形は短小だが籜にはやはり毛がある。土人は猫兒頭と名けてこれを食ふ。多くは嘈心(さつしん)するが、然し痰を消する力は他の筍に比して勝るものだ。

　味甘し、性は平なり。九竅(きうけう)を利し、血脈を通じ、痰涎を化し、食脹を消す。多食すれば人をして饑ゑ易からしめる。

鞭筍　即ち竹の邊に發するもので、夏、秋に有る。その四月に生えたものをば梅邊といふ。蓋し梅雨の濕蒸の氣を感じて生ずるもので、頗る早く、味は淡くして肉が硬く、秋生えたものに及ばない。筍譜――邊筍、即ち毛筍の旁出したもので、筍の方に盛んな時は生氣が上升して、筍はいづれも竪に生えるが、氣が旣に衰へると根が横に生えてその力を盡し、横に十餘丈に亙る。その地の邊際は竹の長さと比例するもので、これを竹邊といふ。故に邊竹と名けるのだ。その狀態が鞭に類してゐるのでまた鞭筍とも名ける。肥えた土地のものは軟嫩で長さ一尺ばかりになり、その籜は紫色で白を兼ね、その味は恬淡で鮮であり、その氣は醇にして蘊藉なところがあり、毛筍の精英が盡く外に發洩するやうではない。

味甘し、性は寒である。胃を開き、腸を利し、痰渴を消す。

冬筍　即ち潭筍である。沈雲將食纂――猫竹の冬生える筍で土から出ぬものを冬筍と名け、又、潭筍と名ける。

味甘くして温である。――陳芝山宜忌に云く、味甘し、性寒なり――九竅を利し、血脈を通じ、吐血、衄血、及び産後の心腹痛、一切の血症を治す。これを食へば人を肥白な

らしめる（食纂）痰を消し、腸を滑し、毒に透り、酲を解し、痘疹を發す。諸筍の中毒には、生薑、麻油で解す。小兒、及び脾虛のものが多食しては消化し難い。（食物宜忌）痘疹の出ぬには、まだ土から出ぬ冬筍を採り、粥に煮て食ふ。卽ち生發の意がある。（不藥良方）

青筍 卽ち青竹の筍である。竹が細く小さいから出る筍の色が青い。山間の到る處に有る野竹から生ずる筍であつて、卽ち現に俗間で水竹と呼ぶものがそれである。――胡承謀湖州府志。天目に出る筍乾はその色が綠である。その煮る法を聞くに、湯を旋しながら急に轉下させ、筍を再び器を犯さぬやうにすれば綠になるといふ――

味甘し、肺痿、吐血、鼻衄を止め、五痔、幷に妊娠を治す。（食纂）

青筍乾 卽ち青竹筍を鹽湯で煮て曬乾したもので、杭の臨安に產し、天目のものが最も佳し。色は鸚哥綠のやうだ。尖上、尖毬子、二尖等の名がある。

味鹹く甘し、性は平である。胃を爽にし、痰を消す。

鹽筍乾 春筍を鹽湯で煮て曬して作るもので、泥黄、烏尖、直脚等の名がある。

味鹹く甘し、性は平である。氣を行し、痰を淸す。

衢筍乾　筍を鹽湯で煮熟し、熏じ乾して作るものである。

味鹹く甘し、性は平である。膈を利し、痰を化す。

羊尾筍乾　主治は同じ。

處筍片　俗に素火腿と名ける。毛筍を微し醃け、湯で煮て熏じ乾して作るものである。

味甘く微し鹹し、性は平である。血を利し、痰を消す。

荼筍片　即ち玉版筍である。毛筍を淡煮して曬したものだ。浙、閩、江西に多く有つて、草鞋底、蝴蝶尖、玉版等の名がある。湖州府志――菉筍の大なるものを淵綠といふ。有名な泥裏黄なるものが尤も美味である。

味甘し、性は平である。實喘を治し、痰を消す。張石頑云く、乾筍淡片は水を利し、痰を豁する。水腫葶藶丸にこれを用ゐる。

紅海粉

蟲語――海珠は嶺南に生ずる。狀態は蛞蝓のやうで、大いさは臂ほどある。茹す

るところの海菜が海濱の淺水で絲を吐く、それが海粉である。鮮の時は或は紅、或は綠、それぞれ海菜の色に隨つて成る。或は曬晾の方法が適當でなければ黃になる。五色のものがあつて、それは痰を治し得る。或は、この物は海珠と名けるもので、母は墨魚のやうで大いさ三四寸あり、海人は冬期それを家に養つて春種ゑるのだといふ。

瀕湖が、田中に遍く竹枝を挿むと、その母が竹枝に上つて吐出するといつたその物が海粉であつて、濕に乘じて舒展するのである。始め結成せぬときは羹、湯に點てるに佳し。赤痢、風痰を治す。

【疳積、壞眼】慈航活人書――穀精草、小青草を倶に炒り、青黛を水飛し、海粉、刺蒺藜、使君子肉各一兩を末にし、早朝、羊肝七片に藥三錢を拌ぜて蒸熟して食ふ。

本草綱目拾遺第八卷 終

本草綱目拾遺

器用部
禽部
獸部

第九卷

錢唐　趙學敏　恕軒氏輯

本草綱目拾遺器用部目錄

番打馬　老材香　縛木藤　敗琉璃 浮子
油胭脂　木套皮　火漆　七氣罌口
紅毯 白褐　罽布　舊帽沿　綿珠
紅絨　棉紗　舊頭繩　北雁砂
烏金紙 皮金紙　舊織紙　包烟紙　粗草紙 厠草紙
酒罈上紙　燒酒草　古瓦　青龍背
絹篩籮　陳年竹燈盞　銅燈盞青　料絲
烏龍翅　船篷箬　洋船璞　櫓箍
漆盤上漆　油木梳　衣帶　刀鞘
舊竹筋　草鞋鼻上布　織機上草辮　肉臺上屑
盛米栲栳 烟籮底　砂壺　靈鶴盞　花簪
小兒破鞋　夏布舊蚊帳　厠上椽木 尿板　白秋霜

本草綱目拾遺禽部目錄

燕窩 素燕窩　石燕　蝙蝠腦　石鉥

鸊鷉涎 蛋　翠鳥舌　白鷴雞　鬱雞

鵕雞　雪雞　洋鴨　烏鴉膽

鵞毛 屎　涎　蛋殼　腿骨　喉管　鷹吐毛 鷹條　雄雞卵

本草綱目拾遺獸部目錄

獅子油 血　糞　象糞 象白　尾毛　犴血　醉虎 油　膽　脂

鹿胎 乳餅　脛骨　猴經　犬豕胎糞　猫油

海狗油　狐麝　獺糞　狼脂

山羊血 油　糞　石羊膽　山狸　犀皮

貂尾　七葛　香鼠　鼠血

猫尿 胎　胞衣　尾血　白松香　浙驢皮膠　霞天膏

羊衰　蘭薰 家鄉肉　陳火腿骨　猪項上蜻蜓骨　雄猪眼梢肉　製火腿法

器用部

番打馬

形は一尺ばかりの長さで、内に油膏を入れ、外を椶皮で裹んである。火把の代用にもなり、また馬を打つ鞭になる。外國商船で持つて來るもので、哈喇叭に出る。

○方輿勝覽——做打麻なるものは樹脂の結成したもので、夜點ければ光があり、舟に塗れば水が入らぬ。華夷考に、做打麻なるものは樹脂から流れ落つる膠汁が土に入つたもので、土中から掘出す。松香、瀝青のやうな狀態のものだ。内が明淨になつてあるもので、好きものは都て金珀と同樣に似てゐる。滿剌加國に產するとある。

性專ら蟲を殺す。服してはならない有毒物である。外科の瘡瘍の膏に入れて用ゐる。

【陰癬を治す】救生苦海——番打馬を用ゐ、鉛、水銀、雄、硫 樟腦各等分を和

し、猪油で和して搽れば效がある。

○【癩疥膿瘡】積善堂良方――麻黄膏中にこれを用ゐる。

○【疥瘡】救生苦海――番打馬三錢、楓子肉五錢、水銀、杏仁、蛇牀子各一錢、川椒、樟腦、雄黄各二錢を、紅燭蓋油を用ゐて共に研り匀ぜて搽る。神效がある。

○【疥瘡を治す】應驗良方――全蝎、乳香、枯礬、大楓子、蛇牀子、土木鼈、川椒、雄黄、水銀、番打馬、輕粉、樟腦を末にし、燭油で丸にして搽れば效がある。この方は番打馬を番答木と書いてある。

諸瘡、幷に楊梅風毒に搽つて經驗あり。濟世良方――黄柏を皮を去つて一錢、黄連を蘆を去つて一錢、川大黄五分の三味を別に研り、雄黄、膽礬、銅青、兒茶、青黛、輕粉、枯礬各二分、氷片一分半を別に研り、大楓子七箇を殼を去り油を去り、人言を壯人には七釐、弱者には五釐を入れ、番打馬、卽ち外國商船で來る火把を作る物を別に末にして、瘡毒は盛でも體力が壯健で飲食の十分なるものには毎分に五分、毒が盛で體力の弱いものには毎分に三分を用ゐ、健ならず弱ならぬものには毎分に四分を用ゐて前の藥の中に入れて研り匀ぜ、水銀を壯健のものには毎分に一兩、

中等のものには五錢、極めて弱きものには三錢を用ゐる。多くてはならぬ。藥は極細に研らねばならぬ。さなくば粒が粗くして恐らく皮、肉を傷めるものだ。右の藥を用ゐて、先づ水銀一分、幷に前の藥末一分を盞內に入れ、眞芝麻油少量を加へ指で研り開いて次第に油を添へて研り、水銀が見えぬまでを度とし、大體稀糊のやうになればよし。かくて兩手、兩足の掌後の動脈の處の周圍に藥を一分づつ擦る。三日間毎日朝夕各一回擦り、毎回七八百擦るを程度として止め、大體熱を透らせて住めるのである。擦る時には凡て全身の破傷のある處にいづれも麝香の入らぬ膏藥を貼り、毎日一回換へて風に當らぬやうにし、帳幔を垂れて風を避け、冬期には煖床を用ゐ、被褥を厚くし、春、夏、秋の暖な時でもやはり、風に當らぬやうにする。擦ること七日に達すれば、必ず口に臭涎を吐くものだ。もし口齒が破爛して出血するときは、黃蜂窩の煎湯を冷して漱げば解す。嚥下してはならない。輕いものならば花椒湯で漱ぐ。擦る處は多く皮が破れるが、痛を畏れて少く擦つてはならぬ。魚腥、生冷、風を發する等の物、及び醋、茶、醬を一个月間忌み、尤も房事を忌む。牛肉、燒酒、團魚の類は二三年間忌む。蕎麥麪と羊肉との如きは終身これを忌む。毎回擦

り畢つたならば、藍布一尺ばかりで擦つた處を包裹する。これが楊梅風毒を治する法である。もし楊梅瘡の初起のものならば、五六日間擦れば全癒する。その場合に用ゐる藥は皆同じだが、ただ水銀を四五錢だけ用ゐるに止めて足る。膏藥を貼るの必要はない。

○【年久しき癧瘡】擦るべき處がもし破爛してゐるときは、脚、手の心に擦るがよし。その藥料は前項の中等の體力に用ゐるものを準用する。やはり布で包み膏藥を貼ることとも前項と同じ。

○【下疳、及び蛀幹】重きものはやはり中等の藥を準用する。搽擦して膏を貼る。

○【喉內の瘡癬】潰爛して飲食不能のものもやはり前記の中等の藥を擦る。

○【全身の牛皮瘋癬】癢く痛み、水の出るものもやはり前記の中等の藥を擦る。

凡そ藥を擦つたならば、同時に內用の煎藥を服せねばならぬ。

煎藥方——防風、荊芥　銀花、防已、白芷、連翹、苡仁、白鮮皮、桔梗、川芎、當歸、赤芍、生地黄、黄連、黄柏、知母、牛膝、木通、陳皮、羌活、獨活、粉草、梔子各等分に土茯苓の乾いたもの四兩、鮮のもの八兩を加へ、水六碗で三碗までに

煎じて三回に分け、一日に朝、晝、夕とに全部を服す。搽擦を開始した日から服して七日目になると口に發するのが止む。虚せる人には人參二三錢を加へる。

【痔漏消管藥線】妙靈方——藥を用ゐる前に、先づ燈心でその深淺を試みる。端が極痛處に達するまでをその深さとし、藥條を型の如く漏口に送入し、三日後にまた試み、內根に次第に肉を生ずれば條を次第に短くし、漏口が滿つるまで藥を用ゐて止める。玉簪花根、これは白いものが佳し。焙乾して四兩、番打馬を焙乾して三兩、馬兜鈴を炒乾して二兩、磁石三錢を紅く煆いて醋に淬すこと三回、共に極細末に研り、麪で條に作る。太さを瘡管の大いさに隨ひ、全部が化け去つたとき始めて再び插入する。

【廣瘡】仙遺拾珠——膽礬三錢、皂礬、石黃、青黛各二錢、番打馬二錢、珠砂五分を末にし、猪脂一塊に搗き勻ぜ、夏布で包んで手、足の心に擦り、腹の鳴るを候つて止める。病は自ら癒える。

【膿窠瘡】慈航活人書——斑毛三個、麻黃二錢、番打馬三錢、樟氷五錢を用ゐ、臘猪油二兩を先づ熬り化し、次に斑毛を入れて煎じ焦して撈ひ取り、再び麻黃を入れ

て煎じ焦して撈ひ取り、再び番打馬末を樟氷と共に加へて調匀し、瘡頭を搯破してその藥を點ける。立ろに結痂して翌日全癒する。

老材香

山西、陝西省地方には漆がない。民間では棺に斂めるにいづれも松香、黄蠟を棺内に塗る。數十年後に遷葬するものがあつて、棺が朽ちてゐると另に新棺に易へる。その朽棺内の香、蠟を名けて老材香といふのである。土人はこれで金瘡藥を合せる。按ずるに脂、蠟なるものは先天の流液の精であり、又、土を得てその力を固くし、血肉の餘氣を藉りてその神を凝らしてあるので、これは一物にして三才の用を合してゐるものだ。故に藥に入れての功が他の草木に倍するのである。

○藥性考――北地では古棺中の松脂で金瘡藥を合せる。血を止めるに極效がある。跌打損骨を治し、金瘡出血を止め、肌を生じ、疼を定めるに神效がある。盧氏仙方の金瘡鐵扇散中にこれを用ゐてある。

縛木藤

綱目には、藤部に省藤、即ち紅藤があつて、集解に、物を縛れるといつてあるが、主治はただ風を去り、蟲を殺すことを言つたに止まり、腦漏の治法が無かつた。

【腦漏を治す】急救方――縛木紅皮藤（ばくもくこうひとう）を焼いて性を存して末にし、三錢づつを酒で服す。服して後、一線が鼻から脊背に至つて股に下るを覺え、その腦漏は隨つて癒える。ある人は一年に一回服して效があつた。

【腸癰】經驗廣集――凡そ腸癰（ちようよう）が小肚角に生じ、微腫して小腹が隱痛して止まず、皮の色の變ぜぬものがそれである。紅藤一兩ばかりを好酒二碗で飲んで酔臥し、爾後に紫花地丁一兩ばかりをまた好酒で煎じて服す。後に痛が必ず次第に減ずる。再服に止める。

敗琉璃

浮子

羊角で製造するもので、五色あるが白きものだけを藥に入れる。佛前に十餘年あつたものが良し。油垢を去り淨めて新瓦で煨いて研る。

【管漏、湯火傷、乳痈を退ける】急救方――琉璃片を灰に燒いて性を存し、食後に一錢を酒で服すれば消する。

救生苦海――一切の管を退ける祕方――手指の甲を黄に炙いて研細し、象牙を末に剉んで研細し、山甲を黄に炙いて研細し、乳香、沒藥を倶に炙き、硃砂を水飛し、舊琉璃燈底の偽前の白いもの、三十年のものを用ゐるが佳く、もしそれが得難いときは十餘年のものでもよし。打碎いて麩で炒つて極細末にして各三錢、以上を合勻して再び研り、黄蠟四兩を化したもので和して椒ほどの大いさの丸にし、初服五粒、次服六粒、毎日一粒を加服して十四粒までを増加して止め、十日間合計九十五粒を服し、十一日目に至つて毎日一粒を減じて一日五粒になつたとき、相變らず逐日一粒を増加して十四粒までにし、又逐日一粒を遞減し、かく一週しては復た始め、或は十四粒までになる毎にまた五粒から服し始めるが更に妙である。毎日空心に陳酒で送下し、管が次第に褪出して褪出し盡るを度とする。もしなほ盡きぬときは再び

始めの數より服し始める。神效がある。祕する上にも祕するがよし。

〔內消痔管神方〕陳直夫躬行錄にこの方が記載してある。痔管を治すること神の如し。ある一小兒が高處から墜落して背を傷め、脊骨が月餘の後に毒を生じ、潰爛して漏となり、蛔蟲が漏孔中から出た。經に『外癰の膜に透る者は死す。內癰の膜に透る者は死す』とあつて、この症は已に不治に屬するものであつたが、直夫がこの藥一料を用ゐて癒えた。やはり奇方であつて、凡そ諸種の漏管はいづれも服すべく、獨り痔管だけではない。琥珀を燈心で研末し、象牙屑を焙じ、血餘を必ず自製し、蝟皮を陰陽瓦で合せ好泥で封じて煆いて性を存し、雨前芽茶、舊琉璃底を剪り碎いて法の如く製して蝟皮、蟬退と共に炒り、人指甲を——手、足に拘らず俱によし——瓦上で脆く焙じて末にし、穿山甲を脆く炒り、當歸、白茯苓、猪懸蹄甲を鋏で剪り碎いて製して蝟皮、蜣螂と共に瓦で炙き、牛皮膠を酒で煮化して藥と和し、もし不足のときは煉白蜜を加へ、以上の藥各三兩、小蜂房十箇を製して蝟皮と共にし、火候は更に輕きがよく、煆いて灰にしてはならぬ。蛇退十條を剪り碎き、瓦上で炙き焙して自ら汁にし、將に凝らんとするとき覆ふて性を存する。さなくば性が

過ぎる。末にして阿膠と共に和して搗き、撚つて丸にし、毎日朝、晝、夕に三錢を服し、滾水で送下する。一料で自ら癒える。已に數十人に經驗したものである。

【痔漏で管と成りたるもの】兪曉園鈔方——尅蛇龜の活けるもの一箇を泥で裹み、朝を擇んで南檐下の背陰の處で煆き、烟の盡くるを度として泥を去り、多年の琉璃底一具、琥珀、象牙各三錢、珍珠、西黄、冰片各五分を末にして摻る。この藥はまた服してもよし。毎服九分。

【肺癰】傳信方——陳年の琉璃を灰に煆いて性を存し、陳年の油絮漆の匠店にある煉成した灰を和勻し、酒で服す。試驗して神效があつた。

【尿血】救生苦海——舊琉璃燈を洗淨して剪碎き、磁礶内に入れて泥で封じ、火で煆いて紅くなるを度とし、冷えるを待つて取出し、酒で三錢を服す。

【輕粉結毒】救生苦海——舊琉璃燈を燒いて性を存して研り、毎服二錢を、毒の上に在るには川芎湯で服し、毒の下に在るには牛膝湯で服す。輕きは十日、重きは一个月で全癒する。

〇濟生方——佛前で照した舊琉璃を燒いて性を存し、酒で調へて服す。一日一二

同、一个月で全癒する。

【一般の火焼】廟中の琉璃浮子の松樹の厚皮で作つたものを灰に焼き、地上に放置して碗でその灰の上を蓋ひ、性を存して研末し、洪塘眞香油で調へて敷く。

【臟利瘡】百藥備遺――陳年の佛前の琉璃を用ゐ、ただ底を取つて瓦上で煆いて性を存して末にし、眞麻油で和して搽る。

【喉癬】選奇方――陳年の琉璃を煆いて末にして一錢に、薄荷末、白硼砂各五分、氷片少量を加へ、和匀して吹入れば立ろに癒える。

【敗毒散】新、久を問はず、腫毒、癰疽、發背、疔瘡いづれも治す。家寶方――琉璃の陳年にして破損したもの一箇、楝樹子四兩、舊髮網巾一箇、鳳凰衣四十九箇、三七一錢、敗龜板を炙つて五箇を共に末にし、毎服五分を楝樹子湯で服す。

【男、女の臁瘡】家寶方――先づ白蘿葡を打爛らして瘡口に貼り、一日一回換へ、三日にして毒血が去り盡きてから再び後の藥を用ゐる。松香一兩、杏仁三十粒を皮、尖、油を去り、黄丹八錢、輕粉五錢、舊琉璃燈三錢を火で焙じて末にし、研細して麻油で調へて搽り、一日一回換へる。數回にして癒える。

【癧瘺】雲谷醫鈔——多年佛前の舊琉璃を焙じて性を存し、麻油で調へて癧瘺に搽れば消する。

【結核を散ずる】石臨初結核論——凡そ馬刀、瘰癧、一切の結核には、破舊琉璃を煆いて性を存して末にし、二錢づつを服して微汗を取る。この物は羊角で製成したもので、能く節中の結氣を療ずる。佐として養血、和榮、清熱、解毒の藥品を用ゐれば、標、本を並治して佳いものである。

○【散結湯】熟地、當歸、白芍、川芎、丹參、丹皮、柴胡、桔梗、玄參、白蘞各等分を水で煎じ、琉璃末を共に服す。

【頸上の癧瘡】舊琉璃燈を灰に燒き、菜油で調へて搽る。神效がある。

【長明酒】種福堂方——痔漏を治するに神效がある。積年の舊琉璃燈を油膩を洗淨して火で煆いて研細し、四錢を紅酒で服す。七日に過ぎずして管が自ら退去する。

【全身漏を治す】醫宗彙編に云く、經驗した良方である。陳年の琉璃底三錢、人指甲を麩皮で炒つて一錢、象牙末一錢、辰砂一錢、蟬退を土を去つて五分、沒藥を油を去つて八分、白礬八錢を用ゐ、もし漏が上身に在るには川芎六分を加へ、下身に

在るには牛膝六分を加へて共に細末にし、黄蠟三兩を溶化して前の藥を入れて和匀し、大勢の手で急に菉豆大の丸にし、初に七八丸を服し、毎日一丸を增加して十六七丸にして止め、無灰酒で送下する。上身の漏には飽食後に服し、下身の漏には饑ゑて服す。雞、及び一切の葱ある物を最も忌む。

油胭脂

藥性考――油胭脂、平家膏を合はせたものは、膚の皴裂を潤し、血を活し、痘に點ける。西北は風が高いが、塗れば面皴を舒べる。不龜手藥なる古名は謬でない。

○一名碗兒胭脂といふ。小さい錫碗に盛つてあるから名けたのである。色紅く、膏のやうに潤ふてゐる。

○百草鏡――油胭脂の製造法。紅花汁一杯、白蠟二兩を微火で溶化して攪匀ぜ、磁罐內に傾け入れて薄餅に成るを待ち、碾藥を用ゐて數百遍杖碾すると膠粘して膏藥のやうになるのである。僞物は胭脂の滓脚で造るので藥に入れない。血を治し、毒を解し、痘疔を治し、蜂咬に塗る。王氏準繩では、珍珠末と共に塗つて痘瘡、燕

瘡疔を治す。

○救生苦海――痘の初起の時に預め壞眼を免れる。臨淸、濟寧の好油胭脂を眼の大眥に點ける。

○普濟方にある四聖丹――小兒の痘中の疔が或は紫黑して大きくなり、或は黑壞して臭く、或は中に黑線のあるは、これは痘として十中八九は死ぬものである。ただ牛都御史が得た祕傳のこの方を點けるが最も妙である。豌豆四十九粒を燒いて性を存し、頭髮灰三分、眞珠十四粒を炒り、研つて末にし、油胭脂と共に杵いて膏にし、先づ簪で挑破して惡血を啜ひ去つてから少量を點ける。卽時に變紅して活きるものだ。

【乳頭破裂】油胭脂、蛤粉を水飛して敷く。――蛤粉を用ゐぬもよし――

【疹子眼を治す】眼科要覽――雞膽を用ゐ、油胭脂で調勻して塗る。眼の突出したものでも好くなる。雞膽のないときは田雞膽を代用してもよし。

木套皮

古は屐といつた。今は木套と名ける。

【血風瘡を治す】救生苦海――木套皮を灰に燒き、東丹礬と各一錢を末にし、菜油で和して搽る。

火漆

火漆なるものは臙脂を造るとき紫梗水で脂胚を染て漉した渣滓である。紫梗は本來紫鉚と名け、波斯、眞臘、南番等の地に產する。蟻のやうな小蟲があつて、樹枝に緣つて造成するもので、白蠟を造ると同樣である。吾杭で臙脂を造るには、これを藉りて染めて製するのであるが、ただ紫梗一味を用ゐただけでは色が紅くならぬので、必ず黃葉水を配して共に煎じねばならぬ。それで色が始めて紅艷になるのであつて、その餘る渣が則ち火漆なのである。藥に入れるには、ただ極細に硏つて用ゐる。中に硏れない枝梗があるときは篩ひ去る。物理小識に、火漆、一名紫膠とある。

【血崩を治す】救生苦海――火漆を多少に拘らず油のない淨鍋に入れて化して炒

り、黃烟が淨まつて白烟の起つを見て火を退け、取出して研末し、空心時に好酒で和して三錢を服す。重きものも三服に過ぎぬ。

【腸風下血】不藥良方——火漆三錢を細末に研り、豆腐皮で分けて包んで三十包にし、白滾水で送下する。至つて重きものも三服で癒える。

【九種の心痛】神方考——火漆一味を用ゐ、灰に燒いて性を存し、毎服一錢を送下すれば癒える。

七氣罌餅

これは人家の屋簷の脊上に用ゐて不祥を鎭壓したもので、七箇の小罈を横に疊んで七星狀のやうに相聚め、外を灰泥で粘覆してあるものだ。藥に入れるには年久しきものを用ゐる。

王子接絳雪園方——罌は小口瓶である。七氣とは日、月、風、雨、露、霜、雪である。七罌は人家で多く古屋上の廣漢前の上層に置く生餅で、年深きものが良し、火土結成し、堅剛にして性は利である。復た天の七氣を藉りて能く骨に透り、髓に入

り、傷を理し、絶を續ぐ、藥に入れるには純鋼で生で剉み、剉末を聲がなくなるまで研つて水飛して用ゐる。

○慈惠編の接骨七釐散中に用ゐてある朝天寶は、卽ち人家屋上の瓦將軍前の小瓶であつて、年久しいものほど妙である。必ずその朝天の精華を得たものを取るを要し、研末して藥に入れて用ゐる。

【接骨丹】絳雪園方——七氣罌口の剉末を水飛して一錢、古文錢の半兩五銖あるもの、秦漢頃に鑄た紅銅のものが佳く、唐時代の開元錢でもよし、火で煆き醋に淬すこと七回して塵粉のやうになり、聲がなくなるまで研るが妙である。その末五分を罌末と和勻し、毎服七釐を用ゐ、先づ甜瓜子仁を殼を去つて三錢を嚼爛らして吐出して藥を拌ぜて服し、再び淸酒を服下して口を過す。この方は七氣罌口、古文錢を用ゐてあつて、功は壞肉を腐蝕するに專である。陳藏器は、能く損處に直入して人の斷骨を銲するといつた。甜瓜子仁は腸、胃の壅遏を開き、筋骨の機關を通ずるものだ。丹藥の釐數が甚だ微少なので、これで助けて胃に入れ、轉輸して丹藥の嚮導とするのである。

り、黄烟が淨まつて白烟の起つを見て火を退け、取出して研末し、空心時に好酒で和して三錢を服す。重きものも三服に過ぎぬ。

【腸風下血】不藥良方——火漆三錢を細末に研り、豆腐皮で分けて包んで三十包にし、白滾水で送下する。至つて重きものも三服で癒える。

【九種の心痛】神方考——火漆一味を用ゐ、灰に燒いて性を存し、毎服一錢を送下すれば癒える。

七氣罌餅

これは人家の屋簷の脊上に用ゐて不祥を鎭壓したもので、七箇の小罈を横に疊んで七星狀のやうに相聚め、外を灰泥で粘覆してあるものだ。藥に入れるには年久しきものを用ゐる。

王子接絳雪園方——罌は小口瓶である。七氣とは日、月、風、雨、露、霜、雪である。七罌は人家で多く古屋上の廣漢前の上層に置く生餅で、年深きものが良し、火土結成し、堅剛にして性は利である。復た天の七氣を藉りて能く骨に透り、髓に入

り、傷を理し、絶を續ぐ。薬に入れるには純鋼で生で剉み、剉末を聲がなくなるまで研つて水飛して用ゐる。

○慈惠編の接骨七釐散中に用ゐてある朝天寶は、卽ち人家屋上の瓦將軍前の小瓶であつて、年久しいものほど妙である。必ずその朝天の精華を得たものを取るを要し、研末して薬に入れて用ゐる。

【接骨丹】絳雪園方——七氣罌口の剉末を水飛して一錢、古文錢の半兩五銖あるもの、秦漢頃に鑄た紅銅のものが佳く、唐時代の開元錢でもよし、火で煆き醋に淬すこと七回して塵粉のやうになり、聲がなくなるまで研るが妙である。その末五分を罌末と和勻し、毎服七釐を用ゐ、先づ甜瓜子仁を殼を去つて三錢を嚼爛らして吐出して薬を拌ぜて服し、再び清酒を服下して口を過す。この方は七氣罌口、古文錢を用ゐてあつて、功は壞肉を腐蝕するに專である。陳藏器は、能く損處に直入して人の斷骨を銲するといつた。甜瓜子仁は腸、胃の壅遏を開き、筋骨の機關を通ずるものだ。丹薬の釐數が甚だ微少なので、これで助けて胃に入れ、轉輸して丹薬の嚮導とするのである。

紅毼

白褐

紅毼とは毛布のことで、今は褐子と名ける。西人は多く牛、羊の毳を雜織して作る。茜草で染めるので色が紅いのだ。

【疳瘡を治す】醫便——紅毼を灰に燒いて性を存して五錢、乾桃の樹上で乾いたものを灰に燒いて性を存して五錢、爐甘石を火で煆いて黃色にして童尿に淬すこと七回して二錢五分を共に細末にし、搽る時に臨んで片腦少量を入れる。その瘡をば先づ椒葱湯で洗淨して再び藥を搽る。三回にして癒える。

【血崩】醫便の六合散——血崩が止まずして諸藥の效なきものを治し、これを用ゐれば立ろに止む。これは急なるときはその標を治するの要領である。杏仁皮を燒いて性を存し、香附を童尿に三日浸して黑く炒り、舊紅毼子を燒いて性を存し、地膚子を炒り、舊棕薦を燒いて性を存し、壯血餘を燒いて性を存し、蟹殼を燒いて性を存し、陳蓮蓬を燒いて性を存し、共に末にし、毎服三錢を、酸漿草汁一鍾に熱

酒一鍾を沖したもので空心に熱服する。按ずるに、この方は初服には反つて血崩が多くなるやうに覺えるが漸次に少くなり、紫色から紅になり、終に無くなる。無くなつたならば止めて、後に十全大補湯を二十劑用ゐて調補する。それで根を斷つ。

【走馬牙疳】祝氏效方——黃蜆殼を煆いて性を存して研末して一錢五分、黃連を鐵器を忌んで末にして五錢、栝樓根、膽礬を煆き、五穀蟲——腰尾全きものが佳し——を瓦上で煆いて性を存し、紅毼を煆いて性を存し、以上各五錢、末にして氷片二分を加へて和勻し、先づ米泔で口を漱ぎ、數回連續して吹けば癒える。吹いて後には泔水で口を漱いで淨め去る。

【臍血、臍濕を治す】救生苦海——紅毼を灰に燒き、油で和して敷く。或は裁縫店中の多數の家の布を切り碎いたものを灰に燒いて摻る。

【淸香散】癖疾から牙疳を生じて潰爛し臭穢なるを治す。萬病回春——乳香、沒藥、孩兒茶、輕粉を炒り、象皮を炒り、象牙を黃に焙じ、毼を灰に炒り、珍珠を黃に焙じ、海巴を焙じ乾し、各等分を細末にして患處に摻る。立ろに痛が止つて肌を生ずること神の如くである。

白褐　小兒の牙疳を治す。集驗方——銅綠を水飛し、雄黃を水飛し、五棓子を炒焦し、枯礬、白褐を燒いて性を存し、烏梅肉を炙き乾し、細辛を葉、蘆を去つて炒焦し、胡黃連を炒焦し、共に八味各等分を用ゐ、老茶葉、葱根の煎湯を雞翎に染めて腐肉を洗ひ去り、鮮血が見えるやうにして後にこの藥を搽る。

𦆽布

粤山錄——新安、南頭に產する。𦆽は元來苧蔴で造つたもので、漁婦がその破敝したものを剪つて條縷にしたものを緯とし、棉絲を經として織り、石灰で煮て溪水で漂し、その舊と染めた薯莨の色を去つて瑩然たる雪白にしたものである。その布には雙と單との別があつて、雙のものは表裏兩面に大小の絮頭があり、單のものは片面にある。絮頭は長さを貴しとし、久しく摩挲すると葳蕤のやうになる。西氈から裁にしたものならば更に好し、或は薯莨で染めるとその絲が勁く爽になつて夏服にするによし。染めねば柔かで寒が禦げる。粤人は甚だこれを貴重視する。これ亦奇布である。

小兒が服すれば邪魅を辟ける。

舊帽沿

【癤毒を治す】外科正宗――下疳には、油の透つた羅緞の舊帽沿を灰に燒き、杭粉を瓦上で煨いて黄色にし、等分を極細に研り、先づ紅棗十五箇、甘草三錢の煎湯で洗つて後に摻る。

【金瘡】集聽方――舊氊帽の油口沿を灰に燒いて摻れば癒える。

綿珠

綿には木綿、絲綿の二種あるが、ただ絲綿は服に製すると珠があり、新製衣に每に絲珠があつて衣の外に透出するものだ。周履靖の羣物奇制に、伏中に裝ふ綿布衣には綿珠がなく、秋、冬には有る。燈草少量を綿上に置けば珠がなくなるとある。藥に入れるには舊衣中の綿珠を用ゐ、その襄た人の氣の旣に久しきを取る。その新衣の衣外に透出した綿珠は用をなさぬ。

蝸虎咬を治するに、香油で調へて塗れば神驗がある。

紅絨

秤勾痞を治す。この症は、一个月以內の小兒の肛門上に突然痞孔が生ずるその症をいふのである。救生苦海――紅絨を灰に燒いて二錢、珍珠五分、輕粉五分、兒茶二錢、血竭一錢、乳香一錢を末にして乾いたものを摻る。

棉紗

養素園方――これは草綿花で紡いだ線である　吳松地方ではこれで布を織つて棉紗と名ける。本來の色は白だが、或は藍靛で染めて青色にし、婦人の裁縫用にする。古は木棉を用ゐたが、今は草棉を用ゐる。綱目の服器部にある綿は絲綿だから絲に從ふ。

性は平なり。能く斑疹に透る。傳信方――風疹斑瘠が出て透快ならぬには、白棉紗二兩、檉柳一兩を共に湯に煎じて浴し、風を避ける。頃刻にして透發する。檉柳

がなければ櫻桃核を代用する。また煎じて服するもよし。

藍棉紗 これは靛で染めたものである。湯に煎じたものは毒を解し、藍汁と同功である。

舊頭繩

百草鏡——俗に紥根と名ける。これは婦人が髮を紥るものだ。藥に入れるには油が透つて棄て去つたものを取るが良し。網目にある巾、及び緻は脚布であつてこれではない。

紅絲疔、蛇傷を治す。肉上を紥束すれば能く毒氣を透らざらしめる。

【小兒一切の頭瘡】秦中用云く、灰に燒いて油で塗れば立ろに癒える。

【難產を治す】經驗廣集——婦人の舊頭繩一條を灰に燒き、人參一兩を加へて煎じて服す。横生、逆生を論ぜず、これを服すれば順流して下る。神奇不可思議である。

北雁砂

關東に產する。菉豆色で珠の如く、顆粒を碗中に擲つと響聲のあるものが眞であつて、目を明にする。

【一切の眼病を治す】洪靑遠方――明目砂五分、針で刺入れて紅いものが佳し。北雁砂三錢を用ゐ、また羊肝一具を膽を連ね、水に落さずに數路に刺開し、剖開する要なし。前の二味の砂を末にしてその肝內に入れ、無灰油二觔で蒸熟し、煎じて二碗にし、空心に一服し、晚飯後に一服し、量を盡すを度として羊肝を配して全部を一服する。眼病の內障、外障、黑暗不明を論ぜず、神效を奏せぬものなし。

烏金紙

皮金紙

江、浙の紙を製造する處に多くある。兩面が黝黑で漆の如く、光滑、脆薄で書畫の用にならず、惟だ商店で高貴の品、及び藥物を裹む下裹みの料にする。又、薰金

紙と呼ぶは、その物が熏黒で、搥硏すると光るからである。

物理小識――金箔を造るには、碎金を藥紙で隔て、巨斧を揮つて捶つ。金はそれで箔になるが、紙は損じない。紙は初は褐色だが、久しくして烏金色になる。

○魏良宰云く、烏金紙はただ杭省だけにある。その紙を造るには、城東の淳佑橋の左右の水でなければ出來ない。その法は、先づ烏金水を造つて紙に刷き、漆のやうに黑くなるを俟つて再び熏じ、槌石で硏つて光らすのである。性最も堅靱で、凡そ金箔を打つにはこれで金片を包んで打つのである。金が箔になつても紙は損じない。これを遠方へまで賣るが、價は頗る昂い。蓋し天下にこの紙を能く造るのはただ浙省城人だけだからである。

【下疳を治す】集聽――烏金紙を銅杓内で炒つて末にし、冰片少量を加へて塗る。

【復明散】陳嘉木眼科要覽――專ら瞖膜遮睛を治し、瞽者もまた復明する。七八歲の童子の口中から吐出した蛔蟲一條を竹刀で剖開し、淸水で洗淨し、新瓦を用ゐ炭火で焙乾し、焦げぬやうにして極細末に硏り、烏金紙で好く包み、また硇砂四兩の中にその蛔蟲を包藏し、一七日にして取出し、骨簪にその藥を蘸けて眼に點ける。

一日三回。後に骨簪脚で眼中の翳膜を撥去し、熱水で洗ひ、少頃してまた點ける。この藥全部を點ければ再び明を復せぬものはない。

皮金紙　又、羊皮金と名ける。廣東に産する。凡そ金箔店にはいづれもある。商人は皮金紙と呼ぶ。

跌仆、擦傷、釘鞋で足跟を傷め、病久しくして蔭瘡となり、擦痛するもの、幷に凍瘡で足跟が瘟爛し、水の流れるものを治す。凡そ小擦傷、刀傷で腫潰し、紅赤で皮が光り、潮濕するものいづれも效がある。患處の大、小を看て、この紙から金面を剪取つて傷處に貼る。一夜經てば癒える。(毛世洪養生集)

舊繖紙

綱目には桐油繖紙があつて、ただ蛀幹陰瘡、及び疔瘡、疔汗を治することを言つたのみに止まり、他の治法がない。今これを補ふ。

【纒腰丹を治す】急救方――舊繖紙を燒いて性を存して末にし、香油で調へて敷く。

【對口瘡】祝氏效方——淡底白色のものが佳し。一兩の陳繖紙を灰に燒いて五錢用ゐ、烏梅肉一兩を先づ打爛してその末を入れ、再び生桐油を加へて搗勻ぜて患處に敷く。次第に癒える。

【發背立效方】周氏家寶——千年石灰を研つて細末にし、鐵杓内で紫色に炒つて磚上に傾け出し、略ぼ冷えて微に熱氣あるを待つ。太冷、太熱ではならぬ。それを三錢、大川芎を細末に研つて二錢を和勻し、眞麻油五六點を入れ、井水、或は河水で調へて服す。全身に大汗が出て散ずる。もし惡瘡の場合には、黑繖紙灰三分を加へ、右の方を服す。

【臁瘡】蔡懿晉方——人家で糖頭を蓋ふた舊繖の多年の霜雪を經たものを用ゐ、瘡の大、小に依つてその繖衣を剪つて一塊にし、上を木針で刺し洞けて貼る。三日にして別に一張を換へ、毎日裏返して貼る。三張貼れば癒える。

○集驗方——臁瘡には、輕粉、猪骨髓を研勻し、舊繖紙上に攤して貼る。

周氏家寶の諸瘡隔紙膏、臁瘡經驗膏、隔紙膏、脫身隔紙膏いづれも舊繖紙を用ゐて藥を夾で貼る。

包烟紙

これは煙草商店で煙草の外一層を包む厚い白紙である。これは石灰槽で浸して造るもので、灰氣がまだ去らない。紙はやはり靭(つよ)くなく、ただ煙草を包めるだけのものだ。建紙と名ける。近頃の喫煙家はその紙で烟管の頭嘴を擦つて銅を潔白にする。錫器を擦るによし。武原の朱進士醒莽の話に、北方の紳士は多くこの紙を貯へ、毎日早朝、洗面後にこれで顔を拭く。久しくすると黝(ろ)きを白くし、玉のやうに光發するといふ。

顔を拭へば黝䵎汗斑(たつかんかんはん)を去り、容顔を美にして光豔(くわうえん)を發する。

粗草紙

廁草紙

これは稻草で造つたもので、南方の商店ではこれで物を包む。厚、薄の二種あつて、厚いものを銅板草紙と名け、藥に入れて用ゐる。

【疹瘖を發する】百草鏡——折角草紙半枚、南方の商店で物を包む厚いものがそれである。煎じて服す。檉柳に比較して更に尤も透發する。

【小兒の臍瘡】不藥良方——急に大草紙を灰に燒いて敷けば瘋癇に變症しない。或は枯礬を加へ、或はまたその上に龍骨を灰に燒いて等分を加へ、麝香少量を入れて撒く。

【腸風下血】不藥良方——粗草紙の燒灰、砂糖を拌勻し、水に開いて服す。

【貝母團】經驗廣集——羊兒瘋を治するに百發百中である。川貝母を心を去つて一兩を粉に研り、羅篩で大草紙一百枚に鋪き篩ひ、一層の紙一枚に一篩し、百枚の草紙に百篩し、然る後に線で縫ひ、四碗の水に入れて煮乾し、毎早朝一枚を取り、その紙を團にして煨き、滾湯に泡けてその汁を飲む。全部を服すれば全癒する。神妙無比である。

厠草紙　これは坑厠中で糞を拭つた草紙を地に棄ててあるものである。同壽錄に云く、傷寒中に咯滯傷寒といふ一症がある。この藥以外では除けぬものだ。この紙四十九枚を採り求めて灰に燒いて末にし、水二碗で一碗に煎じ、渣を去つて飲めば

效がある。

酒罈上紙

これは酒罈の口を封じた紙で、陳久なるものが佳し。これは多く酒氣を得て、黴爛して堅靱でなく、又、灰性が脱去してゐる點を利用するのである。

皮膚間に忽然として血の濺ぎ出るを治す。同壽錄――この紙を砕き扯んで楊花のやうにし、血の出る處に攤せば止まる。

燒酒草

これは燒酒の罈頭の泥中の草である。慈航活人書にこの一種を藥に入れるとある。故に補記して置く。

【剪刀風を治す】活人書に云く、その症は腰に紅瘰を生じ、物を纏へると痛むものである。針で血を挑出し、この草を取つて鹽を加へて擦る。汗を出して癒える。

古瓦

綱目の土部に烏古瓦があるが、癤毒を治することを言つてない。

「小兒の生毒を治す」救生苦海——已に成形したるものには、多年の古瓦を研末し、細茶葉を煎じた極濃汁で和して敷き頭を留めて置けば散ずる。

【蟮拱癤】瓦片を火で煆き醋に淬すこと七回して末にし、菜油で和して搽る。

【消渴】舊屋上の瓦兩片を洗淨して搥碎き、水で濃汁に煮て食後に一小盞を溫服する。（同壽錄）

青龍背

龔廷賢回春に云く、鍋の蓋の表面の垢膩を青龍背と名ける。瘰癧の潰爛して久しく癒えぬものを治し得るものだ。これを烏龍膏に入れて治す。

【烏龍膏】木鼈を殼を帶びて炒つて性を存して殼を去り、側柏葉を焙じ、人中血、即ち亂髮を灰に燒き、青龍背、紙錢灰、飛羅麪各一錢を倶に末にし、好陳米醋で調

へて膏にし、瘡上に塗つて外から紙を貼る。

絹篩籮

今呼ぶ篩子には、馬鬃で織つたもので底を作つたものがあり、絲絹で底を作つたものがあるが、藥に入れるには絲絹のものを良しとする。

【月を過ぎた難產を治す】彙集にある急救過月難產仙方——陳篩籮底一箇を筒に捲いて碗內で燒き、それを產婦に與へて服ませれば分娩する。產み落した兒の身上にみな羅のあるがその驗であつて、神の如きものである。

陳年竹燈盞

【多年の陰陽諸癖を治す】救生苦海——陳い竹燈盞の油の透つたものを用ゐ、尖底瓶に入れて瓶の口に鐵絲髻一箇を置き、地に一土坑を挖つて中に大碗一箇を置き、瓶をその上に倒に覆ふて底を上に向け、週圍に礱糠を塡滿して燒き、碗中に滴下する油を取つて搽る。效驗がある。

○文堂驗集――癬を治す。多年の油竹燈挂一箇を火上で烤つて油汁を出す。膠の如きものが良し。別に五棓子を蟲を去つて炒つて研末し、二味を一處に和し、陳醋を火上で温熱したもので和勻して搽る。甚だ效がある。

【臘梨頭瘡】張子卿祕方集驗――酒飯店の油の透つた陳竹燈臺一箇を劈碎し、磁瓶中に入れて口上に舊髮鐵絲を用ゐて缾上に覆ふて倒に轉下し、また一箇の空磁缾を用ゐて先の缾の下を向いた口に合せ、火で煆いてその汁を溜らせ、その汁を取つて瘡に搽る。その效神の如くである。

【腦漏】百草鏡――竹燈絡子の十年のもの、田舍村にある油垢のものに限る。淨めてはならない。煆いて炭にし、土に伏せて性を存して研細し、一二錢づつを豆腐皮に包み、早朝に滾水で呑下し、續けざまに服し盡す。自ら癒える。

【腸癰、肚癰の神效方】便易良方に云く、右脚の拘急するは腸癰、左脚の拘急するは肚癰である。數十年の舊油印竹燈臺、俗に善福と名けるものを取り、一箇を半燒にし、水を用ゐずに窒塞して灰にし、研つて細末にし、陳三白酒を沖して二錢、或は三錢を服すれば癒える。王站柱不藥良方に云く、この藥はまた肺癰を治するに極

めて神效がある。

銅燈盞靑

卽ち盞內の油垢に生じた銅綠である。藥に入るに良し。

【燕窩瘡を治す】救生苦海――もとは髮際瘡と名ける。頭の枕骨下の髮の盡きる處に生ずる。銅燈盞內の靑垢を刮下し、研爛して搽るが神の如くである。

料絲

物理小識――滇の(一)金齒衞では、碼碯、石英の屑汁を用ゐ、北方の天花を點けて凝收させ、煉つて絲に作り、それを燈にする。近頃では丹陽、松江でいづれも能く料絲を作る。李西涯の書には繚絲と書いてある。大內靑瑣、卽ちこの物である。

磨つた漿は能く血を止め、血を破る。

烏龍翅

(一)金齒衞ハ今ノ雲南省永昌縣ノ地ナリ。

汪連仕草藥方——烏龍翅、卽ち焦けた火把である。泥土中に零れ落ちて霜雪を經たものが佳し。

足爛の甚だ經過惡しきものを治す。炭に燒いて油で搽る。燒斑、痧疰、神鬼箭に神效がある。

船篷箬

【耳中の腫爛、脹痛を治す】救生苦海——多年の船篷箬を灰に燒いて性を存し、冰片少量を加へて研細して吹入る。

洋船璞

これは海船底の中間に木に襯いてあるもので、舟人は名けて龍骨藥といふ。その間に生えてゐる形は菌蕈のやうだ。乾して藥に入れる。

胃脘疼痛を治す。

按ずるに、潘之恒廣菌譜に、舵菜、卽ち海船の舵上に生ずる菌である。多くは得

られないものだとある。果して然りとすれば、これは蔬部に入るべきであらう。このままにして後考に俟つ。

櫓箍

【奶串を治す】○毛世洪經驗集——凡そ乳癰が串爛して久しく癒えず、內部の臟腑が洞見されるほど深く陷つて癒えぬには、船を搖かす櫓の手で握る部分の舊藤箍を剪下し、陰陽瓦上で煐いて末にし、竹管に棚篩を紮けて日每に摻る。もし乾く處には香油で調へて搽る。半月に過ぎずして全癒する。

漆盤上漆

【羊眼漏を治す】救生苦海——この症は足の脛骨に生じ、一孔を生じて膿なく血なく、ただ清水を流して大いに痛むものである。多年の漆盤から漆を刮下し、灰に燒いて摻れば癒える。

油木梳

木梳は木で作つたもので、髮を通すに用ゐる。黃楊木のものは能く火を淸し、石楠木のものは風を理す。その器はこの二木で造つたものを最とし、他の雜木、及び駝骨、牛角等の梳は藥に入れない。或は、牙梳は邪を辟け、皂角木梳は髮に膩をなくし、柏木、鉛の梳はいづれも能く髮を烏くするといふが、總て黃楊、石楠の二木を常用するの佳きには及ばない。綱目には、梳、篦を合一して區別せず、記載した治法はやはり夥しいが、ただ油梳だけはその功用を遺してあるから、此に補記する。

【肺痿を治す】救生苦海――油木梳を二三十年のもの一箇を燒いて性を存し、滾水で和して服す。甜酒でもよし。

【五淋を治す】同壽錄――多年の木梳を燒いて性を存し、空心に冷水で調へて服す。男は男の梳を、女は女の梳を用ゐる。神效がある。

【拗頸】海上名方――この病は俗に落枕と呼ぶ。乃ち頸項を夜間悞つて枕から落し、或は偶〻閃挫して、血滯し、强し、酸疼をなすものである。舊油梳を火上で烘

熱し、その梳の背で疼處を極力刮る。自ら癒える。

【誤つて蝦蝗を食つたとき】兪潛山云く、曾て誤つてこれを食ひ、腹中が瀉し、不時に疼痛し、瀉血したので、黃土漿水、その他の藥を試みたが多く效がなかつた。ところが多年の舊油梳を灰に煆いて酒で調へて服することを敎へられ、一夕にして蝗がみな水に化して下つた。眞に神方である。

衣帶

【蛇纏を治す】救生苦海――繫腰帶を煆いて性を存して硏細し、好醬で和して塗る。或は水龍骨を加へ、柿漆水を和して塗る。

刀鞘

【中惡腹痛を治す】救生苦海――刀鞘を灰に燒いて水で服す。

舊竹筋

【蜈蚣傷を治す】救生苦海——小さい方の端を燒いて土に伏せ、取出して小量を研細して敷けば立ろに癒える。

草鞋鼻上布

綱目には、屐屧鼻繩下に草鞋鼻があるが、布を取る法がなく、またその瘄を發する功のあることをも知らなかつた。此に補記する。

【小兒が瘄疹を患つて發せぬを治す】破草鞋の鼻上を裹んだ布七八條を湯に煎じて服す。立ろに效があること神の如くである。（周寶生醫通）

織機上草辮

楊春涯驗方——白蛇纏を治す。この物は陳きを好しとする。灰に燒いて性を存し、麻油で調へて搽る。紅蛇纏をも治す。

肉臺上屑

綱目では、故木砧の條に几上屑を列して、ただ嗆瘵、唇、耳等の瘡、乾霍亂、蟲牙等の症を治すと言つたに止るが、急救方に、その手毒を治するに神の如きことを言つてある。因つて急に補して置く。

手掌の虎口の邊に連る腫毒を治す。猪肉臺上から刮下した木屑の膏の如きものを用ゐ、餅にして患處に貼れば癒える。

【吐血】慈航活人書——醃臘肉店中で肉を切る木墩上から肉垢を刮り取り、火の上で燒き枯し、白色にならぬやうにして性を存して研末し、酒を沖して服す。

【狗咬】楊春涯驗方——切肉墩上の油垢を刮り取り、砂糖を和し拌ぜて敷く。神效がある。

盛米栲栳

爛籮底

【血䐢を治す】楊春涯驗方——二三十年の盛米栲栳一箇を擊碎き、湯に煎じて一二回服すれば消する。

爛籮底　これは人家で米を盛る竹器である。浙地方では淘籮と呼ぶ。竹絲で織つて米を淅ぐに用ゐるものだ。舊きものは多く柴灰を入れて水を淋して衣類を洗ふに用ゐる。年久しくして爛れたものである。

【經を截つ】同壽錄に云く、婦人の行經の止まぬは、これを服すれば截てる。頭紅花、爛籮底、爛八搭、草鞋鼻子蓮房、この四味を倶に燒灰して性を存して末にし、毎服一錢を黃酒で送下する。三服に過ぎずして紅が立ろに止まる。

砂壺

宜興に出る紫泥のものが佳し　藥を入れて毒を吸ふに用ゐる。その口の光滑にして薄く、肌肉を傷めぬものを取る。

傷寒の汗の出ぬを治するに用ゐる吸法、二箇の砂壺に各〻燒酒八分を盛り、重湯で煮滾らして酒を傾け去り、直ちにその壺を臍上に對して合住し、これで吸はせて敏速に二壺を互に交換する。汗が出て癒える。

○瘰癧の破爛せるものの毒を拔く法。先づ破れた處へ蕎糊で作つた餅を貼り、小

砂壺二箇で焼酒を煎滾らして酒を去り、熱した壺口を麪餅上に覆ふて瘡を熏じ、拔火壺と同様にし、壺が冷えたときはまた一壺に易へる。かく數回繰返せば毒氣が盡く拔けて癒える。熏じて後には猪膽を熬つた膏を瘡口に貼る。この方は神效がある。

○獸、蟲の咬傷、幷に風寒一切の毒を治す。砂焼酒壺二箇を用ゐ、壺の大半に焼酒を盛り、先づ一壺を火上で滾らし、聲無く傾けて酒を去り、直ちに破口上に按置する。汚黑の血水を拔出し、壺に滿ちて自ら落ちたとき、ただ次の壺を同時に瘡上に按置し、交互に提拔して毒の盡るを度とする。――俱に經驗廣集を見よ――按ずるに、王站柱不藥良方の瘋狗咬傷を治するに砂壺を用ゐる吸法はこれと同じく、吸つて後にまた頂上の紅髮を拔去すれば癒える。

靈鶴盞

李金什は嘗て淮南へ行つてゐたことがある。その話に、山陽一帶は洲渚がみな蘆葦で、鶴を產し、その中に多く卵を產んである。村人は能くその產卵期を識つてゐて、鶴が卵を產むと竊んで來て鍋に入れて煮熟し、急に涼水を沃いで卵殼が熱くな

くなつたものを復たその窠へ入れて置く。鶴がそれを知らずして煦伏し、三七日過ぎるとその卵の黄白がまた鮮なること故の如くになる。それをまた竊んで來て急に煮てまた窠に納れ、鶴がまた伏してかく三回繰返すと、鶴卵の外殼が厚く紫玉のやうになつて盃になるものである。それをまた竊んで來てその頂を鋸き去り、外面に金玉を鑲飾して盃の形に作り、それを靈鶴盞と名ける。酒をその中に注げば一羽の小鶴の影が酒上に浮ぶ。これを食へば壽命を益し、天年を延べ、且つ能く心疾を治すといふ。容易に得られぬもので、商人の手にあるものは價に限がない。

神魂を安じ、心悸を定め、小兒にこれを用ゐれば驚癇を除き、妊婦がこれを用ゐれば胎を養ひ、痘の出るを稀にし、外にこれを帯ぶれば蛇、蠱、及び一切の毒を辟ける。

花簪

楊春涯驗方――乳癰を治す。初起の時に婦人の頭に挿す花簪を太陽に向け對して圏を畫き、口の中で『天上一朶黑烏雲、地下女子害乳疼。我今特授金簪上、金簪化

去永不疼』と七遍默念し、その膂を婦人に渡して患部の圈を撫でさすれば好し。

小兒破鞋

【接骨】家寶方――市鎭上の乞小兒の破鞋一隻を灰に燒き、白麪と等分を好醋で調へて糊にし、患處に敷いて絹で束ね、杉木板で夾むが好し。須臾にして疼が止み、骨が接がつて聲のあるが妙である。

夏布舊蚊帳

江西では麻布を藍で染め、夏に入つて蚊帳にし、夏布と名ける。今世間でこの舊帳で漆器の坯を作るに最も佳しとしてある。

【走游風を治す】王化九簡便方――靑夏布の舊蚊帳を灰に燒いて性を存し、麻油で調へて敷く。再發したときは再び敷く。

【陰の奇癢で忍び難きもの】不藥良方――靑夏布舊蚊帳を灰に燒いて性を存し、麻油で調へて搽れば癒える。

厠上椽木

尿板

これは毛坑上の椽子（てんし）で、多年糞氣に熏漬（くんし）されたものである。その解毒の功は糞淸に劣らない。

【紅絲疔を治す】敬信錄――紅絲疔は、先づ針でその絲を挑斷し、多年の糞坑上の碎木椽子を灰に燒いて硏細し、飴糖（いたう）を拌ぜて塗り、頭を留める。疔はそれで拔出する。

尿板　手、足の瘡で、無力で口を收まらぬものを治す。家寶方――多年尿で浸爛して白色になつた木板を煆いて性を存して細末にし、氷片を加へて摻（ね）る。立ろに口が收まる。

白秋霜

萬表積善堂方――白秋霜、卽ち多年糞缸底（ふんかうてい）に結成した白霜である。風雨を經たも

のを用ゐるに限る。藥に入れるには炭火で紅く煆いて醋に淬すこと七回する。綱目では、人部に、溺白埿を人中白、乃ち溺埿とし、且つ主治、及び附方にいづれも骨を接ぎ、傷を治するの說がない。特にその缺を補つて置く。

跌撲損傷を治す。閃挫骨傷の極めて重きものには、極細末に研り、每服五分を好酒で調へて服す。(萬表)

陳海曙云く、凡そ多年の厠坑底の石板の背後には、雪のやうな白胎があつてその間に結してゐるものだ。鑿取つて見ると微に穢氣があるが、陳久なものはやはり無い。然して糞力が石を透つたものだから、その精華が此に凝聚してゐるので能く火毒を淸するのである。

○王聖兪云く、一名糞霜、曾て小兒の瘠疘の癒えたばかりのものが突然肺燥し、咽乾き、脣裂け、目中に火を出し、滿面紅赤となつたものを見た。これは火毒の壅過がまだ化せずして上焦に滯つたものである。この藥一二錢づつを服し、數日ならずして全癒した。

○敏按ずるに、蔣儀の藥鏡に、泥の糞坑底に一夜あつたものは疔腫、發背の痛を

止めるに塗るべきものだとあるが、霜はまたその精華である。大體に於て火を清し、毒を解するの功用はやはり甚しく相遠くはない。

禽部

燕窩

素燕窩

一名燕蔬菜。從新に云く、漳泉に產し、沿海の地にある。乃ち燕が小魚を啣み、春それを窩中に疊ねるのを人が取るのである。

閩小記に云く、燕が小魚を取つて石に粘するものが久しくして窩となる。烏、白、紅の三色があつて、烏色は最下品である。紅色のものが最も得難く、能く小兒の痘疹を益する。白色は能く痰疾を癒す。

泉南雜志――閩の遠海の番地に近い地方に金絲と名ける燕がある。首尾は燕に似て甚だ小さく、毛は金絲のやうである。卵を產み子を育てる時期になると、羣り飛んで水旁の地に近づいて泥を汋み、石のある處で蠶螺を食ふ。蠶螺は背上の肉に兩筋があり、楓蠶のやうで、絲が堅く潔くして白いものだ。これを食へば虛損を補し、

痢、勞の症を已し得るものである。この燕はこれを食ひ、肉は化けるが筋は化けないので、それを津液と共に嘔出したのが結して小窩となつて石上に附く。久しくして燕は翼が成つた小雛と飛去り、海人がその時期に拾ひ取るのである。故に燕窩といふ。事實さうだとすれば形狀、功用、時候、族類、倶に信ずべきものがある。

○嶺南雜記――燕窩には數種あつて、日本では蔬菜として僧に供養する。これは海燕が食ふ海邊の蟲であつて、蟲には背に化けない筋があるので、それを復た吐出して窩とし、海山石壁の上に綴つてある。土人が攀ぢ登つてそれを取るのだ。春取つたものは白く、夏取つたものは黃である。秋、冬は取られない。取れば燕の棲むところがなく、凍死して翌年は窩が無くなる。

○香祖筆記――燕窩は紫色のものが尤も佳し。

○崖州志――崖州海中の石島に玳瑁山といふがある。その洞穴はみな燕の巢で、燕の大なるものは烏ほどあり、魚を啖つて吐いた涎沫を冬期退毛の食料に備へる。土が皮衣、皮帽で炬を持つてそれを探し取るのだが、燕が驚いて人を撲つために、老人や力の弱いものは崖から落されて死ぬことがある。故に多量に收獲するものも

あれば空手にして返るものもある。これが燕窩の菜となるのだ。

○粤錄——海濱の石上にある海粉は積結して苔のやうだ。燕がそれを啄み食ひ、吐出して窩を作り、巖壁の間に纍纍たるものである。島人はその秋燕が去るを俟つて、長竿に鏟を著けて取る。海粉は性寒であるが、燕に呑吐されたものは暖である。海粉は味鹹いが、燕に呑吐されたものは甘である。その形質が盡く化してゐるところから痰を淸し、胃を開くといふことだ。凡そ烏、白の二色であつて、紅色のものは得難い。蓋し燕は火に屬し、紅色なるものは尤その精液である。一名を燕蔬といふ。その物が草木の不足を補するのだから蔬といつたのだ。楡肉は北に產し、燕窩は南に產し、いづれも蔬である。

○宦遊筆記——燕窩は南海、日本諸國に產する。春期中に取つたものは色白くして上品であり、秋期中に取つたものは色黃にして次位にある。一種微黑にして毛の多いものは揀擇して遺したものだが、價はやはり安くない。怯症の人が久服すれば、やはり肺を潤し、嗽を止めるの功が參、苓と等しい。

○査浦輯聞——南燕が海外の水邊に歸るときは、容易にその地へ到達されぬの

で、小魚を啄んでその肉で窩を作り、それを口に啣んで飛ぶ。飛び倦むとその窩を水中に投じてその上に棲止し、少し息むと復た啣んで飛ぶのである。故に東南風が吹くと近海の岸へ漂著するので、人がそれを取るのである。

○阮葵生茶餘客話――許青巖松佶方伯が予に語つた話に、燕窩は海島中の窮巖、邃谷に産し、足力や繩、竿などの屆かぬ處にあるので、船舶商人は善く人間の意志を解する小猿を飼つてその山島へ往き、小布嚢を猿に負せて縱してやる。すると木に升り深巖を攀ぢて盡く嚢中に剝塞して歸つて來る。初め猿をそのまま縱してやると、食物がないために三四日で返つて來るので、商人はその嚢へ果餌を充て、遠方へ往つても饑ゑぬやうにしてやる。拙な猿を出してやると、嚢中に剝塞して歸つても、嚢を開いて見ると數片に過ぎぬことがある。それは嚢中に果餌が滿ちてゐて入れる餘地がなかつたのだ。黠いものは果餌を出して岩穴などへ入れ、張り切れるほどに剝塞して嚢中に盡く燕窩を滿てて來るものだ。その嚢を空けて復た出してやると尤も便捷に働いて來る。猿一頭數百金に値する收獲を得て、拙なるものに數倍するさうだ。許謹齋黃門は、毎朝起きると蕉猿、燕窩一巨觥で融軟するを度として

食ひ、他人はみな生で食ふから終日排尿しないのだといつてゐたといふ。

味甘く淡し、平である。大いに肺陰を養ひ、痰を化し、嗽を止め、補して能く淸し、調理を爲す。虛損、勞瘵の聖藥である。一切の病の肺虛に由つて淸肅し下行し能はぬものには、これを用ゐればいづれも治し得る。胃氣を開き、勞痢を已し、小兒を益す、痘疹には煎藥に入れ、或は單煮して汁を服するがよし。

○從新に云く、今一般にそれで粥を煮、或は雞汁で煮るが、口當りは甚だよいけれども、その淸補の本性を亂るものだ。痰を已し得さうなことはあるまい。氷糖と共に煎じるものもあるが、それは甘くして壅する。肺金を助けて淸肅、下行しさうなことはあるまい。

○物理小識——燕窩は能く小便數を止める。

逢原に云く、甘し、平にして毒なし。能く金水をして腎氣を相生ぜしめ、上に肺に滋して胃氣もまた適當を得て安かになる。食品中での最も馴良なものである。惜いかな、本草に收載されず、方書に用ゐてあることが罕だ。今は一般にこれで虛勞の咳吐紅痰を調補し、氷糖と共に煮て食ひ、往往にして效を獲てゐるが、然した

だ病勢の初、淺の者ならば宜いであらうが、陰火が方に盛にして血逆上奔するものには用ゐても役に立たぬであらう。何となれば、それでは幽柔で剛毅な力がないからだ。

○張石頑云く、暴に起つた咳嗽吐血で乍ち止むには、氷糖と燕窩茶とを共に煮て連服する。その肺、胃を平補するを取るのであつて患を止截するのではない。ただ胃中に痰濕あるものだけは嘔氣を催すものだ。それはこの物が甜膩で膈に戀するからである。

○食物宜忌に云く、陽を壯にし、氣を益し、中を和し、胃を開き、精を添へ、髓を補し、肺を潤ほし、久瀉を止め、痰涎を消す。

○嶺南雜記――紅色のものは血痢を治す。梨を入れ氷糖を加へて蒸して食へば膈痰を治す。

何惠川云く、翻胃久吐は、人乳を服し、多く燕窩を吃つて癒えたものがある。

【老年の痰喘】文堂集驗方――秋白梨一箇を心を去つて燕窩一錢を入れ、先づ滾水で泡してまた氷糖一錢を入れ、蒸熟して毎日早朝に服す。間斷してはならぬ。神效

がある。

【噤口痢】救生苦海――白燕窩二錢、人參四分、氷七分を隔湯で頓に熟し、徐徐に食ふ。立ろに效がある。

素燕窩 月湖筆藪――近頃の精進料理中に盛に行はれる素燕窩といふ一種のものは、寗波の洋行に頗る多い。形は白くして細く長く、空心、虛軟なものだ。さながら食舖中の饊子のやうで細く、七八寸から一尺ほどの不揃なもので、一見したところ晶瑩だが、握つて見ると輕虛だ。三十餘本づつを一束にしてある。料理人がそれを買つて來て、湯を沃ぐと起脹して蕤蕤然として凝白し、官燕に類してゐる。精進料理の材料として珍品である。食つてはやはり淡くして味が少い。何物で製造したものか判らないが、或は、糯粉、山穀で作るもので、その證據には沸湯で反つて脆美になるともいひ、或は、銅、鉛の苗で、海外の深山に產し、これを食へば目を明にするもので、近頃始めてその有用なことが知られたともいふ。事實の眞否は判らないが、附記して後考に俟つ。

○北硯食規にある素燕窩の調理法――先づ溫水に入れて一囘盪して腰を伸し、直

ちに滾らして冷した水に浸し入れて料となるを俟ち、菜を配して別鍋に齊集して製し、適當な笊籬で燕窩を撈出し、笊籬の上から滾湯で二三遍淋して用ゐる。軟で糊らなくなる。それを拌ぜ燜いて用ゐる。

烟草の中毒を解す

石燕

粤語——西樵の巖穴中に產する。大いさ乳燕ほどで、足が翼の末に生えてゐる。綱目には、石燕の條に日華子本草を引いたが、疳を治するの說がない。現に廣地方ではこれを用ゐて頗る效驗を得てゐるから補記して置く。

兒疳を治す。小兒の羸瘦には、取つて食へば癒える。諺に、嬰兒が瘦せるときは石轂を探すといふはこの物のことだ。

蝙蝠腦

李氏蝠腦丸中に用ゐてある。癰疽內陷を治し、これを服すれば能く毒をして攻心

せしめない。

石鉮

張氏日鈔――これは大鵬の精である。鵬は獨運のもので𪃹がない。海が靜で波のない日に、下に映る影を見て𪃹とする。その精が溢出して地上に墮ちたものを土鉮といひ、木上のものを木鉮といふ。ただ石上のものだけがその本性を失はずして最も佳し。或は水中に墮してあるとき、婦人が衣を袒いで水に投ずると、自ら能く躍り出る。

按ずるに、石鉮なるものは愼恤膠の類のものである。

酒に浸して服すれば、陽を壯にし、人をして子有らしめる　薑酒を以てこれを解す。

鸕鷀涎　蛋

鸕鷀は、形は鷀のやうだが色が黑くして面が紅い。俗に摸魚公と呼ぶ。水鄕の人

家では多くこれを養つて魚を捕る。十月後に狗肉で飼へば身が煖で寒を畏れず、氷を破つて水に入れても㾗死しない。

腎咳を治す。俗に頓嗆と呼ぶもので、小腹下から逆上して咳し、連嗽數十聲にして少し止んでまた甚しく作り、或は咳が發すると必ず嘔して兩脇に牽掣し、涕、涙みな出て、數月に亙つて癒えぬものである。鸕鷀涎に滾水を沖して服す。咽を下れば止まる。

蛋　墮胎せんとするには、一箇を白水で煮て服す。胎は化して血水となり、小便から出る。多きも二服にして效驗を奏せぬはない。

翠鳥舌

翠鳥、即ち魚翠である。その舌は大きくして用ゐられる。綱目には、魚狗の條下に、ただその肉は魚骨哽を治するといひ、翡翠を附記して、また方書にはこのものは用ゐてないが、その功效は大約相同じといつたに止まるが、此にその舌の功用を補記して置く。

【針頭風】集聽——翠鳥舌一個を桐油に浸して曬乾(しやかん)し、また浸しまた曬して三稜針のやうに硬くし、病の發(おこ)つたとき、その鳥舌で頭上に亂針すれば癒える。

白[衣+鳥]雞

珍異藥品——首に文(もん)があり、翼が白く、足が黄である。

嗌痛(えきつう)を治す。

鬱雞

珍異藥品——廣中に產する。

〇孫硤川云く、この物は山中に在つて多く鬱金の苗を食ふものだ 故に肉が鬆脆(しようぜい)である。

鬱を解し、結氣を散ずる。

豁雞

廣中に產する。頭は雞で啄が烏、色は黃で腹の毛は純黑、尾は長く下垂し、鳴聲は豁豁（くわつくわつ）といふ。性蛇を嗜み、その子を哺するとき、雛の兩足を折つて蛇で飼ふと三日にして足が故（もと）に復する。屢〻折つても屢〻復する。捕つて食へば能く骨節折傷を治す。

雪雞

西方の邊境に產し、千百羣を成して雪中に棲止する。西域聞見錄——喀什噶爾（かしかる）には雪雞が羣飛してゐる。極めて肥美なもので、一般にそれを食物とする。ただ性が燥なだけだ。藥に入れるには雄が良し。丹田を煖め、元陽を壯にし、一切の積冷、陰寒、痼癖の疾を除くに雪蓮に比較して尤も效がある。

洋鴨

朱排山柑園小識——洋鴨（やうあふ）の種は海洋から出たもので、形は鴨のやうで冠が紅く、

羽が羣り、馴れるもので善く飛ぶ。雄は重さ十觔に達するものがあるが、雌は普通である。その性は淫なるもので、雌雄が一日に必ず四五回交はる。故に房中術にこれを用ゐる。卵は大いさ鵞子ほどで、味は極めて美である。母雞に伏させると約一个月餘で雛が出る。雛は極めて成長し易い。

陽道を助け、腰膝を健にし、命門を補し、水臟を煖める。

烏鴉膽

これは慈烏の膽であつて、浙東に最も多い。全體が肥黑で大きく、所在に多くゐる。予の門人奉化の徐朋圭は白巖に居るが、その地は山僻徑幽、古木叢雜せる處で、その語るところに據ると、その地方には鴉膽を取る者があつて、その者の話に、烏鴉の膽汁は晝は身、目に散注してゐるので、精が聚つて能く烟霄の外の物を見るが、夜は汁が膽に歸するものだといふ。膽を取る方法は、必ず夜間睡つてゐて少しも物を覺らぬ時を伺ひ、利刀でその頭を斷り、急に腹を剖いて取る。膽汁は完全にあつて漏溢しない。然る後に線で穿つて陰乾したものを藥に入れて用ゐる。もしこれを

取る方法が適當でないか、或は鵜に驚き覺められると、縦令殺してその膽を取つて見ても、やはり只の空皮で、用ゐるに堪へる汁がないといふことだ。

目を明にし、瞽を開くの功は空青に勝る。青盲に點ければ最も效驗がある。藤黄の毒を解す。

【爛弦風眼、及び翳障】不藥良方——烏鴉膽を點ければ癒える。

鵜毛

屎　涎　蛋殼　腿骨　喉管

綱目では、鵜の條下にその毛を記載して、射工の毒を治し、氣を通じ、痼を辟け、噎を開くといひ、その屎は小兒の鵞口を治す。蒼鵞のものは蟲蛇咬に傅けるがよしといつたが、實は、毛は癰毒を治し、屎は更に犬咬を治するものだ。悉く補つて置く。

【癰毒を治す】集驗方——鵞毛を灰に煅いて一兩、明礬二兩を研末し、麪糊で丸にし、二錢づつを好酒で服す。

【大麻風】赤水元珠の蔘毛丸――大麻風を治するに神效がある。苦蔘一觔、鵞毛八兩を煆いて性を存して末にし、陳米糊で桐子大の丸にし、一日二回、五十丸づつを酒で送下する。

【神功至寶丹】王秋泉家傳秘方――專ら男女の溜膿肥瘡、膿窠瘡、膿梨頭、遍身風癩、癮疹、疥癬で非常に瘙癢するもの、麻木不仁、諸風で手、足の酸痛するもの、皮膚の破爛、陰囊の極端に癢きもの、幷に婦人の陰瘡濕癢を治す。酒で丸にし、散にし、擦藥にし、洗貼し、神の如くである。病の上、下に隨つて茶、湯で送下し、一日に二回進め、暴怒、房勞、炙、煿、發毒の物を戒める。苦蔘一觔を末にし、鵞毛を香油で炒つて性を存して六兩、右を黃米糊で丸にして硃砂を衣にする。この方は元珠で大麻風を治するに用ゐてあるものと大同小異だが、竝に存して置く。

按ずるに、鵞の白きは能く風を疎す。瀕湖は、その氣、味倶に厚く、風を發し、瘡を發することこれより甚しきはなしとし、韓悉の醫通に、風を疎すとしてあるを駁して大なる悞だといつたが、何ぞ知らん、鵞は能く瘡を發し、濕を生じ、火熏せるものは幷に火毒、宿疾を發するの害は如何にもあるに相違ないが、風を疎す

るの功はやはり盡く誣ゆべきでない。その毛と肉とに至つては性尤も同じくない。本經逢原に、昔人が癘風を治した方中に、純白の鵞の全身の毛、及び嘴、足の皮と肫、肝の内皮とを取り、固濟して灰に煆いて性を存し、風藥を和するに用ゐてある。風藥の嚮導としたのである。然してその一處をも遺してはならないもので、一處を遺せば癒し得ない。又、雜色のもの用ゐてはならぬ。もし一處でも色の蒼いところがあつたものならば、風が癒えて後にその部分の肌膚の色が黒くなるといつてある。正にその疏、利して燥せず、風藥の熯烈を和する點を取つたものであつて、蒼色のものを用ゐぬのは、純白の鵞が無毒だからである。

【絶胎方】保和堂祕方――血管鵞毛を灰に燒き、百草霜と各一錢を用ゐ、行經後に酒で調へて服す。終身孕まない。○又、周氏家寶方――鵞毛一把を煆き、細茶の煎湯で行經後に服す。永く生まない。――この二方は存しては置くが輕輕しく用ゐてはならぬ――

寶生論にある打を受けて痛まぬ法。血管鵞毛七根、地龍七條を煆き、乳香、白蠟と共に丸にし、好酒で送下する。

【瘰癧の初起を治す】傳信方――白鵞の大なるもの二羽から全身の毛翎、竝に口、

脚の黃皮を取り、新瓦で焙じ焦し、末にして十服に分け、毎日食後に服す。全部を服すれば癒える。

【腫毒を治す】救生苦海――血管鵞毛一握を銅鍋で炒焦し、腐皮で包裹して酒で呑下す。直ちに初起のものを內消して效がある。

○諸腫毒の甚しく痛むもの、膿あるをば潰し、膿なきをば消する。鵞毛を灰に燒いて一兩、雄黃三錢、川烏、草烏各一錢半を用ゐ、黃蠟を鎔化して前の藥を入れ、丸にして一錢づつを好酒で送下する。(嚴氏方)

【諸毒內消方】吳涵宇――鵞毛二箇を炒り、蜈蚣十條を醋で炒り、穿山甲一兩を炒り、殭蠶一兩を炒り、全蝎五錢を洗ひ、廣膠二兩を炒り、桑黃二兩を炒り、羊角屑二兩を炒り、共に末にし、三錢づつを砂糖で調へて好酒で服す。醉ふを以て度とする。

【發背疔瘡、對口風毒】醫宗彙編――穿山甲、蛇蛻、蟬退、蜈蚣を俱に末にし、鵞毛一羽分の毛を灰に燒いて性を存し、全蝎、血管雞毛の翅二箇を灰に燒き、人指甲を十分の一用ゐ、敗龜板一箇を殭蠶と俱に末にし、一錢づつを酒で服す。

【悞つて銅錢、及び鈎線を呑みたるもの】慈惠方——鵞毛一錢を灰に焼き、磁石、皂角子を火で煆き、象牙一錢を焼いて性を存して末にし、五錢づつを新汲水で服す。

【艾火帶】乃ち灸火の傷。爛痛して忍び難きものである。同壽錄——雉雞毛を鵞毛と共に灰に焼いて敷けば效がある。

【喉蝨癬】傳信方——鵞毛灰三分、兒茶二錢、牛黄三厘、雄黄一錢、人中白一錢半を煆いて性を存し、もし深く吃ひ入りたるには、珍珠を煆いて性を存して一分を加へて末にし、先づ生桐油で一回探刷して後に藥を吹入る。臙礬を加へるが更に妙である。

鵞屎　救生苦海——犬咬を治す。鵞屎を敷けば爛痛せぬ。

鵞涎　綱目には、ただ咽喉穀賊を治することを記載したに止まるが、現に一般に小兒の鵞口瘡を治して甚だ效がある。

鵞蛋殼　急救方——癰疽の頭なきには、新生鵞蛋の殼を灰に煆いて性を存して末にし、醋で調へて敷く　立ろに膿血を出して妙である。

鵞腿骨　奇效方——犬傷の日久しくして發したるものには、鵞腿脡骨を煆いて性

を存し、研末して摻る。

鷺喉管　家寶方——喉症を治す。鷺喉の氣管一箇を陰陽瓦で黄色に炙き、氷片一分と共に細末にして吹く。二三回で癒える。

【赤、白帶を治す】家寶方——鷺の水喉管を取り、煆いて性を存して研末し、酒で調へて就寢時に服す。

鷹吐毛

鷹條

百草鏡——鷹は、毎日雀を食ふとき毛も共に食ふが、肉は化けるが毛は化けず、聚つて茨實ほどの一團に成るを翌朝吐出する。それを取收めて藥に入れる。綱目には鷹毛はあるが吐毛はないから補記して置く。

○按ずるに、鷹は西方兌金の氣を稟けたもので、その性は猛烈にして竄捷である。故に余居士はその頭を以て眩運を治し、王燾はその糞を以て食哽を治した。いづれもその庚辛の鋭氣を得て一往無滯なるを取つたものだ。反胃の症は食つて復た

吐く。胃に久積して運化することが不能なために旋て出るのであつて、概して憂鬱に由るものが多いのである。この物を取るは復吐の意を取り、又、その爽猛の性を得たるを取るのであつて、その治療上の關係は精微なものである。

反胃を治するに、煆いて性を存して研る。

醫方集聽――査將軍家傳の噎膈方――牙鳥灑出毛肘を用ゐる。卽ち鷹の吐いた鳥毛であつて、七箇を要する。地に落してはならない。布で受けて棚の上に置き、それを微火で熯燥し、末にして服して營内する。凡そ毛肘を喂ふはただ午後だけで、翌日は天明に吐出するものだから最も得易い。肘は地に落してはならぬもので、地上に落せば效驗がなくなる。

鷹條　本經逢原に云く、鷹屎中のまだ消化し盡きぬ毛を鷹條といふ。陰丹、陽丹に入れて用ゐるは、ただその翮の善く脫するを取つて、以て脫し難きの病を治するのみでなく、幷に屎中の未だ化せぬ羽を取つて、以て目中の未だ脫せぬ翳を消するのであつて、妙用と謂ふべきである。

雄雞卵

茅崑來云く、雞はもと南方積陽の象であつて、卦に於ては巽である。五更の時刻は日が巽の方位に臨むから鳴くのである。凡そ鳥は、雌が卵を生んで雞は生まないが、ただ雞だけは雄のものが間々また卵を生む。これは陽極つて陰これに乘ずるのである。その卵は雌雞の卵よりやや小さく、殼は石のやうに堅い。殼の色の微紅なるものを藥に入れて用ゐる。胎を安じ、痘を稀にするものである。

○王椷秋燈叢話――古北口叭噠嶺のある喇嗎が、巡檢張某に『雄雞卵を買つて來てもらひたい』といつた。張は笑つて『雄雞が卵を生むわけがあらうか、それは六ヶ敷い話だ』といふと、喇嗎は『さうでない。俗にさういふことを言ふのだから、その物があるに相違ない。兎も角探したら手に入るだらう』いふ。張も當はなかつたがそれを引受けて、その部下の使役人にその事を話して見ると、使役人が『この前の村の民家で飼つてゐた雞が、續けざまに卵を三箇生んだので、村民共は不祥なものだらうと評判してゐるが、その家の女房は珍らしがつて藏つてゐるさうだ』といつた

そこでその使役人をやつて取寄せ、それを喇嗎に送ると、その一箇を收めて、代價として五十金を出した。張が何に用ゐるのかを詢ねると、これは能く眼疾を醫するもので、年久しき瞽者もその汁を得て點けると直ちに明を復すること空靑と同じだといつた。

○陳藏器本草——現に雞に白臺といふがある。卵のやうで硬く、白があつて黃がない。これは牡雞が生んだもので、父公臺と名けるものだといふ。

二申野錄——成仁二十三年、吳縣の湯惟信の家の雄雞が卵を生んだ。

平湖縣志——萬曆四十八年四月、施太史の家の公雞が子を生んだ。形は雀卵ほどで色は紫だつた。

史異纂——天啓二年、陝の民王進榜の家の白雄雞が卵を生んだ。

三岡識畧——壬申二月二十九日、提標左營韋元鼎の官舍の雄雞が卵を續けて二箇生んだ。

述異記——康熙甲戌十二月、松江の吳南林の家の雄雞が卵を生んだ。大いさは鴿蛋ほどで、殼が甚だ堅く厚く、椎で破つて見るとやはり黃、白があつて、白は凝脂

のやうで散らず、黄は赤色を帶びてゐた。

〇質直談耳――嘉定湖南村の村民錢嵩の家の雄雞が卵を生んだ。雌と異るところはなかつた。乾隆壬寅の歳の夏期の事である。

〇紀曉嵐先生云く、雄雞の卵は大いさ指の端ほどで、形は閩中の落花生に似て、正圓にはなつてゐない。外には斑點があり、日に向けて映して見ると、その中が深紅で琥珀のやうだ。目眚に點けて甚だ效がある。德少司空成、汪副憲承霈はいづれも嘗てこの物で藥を合せた。然し得難いもので、一箇の値段が十金する。阿少司農廸斯は、これは睹ることの罕なものではあるが、やはり人工で作れるものだ。肥壯な雄雞を籠に閉込め、群くの雌を籠の外を繞つて縱ち、相近けても交尾し得ぬやうにすると、久しくして精氣が團結して自ら能く卵と成るものだといつたが、これはやはり道理上さうあることだらう。然し雞は巽風の氣を稟るものだから、これを食へば瘡毒を發する。その卵は盛陽が洩れずして鬱積して成り、自ら必らず熱を蘊むわけである。如何なるわけで反つて目を明にするものか判らない。又、本草にも未だ記載されず、醫經にも未だ說かれてない。何を根據としてその能く目を明かにすること

が判つたものであらうか。その理由が明かでない。汪副憲は、蛇卵をその物として欺き賣るものがあるが、ただ日に映して見て紅くないものならば僞物だから注意を要するといつた。

敍按ずるに、諸書に記載された雄雞が卵を生むといふことは、古からあることで、元來物に異つた據があるわけではない。陳藏器は、白があつて黄がないといつたが、述異記の記載では、黄もあり、白もある。想ふに、本來間氣から生れるので、その形色にもやはり一定したものはないであらう。乾隆庚戌の歲、臨安の慈聖寺に放生があつて、その際雄雞が突然卵を生み、一日に一箇づつ同じやうに產んで十日餘り續いたので、世間では奇怪なことに思つたのであつた。その卵はやや小さく、紫色で殼が堅かつた。ある錫器製造者がそれを買つて行つたので、予はその時、臨安に滯在してゐて、その話を聞いて買求めやうとしたときは已に無かつた。錫器製造者は徽の人だつたが、やはり、その卵の白が藥に入れられるものだから、買つて鄉里へ歸るのだといつた。然しこの物はまた藥に入れられるだけではない。李懷白先生は、曾て喇嘛が黑經を誦むに雄雞蛋を用ゐるのを見た。川中の鬼師には雄雞蛋を用ゐて

禳ひを行ふものがある、白蓮教ではまたこれを需めて魘迷術を解す。現に一般人は徒にそれを奇怪なものとしてのみ怪しげに吹聽するが、實は天のこの物を生ずるは確に世間の用たらしめるためなのであるといつた。

胎を安じ、痘を稀にし、瞽を開く。

獸部

獅子油　血　糞

辛し、溫にして毒あり、色の微黑なるが眞物であつて、善く經絡に透る。凡そ用ゐるには多くしてはならない。

○沈良士云く、指甲上に塗つて見て涼が指甲を透るものが眞物である。又、別の方法では、黍粒ほどを沸湯に入れると湯が直ちに沸かなくなるものが眞物である。

○逢原に云く、獅は百獸の長であつて、性最も馴れ難く、一たび吼ゆれば百獸が辟易する。爾雅には『その食は虎、豹』といつてある。熊太古は、その乳を牛、羊、馬の乳の中に入れるといづれも化して水と成る。西域地方ではこれを捕獲して取つた油を朝庭へ入貢し、それを宮女達が衣垢の滌除に使用する。又、能く紙上の墨跡を去るもので、少量を刮つて隔紙で熨すと脫れるといつた。予は嘗て試みに用ゐて見たが、垢は去るけれども、衣類が毀れ易くなり、紙は脆くなり易く。僅に一時の用

に供するだけだ、遠隔地の物産として方藥に用ゐることは罕である。近世の醫者はこれを噎膈症を治するに用ゐるが、蓋し噎膈はいづれも鬱疾の瘀積から起るもので、これを用ゐるは痰を滌ふの意味である。試驗して見て效果があるところから、方家は爭つて奇物となしてゐるが、但し性は最も猛利で、力が能く胎を墮す。妊婦は用ゐることを忌む。象油もやはり能く垢を去り痰を滌ふが、但し墨の跡は去れないだけだ。

○椿園聞見錄——溫都斯坦は西域の一大囘國であつて、葉爾羌から西南行程百日にして到達し得る。その國の西隅には周圍數千里の大澤があつて、澤中に周圍千里を逾える山があり、萬峰聳峙して高く雲天に入つてゐる。或は、世界第一の高山だといふことだ。名を牽各里麻膽達喇斯といふ。山中には獅子を產し、新月の皎潔なるときに雛を負ふて山中に往來してゐる。頭が大きくして毛が虬れ、尾の形は帚のやう、黃質、黑章で虎の皮の如く、身長は六七尺ある。時に山の絕頂に登り、月を望んで垂涎し、咆哮、跳擲し、猛飛して月を呑まんとし、八九里、十餘里も飛び去つて山谷中に墜死することがある。その國人は獅子を飼養ふことが上流の格式とな

つてゐて、毎年月の明な秋になると、その酋長が人を使つて獅子を取らせ、精鐵で作つた太さ瓨(こう)ほどの柱で周圍を蜜布層遮した中にそれを畜ひ、餌には牛を與へる。時に吼えると雷霆の如く、滿城震動して人畜が慴れ戰(をのの)く。これを取る方法は、最も手練な鐵砲の射手を擇び、地に阱(あな)を掘つた中に匿(かく)れてゐて、雛を負ふて來るのを狙つて不意に發砲し、斃してその雛を取るのである。しかも一發で中らないならば、山を抛ち石を裂くの凄慘を惹起して、人間は一たまりもない。

○張蓑漪はこの油を所有してゐて、これを蒸つて挑(あ)げて見ると一二尺絲に伸びて斷れないものだ。他の油ではさうはならぬといつた。

○陳海曙は嘗て京師詰めをしたとき、簡親王の邸で獅油を見たが、石のやうに堅く、さながら雞卵のやうで、白潔愛すべきものだつたといふ。

朱排山柑園小識――獅子油は白膩(はくじ)なること猪肪の如く、氣、味倶に薄く、小便を利す。一般に小便不通には、腹脹、莖痛して病の危急に在るものでも、酒、或は白湯で三四釐、或は半分を送下すれば通ずる。嘗て一乞丐(きつかい)が暑熱を受けたために小便不通となり、毎月一回發つては二三日苦み、後には割れるやうに莖痛して忍び難く、

屢〻縊死しようと企てたが、ある人が獅油少量を與へると片刻にして通じた。奏效の速なることこれに逾えるものはない。而るに本草にその功用の記錄されてないのは不思議だが、これは當時まだ用ゐることを知らなかつたのではあるまいか。ただ虛祕するものには斟酌して用ゐねばならぬもののやうに思はれる。

○敏按ずるに、獅油は性が最も猛烈なもので、內服には就中單用されない。更に多服してはならない。嘉慶元年三月、予の友人邵莱は獅油少量を手に入れ、病のときそれを服用しようとしてゐると、また果さぬうちに、同鄕のある者が持ち出してある人に賣り、多額の金を利得した。ところが買つたその人が黍子半粒ほどを服すると、その夜半に死んで了つた。同鄕人も罪を懼れて水に投じて自殺した。蓋し外用は妨ないが、內服には尤も愼重な警戒を要する。人の腸、胃は甚だ弱いもので、峻利なる攻劑に任へないからだ。

熱結を消し、膈、大、小便不通を治す。救生苦海――獅油を用ゐ、酒で二三釐を服す。自ら效がある。

獅血　沈雲將食物會纂――獅血は百蟲を殺す。これを燒けば鬼氣を去る。

獅糞　王沂堂は獅糞一段を所藏し、鐵匣に盛つて四圍を鐵屑で養つてゐた。その形は至つて堅く鐵石のやうで、磨ると紅色をなした。これは鐵屑で養はねば朽爛し易いといふことだつた。

一切の腿足、下部の惡瘡を治す。年久しく癒えぬものは、これを塗れば痂して落ちる。

象糞

象白　尾毛

按ずるに、象には家、野の二種あつて、京師のものは特に充てられた飼料を食ひ、滇、廣の山に産するものは竹木、雜草を食ふ。藥に入れるには野象糞を良しとする。京師の象の糞は皮革工場でみな多く取る。黄貂、黄狼に濺ぐと毛が漆のやうに黒くなるものだ。綱目には、象の條下に凡そ牙、肉、睛、皮、膽、骨、いづれも藥に入れるとしたが、その糞に及ばなかつたから補記して置く。

鵞掌風を治す　象糞を燒いて熏すれば自ら癒える。

〔起死囘生散〕李文炳經驗廣集——痘瘡を治す。七八日に至つて忽然變黑し、腹内に收入し、全身を抓破し、吭喘し、死の須臾にあるにはこれを服す。新なるものから別に發出して立ろに囘生する。當歸、川芎、白芍、生地、升麻、紅花、上陷には白芷を加へ、下陷には牛膝を加へ、全身黑陷には麻黃を加へ、象糞を少し炒つて、一歲の小兒には二錢、大兒には三五錢までを用ゐる。右を剉んで一劑とし、酒、水各半で煎じて服す。新になつて發出する。脚下の黑疔をば七八日に至つて針で排去し、太乙膏を貼れば毒を拔出する。連進二三服する。

〔瘟疹〕良朋彙集方——小兒、大人が、瘟疹が出て囘つて心胸に在り、喘を作し、發燒するには、象糞八錢、升麻二錢を水二鍾で一鍾に煎じて服す。卽刻透出する。

象白　これは象が水中で交尾して、その精が水面に浮んだものである。象番人が磁餅にそれを收貯する。藥に入れて顏に敷けば皺が出ない。また房中藥にも用ゐられる。

象尾毛　通雅に云く、今は一般に牙を剔つた杖を極めて貴重視するが、象の尾は火を去るものだといふ。

犴血

孫含懿云く、ある行商人が四川から犴血を持つて來て言ふには、この獸は星禽であつて、天上の井宿が五百年に一回世に降つて人を濟ふのだ。その降るのは必ず蜀だけで、降る三日前には天が大風を起し、家屋を振動し、樹木を拔倒す。これは犴を降す風なのである。左右の村落の住民は、それで犴が必ず降ることを知り、悉く他へ轉居し、鐵工に賴んで蓮蓼箭といふものを造る。それは鏃が橄欖のやうな形でその中を窪めてあり、鏃上には各〻名を刻んで記とする。當日犴の降るのを見ると、形は胡犬のやうで鱗があり、大いさは象に十倍し、首は必ず歲星の方に向ひ、蹲踞して動かない。土人はその後方から射るので、矢はその身に集つて猬のやうになり、三日の後にゐなくなる。そのとき地に遺した矢を村民が各〻その鐫んである名で見分けて持ち歸るので、何等の紛爭も起らない。その鏃頭には橄核ほどの一塊の血があつて、それが藥に入れられるのだ。土人はやはり甚だ珍寶としてゐるので、輕〻しくは賣らない　明の洪武の時に嘗て一回降つてから、今年まで殆ど四百年になる

ので、珍とするところの藥もやはり所有するものが罕にあつた。縉紳舊族に或は所有者があつても、やはり卞和の璧玉と同じやうに大切に寶藏されてゐるといふのである。

一切の陰疽、發背、一切の大毒を治す。凡そ癰疽の必死の症で救ふべき藥のなきものは、一釐づつを用ゐ、潰れたるには敷膏にして外貼し、未だ癒れぬには酒で調へて服す。一夕にして自ら癒える。癰等を治する藥と合せるとき、一觔に對して一分ばかりを加入すれば神の如くに奏效する。

醉虎

油膽脂

三岡識略——壬子正月初十日、福山の戍卒が一醉虎に遇つて、縛つて王大將軍の轅門に獻じた。將軍はその肉を剖いて郡の有力者達に贈つたのであつた。小兒がこれを食へば痘を稀にする。按ずるに、虎は、人と楊柳と、及び狗を食へばいづれも醉ふものである。

宦遊筆記所載の山間民の虎を捕獲する法に、虎は犬を嗜んで食ひ、食へば必ず醉ふ。人が酒に中るやうなものだ。虎は深谷、峻嶺に往來して時に拘はらぬので、その跡(あと)を尋ねることが困難だから、山民共は劣等な犬を山の凹處に縛つて置く、すると犬が嗥(ほ)えて已(や)まぬその聲を虎が聞きつけ、進んで來て存分にそれを食ひ、醉つて遠くへ行けなくなる。そのとき山民共は犬の血痕を蹈(たど)つて捕獲するのであつて、遁れられなくなつてゐる。これが醉虎を縛る法だとある。

主治は痘を稀にする。

虎油　物理小識――虎は一身の各部分みな藥に入れられるが、本草にはまだ虎油の功效の記載がない。予は獵師の家でその油を取つて、臘梨瘡に塗(つ)けて一二回で癒えた。また大麻瘋をも治し得る。

○藥性考――虎油は禿を療じ、狗咬傷、五痔下血に塗る。反胃(ほんゐ)には酒で嘗める。

虎腑　打傷の垂死なるを治す。飲食進まず、大小便通ぜぬは、瘀血が心に在るので命旦夕に在る。この方を用ゐるがよし。虎膽五分を外皮を去り、老黄酒を用ゐて碗内で研つて細末にし、茯苓(ぶくりやう)二錢を末にし、熱陳酒で調へて灌下する。それで死を

免れる。

虎脂　頭骨蓋を打砕したるを治する方。虎脂一兩を好熱酒に浸し、むらなく化するを俟つて服し、汗の出るを度とする。患處の靑いものは不治である。

【反胃】不藥良方――虎脂八兩を淸油一觔に一个月間浸し、密封して氣を洩らさぬやうにし、その油一兩に無灰酒一盞を入れて溫服し、瘥えるを度とする。油が盡きたときは再び添へる。

按ずるに、虎膽、虎脂は、綱目にはその用を記載したが、折傷に入れる料として用ゐることには言及しなかつた。この二方法は錫山華氏經驗錄から出たもので、いづれも屢〻試みて效があつた。故にその說を補して濟急の資とする。

鹿胎

乳餅　脛骨

瀕湖の綱目には、鹿の條に精、髓、筋、膽、胎糞、いづれも各〻備載してあるが、張璐の逢原には、別に鹿胎の一條を列して頗る詳細に辨說してある。採錄してその

遺を補ふ。

璐曰く、胎中の鹿は、その嘴、尾、蹄、跆の生ける鹿と異ならぬのが眞物である。その色が淡くして形の痩せたものは鹿胎であるが、色が深くして形の肥えたものならば麋胎であつて、能く眞陽を損するものだから誤用せぬやうに注意を要する。又、獐胎は鹿胎と相類するが、但だ色が皎白であり、且つその下唇が、鹿の上唇より長いやうにはなつてゐない。その他、雜獸の胎は鹿胎と總て相似てゐないもので、藥に入れるには眞物を取り、酥で黄に炙いて用ゐる。

氣味は甘温にして毒なし。鹿の性は陽を補し、精を益する。男子の眞元不足のものに適する。ただ茸、角、莖のみでなく胎を藥に入れるのであつて、全鹿丸は大劑の參、耆、桂、附に合せて大いに元陽を壯にする。それは胎は純陽が未だ散じないから天眞を補養し、少火を滋益するに宜き良劑となるのであるが、しかし必ず參、耆、河車などの物を佐とするが尤も發揮する方法なのである。もし平素虚寒する下元不足のものならば、六味丸中に入れるが精血を温補するの要藥であつて、桂、附の辛熱で陰を傷めるの患がない。但し十分注意して麋胎を誤用して反つて天元の陽

氣を傷はぬやうにせねばならぬ。

鹿乳餅　莒陰札記——孝豐の深山に鹿を產する。土人はその子を產む時期を計り、夜半その洞側に伺ひ寄る。鹿は子に授乳するは必ず五更の時刻で、授乳し畢ると洞を出て日暮に歸つて來る。每日ただ一回子鹿に乳を與へるだけで、子鹿はその乳を腹中で十二の小餠に結し、每一時に一餠を消化するのである。伺ひ寄つた土人は母鹿が洞を出るのを候つて乳鹿を抱へて歸り、腹を剖いて餠を取り、それを遠方へ珍藥として賣出すのであるが、價格は金と等しい。その餠は雲南棋子ほどの大いさで、色は微黃であるが、乾いたものは老黃色を作し、腥氣が最も烈しい。それを食へば大いに能く陰を强くし、命門の火衰を益する。老羸に最も宜し。怯弱、虛損を理し、痘漿を發し、婦人の乾血勞を通ずる。

鹿脛骨　綱目には、鹿の條に骨があつて全體を指してゐるが、脛骨には用法があることを聞かない。當今の醫界には斑龍散といふがあつて、純らその脛を取つて用ゐてある。因てその方を補載する。

[肌を生じ、口を收める]　救生苦海に用ゐてある斑龍散——鹿脛骨を取り、濕紙

で固く包んで灰火で煨き、黄脆になつて研れるを度とする。もし焦黑色になつては過性して用をなさぬ。大毒に摻れば肌を生ずること甚だ速である。

猴經

藥に入れて申紅と名ける。深山の羣猴の聚る處に極めて多い。探し採る者は草の間でこれを取るので、色が紫黑の塊で細草屑を夾んでゐる。これは母猴の月水の乾血だといふ。廣西のものが良し。

乾血勞を治す。

犬家胎糞

史長惺に、藥を服せずして眼に點けて汗を發する方がある。初生の男の胎糞を煉つて升し、氷、麝を加へて磁甖に收貯し、發汗の必要が生じたとき、男には左、女には右の乳で點けて臥せば汗が出る。本草には未載の事實である。小識に、犬家初生糞はいづれも合煉されるもので、必しも嬰、孩のものと定つてゐないとある。

猯油

猯、卽ち貒の字である。所在の山澤にあり、穴居して蟲、鼠を食ふものである。劉仲旭云く、北直の河堤の一帶に尤も多く、堤岸に穴を明けて居るので、最も堤防に患をなすものだ。河を守備する兵卒が多くこれを捕へる。一說に、猯は蟄に入る時に必ず蜂を食ひ、それで冬を過して饑ゑない。ある人が初冬にその蟄穴を發掘して貒を取り、腹を破つて見るとその肚胃中にはまだ蜂がゐて、貒の腹中は蜂に螫されるので厚さ數寸になつてゐた。或はこれで饑ゑないのだらうといふことだつたが、この說はやはり深く信じられない。堤防地の人民は猯脂を取つて多く炭坑へ賣る。地下燈を作るにはこの物以外では出來ないもので、他の油では地風に吹かれると吹滅えるが、ただ猯油で作つた燈だけは能く地風を禦ぐものだ。

膏中に入れて濕を拔くに神の如し。繆仲淳廣筆記――趙府膏藥中にこれを用ゐてある。

【頭上の白禿を治す】集驗――貒油を火で烤いて三四回擦れば癒える。もし年久

しいもので髪の生ぜぬ恐があるときは、枸杞子の煎湯を飲む。

【痔瘡】劉怡軒云く、一切の内、外痔には、猯油を塗れば立ろに効がある。

【欬血で胸中に哽噎し、怵怵として蟲の行くやうに覺ゆるもの】不藥良方――猪、獾油を油に入れて和して服す。或は下し、或は吐し、或は自消する。

海狗油

海狗は遼東、登州の海中に產する。即ち膃肭獸であつて、綱目には、膃肭臍を記載したがその油の功用には言及しなかつた。故に補記する。

○蓬萊李金什の話に、その地は登州の海口で、海狗を產し、皮は裘、帽になる。俗にその美なるを稱して海龍といふ。即ちこの物の腎が藥中の膃肭臍なのだ。土人は海狗を取ることを打狗といつてゐる。この物は晝夜海底に潛み、ただ孳乳の時期だけ島に登つて子を產み、やや大きくなると親子相率ゐて水に入るので、一般には取れない。必ず冬期の極めて凍る頃、海涯の水口が結氷して天が晴れると狗が氷上に羣り出て日光浴をするので、その氷上に臥してゐる時を候ひ、驟に水に入つて木

棍でその腰を撃つて取るのである。もしその時、氷が裂けるか、或は步履の音が聞えてはならぬので、その睡つてゐる時以外では得られない。さやうな次第で、每年打狗には水に墜ちて溺死するものが多いのであるが、利益を主とする人間はやはり生命を惜まないでそれに從事してゐる。

性熱であるが降つて善く消利し、三焦の濁逆の氣を治し、能く水臟の積寒、停飮を淸す。近海人の鰒魚、海參を取るを觀ると、その油を用ゐて海面に滴す。海水が淸んで底が見え、砂石が畢く見えるのだといふ。その性の分利するものなることが首肯される。

近頃ある人が關東からその油を持つて來たが、綠色で乾いた糊のやうであつた。皸瘃に塗れば直ちに癒え、翌年も再發せぬ。その性の熱烈なることが判る。

狐　麝

金沙江志——東川、昭通二府に産する。普通の麝香に比較して氣が尤も烈しい。これを佩れば邪を辟け、惡夢を絕ち、魘を定める。

獺糞

綱目には、獺の條にその屎を記載して、魚臍瘡、及び下痢を治すとしただけだが、實は瘤を消する功の有るものである。此に補記する。

王氏檢祕――瘤を消す。獺糞一兩、天南星三錢、麝香三錢を共に研末し、醋で調へて塗れば癒える。

狼脂

本經逢原に云く、狼は性風を追ふて逆行するものだ。故にその糞を燒けば烟が能く風に逆つて上る。燒灰を水で服すれば骨鯁を治す。それはその性が專ら逆行して阻滯なきものだからである。狼脂は風を摩するに第一位に推されるものだが、本草に記錄してないのはまた一の欠事である。按ずるに、周禮に『冬、狼を獻す』とあるは、その膏の聚るを取るのである。内則に『狼を食ふには腸を去る』とあつて、古代には食品としたものだ。綱目には、獸部の狼膏下に、瀕湖は僅に飲膳正要に據

つて、その能く燥を潤し、肌を澤にし、惡瘡に塗ることを記載しただけであるが、實はその大なる功用は能く風を驅り、逆結の氣を散ずることである。これを知らぬといふことはない。故に急に補記して置く。

風氣膏中に入れて、能く積久の風痺を去る。酒で調へて服すれば逆結の氣を散ずる。

山羊血

油　糞

常中丞筆記――山羊は平樂の山崖の間に生じ、能く峻坂を陟り、蹻捷飛ぶが如くである。その血は跌損傷、及び諸血症を治し得る。凡そ跌撲死者にして未だ絶氣せぬものは、一分ばかりを酒で調へて飮めば遂に甦り、神效立ろに現れる。ただ捕獲が甚だ困難なもので、人さへ見れば決驟して去り、非常に飈迅で、足力では到底追ひつけない。必ず繩網を草間に布いてその足を罥め、始めて能く生獲し得る。その心血を刺し取り、乾くを待てば凝結して塊と成り、遠方へ携帶し得るやうになる。

蓋し凡て血はみな凝滯を患ふるものだ。山羊は高きを踰え險を歷て旦夕休まないので、その血が活きてゐる。而して心を主と爲すものだから心血が最も良いのである。語に『流も汚れず、戶樞も蠹まぬ』といふが、これを觀て益〻信ぜられる。

○本經逢原に云く、山羊は滇、蜀の諸山中に產し、性は善く走逐し、鬪を好む。肉は能く冷勞、山嵐瘧痢、婦人の赤、白帶下を療ず。その心血は、瀕湖の綱目には記載がないが、苗人が血を取る法は、麋竹を通節に削つた利鋒で活きながら心血を刺し取る。乾したものが良し。割宰して取つたものは用ゐるに堪へない。

○柑園小識――山羊血は廣西の諸土郡に產する。山羊は羊に似て大きく、善く鬪ひ、能く絕壁に上り、每に高處に登つて足を失し、或は骨折することもあるが、少頃して故のやうになる。喜んで三七の苗を食ふ。その血は主として損傷を治するに極妙であつて、輕きものは數釐を服し、重きものも二三分を服す。心血を上とし、身血はそれに次ぐ。色黑く光があつて質の輕いものが眞物である。

○陸祚蕃粤西偶記――山羊血を試驗するには、雞血半盃に一粒を投じ、一夜過すと變じて水になり、或は久しく凝血した雞血一塊を山羊血に投入し、一夜過すと變

じて鮮血になるものならば眞物である。

〇瀕湖の綱目に、山羊、卽ち野羊であつて、一名羱羊といふ。今の家山羊ではないとあり、時珍は山羊の主治の條に於て、僅にその肉の功用を記載したが、油と血との用には及んでゐなかつた。此にいづれも附記して置く。

〇今一般に、乾血の塊になつたものを收得するには、必ず糯米で養ふ。それで久しく置いても枯れないといふ。

性は溫なり、味は鹹くして毒なし。逢原に云く、和傷、散血の神藥である。その跌撲損傷を治するには、單用し酒で服して醉を取る。醉が醒めればその骨が自ら續がる。每用一分ばかりに過ぎず、過服してはならない。元氣を耗傷せぬけれども、力が能く陰血を走散するものだ。然して患を受けた當初直ちに服するが效を得ること最も速だ。もし三五日を經過すれば血が凝り氣が滯つて治を濟さない。價は牛黃と等しく、心血はやはり得難い。滲血丹はこれを用ゐてあつて、眞に虛勞失血の續命丹である。

〇藥性考——山羊血は味鹹し。跌撲損傷、咯血、嘔衄、便溺諸血を療ず。能く血

を止め、瘀を消するには酒に和して服す。その皮を茵褥にすれば筋骨疼痛を癒す。角を火罐に作つて頭風を灸する。水に入れて一絲の散ぜぬものが眞物である。

【吐血】蔣莘田經驗方——就寢時に廣西の眞山羊血を用ゐ、三分づつを服すれば、能く血を引いて源に歸す。二三服に過ぎずしてその血は自ら止む。

【黎峒丸】跌打、及び一切の癰腫を治す。天竺黃八分、牛黃四分、氷片四錢、三七四錢、血竭四錢、兒茶四錢、麝香四分、沒藥四錢、阿魏二錢、雄黃二錢、藤黃四錢、孩兒骨一兩、山羊血を藤黃で製浸して藥に入れ、共に細末にし、煉蜜で龍眼大の丸にして陰乾し、外をば蠟を殼にして封固し、三白酒で服す。

【祝氏效方】山羊血は能く鮮菌、河魨の毒、傷損惡血を解す。痘內に漿がなくして起發せぬを治するには、集驗良方——眞山羊血三分を甜酒釀で調へて服す。痘漿が立ろに起る。

【太乙神鍼方】人參四兩、三七八兩、山羊血二兩、千年健一觔、鑽地風一觔、肉桂一觔、眞川椒一觔、乳香一觔、沒藥一觔、穿山甲半觔、小茴香一觔、蒼朮一觔、眞蘄艾四觔、甘草二觔、麝香四兩、防風四觔、以上を共に細末にし、綿紙一層、高方

紙三層を用ゐ、紙は寛さ裁尺二寸五分、長さ一尺二寸にし、藥末を薄くむらなくそれに鋪き、一針に約そ藥七八錢程度にし、それを緊く捲いて花炮のやうな形式にし、飽まで兩頭を堅實せしめ、紙で封固し、外を印花布で包み、面をばやはり齊整にして體裁を好くする。この針は能く一切の痛風寒濕、筋骨疼痛の諸症を治す。使用する時には針を火で焠き透し、或は穴道を按じ、或は痛處に在き、下には方寸の新紅布數層を襯けてその上に針を按ずる。若し火旺に布薄くして疼を覺えるときは、墊く布を數層多くする。但し針は必ず三四本必要で、一針が已に冷えたときは再び他の一針に易へ、七針を連進する。立ろに效驗を見はさぬはない。

【喉癬を治す】喉症には、ただこれを最とする。遲れて久しく經てば失音して救治し得なくなる。種福堂方——西牛黄一分、眞山羊二分、川連五分、血珀三分、氷片一分、硼砂一錢、青果核灰三分、燈草灰五分を共に細末にし、藥一茶匙づつを蜜一茶匙で調へ、舌尖上に置いて徐徐に嚥下する。一日五回、二个月で癒える。或は蜒蝣、梅灰を加へるが更に妙である。

【馬氏夾棍神方】吉雲旅抄——山左の馬家で賣つてゐる夾棍藥は極效の方である。

蚺蛇膽二錢、山羊血一錢半、琥珀一錢、大白頸地龍七條を泥を去り、珍珠三分、辰砂一錢、兒茶八分を用ゐ、金箔一帖を衣にする。細末にして蜜で桐子大の丸にして金箔を衣にし、一錢五分づつを好酒で服す。もし打夾せぬものは刀で皮を破れば藥が自ら出る。

【急心痛を治す】集驗方――山羊血一分を燒酒に化して服す。

【邪鬼に遇つて中てられたるとき】醫鈴――この症は陽氣衰へて陰甚しきもので、治するには急にその陽を補して正氣を存せねばならぬ。それで陰邪が自ら平らぐものだ。もし或は痰を治するもその通り、やはり意の如くなわけで、正を補するを本とする。人參二錢、當歸六錢、白朮一兩、菖蒲二錢、半夏三錢、白芥子三錢、丹參五錢、皂角刺五分、山羊血八分、附子一錢、この方は山羊血、皂角刺を用ゐてあつて、これは關を開くの聖品である。それで邪祟の惡路を通ずるのだ。半夏、白芥はその寒痰を消する。寒の侵すものが無ければ斷じて鬼に中らないものだ。大いに參を用ゐてその陽を扶けてあるので、陽生じて陰滅する、これは不易の理である。

【救絕仙丹】石室祕錄――この丹は專ら五絕、及び邪祟ある昏迷で一時卒倒するも

のを救ふ。いづれも灌(そそ)ぐがよく、それで起死回生する。實に神奇の極である。これは端午の日に修合するが宜く、急を濟(すく)ふために準備して置けば大いに世人を救へるものだ。山羊血三錢、菖蒲二錢、人參三錢、紅花一錢、皂刺一錢、製半夏三錢、蘇葉二錢、麝香一錢を各〻末にし、蜜で龍眼核大の丸にし、酒に化して服す。

敏按ずるに、山羊血は滇(てん)、黔(きん)、及び蜀のものを佳とする。その地の深山には三七苗、及び血を理し風を定める諸草が多く、山羊は毎(つね)にそれを食ふ。蠻峒の者は追逐して取るのであるが、山羊はもと迅躍して一刻も停らぬもので、その體血も頂から尾に貫いて終日旋運すること飛ぶが如くである。又、逐捕されるので躁性が頓發し、血は氣の運るに隨つて蹻捷(けうせふ)尤も甚しい。黎峒(れいどう)の蠻人は捕獲すると竹鎗をその心に刺し入れて血を取るので、これを用ゐるを上品とする。その血は條を成し、深紫で光があり、少量を水中に入れると自然に旋運して飛ぶやうである。蓋し矯捷の性がなほ存してゐるのだ。もし網で捕へ刀で剖(さ)いて取つたものならば、血色が黯滯(あんたい)し、水に入れてもやはり迅捷なわけに行かぬ。他省の產でも峒苗のもののやうに大勢で追逐し、そのものを上下に騰躍せしめて後にその心血を刺取(さしと)つたものならば、使用し

てやはり滇、黔の山羊血にやや次ぐものである。ただ今の各地で獲るところの山羊は、いづれも網を用ゐて取り、或は鎗で斃して後にその死血を刺取つて心血に僞充するので、力が微であり、性は緩である。更にまた他の血をこれに代へてあるものに至つては、尤も贋質に屬するもので無用である。故に現に市中には毎にこの物が多くあつて非常な高價を要求してゐるが、親しくその地を歴て實地を明瞭にしたものでなければ用ゐてはならない。

山羊油　張卿子祕方集驗――主心痛を治す。山羊油の水に落さぬものを荷葉で包裹し、風處に挂けて陰乾し、雨の著かぬやうにして用ゐる。この症のあつたときは、三五錢に熱酒を沖して服す。酒を飮まぬものには滾湯でもよし。幷に諸痛を治す。

按ずるに、文堂集驗に、主心痛には山羊血を用うとあり、その言ふところはこの方と同じだが、然し仔細にその文義を繹ねて見ると、「水に落さぬ」なる句があるところを見れば油を用ゐるので血ではない。文堂は誤つて油を血としたのだ。故に竝にこれを正して置く。南方にも山羊はゐるが、粤產のものの血の尤も迅捷なるに及ばない。

山羊糞　山羊糞を水粉と共に各一升を一夜浸して汁を絞り、頓に熱して正午に服すれば疳痢を治す。

祝西莽本草——山羊屎を灰に煆いたものは、潰爛を療じて肌を生ずる。

外科の口を收める藥に入れて用ゐる。祝氏效方の大棗丸——山羊屎を曬乾して鍋に入れ、炭に炒つて性を存して研末して收藏する。久爛に堪へず、將に內臟が見えんとするものがある每に、大棗を皮、核を去つて泥のやうに搗爛らして後、右の粉を入れて丸になるまでに搥き、每服四錢を黑棗湯で送下する。この物は大いに能く潰爛諸口を斂めて神效無比である。

【山蓮散】大なる活鯽魚一尾を腹を破つて雜を去り、山羊屎をその魚腹に塞實し、瓦上に置いて慢火で炙き乾して性を存して研末し、麝香一錢を加へて封じ貯へ、潰瘍が爛れて內臟がただ一膜を隔てて見えるばかりのものがあつたとき、この藥を摻れば立ろに癒える。

【雷頭風】祝氏效方に云く、諸藥の癒えぬには、ただ山羊糞を炭に炒つて粉に研つたものが甚だ效がある。歌に曰く『雷霆頭裏に震ふるは、山羊の糞緣あり。酒で二

錢を送し下せば、腦門に在つて喧ならず』

【心痛を治す】年久しきと日淺きとを論ぜず。玉泉方――山羊糞七粒、油頭髮一握を共に燒いて末にし、好酒で和して服す。永く再發せぬ。

石羊膽

廣東通志――石羊は色黑く、人家の羊に類するが蹻捷である。その角は、紙を燒いて火罐にすれば能く頭風を收める。その皮は、褥に作れば筋骨疼痛を癒し得る。その血は、能く跌打損傷を療ずる。やはり秦地方の山羊のやうなものである。

○肇慶志――石羊は高要山中に產する。羊に似て高く大きく、角が長くして耳が厚い。この羊は一毛孔に三毛がある。服用すれば柔にして能く久し。

予の妻の兄朱問亭が粤に在官中、嘗て石羊膽一對を贈つてくれた。銀匣に盛り、大いさは小指ほどのもので、絨線でその一端を紮つて乾したものであつた。その說明に據ると、この物は得難いもので、試驗する法は、この膽囊を胸前に掛けて急に步行しても喘せぬものが眞物である。折傷を治するに山羊血に勝るものだといふこ

山羊糞　山羊糞を水粉と共に各一升を一夜浸して汁を絞り、頓に熱して正午に服すれば疳痢を治す。

祝西莽本草——山羊屎を灰に煆いたものは、潰爛を療じて肌を生ずる。外科の口を收める藥に入れて用ゐる。祝氏效方の大棗丸——山羊屎を曬乾して鍋に入れ、炭に炒つて性を存して研末して收藏する。久爛に堪へず、將に內臟が見えんとするものがある毎に、大棗を皮、核を去つて泥のやうに搗爛らして後、右の粉を入れて丸になるまでに搗き、毎服四錢を黑棗湯で送下する。この物は大いに能く潰爛諸口を斂めて神效無比である。

【山蓮散】大なる活鯽魚一尾を腹を破つて雜を去り、山羊屎をその魚腹に塞實し、瓦上に置いて慢火で炙き乾して性を存して研末し、麝香一錢を加へて封じ貯へ、潰瘍が爛れて內腑がただ一膜を隔てて見えるばかりのものがあつたとき、この藥を摻れば立ろに癒える。

【雷頭風】祝氏效方に云く、諸藥の癒えぬには、ただ山羊糞を炭に炒つて粉に研つたものが甚だ效がある。歌に曰く『雷霆頭裏に震ふるは、山羊の糞緣あり。酒で二

錢を送し下せば、腦門に在つて喧ならず』

【心痛を治す】年久しきと日淺きとを論ぜず。玉泉方——山羊糞七粒、油頭髮一握を共に燒いて末にし、好酒で和して服す。永く再發せぬ。

石羊膽

廣東通志——石羊は色黑く、人家の羊に類するが蹻捷である。その角は、紙を燒いて火罐にすれば能く頭風を收める。その皮は、褥に作れば筋骨疼痛を癒し得る。その血は、能く跌打損傷を療ずる。やはり秦地方の山羊のやうなものである。

○肇慶志——石羊は高要山中に產する。羊に似て高く大きく、角が長くして耳が厚い。この羊は一毛孔に三毛がある。服用すれば柔にして能く久し。

予の妻の兄朱問亭が粤に在官中、曾て石羊膽一對を贈つてくれた。銀匣に盛り、大いさは小指ほどのもので、絨線でその一端を紮つて乾したものであつた。その說明に據ると、この物は得難いもので、試驗する法は、この膽囊を胸前に掛けて急に步行しても喘せぬものが眞物である。折傷を治するに山羊血に勝るものだといふこ

とであつた。

一切の目疾を治す。勞眼、靑盲には人乳で調へて點け、風火には防風汁で調へて點ける。この物は翳障を去るに神の如くである。水で調へてもよし。

跌蹼に對する功は山羊血と同じ。

曹閩亭先生は嘗て黔中に在官されたことがあつて、その話に、邊邑にはいづれも石羊を産する。形は小さくして兎ほど、趫捷で捕獲し難い。これを得たならば、直ちにその腹を破つて膽を取るべきもので、少し遲れると腹の中で裂けて了ふ。その膽を乾したものは、肝厥の暴絕を療じ得るもので、酒で一二釐を服すれば直ちに甦る。その心血は、能く眞心痛を治するに頗る效がある。骨、皮を熬つた膠は風を去り、血を活すに神の如くであるといふ。

山狸

坤輿圖說——利未亞國に山狸といふがある。麝に似たもので、臍後に一肉囊があり、それに香が滿ちると病になり、石上でそれを剔出して始めて安になる。その香

は蘇合油に似て色が黒い。
耳病を療ずる。

犀牛皮

物理小識――近頃外國商船で來るものがある。この物は眞の海犀(かいさい)であつて、その皮は藥に入れる。
風を治し、血を活すに最も效がある。

貂尾

貂(てん)は西北の塞外に産し、松栗を食物とする。卽ち南方に於ける松狗の類である。その行くことの捷(はや)いもので、樹枝の間を穿つて飛ぶやうである。蓋し尾を以つて働くものだ。故にその力は尾に在る。綱目には、貂鼠の條にただその皮毛で目を拭へば眯(めい)を去ることを記載したに止り、その尾を遺(おと)してあるからその功用を補記して置く。

【凍瘡】貂尾を燒いて性を存して末にし、爛處に摻れば自ら癒える。未だ破れぬものは、舊貂皮毛を煆いて研り、香油で和して搽る。（養素園驗方）

七葛

回疆志——伊犁西番一帶に產する。馬乳を皮袋中に裝入して繩で縮口し、手で袋を提へて提颺し、半時ばかりして熱處に放置し、一夜にして作るものだ。名けて七葛といふ。これを飮めば熱にして人を補す。もし日日にこれを服するならば老を返して少に還すの功があるさうだ。

香鼠

珍異藥品に云く、雲南に產する。形は鼠のやうで、僅に長さ一寸ばかりのものだ。

周櫟園書影に云く、密縣の西山中に香鼠が多い。普通の鼠に比較して小さく、死ぬと異香がある。蓋し山中の鼠は多く香草を食ふもので、やはり獐に香臍のあるやうなものである。山中の住民は捕つて來て篋笥中に入れて置くが、年を經てゝ香氣

が散じない。

桂海志に云く、至つて小さく、僅に指擘ほどの大いさで、柱の中に穴を作る。地上を行くことが疾くして激箭のやうだ。

疝を治するに甚だ效驗がある。

鼠血

これは家鼠の血である。綱目には、鼠の條下に獨り鼠血だけを遺したから此に補記して置く。

○本經逢原に云く、生鼠血に青鹽を蘸けて牙宜に擦れば效がある。牡のものが良し。

猫尿

胞胎　尾血　白松香

蒜片を取つて猫の牙を擦ると直ちに排尿する。

鳳聯堂驗方――偷糞老鼠を治す。猫尿、井底泥を用ゐ、和勻して圍めば立ろに癒える。

○急救方――蝎毒螫傷に塗る。

○蟲の耳中に入つて出ぬには、猫尿を滴せば立ろに死ぬ。

猫胞衣　膈噎を治するの神薬である。瀕湖の綱目には、猫の條下に胞衣を附錄してはあるが、ただ楊氏經驗方の、反胃吐食を治するに、燒灰に硃砂を入れて服することを引いてある外、概して未だこれに及んでゐなかつた。且つこれを取るに方法があり、これを食ふに忌むものがあるので、均しく補記して置く。

【膈噎】同壽錄――猫の初生の胞衣を新瓦で焙乾して細末に研り、毎服一二分を好酒で送下し、口に筆管を含んで睡る。牙を咬み、及び咳嗽する恐があるからである。米の下らぬものは五六服で癒える。猫胞を取る法は、猫が將に産せんとするとき木枷を枷ける。出生すると直ちに母猫が食ふ恐があるからだ。燒酒を忌む。

【翻胃】鳳聯堂經驗方――猫胞衣三箇を好酒で洗ひ、猪肉四兩を用ゐて淡煮し熟して服す。數年のものも立ろに效がある。

○莫際華云く、胃脘痛は猫胞でなければ根を斷つことが不能だ。金御乘云く、猫胞衣は、凡そ小產を患ふ婦人は產後に或は羹にし、或は末にして食ふ。その後は小產しなくなる。極めて效驗がある。

猫胎　祝氏效方——瘰癧を治す。猫胎一箇を泥で裹んで煨いて性を存し、菜油で調へて搽る。

猫尾血　不藥良方——急驚風には、猫尾を剪破して血を滴らし、滾湯を沖して服す。

白松香　汪連仕云く、瓦上に多年あつた猫糞の色白きものを火で煨いて用ゐる。鹽哮、蚘厥で痛むを治す。更に瘟疫、鼠瘡を理して立刻に效が現はれる。

浙驢皮膠

黃雲盛の話に、近頃浙地方で造る黑驢皮膠は、その製法が阿膠を造る方法と同樣だ。臨平寶莊の水で煎熬して出來上るもので、黑色に綠を帶び、頂に猪鬃紋があり、東阿で造つたものと全く異らない。藥に入れてもやはり頗る效がある。蓋し阿膠の

眞のものは得難いので、浙膠があればやゝ雜膠を用ゐるに勝るのである。寶莊は臨平湖の西岸に在つて、寶莊泉といふがあり、土人は名けて大力水といふ。これを飮めば力が多くなるさうである。虎跑泉の水は、大缶中に注いで口と平にし、それに錢を投ずると一百六十の靑錢を呑んで了つて水が溢れない。他の水では八十まで投ずると最早や溢れ出して了ふ。故に虎跑泉を飮めば氣を益すのだといふ話は向に聞いてゐるが、寶莊水は靑錢を二百まで呑んで溢れない。その力は更に知るべきだ。この水で作つた膠は自ら伏流の濟水に敵するものだといつてある。予は毎にこの膠を藥肆で搜し、藥商人に遍く訽ねて見るが、いづれもそれで造つたものはやはり少いので容易に得られない。しかし雲盛の話は甚だ詳細だから姑くこれを存して異日の考證に備へる。

血を補し、燥を潤する功は阿膠に同じ。内傷腰痛を治し、力を強くし、筋を伸べ、精を添へ、腎を固くするに尤も特別な功能がある。

霞天膏

綱目の畜部牛の條下に倒倉法を附記したが、霞天膏の製法がない。近頃ではこれを用ゐることが頗る多いから附錄して置く。本草經疏にも記載して專品としてある。その法は、肥嫩な黄牛の肉三四十觔を洗つて極めて淸淨にし、水で煎じて糜にし、滓を濾し去つて再び熬つて膏にして用ゐる。繆仲醇曰く、胃は土に屬し、水穀の海であつて、物として受けざるはない。胃が痛めば水穀が一定時の運化が不能になり、羈留して痰飮となり、經絡に壅塞しては積痰、老結痰となる。痰の關係する症は、陰虛內熱に痰を生ずれば偏廢し、口眼歪斜し、腸、胃に留滯すれば宿飮癖塊となり、氣に隨つて上湧すれば喘急迷悶となり、肌肉に流注すれば結核となる。王隱君は、人の諸疾を論じて悉く痰に由るとした。然して痰の生ずるは總て脾、胃が虛して運化不能なるところから出發するのである。ただ霞天膏を用ゐて諸痰症を治するは、蓋し牛は土畜であり、黄は土の色であり、肉は胃の味であつて、熬つては液となり、有形ではあるが濁質がない。脾、胃の主とするところの物を以て脾、胃の生ずるところの病を治するのである。故に能く腸、胃に由つて肌膚、毛竅に滲透し、一切の留結を搜剔するのである。陰虛內熱の人に往往痰が多いが、これは水涸れ火

燒にして、煎熬される津液が凝結して痰膠となるので、固に散じ難いものである。やはり必ずこの物を竹瀝に和し、貝母、橘紅、蘇子、栝樓根、枸骨葉の類を以て消し、或は橘皮、白茯苓、蘇子、白荳蔻仁、半夏、蒼朮を麯としたものを以て脾、胃の積痰を治し、或は橘皮、貝母、蘇子、栝樓根及び仁、蓬砂を麯としたものを以て積熱痰結を治す。

味甘し、温にして毒なし。中風の偏癱、口眼歪斜、痰涎壅塞、五臟、六腑の留痰、宿飲癖塊、手足、皮膚中の痰核に主效がある。（繆氏經疏）

羊哀

形は圓くして彈の如く、大、小不等である。羊の腹に産し、胃中に在る。ただ山羊だけにあるもので、胡羊にはこれが成らない。蓋し羊は百草を食つてその精氣が胃に聚り、久しくしてこの物と成るのである。俗に百草丹と呼ぶ。やはり牛黃、狗寶の類である。牛黃は細膩にして疎鬆であり、且つ香烈だから黃を以て名とし、狗寶は花白にして氣が羶く、一般にその牛黃の如くなる能はざるを惜まれる。狗寶の

精美にしてまた羊腹に產し、日、月の精華を得、又、異草を食つて孕結するもので、堅重ならずして香凝なるもの、僅にこの物を成したといふところから、これを哀むといふ意味で名けて哀といふのである。

○常中丞宦遊筆記の記載に、軍營に在つたとき、羊の腹中から鮓答と名ける石子を得た。形は鴨卵のやうで色は紫黃、兩頭に圓きこと黃豆のやうな二白圈があり、腰に寬き韭葉ほどの青藍色の束帶があつて、束帶上にもまた二白圈があり、質は細で玉の如く、滋潤なること水の如きものであつたとある。輟耕錄にも亦、蒙古で雨乞をするときには、淨水一盆を取つて石子數箇をそれに浸し、咒文を唱ひながらそれを播弄する。その石子は鮓答と名け、畜類の腹中に產するもので、牛、馬いづれもある。必しも羊に限らないと記載してある。

しかし羊哀はまた鮓答と異ひ、鮓答は堅く重く細潤であるが、これは輕く鬆く羶臊であつて、また束帶も白圈もない。庚戌の歲の冬、友人李金什が臨安に住み西關外の屠羊場で屠者が一頭の羊を剖くのを見てゐると、胃中から忽ち鴨卵黃ほどの一彈が湧出した。勻く圓く潔く光つたものであつた。それを水盆に浮べて買つて歸つ

て予に見せた。予は、これは羊哀であつて、氣は臊くして鬆い。鮓答の類ではないといつた。彼の女人のいふには、屠者(としや)はこれを百草丹と呼び、且ついふには、この業に從事して三十年になるが、ただ三箇あつただけで、やはりこれに遇ふことは容易にないといつたさうだ。この物はただ山羊だけに生ずるもので、山羊は百年を食ふので、偶〻異草、或は石乳を嚙み、その膏液が胃中に注いで久しくして凝成するものだ。胃は精氣往來の所であつて、口に氣を爲して運動するものだから、結する物は多く丸のやうに圓い。鮓答は腹に結するもので、氣を爲さずして擾動するものだから、形が匾圓(へんゑん)で石のやうなのだ。金仕はそれを予にくれたので、予がまた取つて仔細に觀察すると、その質は鬆くして亦た堅く、嗅いで見ると羊の臊氣があり、外觀は色澤があり光膩(くわうじ)であつて、さながら油のやうに潤ひ、その體質は石でもなく酥でもなく、腐草が融結したやうなものだつた。始めて說畧所載の、羊哀は濕茅祇(しつばうし)の如しとの說が謬(あやまり)ならざることが信ぜられた。因に此に附記して格物に折衷なる諸君子に待つ。

按ずるに、百草鏡に、羊胲(やうがい)は羊の腹中に結成し、色は微黒のもので、反胃を治し

得るとあるが、或はこの物かも知れぬ。

斂按ずるに、慈航活人書に、端午の日に取収めた羊屎を百草丹と名ける。瘧を絶ち得るとあるが、羊の胃にある積草とは別物だから注意を要する。

蘭薫

家郷肉　陳火腿骨　猪項上蜻蜓骨　雄猪眼梢肉　製火腿法

俗に火腿と名ける。金華に産するものが佳く、金華の六管轄中にいづれもあるが、ただ東陽、浦江に産するものだけが更に佳し。その醃腿には冬腿、春腿の差と前腿、後腿の別とがあつて、冬腿は久しく置いても壊れないが、春腿は夏に交ると變味し、久しくすると蛆腐して食へなくなる。又、冬腿の中でも獨り後腿を取る。それは肉が細く厚くして久しく貯藏し得るからであつて、前腿では比較的遜色あるを免れない。蓋し金華一帶の人家では多く木甑に米を撈して飯にし、鑊で煮ることはしないで飯湯の釅厚なるものは猪の飼料にしてゐる。その養猪法は、潔淨な欄房を擇び、朝夕豆渣、糠屑で餵養し、兼て粥を煮て食はせ、夏になると兼て瓜皮、菜

藥を飼料にし、冬の飼料には必ず熱を加へた飼料を與へ、その饑飽を調節し、その冷暖に注意する。故に肉が細かで體が香しいのである。茅船の漁家で飼養したものが尤も佳く、船腿と名け、その腿は他の腿に比較して小さいが、味は更に香美である。凡そ金華の冬腿の三年の陳い者は、煮て食ふと氣香が室に盈ち、口に入れると味が甘酥で胃を開くこと異常であり、諸病に宜しきものである。

○東陽縣志――薫蹄を俗に火腿といふが、その實は烟で薫するもので、火ではないのである。醃け、曬し、薫する方法を正確にするものだから、果して普通品に勝るので、醃けるに用ゐる鹽は必ず台鹽を用ゐ、薫するに用ゐる烟は必ず松烟を用ゐるので、氣香が烈しくして善く入り、製する時期が正確だから、それで久しきに亙つていよいよ旨いのである。別の一種で風蹄と名けるものは、鹽を用ゐて漬けないので淡腿と名ける。浦江で盛に作つてゐるが、本邑（卽ち東陽）では多く作らない。

○陳遠夫藥鑑――浦江の淡腿は鹽腿よりも小さく、味は頗る淡い。點茶によいので茶腿と名ける。陳いものは血痢を止め、胃を開くに神の如くである。

○陳芝山食物宜忌――火腿は、醃けてから晾し燥して、高い處に翌年の夏期まで

挂けて置くもので、陳いものほど妙である。金華府の屬邑に產するものが佳し。

○常中丞筆記――蘭薫とは金華の猪腿のことである。南方の諸省では諸處で能く製するが、但だ金華のものに及ばない。金華のものはその皮が薄くして紅く、熏が淺くして香しいからで、それで遠近に流傳され、近頃では珍品となつてゐる。然しやはりただ浦江に產するものだけが佳いので、その製法は、冬期に屠割し、鹽を適當に用ゐて肉を堅く實して敗れぬやうにしたものが最上のもので、淡腿といふ。美味、香潔で、茶の佐にするによし。各處いづれにもこの製品がない。蓋しこの地は豕を畜ふ闌圈が清潔であり、その茁壯ならんとする時期を俟つて屠宰して醃け曬すからである。或は、その豕の種類がもと他の地と異ひ、又、香溪等の水を以て飼ふからだともいふが、やはり理に近い。

○陳瑤藏藥祕訣――凡そ火腿を收めるには、必ず冬醃けた金華猪の後腿を擇ぶを上とし、皮が薄く、色が潤ひ、日に照して見ると明亮で、全體に隱隱として內骨の見えるものが佳し。香油を全面に塗り、每箇を長繩で脚を穿つて一文字に排べ、下に毛竹を眞二つに割つたものを仰へて置いて油を接け、かくて風の透る場所に置け

ば十年經つても壞れない。もし夏に交つて入梅期になると、表面に綠衣が生ずるが、やはり害はない、或は毛蟲が生じ、蛀孔があるを見たときは、竹簽で排出して香油を灌いで置く。剖割するときの切剩りなどは鹽を切口に塗つて荷葉で包み、相纍らず懸けて置けば久しく置いても壞れないものである。

○朱氏の僕葛三の話、若い頃、曾て金華で傭はれてその業を習つたので、腿を醃ける方法は詳細を知つてゐた。それに據ると、火腿は金華の六管轄地にいづれもあるが、總じて浦江、湯家村で産するものを第一とする。村はただ一二千戶だが、みな猪を飼つて腿を作る。その猪は甚しく大きくはなく、重いものでも七八十觔に過ぎない。それを腿に製して乾すと三四觔に過ぎなくなり、或は五六觔になるもあり、一定してゐない。四期いづれも醃けられるが、ただ冬腿だけを第一とする。冬醃けたものは皮が細かくして栗眼がなく、手で摸でて見ると潤膩であつて、切開しても黃膘、爪灣がなく、久しく貯へても蛀がつかぬ。他の時期のものはいづれも蛀がつき易く、春腿は栗眼が多く、夏腿は爪が直く、秋腿は皮が粗い。醃る法は、腿十觔に對して鹽四兩を用ゐ、木で人の手掌のやうに刻んだ楦で鹽を擦り、後に掌楦

で輕く揉み擦り、四圍にまで十分鹽が行渡るやうにし、皮が綿のやうに軟になるを俟つて後に缸に入れる。缸の面には辣蓼で蓋ふて竹遍を覆せ、七日の後に滷が出るを待ち、一回攪ぜ翻して上下むらなくし、再び炒鹽四兩で前の方法のやうにして手で揉んで缸に醃け、十日後に缸から出し、そこで缸中の醃けた汁で一一洗淨し、草繩で足を縛つて風の當る場所に懸けるのである。ただ冬醃けたものだけは油が滴らぬといふのであつた。

味鹹く甘し、性は平なり。○陳芝山云く、中を和し、腎を益し、胃氣を養ひ、虚勞を補す。○陸琛云く、津を生じ、血脈を溢し、骨髓を固くし、陽を壯にし、泄滑、虛痢、蓐勞、怔忡を止め、胃を開き、神を安ずる。

藥性考――火腿は鹹くして溫である。胃を開き、膈を寛にする。病人にこれに宜く、氣を下し、噎を療ず。

【腹痛して或は三四日止まぬもの】○筆苑仙丹――火腿肉の煎湯中に眞川椒を入れ、上面に浮ぶ油を撤ひ去り、熱に乘じて湯を飲む。立ろに癒える。累〻效驗を得た。

【久瀉】○救生苦海――陳火腿の脚爪一箇を白水で一日煮て極めて爛らせ湯と共

に一頓に食ひ盡せば癒える。多きときは三服する。これは予の親戚の柏雲が屢〻試みて屢〻效を奏した方である。

百草鏡に云く、火腿は浦江縣に產した脛骨の細いものが眞なるもので、陳きものが佳し。皮上の綠黴が重なるほどその味が佳くなる。必ず垢、及び黃油を洗ひ去つて用ゐる。

嘉香肉　食物宜忌に云く、又、家鄉肉と名ける。浦江に產するものが最も佳し。○藥鑑に云く、家鄉肉は金華の屬邑にいづれもあつて、秋に醃けて仲買商に渡して省城へ賣り込む。その肉を商店で買つて見ると、皮が白く肉が紅く、鮮氣香美であつて、他の地で醃けた猪肉のやうに色少く澤の鮮なものでない。但し一旦杭州の商店へ入れると、硝滷を加へ缸中に投じて浸透させて然る後に賣出すのである。蓋しさうせねば肉味が淡くなり、美味でないのであつて、而も秋期はなほ暖で硝滷が漬透らず、また腐臭し易いのである。肉は硝漬になつてゐるから、食つては恐らく補益に乏しく、火腿の冬醃で陳久なもののやうに佳いわけに行かない。さやうな次第で、現に商店で賣つてゐる火腿は、いづれも家鄉肉腿を風乾して、翌年になつて

皮上に綠衣が生じたものを陳火腿と稱して賣つてゐるのである。一般には多くそれに十分注意を拂つてないが、療病のための食餌とするならば必ず眞の金華の腿を用ゐてこそ有效なのだ。

味鹹く甘し、性は平なり。〇陳芝山云く、虛を補し、胃を開く。

〇百草鏡に云く、肝を平にし、脾を運し、血を和し、津を生ずる。

〇藥鑑に云く、腎を滋くし、足力を健にする。

斂按ずるに、芝山の說はやはり杭州の商店で滷漬にされない肉のことだ。故に能く虛を補すといふのであるが、若し滷で漬け透つたものならば、それは能く肺を爍する。凡そ肺痿、陰虛の咳嗽には恐らく適したものでない。産婦の虛勞で補の必要のあるものは、やはりその肥肉の硝滷を得たものを忌む。腹に入ると痰に成るものだ。體が肥えて痰を作すものもやはり多食しては宜くない。倘しこれを食つて痰を作したときは、杏仁を研つて食すれば解し得る。

附 【箭鏃の出でぬを治する方】家寶方――陳年の醃肉を用ゐ、皮を去つて紅活美好なるものを取り、その肥と共に細切し剉濃し、象牙末、及び人の切取つた爪甲

を末にしたものを共に研細してその刲んだ肉中に拌ぜ入れ、再びむらなく刲み込んで合一させ、厚く箭鏃の周圍に敷く。約一飯頃にしてその鏃は自ら迸脫して了ふ。二三尺遠くまで迸り出ることがある。

陳火腿骨　百草鏡に云く、黑く煆いて研つて用ゐ、食積、及び痢を治す。

【痢を治す】救生苦海——陳火腿骨一本を炭火で灰に煆いて篩ひ、白糖一兩を加へ、米湯飲、或は滾水、或は酒で調へて服す。奏效せぬものなし。

○又ある方、赤、白痢を治す。陳火腿骨灰、陳皮、炙草各一兩を末にし、蜜で菉豆大の丸にし、空心に一錢を服す。白痢には薑を用ゐ、赤痢には白湯を用ゐて送下する。

○神錦方——生火腿骨を焙じ燥して極細末に研り、無灰酒で送下すれば止まる。

○醫林集祕——陳火腿骨を灰に煆いて六兩、飯鍋巴を灰に煆いて五兩、砂仁を炒つて三兩、南山査を炒つて五兩を用ゐ、共に末にし、每服三錢を、久痢には人參湯で服し、紅痢には紅糖湯で服し、白痢には白糖湯で服し、蓋痢には炒焦した白朮三錢の煎湯で服し、霍亂吐瀉には藿香湯で服す。

【噤口痢】筆珠萃——火腿骨を煆いて一兩、蓮肉二兩、木香七錢、烏梅三錢を醋糊で桐子大の丸にし、毎服七丸を蜒蝣湯で服す。

【大人、小兒の積食】諸藥も消し得ぬものには、不藥良方——陳年の火腿骨を黑色に煆いて研末して三錢を、火肉一觔を煮熟して汁の上の肥油を去つて取つた淸湯一碗で送下する。

【鼠咬】救生苦海——陳火腿骨を灰に燒き、香油で和して敷く。

【小兒の臘梨瘡】販翁醫要——陳火腿骨を灰に燒き、癢きには礬少量を加へて麻油で調へて敷く。髮の生ぜぬには、老薑で擦る。

猪項上蜻蜓骨 灰に燒いて一切の頭項疽毒に塗る。凡そ腦疽、鬢に發した對口等の症には、麻油で調へて敷けば立ろに癒える。（王聖俞手集）

雄猪眼梢肉 能く彊肉を拔き、毒滯を散ずる。

劉羽儀經驗方——對口瘡を治す。雄猪眼梢肉三錢を剁り爛らして泥のやうにし、滑石末四錢を和勻して患處に敷き、頂上を膏藥で蓋ふ。彊肉を拔去し、黃水を放出して癒える。

製火腿法　李化楠醒園錄にある火腿を醃ける法――毎十觔の猪に鹽十二兩を配し、極めて多くするには十四兩までに加へる。鹽を炒つて皮硝末少量を加へ、猪と鹽と兩ら熱に乘じて擦つて行渡らせ、大桶に入れて石で壓し、五日に一回翻し、一个月にして腿を取起し、風の當る場所に晾して四五个月で用ゐられる。

金華で火腿を造るには、猪腿一觔に對して炒鹽三兩を配し、手に鹽を持つて全體に擦つて石で壓し、三日にして取出してまた手で極力揉み、翻轉して再び壓し再び揉み、肉が綿のやうになつたとき風の當る場所に挂け、約そ小雪後から立春後まで挂ける。それで凍らない。

○戴羲養餘月令にある火腿の製造法――十一月中に圈つた猪を居殺し、ただ四隻の精腿を取り、熱に乘じて鹽を用ゐる。毎一觔の肉に鹽一兩の割合で、皮から肉中に擦り入れて綿のやうに軟にし、石で竹柵上で壓して缸中に二十日置き、三番、五次と順序をつけて、稻草灰一重の間に一重を疊み上げ、稻草の烟で熏じて一晝夜烟の處へ挂けて置く。初夏には水で浸洗して前のやうに挂ける。

按ずるに、これは田舍村で火腿を醃ける方法で、要は金華の蘭薰に及ばないが、

然し杭州の醃臘店で買ふ火腿に比較しては霄壤ゝ啻ならざるものだから、竝にその法を記載して置く。

○火腿醬の製造法——南火腿を用ゐ、煮熟して丁に切碎き、もし火腿が鹽が過ぎてゐるときは、先づ水で泡けて淡くし、再び煮て皮單を去つて精肉を取り、火で鍋を燒いて滾熱したところへ、香油を先づ入れて香しく滾らし、次に甜醬、白糖、甜酒を投下して共に滾らして適當に煉り、然る後に火腿丁、及び松子、核桃、瓜子等の仁を投下して速に炒り翻し、取起して磁罐に收貯する。その法は、腿一箇毎に好麵醬一觔、香油一觔、白糖一觔、核桃仁四兩を皮を去つて打碎き、花生仁四兩を炒つて衣を去つて打碎き、松子仁を衣を去つて四兩、瓜子仁二兩、桂皮五分、砂仁五分を用ゐる。

本草綱目拾遺第九卷　終

本草綱目拾遺

鱗介部 第十卷
蟲部

錢唐 趙學敏 恕軒氏輯

本草綱目拾遺鱗部目錄

脆蛇　環蛇　翠蛇　碧飛
蟒油　斷草烏　龍涎香龍泄　西楞魚
鰣魚鱗　苦魚　金魚　阿羅魚
渼陂魚　四足魚　河豚目子　蜣螂魚
蜜姑魚　雪鯩　帶魚　血鱔
沙魚翅　土附　烏魚蛋　青魚膽
白皮子　鮀魚

本草綱目拾遺介部目錄

海龍　海牛　白鼈　鼈膽
蟶殼　海螄　吐鐵　田螺涎
蛤蜊肉　蜆腊　蚌淚　西施舌

石蜐　乾蝦 蝦米 鶯爪 蝦子 對蝦　蝦醬
石上螺螄

本草綱目拾遺蟲部目錄

雪蝦蟇　海參　隊隊　風蛤
飯蒼蠅　蠬蜂　蜜蜂　苦蜜
蜜虎　蟾皮 舌　土檳榔　蝦蟞黃
藥蜂針　驢龍　龍蝨　洋蟲 糞
蟋蟀　蚱蜢　淮東子　燈蛾
蠅虎　竈馬　水馬　壁蝨
叩頭蟲　沙雞母　禾蟲　茄稞蟲
椶蟲　蔗蛄　桃絲竹蝨　牙皂樹蟲
黃麻梗蟲　芝麻蟲　桐蛀　牛膝蛀
山螞蟻窠 子　蛆窠　死人蛆蟲 人蚜　虹蟲

鱗部

脆蛇

雲南志――順寧府に產する脆蛇といふは、人を見ると斷れて人が去ると復た續かる。取つて乾したものは腫毒を治し得る。

○滇黔記遊――滇黔の土司に產する。長さ一尺餘で草莽に伏し、人を見ると躍起して數段に跌ぶが、少頃して復た合一する。色は白光のやうで亮に光る。悞つてそれを拾つて毒に觸れると斃れる。

○陳鼎蛇譜――脆蛇は貴州の土司中に產する。長さは一尺有二寸、錢ほどの圓さで、嘴が尖り、尾が禿く、背は黑く、腹は白く、暗鱗が點點として美しい。人を見ると數尺躍起して跌んで十二段となり、須臾にして復た合して一となる。それを知らぬものが悞つて拾ふと、寸斷して兩頭俱に生き、頭に齧まれた人は直ちに斃れる。出入往來に恒に規則的なところのあるものだ。これを捕るには、竹筒をその逕の側

に置き、蛇が知らずしてその中に入つたところを急に取れば完全なものが捕れる。やや緩慢であれば砕けて了ふ。故に名けて脆といふのである。予は家に多く奇藥を蓄へてゐるが、曾てその腊を買つて來て、寸斷した處を見るとみな新なもののやうに光潤であつた。やはり一の特異な點である。

○査愼行人海記――脆蛇は崑崙山に產する。人聲を聞くと寸斷するので、その地の者はその斷れるのを伺つて鉗み取り、その寸寸を必ず異る場所に置いて、風乾するを待つて藥に入れる。もし少頃人聲がないとその寸寸が續つて蛇になる。

色癆、及び驚疑喪膽の諸症を治す。（玉鏡新談）

肉を膏に熬つて癰疽を箍し、風癘を去る。その骨を醋に磨つて腫毒を罨むが良し。

【斷骨を接ぐ】滇黔記遊――脆蛇は取つて腊にして斷骨を接ぐに用ゐる。價格は金と同一である。その上、中、下を視て頭、腹、脛、股を治するに奏效せぬものはない。

【大麻風、痢】滇略――脆蛇、一名片蛇。順寧の大候山中に產する。長さは二尺ばかり、人に遇ふと輒ち自ら斷れて三四片となり、人が去ると復た續く。これを乾せ

ば色が黃金のやうになる。惡疽を治するに、腰以上には首を用ゐ、以下には尾を用ゐる。又、大麻風、及び痢を治す。近頃では一般にこれを買つて夾棍藥とする。

環蛇

蛇譜に云く、三佛齊に產する。環のやうなものだ。大いさは數圍から數十圍のものがあり、獸を逐つて疾走すると車輪を千仞の山に轉ずるやうで、獸はその環中に入つて斃死する。その口と眼とは倶に環の半に生じて尻と相對する。

脂 これを服すれば刀劍も傷け得なくなる。

翠蛇

珍異藥品に云く、形は曲蟮のやうで長さは五六寸ばかり、蟠旋して圈になつてゐる。

癤毒、癰疽を治するに良し。

(一)綬トハ色絲ヲ組ミ合セタル絲條ヲイフ。

碧飛

湖州府志――武康山に碧飛と名ける蝮蛇が多い。大なるものは甕を圍むほど、小なるものもまた杯案ほどあり、首を斧の如くし、目が出て、齒は鋸のやう、文は四角で色が(一)綬になつてゐる。その雄は赤紫、その雌は青黑色で、曄熠として蜃甲の如く光り、目も同じやうだ。山中の者は、これを目があつても視えないものだといつてゐる。春、夏に絲を草篠に布き、人や他の動物がその絲に觸れ激すると、射ること矢よりも迅く、忽ちに見えなくなつたと思ふと已に肉を攫み取つて行つて了ふので、人がその爲めに殺されることがある。霜が降りると絲が脆くなり、高く樹杪に升つて、邊りに白涎を吐く。烏鵲は啄んでこれを呑む。ただ鹿はこれを好き食物として獵獲するが、獲るには前の左足で蛇の腰中を扼し、首尾が盤繞するのを右足の叉趾で寸寸に解いて餘すところなく喫つて了ふものだ。これを捕つて腊にしたものは藥に入れられる。凡そ西北の諸山、英嶺より以内にはみなこの物がゐる。

風痺を治す。蝮に齧まれたときは還つてその肉を食へば生きる。

敍按ずるに、湖志に言つてある碧飛は吾杭の山鄕にも多くゐて、土人は方勝板と名ける。それは全身の花紋が錦の中の方勝のやうで、形が匾くして板に似てゐるから名けたのである。人を嚙むと最も毒だが、ただ野猪は能くこれを食ふ。土人の話に冬期蛇が地中に蟄すると、野豕がその氣を嗅ぎつけ、石を翻し土を掘つて出して啖ふ。蛇は性大熱であつて、野猪が三條を食へば能く嚴冬を過せるのだといふ。綱目に蝮、虺を二種の物としたが、蝮、卽ち方勝板、虺、卽ち土錦、俗に呼灰地匾と呼ぶがそれだ。惡風頑痺はこの猛烈積熱の性で驅除せねば肢廢して、また擧らなくなるものだといふは、殆ど毒を以て毒を攻るの要領である。想ふに碧飛は或は同類にして異名のものだらう。此に書して後の考証に俟つ。

蟒油

爾雅に『蟒は王蛇なり』とあり、註に、蛇中の最大なるものだから王蛇といふとある。現に深山の處處にゐて、大小一定せず、色は菜花蛇のやうでやや黄であり、頭上にいづれも王字がある。また黑色のものもあつて、土人は烏蟒と名ける。蛇を

捕る者には蛇を呼ぶ法があつて、何種なるに拘らず呼べば直ぐ來る。最後に蟒が來ると諸蛇はみな匍伏して動かなくなり、その擇び取るがままになるが、ただ蟒だけをば敢て傷けない。蟒が傷められると諸蛇は主が無くなり、環起して人に嗾ふといふ。それに從事する者の話を聞くに、蟒蛇には自らこの種があつて、生來みな王字がある。故に大小を論じない。蟒が來ると諸毒蛇はいづれも人を敢て傷けないといふことである。

【漏瘡を治す】集驗——蟒油で取つて銅鍋か熬熱し、黄蠟をその油の中に入れて攪き勻ぜ、油紙にその膏を攤して患處に貼る。十餘日にして口が封じて全癒する。

按ずるに、蟒蛇は王字蛇と名け、その首には天生一王字がある。予は庚子の歳、奉化に住んでゐたとき、長橋で丐者が手にこの蛇を握つて錢をもらつてゐるのを見たが、その蛇はやはり甚だ大きくはなく、性は頗る馴良なものだつた。そこで千錢で買取つて縱してやつた。綱目の諸蛇に獨りこれを遺してあるから特に補記して置く。

斷草烏

粤志——斷草烏は廣中に産する蛇である。太さは僅に指ほど、長さ五六寸ばかり、頭は龍の形のやうで小さく、身は純烏で、これが通るとあらゆる草が沾つて立ろに斷れる。人は斷れた草を見れば直ちに追跡して捕れる。故にこの蛇は毎に地から一丈ばかり離れて、身を矢のやうに直くして穴に入り、草の沾らぬやうにしてゐるので、人にその跡が判らない。これも烏蛇中の一種であるが、綱目の烏稍蛇にはこの龍頭のものの一種を記載してない。故にその遺を錄する。

大麻風を治するに酒で煮て服す。

龍涎香

龍泄

通雅——龍涎には嶼があつて、花面國の近くに在り、南海中に獨立してゐる。彼の地の人の話には、樹からこれを取るのだといふ。最も香氣あるものを收めて今の

大内甜香に用ゐてある。

○澳門記略――大食國産の龍涎を上とする。西洋では伯西兒海に産する。これを焚けば翠烟が空に浮び、結して散らない。坐客は一翦を用ゐて烟縷を分けることになつてゐる。

○嶠南瑣記――龍涎香は、新たなるものは色が白く、久しくして紫になり、また久しくして黒くなる。白きものは百藥煎の如く、黒きものはこれに次いで五靈脂に似てゐる。その氣は臊いが、香に和して焚けば翠煙が空に浮んで散ぜぬ。これを試みるの方法は、塊に結したものを力限り水中に投沒して見て、須臾に突起して水面に浮ぶもの、或は一錢を取つて口に含むと微に腥氣があり、一夜經てばその細沫を已に嚥んでも餘膠が舌上に結し、取出して濕ふたまま秤つて見てやはり重さ一錢あり、また乾してもその重さ故の通りなるもの、極めて乾枯したものでも、銀簪を極熱して枯れた中に鑽り入れて抽き出して見ると、その涎が絲を引いて絶えぬもので、これで試驗すれば、褐白なると褐黑なるとに拘らずいづれも眞物である。

海東札記――海翁魚は、大なるは三四千觔、小なるは千餘觔ある。即ち海鰍であ

つて、皮に砂石が生じてゐて、刀箭も入らない。ある人の話に、その魚は口中から涎を噴き、常に自らそれを呑吐する。海濱にそれを遺すことがあるが、それは黑色、淺黃色、一定しない。これが龍涎香であつて、聞上、淡水にあるといふ。眞贋を判別するには、水に斫り入れて攪きまぜ、水面に浮ぶ膏のやうなものを口沫で撚つて丸にし、それを案上に擲つて見て聲のあるもの、噏んで一夜經つても分毫も耗らぬものが眞物で、毎一兩の價格は數十金に値る。

○廣志――新安に龍穴洲があつて、風雨ある毎に龍が起り、地を去ること數丈ならずして、朱鬣、金鱗、兩目電の如くである。その精華は浮沫に在つて、時に噴薄して瀸泉の如く、雨の如くである。土人は爭つてそれを承けて取るが、やや緩であれば地中に入つて了ふ。これが龍涎である。或は、龍涎は多く海上の枯木に鳥の糞のやうな狀態に積つゐるもので、その色は靑黧、その香は腥雜、百和してこれを焚けば、翠烟千結、蜿蜒として空に蟠り、時を經て散じない。翦んで香縷を分けられるものだともいふ。然し多くは眞物でない。外國商船で來るものは大秦、波斯に產する。雨中で焚けば脳膞として聲のあるものが眞物である。

坤輿圖記――龍涎香は、黑人國と伯西兒との兩海に最も多く、大塊は重さ千餘觔あるもので、一見して島のやうだ。每に風濤のために岸に湧泊されると、諸蟲、鳥、獸が直ぐ喜んでこれを食ふ。汪機の本草に、龍の吐く涎沫は香を制し得るとある。

○星槎勝覽――錫蘭山國、卜剌哇國、竹步國、木骨都束國、剌撒國、佐法兒國、忽魯謨斯國、溜山洋國、いづれも龍涎香を產す。

○稗史彙編――龍涎香は、白いものは百藥煎のやうで膩理が極めて細かく、黑いものはこれに次ぎ、五靈脂のやうで光澤であり、その氣は臊に近く、浮石に似て輕いが、香にもと損益はない。但だ能く香を聚めるだけのもので、香に和するに眞龍涎を用ゐて焚けば、翠烟が空に浮んで結して散ぜず、坐客は一翦を用ゐて烟縷を分てる。それは何故かといへば、蜃氣樓臺の餘烈が入るのだ。泉廣の香を合せる者の話に、龍涎を香に入れると能く腦、麝の氣を收斂し、數十年經つたものでも香味がそのまま存するものだといふ。

○廣東通志――龍涎は、水に在つて采つたものは褐黑色、山に在つて采つたものは褐白色である。

○東西洋考――海の傍に木芙蓉のやうな花があつて、花が海に落ちると大魚がそれを腹中に呑む。先に龍涎を食つて花を噛込むと、久しくして脹悶し、昂頭して石上に向つて沫を吐く。その沫の乾枯したものが用ゐられるので、ただ糞だけは佳くない。もし散碎したものをみな取れば自ら沙滲で力が薄い。

○范咸臺灣府志――龍涎香は、言ひ傳へに、鰍魚(しつぎよ)の精液が水面に泡(つ)けられて凝つて涎となつたものだといふ。能く心痛を止め、精氣を助ける。淡黄色で、嚼んでも化(ざ)けぬものを佳とする。淡水に産したものはいづれも淡黄色で黑色がない。

○朱國楨大政記――龍涎香は蘇門答剌(すまとら)國に出る。その西に龍涎嶼といふがあつて、南巫里大洋の中に峙ち、羣龍がその上に交戲して涎を遺(おと)すのである。國人は獨(まる)木舟(きぶね)に駕して伺つてこれを採る。舟は龍のやうな形で、海面に浮び、人はその中に伏し、風潮に隨つて上下する。傍にまた槳を用ゐてあるので、龍はこれに遇つてもやはり呑まれないのだ。毎一觔の價格はその國の金錢で一百九十二枚に値(あた)り、中國の銅錢に換算して九千文である。嘉靖三十四年、戸部に對して香百觔を取寄せることの下命があつた。京師中を悉く搜しても手に入らなかつたので、廣東藩司に下命が

あり、採買部文が臺司へ行つて集議し、每觔に對し一千二百兩の價を懸けて僅に十一兩を得、それを上進すると、內驗の結果不同であつたが、姑くそれを存置して亟に眞のものを取寄せることを命ぜられた。そこで部文が再び廣州へ行き、夷囚馬那別の貯有した一兩三錢を上進した。これは黑褐色であつた。密地都で密地山の夷人が繼いて六兩を上進した。これは白褐色であつた。子細に問糺して見ると、黑いものは水で採つたもの、白いものは山で採つたもので、いづれも眞物で贋ではないといふことであつた。尋で密地山の商人があつて再び上進したので、前のものと通計して、全部で十七兩二錢五分を手に入れ得たので、翌年宮中へ上進すると、內驗の結果、それは眞物だつたので宮への收納が許可された。それ以後、夷船は宮中へ上供するといふことを聞いて、少しづつ持つて來て商ふやうになり、始めて相場が每一兩に付て百金と定まつた。龍涎の功用といふのは、香に入れて合和すると能く腦、麝の淸氣を收斂して、數十年經つても香味がそのままに保存される。その眞のもので和した香は、焚けば翠烟が裊つて散らないのである。涎末に三品あつて、汎水といひ、滲沙といひ、魚食といふ。汎水といふは輕くして水面に浮ぶもので、水練の

達者なものが龍の出すところを伺つてこれを取る。滲沙といふは凝積すること年久しくして氣が沙中に滲みたもの、魚食といふは化して沙磧に糞したものである。ただ汎水だけが食香に用ゐられる。又、魚食にも二種あるといふことで、海の旁に木芙蓉のやうな花があつて、春、夏の間に盛に花を開き、それが海に落ちたのを大魚が呑み、腹腸に先に龍涎を食つてゐると、花を嚥込んで久くして脹悶し、昂頭して石上に向つて吐沫する。それの乾枯したものが用ゐられるのだが、ただ糞のものは佳くないといふ。

○嶺南雜記――諸香は龍涎が最も貴く、市價は毎兩に對し百千を下らず、次位のものでも五六十である。大食國の近海に產し、雲氣があつて山間を罩めると、龍がゐて睡つて下すことが判るので、或は半年、一二年に亘つて雲を看守する。散ずると龍は已に去り、必ずその涎五七兩から十餘兩まで採れる。それを衆人が共に分けるのである。又、大洋中の渦旋のある處にはその下に龍がゐて、湧出する涎が日に爍けて片になり、風に漂つて岸へ著いたものを取る。

又、嶺外雜記――龍が石に枕して睡り、涎が水に浮んで積つて堅くなつたもので、

あり、採買部文が臺司へ行つて集議し、每觔に對し一千二百兩の價を懸けて僅に十一兩を得、それを上進すると、內驗の結果不同であつたが、姑くそれを存置して亟に眞のものを取寄せることを命ぜられた。そこで部文が再び廣州へ行き、夷囚馬那別の貯有した一兩三錢を上進した。これは黑褐色であつた。密地都で密地山の夷人が繼いて六兩を上進した。これは白褐色であつた。子細に問糺して見ると、黑いものは水で採つたもの、白いものは山で採つたもので、いづれも眞物で贋ではないといふことであつた。尋で密地山の商人があつて再び上進したので、前のものと通計して、全部で十七兩二錢五分を手に入れ得たので、翌年宮中へ上進すると、內驗の結果、それは眞物だつたので宮への收納が許可された。それ以後、夷船は宮中へ上供するといふことを聞いて、少しづつ持つて來て商ふやうになり、始めて相場が每一兩に付て百金と定まつた。龍涎の功用といふのは、香に入れて合和すると能く腦、麝の清氣を收斂して、數十年經つても香味がそのままに保存される。その眞のもので和した香は、焚けば翠烟が籠つて散らないのである。涎末に三品あつて、汎水といひ、滲沙といひ、魚食といふ。汎水といふは輕くして水面に浮ぶもので、水練の

達者なものが龍の出すところを伺つてこれを取る。滲沙といふは凝積すること年久しくして氣が沙中に滲みたもの、魚食といふは化して沙磧に糞したものである。ただ汎水だけが食香に用ゐられる。又、魚食にも二種あるといふことで、海の旁に木芙蓉のやうな花があつて、春、夏の間に盛に花を開き、それが海に落ちたのを大魚が呑み、腹腸に先に龍涎を食つてゐると、花を嚥込んで久くして脹悶し、昂頭して石上に向つて吐沫する。それの乾枯したものが用ゐられるのだが、ただ糞のものは佳くないといふ。

○嶺南雜記——諸香は龍涎が最も貴く、市價は毎兩に對し百千を下らず、次位のものでも五六十である。大食國の近海に產し、雲氣があつて山間を罩めると、龍がゐて睡つて下すことが判るので、或は半年、一二年に亘つて雲を看守する。散ずると龍は已に去り、必ずその涎五七兩から十餘兩まで採れる。それを衆人が共に分けるのである。又、大洋中の渦旋のある處にはその下に龍がゐて、湧出する涎が日に爍けて片になり、風に漂つて岸へ著いたものを取る。

又、嶺外雜記——龍が石に枕して睡り、涎が水に浮んで積つて堅くなつたもので、

新なものは色が白く、久くして紫になり、甚久きものは黑くなる。氣は臊に近く、形は浮石のやうで輕く、膩理が光澤である。香に入れて焚けば翠烟が空に浮んで結して散らない。又、海上に出沒して吐出する涎沫に三品あつて、一を汎水といひ、二を滲沙といひ、三を魚食といふ。汎水は輕くして水面に浮ぶもので、水練に達者なものが龍の出るを伺つて隨つて取る。滲沙は、凡そ風浪の飄泊する舟嶼には積年の氣が盡く沙土中にあるものだ。魚食は涎が糞になつて沙磧に散つたもので、氣は腥穢である。進貢するものも四兩に過ぎない。

按ずるに、龍涎の論は、色では、瑣記の說に白と紫、黑との區別があるが、札記には又、淺黃色があり、廣志には靑黧色がある。眞僞の識別もやはり諸說互に異つてゐるが、槪してその色を必ずしも根據とせず、總て含んで耗らぬもの、水に投じて沒せぬもの、雨中に焚いて能く爆するものを良しとする。東璧の綱目には、鱗部龍の條下に龍腦、龍胎が倶に主治があつて、獨り龍涎だけを遺し、その名を附記して、龍涎は方藥に用ゐることが鮮い。ただ諸香に入れるといひ、能く腦、麝を收めて數十年散ぜず、西南海洋に產し、春期間に羣龍が吐いた涎沫が浮き出るのを番人が採

つて賣る。また大魚の腹中から剖き取るものもあつて、その狀態は脂、膠のやう、黃白色で、乾くと塊になり、黃黑色で百藥煎のやうだが膩理であり、久くすると紫黑で五靈脂のやうで光澤になり、その體は細飄で浮石に似て腥燥だといつてあるが、その說はやはりまだ詳確でない。蓋しいふ所の魚腹中から得るといふものは卽ち札記にいふ鰍魚の精であつて、また龍涎と名け、臺灣に產し、大洋中に產する佳きもののやうなわけに行かない。そもそも龍腦、龍胎は世間に無いとしろのものだが、龍涎ならば閩、粵の商店で賣つてゐるものが多いのだ。東壁は何故に見ゐことの罕れなるものを記載して、有るところの者を反つて省略したのであらうか。如何にも該博を期するといふことは至難なことに相違ない。藥に入れて用ゐるには隔湯で頓に化して膠糖のやうな狀態のものが佳し。

氣は腥く、味は微し酸くして鹹し、毒なし　〇藥性考——味甘し、氣は腥し、性は濇する。

〇張璐賓云く、砂を夾んだものは小毒あり。これは土人が砂磧上から取收めたものだ。藥に入れるには甘草水で煮てから用ゐねばならぬ。

○酉陽雜俎に云く、龍漦は烟煤に遇へば散じない。藥に入れる。鐵器、及び石膏を忌む。

血を活し、精髓を益し、陽道を助け、血脈を通利する。

○廖永言驗方に云く、水を利し、淋を通じ、癥結を散じ、精魅、鬼邪を辟け、氣結を消し、勞蟲尸疰を逐ふ。

○陳良士云く、澳門に住んだとき、日本人がこれを用ゐて舶硫、及び他藥を合せて種子丸を作るのを見た。漢時代の術士が丹を和するにこれを用ゐたものだといつてゐたが、日本人はいづれもその方を有つてゐて、祕して中國へ傳へない。

○札記に云く、淡水に產するものは心痛を止め、精氣を助ける。

○周曲大云く、龍涎は能く口中の津液を生ずる。凡そ口の乾燥を患ふものは、これを含めば能く津が流れて頰に盈つる。微し腥氣があるやうだが、粤中の夷人の合す龍涎丸は他藥を和するので腥くなく、口に入れてやはり耗減せず、一丸で數十年用ゐられて敗れない。もし龍涎を單用して藥に入れるならば、必ず先づ雞湯を用ゐて龍涎を制死すれば腹に入つて化けるが、さなくば腹に入つても絲毫も損じない。

蓋し極めて尅化し難いものである。方書に、これを焚けばその烟が能く水盂に入るとあるが、予が嘗て試みたところでは、多くその驗がなかつた。

按ずるに、龍なるものは東方の神であつて、その體は純陽であり、能く噓氣して雲を成す。陽の質は輕浮なるが故に雲は上升するのである。その骨は反つて手、足の少陰、厥陰の經に入るが、蓋し凡そ知覺、運動する者はみな陰陽に背て體を立てるので、孤陽なれば生じないのである。龍は純陽を乘つて骨は反て陰に屬し、藥に入れては能く陽中の陰を收め、心、腎の諸病を治す。所謂一陰一陽の法規である。その質は靈であつて、その齒は能く鬼遊不定を治し、驚癇を鎭める。凡そ病の肝に在るには、龍は肝木を主とし、これを治するに最も神である。涎なるものは陽中の陽だからその氣は絕だ香しいので、龍は木に屬し、木の氣は太陽を多く得るもので必ず香しい。故に諸香は龍を以て最と爲すのである。盂水を得たれば徑にその中に撲落して空外に落ちない。龍は水を以て用となすので、水を見れば精がそれに入るのである。藥に入て能く水道を利する所以であつて、陰陽を分ち、能く精魅鬼邪を殺すは、やはり至陰の物は眞陽を見て立ろに解するのである。

龍泄　河南の薛といふ姓の行商人の話に、曾て嘉興の永太守の處で龍泄が大塊に結成したもののあるのを見たが、その質はやはり輕く、六七兩から一觔ばかりのものもあつて一定しなかつたが、毎塊みな螺旋紋が廻つて象牙の花紋のやうであり、その色には純黑、褐白の二種があつたといふ。眞僞を判別せんとするには、刮削少量を滾水に泡けて見る。その氣は悉く滃として雲となり、婦人に遇ふと雲が輒ち髮際に撲入し、旋繞して散らない。蓋し龍は性淫を好むものだからだ。人がこれを服すれば腹が一向耗らないが、ただ雞湯を見ると輒ち化ける。もし服して後に雞湯を飮まないならば、翌日その藥がそのままで糞に出る。色もやはり改らない。淘り出して洗淨すればまた再び用ゐられ、氣も一向臭くない。その功效は、これを食へば能く婦人の子宮を煖め、男子の下元虛冷を治す。房術中に入れて用ゐる。

又、史良字の話。曾て龍血を見たが、棋子ほどの大いさに結塊し、物が映るほど光滑で、手が觸れると氷のやうに冷かつた。そもそも龍は純陽であつて、而も血だけが獨り冷なるはまた何故なるかを解せぬ。龍泄はまた何物であらうか。それは涎と血とであらうか、それとも精と尿とであらうか、倶に判らない事實だが、その說

を存して考證に俟つ。

西楞魚

坤輿圖說――大東洋に西楞と名ける魚を産する。上半身は男、女の形のやうで下半身は魚尾である。その骨を藥に入れて用ゐるのだが、女魚が更に效がある。血を止め、一切の內傷瘀損等の症を治す。

鰣魚鱗

本經逢原――鰣魚は性補し、中を溫め、虛を益して發毒の虞がない。この魚の江中に生じたものは、大きくして色が青く、味は極めて甘美である。海中に生じたものは小さくして色が赤く、味はやはりやや薄い。この魚は暗室で光を生ずるところを觀ると、遙に普通の魚の比でないものだ。

○綱目には、主治を、その肉は虛勞を補す。油を湯火傷に塗るといひ、集解下に、その鱗花を婦人の鈿飾にすることを記載したが、藥に入れての功用に言及しなかつ

た。

○張佳時云く、鱘魚は必ず活きたときに划水の邊の二鱗を拔くべきもので、尖長なるものが佳し、死魚鱗では藥力が減ずる。

【湯火傷】逢原に云く、鱘魚鱗を用ゐ、香油で熬つて塗れば立ろに效がある。茅集之云く、鱘魚鱗を腿瘡疼痛に貼れば立ろに效がある。

【疔を治す】陳氏傳方――疔瘡には鱘魚鱗を用ゐる。貼ると緊く食ひ込むものだから、先づ必ず酒飯を與へて飽吃させ、然る後に貼つてある魚鱗の邊を些しばかり揭起し、それを力を入れて揭げ取る　疔の根が著いて出るものである。但し疔根を揭出する時は極痛無比なもので、十分に醉つてゐなければ暈倒する。

○傅氏方――水疔に鱘魚を用ゐるには、腮下の腹の近い處にある划水の二瓣の間の長鱗二瓣が最も佳しい。但し得難い。今一般には背上の大鱗をこれに代へる。貼れば直ちに消する。

○毛世洪經驗集――鱘魚靨を手で剖下し、水を見せずに陰乾して收貯する。これは拔疔第一の妙藥である。使用するときには、銀針で疔の頭を撥開し、鱗一片をそ

れに貼つて淸涼膏で蓋ひ、一夜經つて揭開するとその疔は根を連ねて拔出する。後に生肌散を用ゐて功を收める。予は二人の貴婦人の大脚趾に瘡を患つて二三年功を收めなかつたものを治療し、鱉一片を銀花湯に浸して軟にして拭ひ乾し、それを貼ると數日ならずして癒えた。

【下疳】救生苦海——鰣魚鱗を焙乾して硏る。白色なので白龍丹と名ける。これを敷けば直ちに癒える。これは可包醫から得た方だ。

【血痣】蔡雲白の說に、一般に、生れながらにして血痣を生じ、挑破すると出血して止まぬものには、鰣魚鱗を貼る。直に痂になつて癒える。

苦魚

劉蒜苦齋記——匡山は處州龍泉縣にあり、劍溪の水が此に發源して注いで大谷に入る。その中に斑文の小魚多し。形狀は吹沙のやうで、味は苦くして微し辛し 食へる。故にかく名けたのだ。

酒毒を解し、酒を醒し得る。

薬性考――苦魚は微し辛し、形は細くして色は斑である。烹て食へば腴美なもので、酒を消し、癜を除く。

金魚

この魚は宋の南渡の始からあつたもので、一名硃砂魚といふ。これは人家で盆盎中に飼つて愛玩するもので、三尾、四尾あつて尾を品するに金管、銀管の別があり、蛋魚なる名があつて、龍蛋、文蛋、虎頭、反鱗の諸品があり、純紅、純白、或は紅白相間り、體に五色を具し、極めて大なるものは三四寸、小なるものは一寸ばかりである。綱目には、金魚の條に、主治は痢とあるが、用ゐるとしたものは金絲鯉魚である。按ずるに、金魚には鯉、鯽、鰷の諸種はあるけれども、實は鯉魚中の一種の紅鯉は金鯉と名け、鯽魚中の一種の紅鯽は金鯽と名け、いづれも金魚なる名はあるがこの物とは全く別である。而るに東璧は合して一としたのは誤である。

味苦く微し鹹し、小毒あり。これを食へば人をして吐かしめる。綱目には、本條の氣味下に、甘し、平にして毒なしとした。これは紅鯽を指して言つてゐるので、

竝に今の金魚ではない。

【服滷毒を解す】金魚一二尾を搗いて灌ぎ下す。涎水を吐出して自ら甦る。

【瘋癲、石臌、水臌、黄疸を治す】慈航活人書――いづれも紅色の金魚一箇を用ゐ、三尾のものを取つて甘蔗の大なるもの一二箇と共に搗き爛らし、汁を絞つて服す。立ろに痰涎を吐出して癒える。

阿羅魚

首が一つで身が十あり、音は犬の吠えるやうだ。また火を禦げるものである。（珍異藥品）

癰疽を療ず。

渼陂魚

輿地志――鄠縣の渼陂に出る魚で、味が美で藥に入れられる。

痔を治す。

四足魚

物理小識――游子六曰く、闉の高山の水源に黑魚がある。指ほどの大いさで、その鱗、卽ち皮で、四足がある。粥に調へ、藥に入れられる。

小兒の疳を治す。

河豚目

子

逢原に云く、河豚の目を抉り取り、輕粉を拌ぜて地中に埋めて置くと化けて水となる。婦人の脚上の雞眼瘡を拔く。根を脫き得るものである。

河豚子　性は有毒である。壁蝨を絕ち得る。行篋檢祕――蟹殼、樟氷各五分と共に棉花子に拌ぜ、寢臺の下に置いて烟に燒いて熏ずる。

蟯蜋魚

三才藻異——撫仙湖に産する。狀態は龜殼のやうで青く、大いさは盤ほどあり、尾がなく、八足で腹が白い。

これを食へば瘴毒を辟ける。

蜜姑魚

宦遊筆記——光溪から四明に入つて二十餘里の地點に蜜巖がある。峭壁千尋、下は深溪に臨み、窅洞として底なく、巖の頂上に舊と蜂窠があつて、數百萬の蜂が聚り、その蜜が溪に滴下してそれを魚が食ふ。故に魚の味は甚しく甘い。蜜姑魚といふ。その釣る法は非常に曲折の多いものだ。魚は性極めて苔を喜むので、崖下に縋懸して演漾たる深碧にして細い水衣を剜り取つて餌とし、魚の性が暴くして鉤に遇へば跳宕して卒に制しきれぬのと、蜜巖下の溪水が甚だ清んでゐて、粗縄を用ゐては魚が瞥見して驚逝する恐があり、細絲を用ゐてはまた魚の跳宕する力に勝へられない恐があるので、釣る者は長さ十餘丈の絲を取つて竿上に盤し、遙に深波中の魚が餌餌と鼓鬣して來るの望見すると、その絲を徐徐に放ち、さながら小兒が紙鳶の絲を

逆るやうにして、その往くがままに任せる。魚は鉤が入ると、果して一躍數尺、翻波跋浪し、溪面に横激して、その鱗光が閃爍し、千片の碎金が珠顆中に雜るが如く、隨風散灑して觀るものの目眩心動せざるるはない。已にして徐徐に力が倦むので始めてそれが採れるのだ。

性は溫、味は甘である。これを食へば胃津を生じ、肺氣を益し、血脈を補し、髓を增し、熱を去り、虛羸を除き、筋骨を壯にし、嗽を止め、喘を定め、功は燕窩、蛤蚧に同じ。

按ずるに、この魚は最も淸潔なもので、ただ苔、蜜だけを食物とする。苔は寒、蜜は溫であつて、水火旣濟の力を得て、大いに能く土を補し、金を生ずる。燕窩は性淸肅にして下行し、蛤蚧は性和中して臟を溫める。この物は故に能くこれが眞を兼ねたものだから、勞嗽、虛羸の食品として上藥である。柳崖外編の記載に、張方海は浙人で、少年にして四明山に讀書し、炊いた穀食を斷つこと數ヶ月であつたが、山の磵谷には竹が多く、峭壁に蜜があつて、蜜が江に入つて魚と化し、蜜鮎と名けるものがゐた。そこで張は筍を掘り鮎を釣つて食物とした。彼自身の話では、

筍は味が淡くして清く、蜜餅は濃くして美である。天台の胡麻などの及ばないところのあるものだといつた。その後、遂に身輕くして寒暑に耐へ、一向に烟火の味を思はなくなつたとある。これに據つて見ると、その功用は確に誣妄でない。

雪鯪

粤語――鯪魚は、廣地方で池塘に多く飼つてゐるが、それで魚が繁殖し成長する。鯽と性が相反し、鯽は土に屬してその性沈み、長く水中に潛むが、鯪は水に屬してその性は浮み、長く水上に躍る。鯽は食へば腸に實するが、鯪は食へば氣を行り得る。鯽は守であるが鯪は行であつて、かやうに性が各〻同じくない。この物は冬に肥えるところからかく名けたのである。喜んで波上に浮泳し、奔流に遇ふと一尋一丈ほど跳躍するものだ。これを食へば人の氣力を益す。

〇梧潯雜佩――鯪魚は、形は鰱に似てやや短く、味は甚だ美である。膾にするが尤も佳し。

筋骨を健にし、血を活し、氣を行り、水を逐ひ、濕を利す。

帶魚

海中に産する。形は帶のやうで、頭が尖つて尾が細く、長いものは五六尺に達する。大小一定せず、鱗なくして身に涎があり、乾すと銀光色になる。全身に細骨がなくてただ中に一脊骨だけがあり、邊箕のやうな狀態で兩面みな肉で裹まれてゐる。今は一般に常食して海鮮といふ。漁海人の言に據ると、この魚は八月中に外洋から來て、千百羣を成し、洋中に在つて尾を啣んで行く。網にかからぬもので、ただ鉤で取る。漁夫は率ね乾した帶魚の肉一塊を餌として釣るのであるが、一尾が鉤にかかるとその他の諸魚がみな相啣んで斷れずに續いて來る。それを捕取して船に盈てる。この魚の出るのは八月で、十月に盛である。霧が重ると魚が多く、霧が少ければ魚も少いので、大體霧を視て相場を立てるさうである。綱目には、無鱗魚の條にただこの物だけを遺してあるから補つて置く。

〇五雜俎——閩に帶魚といふがある。長さ一丈餘、無鱗で腥い。諸魚中で最も賤いもので、客への馳走には調理に使はない。然し中流の家庭で油で沃煎したものは

やはり甚だ馨潔だ。

○福清志――帯魚は、身は薄くして長く、その形は帯のやうで鱗がなく、夜に入ると爛然として光がある。小さいものを俗に帯柳と名ける。

○物鑑――帯魚は、形は纖長で帯に似てゐる。尾を啣んで行くもので、漁人がその一尾を取ると、他の魚がその尾を啣んで連類して上つて來て斷れない。遂に舟に盈溢れて載せきれなくなるので、刀で割斷して餘分なだけを捨てる。

○玉環志――帯魚は首尾相啣んで行くものだ。釣る法は、大縄一本に竹筒を套して浮子とし、それを海面に浮遊させ、その浮子に小縄一百二十本を綴り付け、小縄毎に端に銅絲一尺を拴け、銅絲の端に長さ三寸の鐵鈎を拴け、帯魚そのものを餌にして釣るのであるが、まだ帯魚を取らぬ先には鼻涕魚を代用する。凡そ海魚を釣るにはみなこの通りである。時期は九月から始つて翌年二月に止める。これを魚汛といふ。

○朱排山柑園小識――帯魚は海中に生ずる。その狀態は鰻のやうで、首が鋭く身が扁く眼が大きく、齒が細く、色白く、鱗がなく、脊骨は篦のやう、肉は細くして

肥え、長さ二三尺あり、形は帶のやうだ　また裙帶魚ともいふ　冬期風浪が大いに作るとこれが釣れる。薨して鯗にして遠方へ送る

味甘し、性は平なり。中を和し、胃を開く（食物宜忌）

帶魚の形は長く扁く薄く、帶に似て色白く、鱗がなく、肉が細くして膾に佳し。醃鮑して風乾すれば、久しく貯藏しても腐敗せぬ。煎烹すれば味が美である。多食すれば痛を發する。註　帶魚は尾を啣んで行くもので、一尾を捕ると引き續き數十尾を得るものだ。醃けて食ふが佳し。暗夜に光のあるものだから毒がある。（藥性考）

血鱔

浙江の寧波府慈谿縣に產し、白龍潭の產を第一とする。他の地の產は尾尖がまだ黑く、全體を通じて硃砂のやうに紅いわけに行かぬ。葛三春の話に、白龍潭の血鱔は全身が血のやうに紅いが、毎年產出する數はやはり稀だ。その血を取つて酒を沖して飲めば驟に氣力を長ずる。行伍中に（一）八段錦の工夫を學習するものが多くこれを服するといふ。

（一）八段錦、未詳。

氣力を增し、筋骨を壯にし、血を益し、髓を塡てる。

沙魚翅

沙、卽ち鮫魚であつて、種類が甚だ多い。いづれも食へる。綱目には、鮫魚の條の集解下の瀨澗の註に、沙魚は腹下に翅があり、味は並に肥美である。南方人がこれを珍とするといひ、主治下に特にその肉、皮、膽の功用を記載したが、翅だけを省略した。今は一般にこれは常嗜の品とする習俗になつてゐて、凡そ宴會の餚饌には必ずこの物を供へて珍味な料理とする。その翅を乾してものは片と成し、大小はあるが率ね三を一對としてあるものだ。蓋し脊翅が一、划水翅が二である。煮て硬骨を拆き去り、軟刺を撿り取る。色は金のやうになるものだ。瀹いて雞湯を佐として調理すると味が最も美である。漳泉には、適當に煮て純ら軟刺だけを剔取し、圍にした臙脂餅のやうな狀態のものがある。金色愛すべきもので、沙刺片と名ける。更に佳いものだ。

味甘し、性は平である。五臟を補し、魚積を消し、蠱毒を解す（食物宜忌）氣を益

し、脇を開き、毒を托し、腰力を長ずる。（閩部食疏）痰を清し、胃を開き、食を進める。（藥性考）

土附

嘉興縣志――一名菜花魚といふ。この物は菜花の咲く時に出て最も肥美なものだから名けたのだ。程大昌の演繁露に、土部は呉興地方では鱸鱧と呼ぶ、それはその質が圓くして面が長く、黒鱧に似たもので、その鱗の斑駁がまた鱸魚に似てゐるから二つの名を呼ばれるのだ。長興では蕩部といひ、又、蕩魚といふとある。湖州府志には、鮒魚は、今は土部と呼ぶ。それはこの魚の質が沈であつて、常に土に附いて行き、他の魚のやうに水に浮んで泳遊しないからである。又、土附と名けるとある。銭塘縣志には、土鮁、俗に土哺と名ける。清明の前のものを佳しとするとある。藻異には、吐哺は杭に産する。本來は土附と名ける。この物は土に附いて生きるからで、色は黒く、味は美だといつてある。雨航雜錄には、吐哺は、或る人は、物を嚼んで吐くから名けたのだといふとある。

敏按ずるに、以上の諸說には、いづれも杜父なる名稱はないが、綱目には杜父魚を記載して、その色は黃黑で斑があり、脊背上に鬐刺があつて人を螫すといひ、また渡父魚、黃黝魚、船矴魚、伏念魚と名けるとあつて、土附と似たものとしては甚だ相類してゐない。沈雲將の食纂、陳芝山の食物宜忌に、いづれもこれを今の土部魚、卽ち杜父魚であるとしてあるが、これは山堂肆考の誤を承けたのである。現に土部は杭城に甚だ多く、一年中みなあるが、正二三月だけが旺である。背は黑く、また淡黑に土黃色を帶びたものもある。能く人を刺すといふことは聞かない。俗に、この魚は、立冬後には土に伏し眼を閉ぢて物を食はない。冬至後に土を出て土に附いて行き、淸明後に眼を開いて小蟲や蝦、何でも食ふ。故に毒があるのだといふ。陳芝山は、土部は、淸明後には頭上に紅蟲が生じてゐて食はれないといつたが、仔細にその形狀、食性を調べて見るに、杜父とは全然類してゐない。强ひて合致させねばならぬわけはあるまい。予は故に禽蟲考中の魚類に於て甚だ詳細に辨じ、杜父をば吹沙の類に入れて、別に土附の本條を立てた。敢て古人の說に阿附して後世を欺くことをしない。土附は綱目の記載に無いものだから、復た補記して置く。

味甘し、性は温なり。○脾、胃を補し、噎膈を治し、水腫、濕氣を除き、一切の瘡疥を療ず。この物はまた能く陽を扶けるもので、その子を燒酒で酔はせて食へば、頗る能く腎を興す。蝦と一對同功である。それはこの魚は蝦を食ふ力に因るのである。

子　相火を助け、腰腎を煖める。

烏魚蛋

登萊に產する。これは烏賊の腹中の卵である。藥性考では、これを雄魚白としてある。

味鹹し。胃を開き、水を利す。

青魚膽

梧潯雜佩——青魚膽は藤縣の䈄——䈄字は字書に見えないが、茳（カシ）といふやうに讀む。郡人にはまたこの姓の人がある。——洲に產する。洲は江中に在つて、長さ五六里ばかり、そ

の上には居民が甚多く、水には石が多く、石上の青苔をこの魚が食物とする。その膽は極めて涼であつて、藥に入れられる。他の地のものでは用ゐるに堪へない。魚は大なるは百餘觔ある。漁人は網で取り、必ず官廳へ屆出てからその膽を剖取し、それを市に賣る。

白皮子

蟫史——蛇は南海に生ずる。四五月初生には帶のやうだが、六月になると次第に大きくなつて盤の形のやうになり、白綠絮に似て耳、目、口、鼻がなく、鱗、骨は一段で色は赤く。破碎したものをば蛇頭といふ。その肉は水晶のやうだ。明礬で醃けて吳人は水母鮮と呼ぶ。久しくして次第に紙のやうに薄くなつたものを俗に白皮紙と呼ぶ。按ずるに、今いふ白皮紙なるものは海蜇の外面の皮で、陳久なる海蜇ではない。一名を秋風子といふ。

○米排山柑園小識——海蛇の上にある白皮は潔白で、脆く美味なることは海蛇に過ぎる。これを白皮子といふ。

〇綱目の記載には、海鮀は水母と名ける。一般に石灰、礬水で醃けてその血水を去る。それで色が白い。その形の最も厚いものを鮀頭といひ、味は更に勝れてゐるといつてあるが、その外皮の用をば記錄せず、且つその性の說明に、煖なり、河魚腹疾を治すべしといつたが、農田餘話には、水母はもと陰海に凝結した物で、食へば煖であるといひ、その性は未詳であり、東璧もやはり發明するところがなかつた。予（學敏）は嘗て東甌に數年居たことがあつて、土人の鮀を販賣して生業とする者に會つて詢ねて見たが、その言に據ると、その物は確に海水の所結に係るもので、東南の海は倶に鹹く、春、夏の雨天に遇ふと、海中に在るものは一滴の雨水が海に入ると輒ち一小泡が生じて海面に凝聚し、初には豆ほどの大いさだが、波に隨つて逐蕩し、日光の烘染を受けて次第に長大となり、形を成して笠の臺のやうになり、塊然として潮に隨つて行くものだ。土人中の鮀を撈取する者は、毎に海塗の間に竹を挿んで小さい城のやうなものを作り、稻草で網を作つてそれを圍んで置く、長潮が來ると鮀が潮に隨て來てその竹城に入り、網に絡まれて出られなくなる。然る後にそれを取るのだ。刀でその中段を剺くと砉然と開け、腸、胃穢積のやうなものがあ

つて落落として交下する。それをば蜇花と名ける。食へばまた最も美味なものだ。そこで再び礬灰で醃けて賣るのだといふ。按ずるに、海は陰水であり、天の雨水は陽に屬する。相入つて感じ、そこでこの物が生ずるので、太陽の眞氣を受けてゐる。日に漸く長大して性の暖なる所以である。

味鹹く澁し、性は温なり。痰を消し、積を行り、帶を止め、風を袪る。

【爛腿に貼る】救生苦海――白皮子を用ゐ、瘡の大小に照して翦んで膏にして貼り、内に銀珠を摻る。

【無名腫毒】集聽方――白皮子一片を用ゐ、白糖霜で軟に揉み、中に一孔を開けて貼る。重きものは潰れ、輕きものは散る。又、痛を止める。

【流火】文堂集驗――海蜇皮の薄いものを取つて貼る。燥するときは易へる。

【頭風】雨の太陽に貼れば能く風濕を抜いて外に出す。

【膝髕風濕】白皮子を貼る。

【痔を消す】王聖兪云く、二方あつて、一には白皮子を荸薺と共に燒酒に浸して服す。一には白皮子、荸薺と共に煮てただ荸薺だけを食ふ。痔を自消する。

○程克庵云く、凡そ小兒一切の積滯には、荸薺と海蜇とを共に煮て、蜇を去つて薺を食ふ。それで諸積は自ら消する。やはり積は寒でなければ滯つて成らないものだからで、海蜇は能く水臟を暖め、荸薺は堅きを化かし、相因つて作用するからその效果が捷なのである。同壽錄に記載したその方は、痞を治するに、大荸薺一百個、古錢二十個、海蜇一觔、皮硝四兩を燒酒三觔に共に七日浸して後、毎朝四錢を喫し、十箇まで增加して止める。それで癒える。

鮆魚

滇程記――雲南の百夷中に小孟貢江といふがあつて、鮆魚を產し、彼の地の夷人はそれを食つて日に百婦を御する。故に夷人は性が極めて淫であつて、貴賤倶に數妻を有つてゐる。その地にはまた縛薑を產する。

○說略に云く、鮆魚は孟貢江に產する。牡のものは恒に多くの牝と遊ぶ。夷人は常にその肉を食ひ、一日に能く百女を御す。藥に入れるには雄のものを用ゐる。陽道を壯にし、精髓を固め、八十の老翁もこれを服すれば子を多く生ます。

介部

海龍

赤嵌集——海龍は澎湖澳に產する。冬の日に海灘に雙んで躍つてゐるところを漁人が獲つて珍物と號してある。首、尾は龍に似て牙、爪がない。大なるものは一尺餘ある。藥に入れる。譯史——この物には雌雄があつて、雌は黃で雄は靑い。功は海馬に倍し、房を益す。箝れば催生に尤も捷效があり、握れば直ちに產む。百草鏡に云く、海馬の屬に三あつて、小なるものは長さ一寸に及ばず、海蛆と名け、藥に入れない。中等のものは長さ一二寸、海馬と名け、尾は盤旋して圈を作し、形は扁くして馬のやうだ。その性は溫、味は甘であつて、水臟を煖め、陽道を壯にし、瘕塊を消し、疔腫、產難、血氣痛を治す。海龍なるものは海馬中の絕大なるもので、長さは四五寸から一尺ほどで一定せぬ。いづれも長身で尾が直く、圈になつてゐない。藥に入れての功力は尤も倍する。同一類ではあるが形狀に微に不同があ

る。この物は廣州、南海にもあつて、體は方で全身が玉色の如く、竹節紋が起つてゐて密密に相比び、光瑩目に耀き、誠に佳品である。

○介語――蝦姑、一名海馬。その扁くして蜈蚣の如きものを燒いて服すれば夜遺に主效がある。

海牛

本草原始――海牛は東海に生ずる。海蠃の屬であつて、頭に牛のやうに角があるところからかく名けたのである。その角は硬く尖銳で紋があり、身は蒼色で龜背の紋があり、腹は黃白色で筋があり、頂に花點があり尾は魚である。現に房術中に多くこれを用ゐる。

氣味は鹹、溫にして毒なし、主治は腎を益し、精を固くし、陽を與す。

白鼈

粤志――白鼈は痰火を治し得る。その初は神授で得たもので、廣地方では甚だこ

れを珍とし『烏耳の鱓、白甲の魚、陰を滋くし火を降すは只だ須臾なり』といふ口ずさみの言葉がある。一名玉躍龍といふ。その背上が僂起して躍龍のやうだからである。首に連つて白きものが良し。甲が白くして首、足が青いものは及ばない。

虚勞を補し、痰火を瘉し、陰を滋くし、氣を降し、血を養ひ、精を益す。

鼈膽

盧之頤云く、鼈には耳がなく、眼を以て聽く。故にその目は瞥識し得ず、明に精にして復た聰に識るのであつて、ただ肝竅に精專なるのみならず、膽も亦衆に異るものである。而して味は大いに辛く、膂脊が脇に連る。脇はまた少陽、膽の府の所屬であつて、これは木、金の交互するものだ。故に聲と色と疊用することを得るのであつて、肝は膽の臟として決を取り、更に相親いのである。

本草乘雅に云く、味辛し、聾瞽を開き、瘰癧、痞積、息肉、惡陰蝕、痔核を除く、今は世間で房術に入れてゐる。風尙の劣下だ。

「痔瘡、痔漏」家寶方――鼈膽一個から取つた汁で香墨を磨り、麝香、冰片少量を

入れ、雞毛に蘸けて塗る。

物理小識に云く、鼈膽は辣なるもので、竅を通ずるに尤も捷である。これは一般にまだ知られてゐないことだ。

蟶殼

綱目には、蟶の條にただその肉を記載して、冷痢を治し、蓐勞を補すといつたに止まり、その殼の功用には及ばなかつた。

【喉風急痺を治す】萬選方——蟶殼を瓦上に置いて日に曬し夜露して年を經たものを取下す。色は雪のやうに白くなつてゐる。細に擣いて水で漂淨した末を曬乾し、冰片と共に喉に吹く。專ら咽喉一切の急症を治して立ろに癒える。

海螄

杭州府志——海螄を杭の俗間では立夏に時に應ずるの味とし、花椒を灑ぎ麻油を拌ぜて食ふ。

（二）海塗ハ海泥ニ同ジ。

○從新に云く、螺螄に比し身が細くして長く、殼は旋紋があつて六七屆し、頭上に靨がある。春初に蜒が出て海崖の石壁に釘いたところを、漁人が下に網をかけて一掠めに取つて鹽、酒、椒、桂で調理する。按ずるに、海螄には太さ指ほど、長さ一二寸のものがあつて、釘頭螺と名け、溫、台、沿海の諸郡に多くある。海螄螺は（二）海塗中に生じ、立夏の後にある。ある人がその羣が變じて蛗となるを見た。今世間でいふ豆娘がそれである。或は、この螺は能く一丈ばかりも跳ねるものだといふ。蓋しその處を遷すのである。この物はまた能く蚶を食ふ。明州の奉化には蚶田が多く、いづれも海塗から苗を取つて種ゑるのであつて、久しくすると自から大きくなるが、その田の所有者は海螄の苗が出るのを恐れて不時に手入れをして監視する。蓋し蚶は他の物をば畏れないが、ただ海螄だけを畏れる。蚶田中にこの物が一箇ゐると、蚶は全く種無しにみな吮はれて食盡されるものだ。玉環に產するものは太さ指ほどあり、釘頭螺と名ける。

鹹し。寒なり。瘰癧、結核を治し、能く鬱氣を降す。

【蛆を辟ける】雲客傳方——立夏の日に海螄を食ひ、後に殼七箇を人に見られな

いやうに厠中、或は馬桶中に撒く。若中に蛆を生ぜぬこと頗る驗がある。

吐鐵

沈雲將食物本草に曰く、吐鐵は海中の螺屬であつて、太さ指ほどあり、中に腹があつて凝膏のやうに白く、その殼中に本身よりも大きい膏を吐き、光明潔白で美しいものだ。姑蘇地方では客に出す酒肴の小皿盛にし、海錯の上品とし、一名麥螺、一名梅螺といふ。寧波のものは大きくして脂が多いが、餘姚のものは及ばない。生で食へば人をして頭腫せしめる。土人は鹽で漬けてその第一回目の涎を去る。便縮には食ふがよし。

○海味索隱に曰く、土鐵、一名泥螺、寧波の南田に產するものが佳し。五月、梅雨後に收製する。

○會稽志――吐鐵は歲時に沙を含む。沙は黑くして鐵のやうだ。桃花時に至つて鐵を始めて吐盡す。見只編に、九月に食へるといつてある。蓋しこの物は泥塗に產して泥を以て食物とするが、八月から九月まではまだ泥を食はずして晶瑩な白脂を

塗上に吐くので、他の月に出るものよりも佳いのである。

○福州府志――吐鐵は海錯中での上品であつて、色は青く、外殼も軟で、肉は鐵のやうに黒く、殼外に吐露する。一般に醃藏にし、糟浸にして各地へ賣る。別に菉豆ほどの小さいものがあつて、桃花の時になると出るので桃花吐鐵と名ける。泉州に產するものは名けて麥螺といふ。

○楷弟觀頤錄に云く、吐鐵は、海寧に產するものは脂が無くて泥が多く、肉が韌くして食ふに堪へない。寧波に產するものは極めて大きく、脂が多く泥がなく、肉は脆である。水で三回洗ひ、甜生白酒に半日浸し、鹽味の出るを待つて白酒釀に換へ、燒酒を加へる。或は單に燒酒で浸すもよし。必ず多く白糖を入れて貯藏すれば久しく壞れない。

○柑園小識――吐鐵は海中に生じ、微に扁螺に似て、殼は薄くして白く、肉は青黒色である。大なるものは脂が多い。鹽で漬ければ遠方へ送れる。

甘く酸く鹹し、寒なり。肝、腎を補し、精髓を益し、耳目を明にする。

按ずるに、吐鐵は色が青くして甲木の氣を得、斥鹵を以て食物とし、一向に他の

ものを食はず、更に土の餘潤を得て脂膏を生ずる。八九月に土を食はぬのは、秋は金が盛で木氣が衰へる。故に泥を吐いて食はぬのである。その能く肝、腎を補し、精髓を益するは、やはり脾土が養化を得て津液が上升するわけなので、幷に耳目に及ぶのである。東璧は蓼螺を泥螺とし、味酸くして肝に入るといつたが、二物は形質が同じくなく、性味もやはり異ふのだから強ひて一に合するは誤である。この物は又、能く喉燥を潤して津を生ずる。予は、庚申の歳の二月、毎に燥火を患ひ、夜に入ると喉嚨が乾燥し舌が裂けるやうに枯れて、花粉、生津の藥を服しても多く效驗を獲なかつたが、ある日吐鐵を買つて食ふと、甘くもあり、夜になつて嚨乾も癒えた。なる程津液を生じ、脾陰を養ふ力の大なるものだ。

田螺涎

保元方——田螺涎は能く水腫を去る。田螺を多少に拘らず水で漂して香油一盞を水中に加へ、その涎を自然に吐出させて取り、曬乾して末にし、毎服三分に過ぎぬ量を酒で調へて服す。水は小便から下り、氣は大便から出て腫は消く。再び脾、胃

を養ふ藥を服すれば全癒する。

蛤蜊肉

殼が厚く口が紫で圓いものを蛤蜊といふ。綱目には、本條下にその肉を記載し、性寒なりとして、高武宗の痘疹正宗に、疹を發し得るとし、及び痘毒の目に入りたるを治するに、その汁を取つて點けるとある說を闢けて謬としたが、實はただ性寒が方に能く熱藥の毒を解すのである。正にその丹石と相反する點を取つて利用するだけのものだ。

【癰、疔、痘毒を治す】集聽に記載された一捻金の方――一切の癰疽腫毒の初起を治するに最も效驗があり、兼て疔瘡、喉風、蛇傷、犬咬、及び小兒の痘毒を治す。乳香一錢、雄黃三錢、血竭一錢半、この三味は必しも製せぬ。沒藥一錢、明礬一錢、硃砂三錢、紅信六錢、麝香六分、蟾酥一錢、蛤蜊肉二錢、蜈蚣三錢、甲片を炒つて三錢、殭蠶一錢、川烏一錢、牙皂四錢を共に末にして磁罐に貯へ、大人は一分五釐、小人は七釐、壯者には二分にてもよし。葱白三寸を搗爛らしたもので藥を和して丸

にし、好酒で服下し、汗を取る　再服は必しも汗せぬ。

蜆腊

蜆は沙泥中に生ずる。江湖、溪澗に多くゐる。その類は一ならずして黄蜆、黑蜆、白蜆、金口、玉口等の名がある。黄蜆は殼が薄くして肉が肥え、黑蜆は殼が厚くして肉が薄い。又、番禺、韋涌地方に產する無耳蜆といふは更に非常に甘美である。凡そ蛤の屬はみな能く子を孕むが、黄蜆は蛾に化して卵を散ずる。白蜆は霧を藉りて形を生ずるといふから、また一の不思議だ。

海南介語――蜆は沙に在るものは黄に、泥にあるものは黑い。蜆は老いると肉から小蛾が出て、蜆が死ねば小蛾が復た卵を水上に散じて蜆となる。凡そ南風で霧が重ければ白蜆が多く、北風の霧なればさうでない。蓋し白蜆の生ずるは霧に生ずるもので、霧は味が鹹く、鹹は白蜆が生ずるところの本である。始め生れるときの白蜆の形は霧のやうで空から下る。無きが若く有るが若く、一般人はそれを見て霧だと思つてゐるが、漁人はそれを知つてゐて、天が蜆子を雨らすとしてゐる。蜆子が既

に成ると天の暖なるを以て肥え、寒くして瘠せる。菱塘、沙灣の二都江水中には厚く積つて數十百丈に達してゐて、これを蜆塘といふ。その利の頗る大なるものだ

綱目には、蜆の條下の集解に尙ほ詳晰を欠き、且つその主治下に、殼、肉、蜆水をいづれも記載したが、蜆腊に就いては何ともいつてない。特に介語を採つて補記して置く。

蟲を解し、幷に水土の服せぬを治す。（介語）

蚌淚

蚌中の水である。蚌は淡水中に生じて色が蒼く、肝に入る。故に熱を淸し、濕を行り、雀目、夜盲を治するの力がある。綱目には、蚌肉、及び蚌粉の功用を記載して、獨りその殼内に含むところの水を遺した。實はこの水は乃ち眞陰、天一の精であつて、藥に入れることが最も廣いものだ。特にその缺を補つて置く。

熱を淸し、胎を安じ、痰を消し、濕を除き、酒積、丹石藥の毒を解す。

「初生小兒の啞驚」逢原に云く、活蚌水で墨を磨つて口中に滴し入れる。少頃して

黑糞を下して癒える。

【湯火傷】生蚌を炙いて水を塗る。

西施舌

居本畯曰く、沙蛤土匙である。呉航に產する。蛤蜊に似てゐるが長大で、舌は白色である。西施舌と名ける。閩部疏に曰く、海錯にして、東部四郡に產するものでは西施舌を第一とし、蠣房がこれに次ぐ。西施舌の本來の名は車蛤であるが、美味なるところから謚されたものだ。長樂灣中に產する。

本草從新――西施舌は浙、溫州にある。海泥中に生じ、車螯に似て扁く、常に肉一寸餘を吐く。それが舌に類してゐるからかく名けたのである。

敏按ずるに、臨安で劉芳洲明府の官舍に寄寓した。劉は諸城相國の胞姪である。その言に據ると、介屬の美は西施舌に過ぐるものはない。天下に諸城の黃石瀾の海濱に產するものを以て第一とする。この物は沙中に生じ、仲冬に始めて有り、正月の半を過ぎると無い。取るには、先づ石の碌礴で沙岸を磨つて沙土を平實にし、少

頃して沙際を視て、小穴があつて泡沫が出てゐるのを見ればこの物のあることが判る。然る後に掘つて取るのだといふ。綱目には、海蛤、蛤蜊の條中に獨りこれを遺してあるから、此に吳氏從新本に依つて補記して置く。

甘く鹹し、平なり。精を益し、臟腑を潤し、煩渴を止める。補陰の要藥である。（從新）

宦遊筆記――西施舌は車螯に似て扁い。海泥中に生ずる。一名沙蛤といふ。長さ二寸ばかり、常に肉一寸餘を吐いて舌に類す。俗にその甘美なところからかく名けたのだ。

石蜐

俗に龜脚蟶と呼び、海濱に多くある。古は未だ藥に入れたことを聞かない。瀕湖獨りこの品を增して、ただその能く小便を利することを記載したに止まつたが、實はこの物は別に功用がある。此に介語に依つて補記する。

朱排山柑園小識――龜却は、形は龜の脚に似て、海中の石上に生ずる。殼は蟹、

蟄のやうで、その色は紫である。食へるものだ。即ち石蠘である。江淹に石蠘の賦がある。

寒澼を下し、積痞、濕、腫脹を消す。虚損の人は米酒で共に煮て食へば最も補益する。(介語)

乾蝦

蝦米　鶯爪　蝦子　對蝦

蝦は淡水に生ずるものは色が青く、鹹水に生ずるものは色が白く。溪澗中に出るものは殻が厚くして氣が腥い。それは土氣を得ることが薄いためだ。湖澤、池沼中のものは殻が薄くして肉が滿ち、氣が腥くなくして味が佳い。海中のものは色白く、肉粗く、味が甚だ劣る。藥に入れるには湖澤中のものを以て第一とする。蝦を煮て、曬乾して殻を去つたものの大なるものを鶯爪といひ、小なるものを蝦米といふ。又、蝦子を名けて蝦春といふ。錢塘では、八月の潮の盛な時、江濱の人は潮の退く後を俟ち、大抵江沙、淺水の處で蝦子を撈取し、それを商品にして賣る。悪

賢い者は豆腐渣を攙和するから、必ず少量を銅銚へ入れ、鹽を和して炒つて見ねばならぬ。色の純紅色になるものならば眞物である。多くは醃藏して貯へ、來春の食品とする。綱目は、蝦、及び海蝦の分條が明晰で、蝦の内に於ける集解下に蝦米を記載し、海蝦の集解下に對蝦を記載したが、いづれも主治を揭げず、僅に、料理材料に充てるといつただけである。故に悉くその缺を補正する。

蝦米 味甘し、性は平なり。風痰を逐ふ。

胡濬の法製編にある蛤蚧蝦の製法に云く、これを食へば腎を補し、陽を益す。蝦米一觔、蛤蚧二箇、茴香、蜀椒各四兩をいづれも青鹽を化した酒で炙き炒り、木香末一兩を和勻し、熱に乘じて新缻中に取收めて密封し、毎服一匙を空心に鹽酒で嚼下す。甚だ妙である。

鰕爪 味甘し、性は平なり。疣を治し、癬を去る。(食物宜忌)

【乳無きもの、及び乳病を治する蝦米酒】鮮蝦米一觔の淨肉を取り、搗爛らして黃酒で熱服する。少時して乳が催す。再び猪蹄湯を飲む。一日數回。その乳は泉の如くになる。

【風痰を宣吐する】不藥良方——殼付きの蝦米半觔に葱、薑、醬を入れて汁に煮、先づ蝦を吃つて後に汁を吃ひ、吐腹を緊束し、雞翎で探吐する。

【赤白遊風】不藥良方——蝦米を搗き碎いて敷く。

蝦子　鮮のものは味甘し。醃けたものは味鹹く甘し。いづれも性は溫である。陽を助け、血脈を通ずる。（いづれも食物宜忌に記載がある）

○敏按ずるに、粤語に、蝦春は蝦子ではない。江中にある水蠹であつて、大いさ僅に豆ほどである。その卵は散布してあるので、取つても窮まりないものだとある。然らば蝦春の性は蝦の性と區別がなければならぬ。陳芝山の陽を助けるの說は、或はまた精核を加へてなかつたらしい。

對蝦　粤志——𧐐蝦は鹹水中に產し、大なるは長さ五六寸である。水から出ると死ぬものだ。漁人は深さ四尺五六寸の絲で粘した網をソッと海中に立てて置く。絲が柔く輕いので、𧐐蝦が來ると鬚尾が穿罥して脫けなくなるのだ。それを二箇づつ乾して對蝦とする。鮮のものは肉が肥白で甘い。

○朱排山柑園小識——海蝦は礫鬚鉞鼻で背に斷節があり、尾に硬鱗があり、足が

多くして好く躍る。溪河に生ずるものよりも大きく、長さ一尺餘あり、鬚は簪になる。土人は二箇づつ乾して對蝦といひ、上等の料理に使ふ。

○宦遊筆記――淮海に產する對蝦は長さ數寸あり、二箇づつ乾して環のやうに勾げて結んである。烹て羹にすれば味の鮮美なものだ。その地方の住民は往往それを客に享し、且つ遠方へ送る。或は、雌雄を對にしてあるのだといふが、子が生れる時から散じて了ふのだから雌か雄か判つたものでない。この物の出る時期は、正月の十五日後から始つて二三月が大いに盛で、端午から後になると杳として判らない。やはり物の理には推想し得ないものがある。

腎を補し、陽を興す。燒酒に浸して服す。

【痰火の後半身不遂、筋骨疼痛を治す】醫學指南――核桃仁、棉花子仁、杜仲を炒り、巴戟、硃砂、骨碎補、枸杞子、續斷、牛膝各二兩、大蝦米四兩、兎絲餅四兩を燒酒二十觔で煮て服す　老年者は附子、肉桂各一兩を加へて酒で全部を服し、渣をば曬乾して細末にし、蜜で丸にし、毎服二錢を酒で送下する。

蝦醬

粤語——蝦醬は香山で造つたものが美であつて、香山蝦といふ。その新寧、大襟、海、上下二川のものもやはり香しくして細く、頭尾と鬚とみな紅く、身は白く眼が黒い。醃ける初には毎百觔に鹽三觔を用ゐて缸口を封定し、蝦身が潰爛するを候つて四十觔までの鹽を加へる。そこで味が大いに佳くなり、久しく食へるやうになる。

【毒樹蠱を解す】廣の地には毒樹蠱といふがある。その樹は花なくして子を結し、牛奶のやうである。これを食へば立ろに死ぬ。蝦醬を以てこれを解す。

宦遊筆記——遼東の大淩河に出る蝦醬、蝦油はいづれも甘美である。平海にまた一種の小蝦を産し、紅毛子と名ける。蝦醬を作るに尤も佳し、現に浙江、寧波、及び蘇にいづれも蝦醬があつて、味はやはり佳し。

石上螺螄

俗に鬼螺螄と名ける。形は海螄のやうで小さく、秋、冬は常に牆脚、石隙の中に在り、夏期には濕地、青苔上に在る。取つて用ゐるには土を洗ひ去る。

【黃疸を治す】慈航活人書――石上螺螄半碗を取つて泥のやうに擣き、無灰白酒を頓に熱して沖して服す。

【疔】濟世良方の黃風膏――疔瘡、及び頭面の熱毒瘡を治す。雄黃一兩、釘銹、白梅肉各五錢、消風散一兩、夏期には鬼螺螄二十個を加へ、共に細末に研り、苦鹽滷で調勻して磁罐中に貯へる。凡そ疔腫毒瘡を患ふには、銀針で毒頂を挑破してこの藥を敷き、綿紙で蓋定する。その毒は收斂して走らず、三日後には癒える。

○黃氏醫抄――細長な小鬼螺螄を殼付きのまま搗爛らして患處に敷き、頭を露して膿を出す。翌日は消するものだ。

【疔を拔く】保合堂祕方――鬼螺螄一箇、荔枝核五箇を煆いて性を存し、白梅肉六箇と共に搗爛らして膏にして貼れば疔根を取出す。後に八寶丹を用ゐて功を收める。

【鼻疔】慈航活人書――花盆中の青螺二三箇を鹽と共に擣いて塗る。立ろに效が

ある。

【白火丹】集聽――丹に青、黄、赤、白、黒の五種あつて、黄、白は治し易いが黒丹は救へない。青丹は十日以内に治し、赤丹もさうである。いづれも燈火を見せ、鹽物を食つてはならぬ。治方は、溪澗中の鬼螺螄を取つて酒で煮て食ふ。それで消する。瘴瘇氣悶するものは數回食へば癒える。

【三漏丸】活人書――穿屁漏、通腸漏、瓜藤漏を治す。いづれも濕熱の邪毒である。蟲を殺し、管を退けるに穩當なる劑である。土蜂窩を煆き、鬼螺螄を煆き、蟬脱を煆いて各七錢、乳香、沒藥、川草薢を酥で炙き、陳棕を煆き、管仲を煆いて各五錢、猪懸蹄甲を煆いて十箇、刺蝟皮を炙いて一箇、雷丸三錢を、黄蠟四兩を化開して麻油六七匙を加へたものに入れて桐子大の丸にし、毎服六七十丸づつを空心に白湯で服す。

【通經】周氏家寶――鬼螺螄十四箇を砑碎し、油紙に攤して臍上に貼り、一晝夜縛つて置く。この螺は陰處に生じてゐるものである。

蟲部

雪蝦蟇

憶舊遊詩話——巴里坤の雪山中にある。醫家はこれを取つて性命根源の藥を作る。軍中の人は爭つて買つたが、一箇の價數千金にもなつたので、なかなか得易くなかつた。

○朱退谷は曾て吳門でこれを見たといふが、全身に金線紋があつて、その形は甚だ蝦蟇に似てゐるさうである。

性は大熱なり、命門を補し、丹田を益し、能く已に絕せるの陽を回らす。功は參、附を兼ねる。火盛のものは服してはならぬ。

【內造伏虎丹】祕方集腋——陽を興し、子を種ゑ、腎を强くし、神を助ける。眞川貝母四兩を必ず四製する。卽ち第一回目には大附子一箇を童尿一湯碗で蒸して細に切り、燒酒三湯碗、韭菜汁三湯碗と共に砂鍋に入れ、貝母をそれで煮乾して附子を

ば去つて用ゐず。第二回目には雪蝦蟇一兩、無いときは大蛤蚧一對を代用する。石で敲き砕いてまた燒酒、韭汁各三碗で同じく貝母を煮乾して蛤蚧をば去つて用ゐず。第三回目には吳茱萸一兩を用ゐ、また酒、韭汁各三碗で同じく貝母を煮乾して茱萸をば去つて用ゐず。第四回目には公丁香五錢を用ゐ、また酒、韭汁各三碗で同じく貝母を煮乾して丁香をば去つて用ゐず。かくて完製し上つてその貝母が泥のやうに爛れたものを石臼の中に入れて舂き、再び眞阿芙蓉一錢、乳製した蟾酥三錢、麝香五分を拌勻して條にし、焙乾して收貯する。使用するときには唾津で磨つて搽る。雪裏蝦蟇は性熱にして微し辛し。陽を壯にし、冷を卻け、痿弱を能く興らしめる。(藥性考)

海參

閩小記に云く、閩中の海參は色が獨り白い類であつて、竹簽で撐へてあり、大いさは掌ほどある。膠州、遼海に產するものと異ひ、味もやはり淡くして劣る。藥に入れるには遼海に產したものを良しとし、紅旗街から出るものは更に綠旗街に勝る。

刺あるをば刺參と名け、刺なきをば光參と名ける。藥に入れて用ゐるには大きくして刺あるものが佳し。一名海男子といひ、粳、糯の二種あるが、黑くして膩なるものが尤も佳し。人は腎を以て海となすものである。この種は北海の鹹水中に生じ、色がまた黑い。これで腎水を滋するはその類を求むるのである。

○百草鏡に云く、南海の泥塗にも海參を產するが、色が黃にして大きく、刺がなく、肉も硬くして食品にはならない。土人は名けて海瓜皮といふ。それはこの物が瓜皮のやうに粗糙なるをいつたものだ。それを庖熇猪肉に充てて食へば脾を健にする。陰分を滋補する藥に入れるには、必ず遼東產のものを用うべきもので、やはり熬膏して膠にして用ゐるがよし。

○藥鑑――海參は盛京、奉天等の地に出るものが第一であつて、色は黑く、肉は糯り、刺が多く、遼參、刺參と名ける。廣の海に產するものは廣參と名け、色が黃である。福建に產するものは皮が白く、肉は粳糙で厚く、刺がない、肥皂參、光參と名ける。浙江、寧波に產するものは大きくして軟く、刺がない、瓜皮參と名け、品が更に劣る。

○關東の韓子雅の言に、海參は東海中に生じ、大小一定せず、體は滑で蜒蝣の如く、能く伸縮する。海底に羣居して遊行の迅疾なものだ。參を取るには、海狗油を水に滴す。海水はそれで淸んで底が見え、海參のあるのが見えるので、直ちに水に入つてこれを取る。この物は人の氣に沾ふと動かぬもので、先づ兩手に探り握つて頸の兩傍に置き、再び取つたものを肋下に置き、次には兩の腿や股、及び膝まで何處へでも夾んで置ける。この物は一旦人の氣に沾へば動かぬからである、然る後に水を出し、刀で腸、胃を刳り去り、石灰で醃けて腥涎を去り、體內を緊密ならしめて乾す。乾すと縮つて一寸ばかりになるが、その質は生では瓜ほどの大さで、長さ一尺ばかりあるものだ。もし乾して一寸以上のものならば、生の時には體の更に大なるものなることが想ひ遣られるといふ。

○蓬萊の李金什の言に、海參は登州の海中にも產し、遼東と接壤の地に產した海參がやはり佳し。彼の土人の話に、海參は多く海中の大石上に伏し、水が深くして見えない。參を取るには必ず海狗油を用ゐる。油を水中に滴入すると、一暈があつて散開し、淸徹にして底が見える。然る後に水に入つて取るのであるが、往往にし

て鯊魚の毒害に遭ふ。それでその價はやはり廉くないとのことである。その體は、生では身に滑涎が多い。腸、胃を去り、灰で醃けて腥涎を去り、乾してから賣出すので、大抵は灰鹹の氣が多いといふ。

○福山の陳良翰云く、海參は北海に生じたものが佳く、天下第一である。その參は海底に潛伏して、二三月の東風が凍を解く時には多く水面に浮び出で、海塗淺沙の中で繁殖するので、水に入つて取り易い。然し腹中から子が出て後にはただ空皮があるだけで、皮は薄く、體は鬆く、味は甚だ美でなく、價もやはり廉い。識者はそれを賤んで名けて春皮といふ。四五月になると大海の深水に入つて石を抱いて棲んでゐるので、取るにはやや六ケ敷く、體はやや肥厚になつてゐる。伏月になると、海中の極深の處の石底、或は泥穴中に潛伏してゐて容易には取れない。その質も肥厚で皮の刺に光澤があり、味は最も美である。これを第一とし、名けて伏皮といふ。價は頗る昂い。藥に入れるにはこの種を以て上とする。秋、冬の時期になつては、また海底に入蟄して了ふので取り得ない。

五雜俎——海參は遼東の海濱にあり、一名海男子といふ。その狀態が男子の勢の

やうだからであつて、淡菜と對をなすものだ。その性は溫補し、人參に匹敵する。故に名けて海參といふ。

○藥性考——海參は遼産のものが佳く、吳浙、閩粤のものは肥大にして味がない。虛火燥結には、木耳と共に切爛し、猪の大腸に入れて煮て食ふ。歌に云く、

海參は鹹寒にして、火を降し、腎を滋し、腸を通じ、燥を潤し、勞、怯症を除く。遼産は小にして佳く、刺密にして脆硬なり。

南産は厚大にして、肉味はやや劣る。

甘し、溫なり。食物宜忌——味甘く鹹し。腎の經を補し、精髓を益し、痰涎を消し、小便を攝し、陽を壯にし、痿を療じ、瘡蟲を殺す。

【百脈の血を生ず】臨安の儒醫盛天然が予に語つた話に、曾て青山里の一婦人の病を往診すると、眼、鼻、口、耳、髮根からみな出血し、下部からもその通りであつた。その婦人は已に人事不省だつたので、その夫に發病の動機を詢ねると、數日前に驚を受けて起上つたといふ。酷暑の際、非常な旱天であり、又、燥烈の氣に中つて血溢を起し、上下に奔騰して散出したもので、救ひやうがなく、諸醫もみな手を斂め

て策がなかつた。盛は、叔父が嘗て都中である方を得、專らこの症を治してゐたことが幸にまだ記憶にあつたので、そこで急に人を喚んで山泉一桶、燒酒一觔を取寄せ、婦人を扶け起して裸で坐らせ、その小腿に先づ燒酒を淋し、酒を踝下から水桶内に滴入させて淋し訖り、然る後に腿を一飯頃の間水中に置かせると、その上下の血が止り、婦人はやはり甦つて顏色が化粧したやうになつた。そこで急に人を呼び、壯年の乳母を搜し出してその乳を哺ませ、更に海參半觔を切片して焙じて末にし、一日三回、毎回三錢づつを調へて服ませた。蓋し海參は能く百脈の血を生ずるものである。もし失血過多の場合には、必ずこれを用ゐて補せねばならぬ。その血を生ずるの功は歸、芎よりも捷である。

【休息痢を治す】宋春暉云く、餘姚に某といふ孝子があつて、その父が休息痢を患ひ、年を經て殆ど危篤に陷つたので、孝子は神廟に參詣して醫藥を祈り求め、一个月餘にもなつたとき、ある日老人に遇つて、海參を用ゐ、毎日湯に煎じて服することを敎へられ、數日ならずして全癒した。

【潰瘍に蛆を生じたるを治す】慈谿の楊靜山云く、嘗てある人が癰を患ひ、破爛し

て內に蟲蛆を生じ、纍纍として千百を計へるほどになり、殺蟲藥で治療しても效がなかつたが、一老醫が海參片を焙じて末にして敷くと、蛆はみな化して黃水となり、然る後に生肌膏を貼つて癒えた。その老醫の言に據れば、凡そ一切の金創、及び疔毒が破爛し、暑中に內潰して蛆を生じたものは、ただ海參末で療じ得るさうである。

○不藥良方——夏期に潰瘍の蛆を生ずるは、陰濕の化する所に由るものだ。海參末を摻り、或は皂礬を飛過して末にしたものを摻ればみな化して水となる。

隊隊

游宦餘談——隊隊は、形は壁蝨のやうで、生れながらに一定した配偶がある。緬甸にこれがあつて、蠻夷の婦は夫と和合しないとこれを枕中に飼つて置く。するとその情が自ら合ふ。故に金珠を惜まずにこの物を求める。

○瞻景鳳小辨、同年の蘇侍御民傑が雲南の巡檢から還つて予に語つた話に、雲南には隊隊と名ける小蟲がある。形狀は蝨のやうなもので、これが出ると必ず雌雄相隨つてゐる。人が偶〻これを得ると富貴の家庭へ四五金の價で賣りつけ、富貴の家

庭ではこれを銀匣に貯へる。これを枕頭内に置けば夫妻が和好して反目しないといふ。これは物の氣が人を正すのである。

媚藥に入れ、夫婦の不和を治す。

風蛤

職方考――閩の邵武府に風蛤がある。蝦蟇に類したものだ。峩嵋峯の麓の數村では、毎春初に東南風が起ると、この物が牀厨の間に滿ちてゐる。土人は取つて脯にする。

性温煖にして風、及び手、足の拘攣、折傷を治す。

飯蒼蠅

謝天士云く、蟲類中の各種のものはいづれも藥に入れて用ゐるが、ただ飯蠅だけは用ゐない。故に本草にもその主治の記載がないのだ。予は十年間その主治を得ようとして精思したが得られなかつた。嘉慶庚申の歳、偶〻東江に在つて柴又升先生

に晤つたとき、先生の話に、昔、台州にゐたとき面疔を患ひ、初起には麻木し、幾ど骨に入るやうに癢くして忍び難かつたが、山中ではあり、倉卒の場合とて藥がない。ある人に敎へられて、飯蠅七箇、冰片一二釐を共に研り爛らして敷くと、走黄せぬことはその時の說明の通りで、果して癢が定り、翌日は次第に痊えて、旬日にして癒えたといふ。

疔根を束ねて走黄せず。瘡疤に塗れば髮を生ずる。

吳秀峯——これを用ゐて小兒の癩に塗る。癒えて後に疤が脫ちて髮の長ぜぬには、これを擣いて塗れば立ろに生える。

鼻を塞げば拳毛倒睫を治す。(藥性考)

蠬蜂

粤志——陽春に蠬蜂がある。常に橄欖樹に附いて生じ、首、足はあるけれども木葉と別がない。木の葉の凋落するを須てばこれが取れる。土人はこれを篋笥に入れて置く。蠱毒に遇へば必ず鳴き、鳴けば自ら呼ぶ。又、その聲の淸濁で病の禍福が

卜へる。

これを佩ぶれば蠱を辟ける。

蜜蜂

綱目では、ただ子を用ゐ、足の陽明、太陰に入るといふに止まつて、蜂を用ゐることはないが、赤水元珠に、瘰癧を治する方があつてこれを用ゐてあるから左に補記する。

赤水元珠に云く、蜜蜂を杏仁葉、蝙蝠、蛇蛻と共に用ゐて瘰癧を治するに神效がある。

苦蜜

處州に産する。劉基苦齊記――匡山の山頂は四面峭壁であつて、風が北から來るので概して甘くはならずして善く苦になる。故に植物中で性の苦なるものが一面に布き簇つて羅生してゐて、野蜂がその間に花髓を採つて蜜を作るので、味はやはり

苦い。山中の方言にこれを黃杜といふ。初めて食つたときは頗る困るが、久しくするといよいよその甘さを覺える。

按ずるに、綱目には、蜜に黃連蜜といふがあり、味は苦いといつてあるが、實は更に天成自然の苦蜜がある。故に補記する。

積熱を除き、煩渴を已し、熱痢、暑積を解す。驅風丸藥中にこれを用ゐるが更に佳し。老人の腸燥には、一盞を酒に和して食ふが尤も宜し。

蜜虎

蜂に似て大きく、首が尖り、身は圓く、狀態は橄欖の形のやうで、兩翼があつてやはり蜂の翅のやうだ。全身毛が生え、花斑色で、尾は短毫があつて鵞尾のやうに鋪張し、鼻上に二本の鬚があり、喜んで花心中に入つて鬚で花蕋を鈎取して出る。その鬚は能く伸縮、屈曲し、象の鼻のやうに物をそれで捲く。登州地方では古路哥子と呼び、徽地方では蜜虎と呼ぶ。蜜を飼養する者は最もこれを忌む。

○臺灣府志――蜂虎は蟲の屬であつて、形狀は燈蛾に似て大きく、頭に斑點があ

る。蜜蜂の窠に入ると盡くその蜂を食つて了ふ。

○汪杭葦の話に、蜜虎は多く喜んで鳳仙花の叢中に入り、子を葉の背に散し、日久しくして小さい灰色の蟲を生ずる。その蟲は青蠖のやうで、體上に黑白の點暈があり、その花葉を食つて長大し、老いるに及んで根の底に下つて變じて蛹となる。この蛹は頭が粗く、尾が尖り、海蛹のやうな狀態で、老黃色をなし、久しくすると蛹から出て蛾となる。卽ち蜜虎となるのである。かく循環して無限に生命を續けるものだ。

【咽喉腫痛で蛾を生じたるを治す】陳良翰云く、蜜虎は登州に最も多く、その地では捕取して布袋に入れ、簷下に懸けて陰乾し、咽喉腫痛で、或は單蛾、雙蛾を生じたものがあつたとき、一箇を取つて瓦上で火で焙じ、その全身の絨毛を去り、頭、足、尾、翅を翦り去り、再び火で焙じて末にし、冰片少量を加へて喉中に吹入れると癒える。これは神方である。又、壯藥に入れて用ゐる。

【心痛を治す】鞠子靜方——蟈嘑哥を用ゐる。卽ち蜜虎であつて、五六月に墻壁に飛行してゐる。山東に甚だ多い。取つて竹筒中に置いてもこの物は容易に死なぬ。

必ず二十日を待つて始めて乾死し、筒中に在つて自ら能く撲打して體上の絨毛を盡く落して了ふものだ。心痛、及び腹痛の患者があつたときは、瓦で焙じて研末し、酒で一二箇を服すれば直ちに止まる。

諸城の王遜亭云く、古路哥（ころか）には雌雄があつて、雄のものは身が瘦せて小さく、雌のものは腹が大きい。藥に入れるには雄を用ゐる。線で穿つて陰乾し、房術藥を合せるに用ゐられる。

その老僕王三の話に、この蟲は山東に極めて多く、能く蜂を食ふので養蜂家が最も忌む。その蟲は口中に黑絲があつて常に捲いてゐるが、もし蜂窩に入ると直ちにその絲を直く吐（は）えて蜂を刺し、蜂が斃るとそれを食ふのだといふ。蓋し蜂の針は尾に在るが、この蟲の針は首に在る。想ふに、やはり毒針を有つてゐるらしいが、尾に在るものは陰、首に在るものは陽で、陽を以て陰に尅（か）つので、それで蜂が刺されると立ろに斃れざるはないのである。その蟲は初秋に子を散し、豆莢（づけふちう）中に在るものは豆蟲となり、青蠖のやうな狀態で豆を食ふ。黍穰上に在るものは朝天猴となり、刺蝥（しはつ）のやうな狀態で、後に黍葉を下から食つて上る。最も莊田の患害をなすものだ。

然し食へるので、莊人は日のまだ出ない時を候ひ、この蟲に露が著いて體が重く翅が輕く、能く飛べずして撲取し易いときに捕り、その翅を去つて瓦罐内に羣り入れ、それ自身互に撲擲してその體上の細毛を自ら落させ、然る後に油、鹽、椒、韮で炒つて食ふ。味は蠶蛹に勝る。但しその體上の毛は人の眼に著けてはならぬ。眼に著けば直ちに目を損ずる。

蟾皮

舌

これは癩蝦蟆の皮であつて、能く大毒を拔いて外に出す。又、能く毒を囘すもので、功效は述べ殫せない。綱目では、蟾蜍の條の主治はみな全用で、單用がない。その皮はただ附方に孫眞人千金方中の、腸頭の推出を治するに、蟾蜍皮一片を燒いて薰じ、幷に傅けるとあるを引いただけで、僅にその些小の功用を錄して反つてその大なるものを遺してある。故に特に著明に補記する。

【大毒に貼つて能く毒を拔き毒を收める】○黄汝良行篋撿祕方の記載に、指頭が紅

腫して毒を生じたるには、活蟾一箇を生で皮を剝ぎ、皮の外面を患處に向けて適當に包む。翌日はその毒が一齊に拔出する。或は發背、對口等の症で、毒が忽ち內に收つて又起る場合には、再び貼る。特に記憶を要することは、その皮の裏面を肉に著けてはならぬことである。著けると牢く咬み込んで揭げ取れなくなるものだ。凡そ痘疹後に毒が囘りたるには、やはりこれを用ゐて治するがよしとある。

【瘰癧斂口膏藥】○瘰癧の膿が已に盡き瘡が平いで、口のまだ斂らぬを治するにこれを貼る。○蝦蟇皮二箇、活きて剝いたものに限る。鼠皮二枚、蛇退二條、蜂房の大なるもの一箇、右四味を倶に灰に煆き、水膠一兩を井花水一酒鍾に化開して後に蜜一兩、蜈蚣を煎じた麻油一小鍾を加へて前の四味灰を攪き勻ぜ、用ゐんとするに臨んで麝香一分を入れ、絹に攤して用ゐる。濕はぬを度とする。

靈祕丹藥に云く、凡そ癰疽、瘡毒を患ふものは、土中の大蝦蟇一箇の全身の癩皮を剝いて瘡口に蓋貼し、蟇皮上に針で皮に數孔を刺し、それで毒氣を出す。自ら安靜なるを覺え、且つ瘡口を爬住して長大ならしめない。又、蜈蚣が氣を開いて來て侵すことを免れる。如何にも神妙なものである。

舌【疔を拔く】外科全書――夏期に疔を患ふには、蝦蟇舌一箇を研爛し、蟾肚皮で蓋貼する。その根が自ら出る。

土檳榔

粵西叢載――狀態は檳榔のやうである。孔穴中に在る間に取る。新なるものはやはり軟い。蟾蜍の糞だと言ひ傳へてあるが、常にはないものだ。主として惡瘡を治す。

蝃蝥黃

物理小識――余岸少は、蜘蛛を養ふに小なるものを大なるものに飼ひ與へ、久しくして硃砂で大なるものを飼ふこと數十日、滿身みな赤くなつたとき、その腹にある黃を藥に入れて用ゐた。瞖を去り、瞽を開く。

蘗蜂針

物理小識——黄蜂の尾針を取つて硫を合せて煉り、冰、麝を加へ藥として瘡瘍の頭に置き、火を點じて瘡上に灸する。本草にこの法はまだ記載がない。必ず先づ濕紙で瘡を覆ふて見る。先に乾くところが瘡頭である。そこに灸する。

驢龍

物理小識——驢の腹中の蚘であつて、體も四角、目も四角で、足がある。小使を以て房術に入れて用ゐられる。皐厭、黑兜蟲、瓦雀卵、衞子莖墮、蛤蚧、吉弔脂と同功である。

龍蝨

閩小記に云く、龍蝨は形が小蟑螂のやうで、又、金龜に似て色が黑い。毎八月十三日から十五日まで漳州の海口に飛んで墮ちる。その他の日には絶無である。

面上の黝野赤氣を除くにこれを食ふが良し。兼て男子の顏色を美にし、血を活す。

物理小識――智は少い頃老父に隨つて福寧へ往つたとき、曾て龍蝨を見た。後に姚に居たとき、ある僕が官舍中でこれを食つてゐた。その者の話では濠鏡から來たものだといつてゐた。して見ると他の地にもこの物が出るので、滓だけにある不思議といふことはない。蓋しこれは甲蟲で、大いさは指頂ほど、甲下に翅があるものだ。熏じ乾して油で潤し、甲、翅を去つて喫ふと火魚の變味したもののやうだ。

洋蟲

一名九龍蟲といふ。外洋に産する。明朝の末年に始て中國に傳入したものだ。或は大西洋に出るもので、康熙の初年に始めてこの物があつたのだともいふ。形は米蛘子のやうだ。初生の蟻は小蠶のやうで、久しくして黒く變じて豆瓣のやうになり、雌雄がある。今世間では、竹筒に入れて穀花で飼ふ。性極めて寒を畏れるもので、天候の冷えるときは懷か袖の中に藏し、夜になれば衾褥の間に置かねばならぬ。さうせねば凍死するが、人の氣を得れば生きる　極めて蕃殖するものだ。茯苓餠、紅

花、交桂末で飼ふものもあり、それで色が紅くなり、光澤があつて美しく、藥に入れて尤も良し。

性溫にして血分に行り、脾、胃を煖め、五臟を和し、筋骨を健にし、濕を去り、風を搜し、陽道を壯にし、怯弱を治す。

附治各症兼引

○老人の不寐——茯苓を引とする。
○小兒の夜啼——硃砂を引とする。
○女兒の夜尿——枸杞を引とする。
○少女の陰寒——附子を引とする。
○癱疽發背——沈香末を引とする。
○舌燥で渴するもの——麥冬を引とする。
○眼目閉痛——甘草を引とする。
○耳鳴、耳聾——當歸を引とする。
○感冒風寒——防風を引とする。

○中濕瘡毒――蒼朮を引とする。
○跌打損傷――全蝎を引とする。
○酒醉で傷めたるもの――葛花を引とする。
○怒氣で傷めたるもの――沈香を引とする。
○絞腸痧痛――青蒿を引とする。

以上十四症は、いづれも蟲十四箇を用ゐ、好陳酒を沖して服す。

【刀斧傷を治す】蟲を搗いて敷けば癒える。

【瘋癱】蟲九箇を木香湯で送下する。

【打傷】九箇を黑棗薄荷湯で送下する。

【黃疸痧】十二箇を薄荷燈心湯で送下する。

【哮喘】九箇を薄荷湯で送下する。

【眼脹】七箇を薄荷湯で送下する。

【傷食】九箇を薑湯で送下する。

【水毒】九箇を薄荷燈心湯で送下する。

【氣痛】九箇を檳榔湯で送下する。
【中風不語】二十四箇を薄荷燈心湯で送下する。
【小肚痛】九箇を薑湯で送下する。
【急、慢驚風】九箇を薄荷杏仁湯で送下する。
【喉痛】二十四箇を薄荷銀花湯で送下する。
【脾風】二十四箇を酒で送下する。
【胃痛、心疼】七箇を木香末に沖した酒で服す。
【無名腫毒】十六箇を陳酒で送下し、五更に服す。
【痘疹】七箇を米湯を沖して服す。
【臌張】二十四箇を薄荷陳皮湯で送下する。
【嘔吐痰火】七箇を淡薑湯で送下する。
【乍ち寒し、乍ち熱し、口乾し、舌燥するもの】七箇を陳皮、半夏を煎じた酒を沖して服す。
【五勞、七傷】白茯苓三錢と七箇を用ゐて搗爛し、毎日空心に酒を沖して服し、元

を復するを以て程度とする。

【瘧後の寒熱不調】七箇を未發の先に酒を沖して服す。三回で止まる。

【夢遺白濁、血淋、白帶】芡實三錢を微し炒つて研末し、白果五箇を皮、心を去り、先づ蘂を搗爛らして再び淫羊藿二錢を邊を去り、廣皮二錢、韭子三錢と共に、煎じ、蟲七箇を用ゐて酒を沖して服す。

【赤、白帶下、及び産後等の症】香附を炙き、芪、烏鰂骨各八分を酒で煎じ、蟲七箇を沖して服すれば癒える。

【氣急咳嗽】川貝母二錢、牛蒡子、當歸、陳皮、淮牛膝各八分を水で煎じたもので服す。婦人は牛蒡子を去つて益母を炒り、香附と各三錢を水で煎じて沖して服す。三回にして神效がある。

【腰痛】破故紙二錢を、雄猪腰一對を竹刀で剖開し衣を去つて内に入れ、酒で蒸して熟爛し、桔梗二錢を加へて末にし、蟲七箇を擣いて沖した酒で服す。神效がある。

【痢疾】白痢には紅糖を用ゐ、紅痢には白糖を用ゐ、陳酒を沖して蟲七箇を服す。

【水瀉の止まぬもの】猪苓、白朮各一錢を陳酒で煎じ、七箇に沖して服す。油

膩、魚腥等の物を忌む。

【偏、正頭風】川芎、防風、荊芥、蟬蛻各一錢、細辛八分を陳酒で煎じ、七箇に沖して服す。生、冷、葱、韮等のものを忌む。

【骨節酸痛、胃寒等の症】川芎、白朮各八分を酒で煎じ、蟲七箇に沖して服す。三回で癒える。

【吐血止まず、喘息し、燥熱する等の症】古墨を濃く研り、貝母三分を研末し、蟲七箇を陳酒を沖して服す。七回で癒える。

【小便不通】燈心、車前各七根、蟲七箇に陳酒を沖して服す。

【飽悶して痞となり、肚腹腫脹するもの】酒を沖して七箇を服す。三回。

【翻胃隔食】生薑七片を布袋内に裝入し、糞坑に入れて七日間浸し、取出して淸水で洗浄し、土中に埋めて一層は薑、一層は土にして七日經つて取出し、陰陽瓦で焙乾して研末し、毎回一分づつを、蟲七箇に沖した酒で服す。三回で癒える。

【吐血】藕節、茅根を洗浄して酒で煎じ、人乳、酒各半を用ゐ、蟲七箇に沖して服す。三回で癒える。

【筋骨疼痛】核桃肉三錢に陳酒を沖して蟲七箇を服す。

【勞嗽】牛骨髓三錢、核桃肉三錢を共に末にし、蟲七箇を入れて再び擣いて每丸三錢の丸にし、每日五更に一丸を噙み化す。九日にして效が現れる。

【痿症】蛇床子三錢の煎湯を蟲七箇に沖して服す。三回にして癒える。久しく服すれば天年を延べ。子を種ます。

【經水不調】香附、陳皮、益母草、當歸、元胡索各八分を水で煎じて酒を和し、蟲七箇に沖して服すれば癒える。年久しきものは連服數回する。その效神の如し。

【產後の崩症】香附、白芍、益母草、當歸、陳皮、茯苓、白果、蘇木各八分に酒を沖し、蟲七箇を服す。三回で癒える。

藥性考——洋蟲は色黑く、形は壁蝨のやうだ。活きたものを數箇呑めば血勞怯を止める。

糞 蝨砂のやうな狀態である。金御乘云く、研末して金刃傷に敷けば立ろに結痂し、血を止めるに最も效がある。

蟋蟀

綱目には、竈馬の條下に促織を附し、僅にその名を列して、古方には未だ用ゐてないが、此に附して考證に俟つといつてある。

性は通利し、小便閉を治す。○藥性考——蟋蟀は辛く鹹し、溫なり。能く痘を發すること桑蟲に勝る。

【跌蹼で小肚を傷め、尿閉して出ぬを治す】○養素園集驗方——蟋蟀一箇を煎じて服すれば立ろに效驗がある。

【小兒の遺尿】慈航話人書——全蟋蟀一箇を取り、焙じて末にし、滾水で服す。歲に照して服し、もし兒が十一歲ならば每回十一箇を服す。十一箇までで止める。

【男女の小水不通で痛脹して止まぬを治す】○集聽——蟋蟀一箇を陰陽瓦で焙乾して末にし、白滾水で服す。小兒は半箇で通ずる。

【催生】趙際昌云く、鬪蟲の戲では蟋蟀が最も盛で、その百戰百勝のものを俗に將軍と呼ぶ。その蟲は冬になると必ず死ぬものだが、輕〻しく棄去つてはならぬ、保

存して置けば産厄を救ふに神驗のあるものだ。凡そ産に臨んで分娩せぬには、乾いたもの一箇の煎湯を服すれば生れる。幷に横産、逆産の患がない。――許景尼云く、蟋蟀の闘戯をやる家では、冬には盆に封じてその自死するを待ち、對にして乾して保存し、産科、痘科の藥用にする。必ず對に成つたものを藥に入れる――

【水蠱を治す】朱烺齋任城日鈔に云く、促織は水蠱を治し得るものだ。昔、ある人が水蠱を患つてあらゆる治療も效がなかつたとき、ある日偶ゝ開水を飲んだ。水中には先に促織が一對入つてゐたのだが、その人は倉卒にそのまゝ呑んで了つたのであつた。越えて數日、その病は漸消した。そこで始めて促織がこの症を治することを知つて、後にこの方を數人に傳へたが、奏效せぬものはなかつた。一對で不足の場合は二三對を連服すれば自ら效がある。

蚱蜢

綱目には、阜螽に僅に拾遺の佩藥の一條を引いただけで、竝に主治がない。

按ずるに、蚱蜢は初夏の大火に始めて有り、秋金の氣を得て繁殖する。性は竄烈

であつて、能く關を開き、竅に透るものである。一種の灰色にして小なるものは土礫と名け、藥に入れては用ゐない。大きくして青色のものを藥に入れる。尖頭、方頭の二種ある。救生苦海の五虎丹中にこれを用ゐてあつて、暴疾氣閉を治す。大體に於てその竄捷の功を利用して引とするのである。

味辛し、平にして微毒あり、性は竄して守らず。咳嗽、驚風、破傷を治し、折損、凍瘡、癍疹の出ぬを療ずる。

【鸕鷀瘟を治す】王氏效方――鸕鷀瘟のその症は、咳嗽已まず、連聲數十聲に及び、哮のやうで哮でもなく、喘のやうで喘でもないものだ。小兒にこれを患ふものが多い。穀田中の蚱蜢十箇を取り、湯に煎じて服す。三劑で癒える。

○百草鏡に云く、鸕鷀鬱は小兒にある。その症は物が哽咽して、吐かんとしても吐き出ないやうな狀態のもので、久しくし痰少量を出す。日久しくして必ず死ぬものである。治するには乾蚱蜢の煎湯を服す。

【破傷風】救生苦海――破傷風を治するには、降霜後に稻田中から取つた方頭、灰色の蚱蜢を穀と共に布袋内に裝入して曬乾し、濕を受けたために蟲や蛀壞を生ぜぬ

やうにし、常に曬して置くことが肝要である。この症に遇つたとき、十數箇を瓦上で煅いて性を存し、酒で服すれば立ろに癒える。

【痧脹】養素園集驗方——蚱蜢五六箇を湯に煎じて溫服する。

【凍瘡】養素園待驗方——方頭黃色の蚱蜢を風乾して煅いて研り、香油で和して摻るもよし。

【小兒の驚風】李氏袁方——蚱蜢を多少に拘らず煅いて性を存し、砂糖を和して服す。立ろに癒える。

○ある方では、急、慢驚を治す。大、小人に隨ひ多寡を量つてこれを用ゐ、煎じて服す。

○王立人易簡方——螞蜡を焙乾して末にし、薑湯で少量を調へて服すれば立ろに癒える。

【急、慢驚風】百草鏡——降霜後に稻田中で方頭、黃身の蚱蜢を取り、多少に拘らず穀と共に布袋内に入れて風乾し、濕を受けたために蟲蛀の生ぜぬやうにし、この症に遇つたとき、十箇、或は七箇を用ゐ、釣藤、薄荷葉各一撮の煎湯で灌ぎ下し、

渣を再び煎じて服す。重さも三劑にして癒える。李東來は常にこの藥を施した。いふところに據ると、山東王蟲が尤も妙で、毎服ただ二箇でよいさうである。

○王站柱不藥良方——急、慢驚風には、先づ白鳳仙花根汁半盞を服し、直ちに方頭蚱蜢を焙乾して硏末し、滾水で調へて服すれば癒える。

【産後の冒風】王良生救急方——乾蚱蜢數十箇を瓦上で煆いて性を存し、好酒で調へて服す。

淮東子

今は跳蝦蟲と名ける。濕土中に生じ、形は跳蚤のやうで大いさは倍以上あり、色は蝦のやうで靑く、腹下に足が多く、蝦のやうに善く跳躍する。兒童が器を水中に置いて、捕つてそれに投入すると躍り出せない。秋期に蟋蟀の闘戲をやる人は多くこれを畜ひ、凡そ蛩が闘傷に遇ひ、及び虛羸すると、必ず毎日これで飼ふ。それで能く蛩の力を益すのだといふ。その性は最も竄捷で、能く經路に達透し、皮裏、膜外、行くとして到らぬはない。

風痺を治し、濕腫を去る。

燈蛾

既に古方には藥に入れたものはないが、祝氏效方にある痔管を治する法は、蜣螂一箇を撲燈蛾十箇と共に罐内に入れて一夜置き、麝香一錢を加へて陰乾して末にし、管内に吹入れる。自ら能く水を出し、水が乾いて癒える。

蠅虎

古今注に、蠅虎は蠅狐なり。形は蜘蛛に似て色は灰白、善く蠅を捕る。一名蠅虎子といふとある。潛確居類書に、一名蠅豹。身は黑く、嘴に二箇の肉爪があつて蠅を攫むで食ふ。兩目は虎に似て烱然として光を生ずる。易に、震來虩虩といひ、雅俗稽言に、虩は蠅虎であつて、常に多く懼れるやうなものだ。故にその形象を取つたのだとある。

○按ずるに、蠅虎はやはり蜘蛛の屬であつて、腹にはやはり絲があるが、網を結

べない。ただ墻壁にゐて蠅を捕つて食ふ。その體は灰褐色で、身の上に微毛があり、嘴には兩鉗があつて翕吸し、頻動跳躍して虎のやうだ。また純白色で兩目の朱色な美しいものもある。兒童は捕へて器中に置き、蠅を捉つて與へて飼ひ、その搏躍するのを視て戯れてゐる。この物は藥に入れるといふことを聞かない。故に瀕湖の綱目には壁錢、蠨蛸いづれも列入したが、この物は獨り遺したのであつたが、今徐氏驗方に、その性頻動して靜でない。その點を取つて血脈を調へ、跌打を治すとあるから、その方を錄して品に備へて置かう。

【跌打損傷を治す】徐順之驗方――蠅虎數箇を取つて研り爛し、好酒で服す。

竈馬

今の竈馬は俗に呼ぶ蟑螂で、又、蟑螂と書く。綱目の所謂蜚蠊である。綱目では、蟲部にやはり竈馬があるが、形は蟋蟀のやうだといふから、今一般に竈壁雞と名けるもので、また蟑螂と別である。瀕湖は蜚蠊の條下に疔、瘡を治するの諸法がないから、此に備に記錄して置く。

【疔を抜く】集聽——竈上蟑螂を多少に拘らず擣爛らして敷く。その疔根は自ら出る。

○卵子妙方——蟑螂蟲のその黄紫色にして甚だ臭きもの數箇を取り、患者自らの唾沫を用ゐ、幾口か吐いて研爛らし、瘡の四圍に敷いて頂上の孔を露し、毒氣をその孔から出さしめる。一日にして癒える。

○邵仲達方——疔瘡を治す。蟑螂の大なるもの七箇を取り、頭、足、殼を去り、砂糖少量と共に擣き爛らし、疔の四圍に敷いて頭を露出する。一晝夜で癒える。

藥性考——竈馬は刺を抜く。擣いて塗れば效がある。

【諸疔毒を解す】傳信方——竈上の紅蟑螂五箇を研爛し、熱酒を沖して服し、汗を取るを度とする。

【紅絲疔】傳信方——蟑螂一箇を頭を去り、青糖を和して擣き爛らして搽れば效がある。

【白火丹】葉氏方——蟑螂を瓦上で焙乾して末にし、白滾湯で一二箇を服す。立ろに效があり、兼て疔瘡を治す。

【對口】活人書——桂州の荔枝肉二三箇、蟑螂二三箇を共に搗き、泥のやうにして敷き、頭を露す。數回にして散ずる。

【無名腫毒】慈航活人書——蟑螂十箇、鹽一撮を共に擣き爛らして敷き、頭を留る。

【諸毒惡瘡を治す】嚴氏家用方——蟑螂と石灰を擣いて敷く。

【痧症】周延園方——活蟑螂蟲二三箇を紙で包み、竈上で焙乾して研細し、冷水で和して灌ぐ。或は吐し、或は瀉して癒える。

【吐血】徐雲生方——蟑螂五箇を取り、ただ翅だけを去つて淨め、火盃に置いて淨瓦上で焙乾して末にし、紙で包んで土上に置いて性を存し、濕腐皮で一箇を包んで滾湯で呑下す。毎日同樣にして呑み五日間斷えず繼續する。

【氣虛中滿】醫宗彙編——蟑螂七箇を末にし、地枯髏の煎湯で送下する。數服で癒える。

【臌脹】家寶方——蟑螂一箇を焙乾し、蘿蔔子一撮と共に炒つて末にし、好酒で呑む。十日にして全癒する。

【一切の兒疳】集聽に云く、凡そ小兒が疳疾を患ふには、何疳たるに拘らず垂死のものにいづれも效がある。竈上蟑螂を焙乾して患者に與へて食はす。但しその香を聞いても腥臭の氣のあることが判らず、中蠱のやうなもので、豆を食つても辛くなく、礬を含んでも苦くない。この症の患者ならばこの治法で奏效せぬものはない。ただ一二回食へば癒える。癒えて後は體が更に肥白になる。且つ屢〻試みて屢〻效驗を得てゐる。

○百草鏡に云く、兒疳の初起には、蟑螂を頭、足、翅を去つて新瓦で焙乾し、常に與へて食はす。百箇にして病は癒える。

水馬

綱目では水黽と名け、主治下に於て、人をして渴せざらしめ、雞、犬を殺すといつてあるが、實は痔を治するの功がある。更に補記して置く。

按ずるに、水馬は四五月中に出て水面に浮び、身が硬く脚が長く、池沼中に甚だ多い。性蠅を食ふ。予は甌にゐたとき親しく見たが、小兒がこれを捕つて嬉

戯し、釣竿に繩を著け、蠅の端に一箇の蠅を穿して水面に擲ち、それで誘ふと直に來て四足で蠅を抱へて放さない、それでこれを獲る。

【痔を治す】東醫寶鑑に水馬散といふがある。夏期三伏中に止水中で婆子を採る。名水馬兒、脚が高くして水面に跳走するものである。三十個を採取して三個の紙包にし、毎包十個を入れ、背陰の場所に懸けて陰乾し、毎包を一服として研爛し、空心に酒で調へて服し、良久して飯を吃ふ。三日に三服を連服すれば十日以內に效がある。久痔で膿血を出すものは二三十服で根を絶つ。

蝨　蝨

俗に臭蝨と呼ぶ。その氣が腥穢で鼻に不快に觸れるから、名けたものだ。行くには必ず南に向ふ。南方は穢濕の產する所だからである。現に江の南、北の人家に多くゐて、やや不潔にすると直ちに生ずる。この物はまた遠隔地の旅行に旅店、驛舍中で衣服や行李に帶入し、家へ歸ると直ちに生ずることがある。極めて繁殖し易く、一晝夜に九十九の子を生み、螽斯と同じである。その形はさながら半粒の豌豆のや

うで、老いると黒くなり、次には棗皮紅になるが、初生には色が黄で細小である。その子は蟻子のやうで色白く、卵生で蝨と同じである。初生から人を嚙み、生れて一二日にして能く殻を褪ぎ、殻を褪ぐほど大きくなり、次第に老いて色がますます紅くして黒くなる。老いたものが人を嚙めば愈〻毒である。多く藁薦中、及び壁の中、或は倚子、卓子、寢臺の縫目に藏れ、その身が扁くして入り易い。冬になると蟄に入つて多く泥沙、山穴中、及び古樹の根下に藏れ、春に交るとみな啓蟄して人家の壁木内に入つて藏れる。性蟻を畏れ、山中に一種の紅蟻があつて喜んでこれを食ふ。故に山の近き處、及び山寺、僧舍にはこの物が甚だ少い。これを帶びて入るものがあると輒ち山蟻に啣み去られるのだ。

　この物は人を嚙む動作が尤も狡黠で、蚤、蝨などのやうなものでない。昔の人は暑時には五大害があると謂つた。それは蠅、蚊、蝨、蚤、臭蟲であるが、然し蠅と蚊とは晝夜交代し、蠅は揮拂し、蚊は蚊帳をつれればよい。蝨は暑期には裸浴するから生ずることが絶えて少く、蚤は土濕に因つて生ずるもので、夏期には土が乾くからやはり甚しい患ひはない。ただこの物だけは最も憎むべきもので、晝夜の別なく

身を牀蓐、及び几闥の間に潛め、善く人の氣を識り、人が一たび倚子を徙すと直ちにその脊血を嗜ひ、嗜はれると腫塊纍纍として貫珠のやうになり、搔けば搔くほど痛癢が大きくなつて禁へ難くなる。小兒は肉が嫩いので尤もその苦みに遭ひ、叫號して已まない。或は、この物には口に一二寸の白氣があつて、人を嚙むには能く蓆を隔てて膚を穿ち血を吮ふので、索しても取りやうがない。寢臺や寢具に著くと夜は聚つて曉には散じ、大抵その醜類は人の倦睡を待つて恣に嘬ふ。

古方にこれを辟除する法は甚だ多いが、一も效驗のあるものはない。ただ蓆下に零陵香草、及び樟腦を鋪くことだが、ややその勢を殺げるだけのことで、然も一二日隔てて藥力が減ずると、その橫虐が愈〻甚しい。ただ眞の楊州安息香を用ゐて、上に好き銀硃を塗つて衣にし、それを牀下で燃いて蓆で護つて烟を熏じ透らせれば壁蝨は盡く死に、子も復た生れないやうになるのであるが、如何にも香氣が惡烈で、鼻に觸れると頭痛がする。必ず熏じて後はその牀にゐないで一二日經つてから寢るやうにする外はない。しかし貧家では到底さやうな金の掛ることは覺束ないことである。古の言葉に、南方の淫氣は短狐を生むといふが、この物もやはり淫濕、腥穢

の氣の感ずる所から生れるもので、絶えず淸潔にしてゐる家にはこの物のゐることが鮮い。

閩地方では、この蟲は滾水に泡つて死んだものは能く復活するが、ただ冷水に浸つて死ねば能く復活しないといふ。山堂肆考には、壁蝨は身が扁くして臭く、能く跳ねないが善く人を齧む。名けて茭蟲といひ、又、扁蝨と名けるとある。五雜俎には、壁蝨は、閩地方ではこれを木蝨と謂ふ。多く杉木から生れる。これを退治するには、蕎麥藁を灰に燒いて水を淋す。江南では壁蝨が木中に多く生ずるが、ただ延綏だけは土中に生じ、土地一面にみなこれがゐて、夜になると牀に緣り幙に入つて人を嚼し、全體が瘡に成る。廣大な建築へ徙つて中空に床を吊つて寢ても、やはり空中から飛んで來るとある。事物紺珠には、壁蝨、一名壁駝、扁く小く褐色で、殠くして人を嚙むとある。六書故には、扁蝨は、牛馬に著いてその血を食ふ。薦蓐の間に產し、差〻小さくして人の膚を嚼す。俗に薦蜌と謂ひ、又、茭蝨と名ける。今世間では訛つて壁大といふとある。かやうに古代からその名はあつても、やはり藥に入れたものはなく、綱目にも幷にその品を列してなかつたが、近頃では治療にこの物を

用ゐるものがある。故にこれを錄して天下に棄る物のないことを示して置く。
氣は腥く、味は微し鹹し、性は平なり。土に在るものは毒がある。――凡そ壁蝨を用ゐるには、必ず溫水中に置いてその臭氣を洩し盡してから藥に入れねばならぬ――。
【咽隔を治す】集聽方――壁蝨十箇を用ゐ、滴花燒酒に浸して服す。
【飯饐】百草鏡に云く、臭蟲を用ゐ、研つて塗る。
【臁瘡臭爛】西亭藥鏡――臭蟲を用ゐ、水龍骨と共に擣和し、麻油で調へて敷く、黃水を出し盡して立ろに瘥える。
【眼に生じた偸針】臭蟲の血を點ければ散る。
海上方に、壁蝨を用ゐて小兒の驚風を治する方がある。壁蝨を淨水中で臭氣を漂し去り、焙乾して藥に入れる。
【疔を拔く】楊氏經驗方――臭蟲を米飯と共に搗匀ぜて疔上に搽る。能く立ろに疔根を拔いて外に出す。
【鮬魚の刺戮】醫宗彙編――凹谷茴香葉を鹽花燒酒を使つて搗いて瘡上に糊る。もし口が久しく爛れるには、臭蟲を頭を剪去つて傅ける。

叩頭蟲

形は黒くして大豆のやうだ。手でその身を按すと、その頭を能く俯仰して剝剝と聲を出す。南方に出るものは小さくして力が微であり、北方の地のものは大きくして力が厚い。小兒はこれを捕つて戯れる。藥に入れるには大なるものを用ゐる。試みる法は、蟲を取つて卓上に置き、その背を翻して仰がせると少頃して三四寸跳ね上る。五六寸以上一尺ばかりも跳ね上るものがあつて、力が更に大である。綱目にはこれを阜螽の後に附したが、やはり主治の功は言はなかつた。この蟲を北方では跳百丈といふ。

腰脚無力を治するに、山螞、蟻子と共に並に壯藥に入れて用ゐる。百草鏡に云く、外用して瘧を絶てる。叩頭蟲一箇を眉心を置き、蟲の頭を上に向けて膏藥で蓋住する。時を過ぎて自ら癒える。

【大力丸】彙集――これは馮嘉賓の方である。蒺藜を酒で洗ひ、炒つて酒刺を去り、白茯苓、白芍、蓯蓉を酒で洗ひ、杜仲を油で炒り、兎絲子を酒で煮、續斷、當

歸、覆盆子、威靈仙、破故紙、薏苡仁各一兩五錢、牛膝を酒で洗ひ、無名異、自然銅を醋で七回煆いて一兩、乳香、沒藥、硃砂を飛過し、血竭、靑鹽各五錢、天雄二兩を童尿に五日浸し、象鼈一箇を頭、足、翅を去り、もし無ければ土鼈を代用する。跳百丈十箇を足を去り、虎骨二兩を酥油で炙き、以上の藥を共に細末にし、煉蜜で丸にし、重量二錢半を朝、夕鹽湯、或は黃酒で送下し、少時して力を出して見ると功を行して四肢に散ずる。

沙雞母

物理小識に、土鼈、これは象房の屎中から生ずるものだ。或は土を旋して窩とするものをこれに充てるとあるが、實は旋土窩のものは沙雞母であつて土鼈ではない。金墨と共に磨つて口瘡に塗る。

禾蟲

閩、廣、浙の沿海の濱に多くゐる。形は蚯蚓のやうだ。閩地方ではこれで蛋を蒸

して食ひ、或は膏にして食ひ、客の馳走に出し、これを食へば脾を補し、胃を健にするといつてゐる。

廣志――夏の暑雨が禾中で蒸鬱して生ずる蟲である。或は稻根が腐つて生ずる蟲で、稻根は色が黃であり、蟲は稻根から化するから色がやはり黃である。大なるものは筯ほど、長さは一丈に達し、節節に口があり、生では青く、熟すると紅黃になる。降霜前に禾が熟すると蟲もやはり熟し、初一二日から十五日までに、大潮に乘じて節から斷れ、田の面に出て浮游してゐるのを網で取る。醋をかけると白漿が自ら出る。それを白米泔で漉し、蒸して膏にする。甘美にして人を益するものだ。稻の精華を得てゐるのである。それを醃けて脯にする。醢醬に作るは貧者の食料である。

○吳震方嶺南雜記――禾蟲は甚だ螞蝗に類し、青黃色で、狀態の甚だ厭惡すべきものだ。潮に淹沒された淡水田の禾根内に出て、數尺から長きは一丈餘になり、寸寸に斷れてみな活き、能く游泳してゐる。午後には腐敗して食へなくなる。鹽醋一小盃を滴して裂いて白漿を出し、雞、鴨の蛋、牛乳を蒸すと最も味が鮮だ。

○粵錄――禾蟲は形狀が蠶のやうで長さは一二寸、種、類がなく、夏、秋の間に

早、晩稲が將に熟せんとするとき、禾蟲は稲の根から出て、長潮が田を浸すとその潮に乘じて海に入り、晝は浮び夜は沈み、浮ぶと水面がみな紫になるものだ。これを採る者は、口が亘きく尾の狹い網を杙に繫ぎ、逆流に迎へてゐるので、網の尻にある囊が重くなると、それを舟の中へ傾けて瀉ぎ入れる。脾、胃を補し、血を生じ、濕を利し、小便を行る。瘡瘍には食つてはならぬ。能く膿を作すものだ。

茄稞蟲

この蟲は茄稞中に生ずるもので、梗上に蛀眼があれば內に蟲がゐる。その蟲は綠色を帶びて嘴の黑いものがそれである。

【男女童癆を治す】劉羽儀經驗方に云く、男、女童の癆は、その症が必しも大人のやうに咳嗽、吐血、洩精するのではなく、ただ身體が瘦弱し、皮毛が焦枯し、肌膚が微熱するものである。急に早く治すべきものだ。野茄稞內の蟲を用ゐ、數十條を取つて私に食物の中に和して置き、それを病者に與へて吃はせる。數回にして癒え

る。

樱蟲

滇南各甸土司記——樱蟲は騰越州外の各土司中に産する。樱櫚木中に穴居してその根の脂汁を食物とし、狀態は海參のやうで粗ぼ臂ほどあり、色が黑い。土人はこれを珍饌とし、土司で高貴の客を饗應するには、必ずその到著前に各蠻峒に割當てこの蟲の索取を申渡し、獻上物としてその附いたままの樱木數尺を公の取扱で輸送させ、その木を剖いてこれを取つて羹にして出すのであるが、味は甚だ鮮美で、肉も堅靭にして腴絕だ。遼東の海參に似てゐる。その地の話では、これを食へば髓を增し、血を益し、就中白帶下を治するので、彼の地の婦人に帶下の患者のないのはこの蟲を食ふからだといふことだ。

赤、白帶、腸紅、血痢を治す。その血を行してまた能く血を補するの功は當歸に同じ。

蔗蛄

漳泉の蔗を種ゑた畑に、一種の蠶のやうな蟲が出て蔗根を食ふ。蔗蛄と名け、土人はこれを食ふ。味は甚だ甘美だ。痘を發し、漿を行らし、癰を托し、毒を淸し、痰を化し、酒を醒し、中を和し、小便を利す。

桃絲竹蝨

これは桃絲竹上に生ずる竹蝨である。李氏草祕に云く、疔瘡、痘疔を罨するが最も妙である。

牙皁樹蟲

救生苦海に云く、この樹は大いさ錢ほどの粗さになると最早や蟲がゐるものだ。但し取るには法があつて、利刀で速にその樹を砍る。遲れると蟲は下行して根に入

り、取れなくなる。その蟲は子の刻には下行し、午の刻を過ぎると上行するものだから、午後に伐つて取らねばならぬ。

一切の腫毒の初起を治す。この蟲には大、小があるが、大なるものは一條を用ゐ、小なるものは二條を用ゐ、證の輕きものは一條を用ゐ、證の重きものは二條、或は三條を用ゐ、擂り爛らして酒で調へて服す。已に化膿したものは治せない。

黃麻梗蟲

秋期を須つて先づ收取し、葱管の中へ入れて置く。

○百草鏡――蔴蟲は蔴梗の根に近い一節の中に生じ、二月には化して飛蟲となり、穴を穿つて去る。山左地方では、蔴を刈る時毎に蟲を蔴梗に連ねて寸斷して布袋に裝入し、南方へ携帶して往つて養禽家が(一)畫眉、(二)百舌を飼ふ餌として賣る。その蟲は性暖であつて、風を去り、血を行らすもので、鳥が食ふと寒を禦げるのだといふ。蟲の形は小蠶のやうで、細く長くして明淨である。藥に入れるには、蔴梗を連ねて蒸し焙じて用うべきものである。生きたものは葱に入れて置かねばならぬ。

(一)畫眉ハ小鳥ノ名ナリ。四川ニ產ス。全身黃黑色、ソノ眉畫クガ如シ。
(二)百舌、一ニ百靈ニ作ル。狀鵪鶉ニ似タリ。善ク鳴ク。

【疔を治す】程林卽得方――黃蔴梗内の蟲を用ゐ、葱葉に包んで貯へ、風先へ挂けて乾し、疔瘡を挑破して蔴蟲少量をその挑破した處に入れる。瘡は直ちに化して水となつて癒える。

○陶節庵の疔を治する蜣螂膏――蜣螂三箇、肚の白いものが佳し。黃蔴蟲十箇の二味を用ゐて搗き勻ぜ、患處を撥破して貼る。もし患處が手、足に在つて紅絲があるときは、上臂の絲の盡きた處を針で挑斷して血を出し、かくて右の藥を用ゐる。毒の重いものは更に敗毒藥を服す。

○葉氏方――黃蔴梗中の蟲一條を焙乾して末にし、酒で調へて服下する。疔は化して水となる。

芝蔴蟲

芝蔴の梗中に生ずる。夜の三更になると下から上り、頂上へ行つて露を食ひ、五更になると下るので、これを取るは夜中となつてゐる。性は熱にして陽を助ける。

（二）韡箔の用に入れる。

（二）韡箔ノ用、卽チ房中藥ナイフ。

【痔管を去る】芝蔴蟲——蠶のやうで綠色である——を用ゐる。取つて焙乾して末にし、水に開いて送下する。毎日一錢、七日間服すればその管は自ら出る。

桐蛀

李氏草祕——桐油樹中に生ずる。卽ち木蠹であつて、最も惡腫毒を治す。七箇を取つて焙じて末にし、酒を沖して服すれば癒える。

牛膝蛀

李氏草祕——蟲の牛膝草の節中に生ずるものである。香油で浸製する。指頭毒で晝夜痛んで忍び難きものを治し、敷けば直ちに癒える。

山螞蟻窠

子

朱欒只云く、山草中にある。草、樹の葉で結成するもので、大なるは斗ほどあり、

冬期に取れば蟻は土に在つて窠にゐない。

○救生苦海――山蟻窠は深山中の大樹根中にある。十一月、或は正月の草の枯れた時に尋ねて取る。二種あつて、一種は大いさ升斗ほど、色は黄で柔軟である。形は乾いて黄爛した葉のやう、又、柔皮紙のやうで、窠皮上に層層として刷紋があり、虎頭のやうな暈を成してゐるので、俗に虎頭螞蟻窠と呼ぶが、實は何物が造つたものか判らない。ただ内部には筋が多く、その筋は松毛、草莖の類のものだ。内部の筋、及び泥土を去つて用ゐる。一種は色白く、泥土で作つてあるもので、その形は松皮に類するところがある。研つて用ゐ。藥に入れる。

久しく口の收らぬ爛瘡は、これを貼れば直ちに口が收まる。

【刀傷出血を治す】救生苦海――山蟻窠を用ゐ、内部の筋、及び泥土を抽き去つて傷處を包裹し、再び布を用ゐて縛る。卽ちに血が止つて口が收まる。沈氏傳に云く、冬期にこれを用ゐれば神の如き效驗がある。

【禿瘡】周氏傳方――山螞蟻窠中の土を鹽滷で調へて敷く。數日にして癒える。

【皮を生じ靨を結する】凡そ瘡の膿腐が已に盡き、新肉が已に生じながら口の收ら

ゐには、山蟻窠を用ゐ、草、泥等の物を搓み去り、扯開して貼る。直ちに靨を結して肉を生ずる。

○張聖來云く、山蟻は深山窮谷中に生じ、頭は虎のやうで甚だ銛利な牙鉗があり、翼があつて能く飛ぶ。凡そ虎は人を食つて十分に飽くと醉ひ、醉ふと後に吐く。蟻がその唾餘を食ふと形が虎頭に變じて翼が生えるのである。卽ちその物の吐いた涎と樹を囓んだ汁と草漿とで山土を和し、泥のやうに釀したもので樹枝に窠を作るのであつて、その窠は蜂窩のやうに內部に臺があり、外は黃白の紋があり、大いさ斗ほどのものを樹枝の上に挂げるのである。山間の住民は、その窠を見ると烟で熏じて蟻を去り、それを採つて藥に入れる。

窠を金刃傷に敷けば血を止め、痛を定め、肌を生じ、口を收める。

窠中の臺は發背、百鳥朝王の毒を治す。

窠上の緣枝は蛀脊を治す。

子 白くして秈米のやうだ。俗に狀元子と呼ぶ。大力丸にこれを用ゐてある。然し微し毒があつて、これを食へば脹を作す。綱目には、蟻の條下に僅にその名を存

したが、主治がない。近頃出陣中の軍醫がこれで壯藥を合せて頗る效があつた。

氣力を益し、顏色を澤にする。

敏按ずるに、蟻には各種あるが、藥に入れて窠を用ゐる場合に山蟻窠を取るは、蓋し山蟻は形が大きく、草中、或は樹根内に在つて窠を作り、その子は粗くして粒米ほどあるもので、藥に入れて力が甚だ猛だからである。子を用ゐるには黃色の細蟻が生んだ子を佳しとする。蓋しこの蟻は力が最も大きく、能く等身の鐵を擧げるものだからであつて、故に人がその子を食へばやはり力が大きくなるのである。

○宦遊筆記——廣地方の美味なるものに蟻子醬といふがある。山間で蟻の卵を採收し、滓垢を淘淨して鹵で醬に作るもので、珍品と誇稱してゐる。これを見るとその子もやはり毒はない。

蛆窠

王安采藥錄——大窖坑內にある蛆蟲窠の白繭子のやうな狀態で(一)蓬堞內に挂つてあるものを取つて來て泥灰を淨去し、曬燥して焙じて用ゐる。

(一)蓬堞ハゴミアクタ。

臁瘡、疳蛀、一切の蟲蛀爛孔を治す。外科の收口藥に用ゐる。

【疳瘡蛀梗】柴氏獨妙方——糞坑內の蛆蟲窠を用ゐる。蓬塵內にあるものの形が白繭子のやうで小さきものを取り來り、多少に拘らず罐中に入れ、焙燥して細末にし、小口瓶に貯へて瓶口を細絲紗で包紮し、倒にして輕く敲いて少量の藥末を瘡口に納れる。もし小蛀眼があつて藥末が入らぬときは、麥草稈で藥を細孔內に吹き入れる。毎日三五回。その蛀爛したものは肉孔が自から長じて平になる。神效無比である。

死人蛀蟲

人蚜

これは檢尸場中の棺內の死蛆である。唐怡士云く、凡そ人は死後に魂魄が散じ盡きても、その生氣がまだ盡きぬものがあつて、肉が爛れて後、悉く腐つて蛆になり、筋骨を攢嚙し、久しくして蛆もまた隨つて死ぬ。故に自然死でないものの棺中には黑蛆のゐないものはない。凡そこれを用ゐるには、尸場で檢視の役人に詢ねてから

取收めねばならぬものだ。

【大麻瘋、癩疾を治す】赤水元珠の大麻瘋、癩疾を治する祕方――死人の蛆蟲を用ゐ、洗淨して銅片上で焙乾して末にし、一二錢づつを皂角刺を煎じた濃湯で調へて服す。もし腫して疙瘩のあるものの場合は、それは陽明の經の濕熱壅盛である。先づ防風通聖散を二三帖服し、然る後に再服する。この藥の補の功あるは皂針を以て引となしてあるからで、故に能く表に達する。能く久しく服すれば極めて神效がある。ありふれた草木の比較になるものではない。

○醫學指南にある大麻瘋を治する祕方――人蛆一升を用ゐ、細布袋に盛つて急水中に置いて流し、乾淨して取上げ、麻黃の煎湯にその蛆を布袋のまま浸し、良久して取上げて曬乾し、再び甘草の煎湯に浸して曬乾し、又、苦參の煎湯に浸して曬乾し、又、童尿に浸して曬乾し、又、葱、薑の煎湯に蛆を投入して、必しも取上げるに及ばず、そのまま鍋に入れて煮乾し、焙じて末にし、毎一兩に麝二錢、蟾酥三錢を加へて共に一處にして磁器中に入れ、毎服一錢を石蘚花の煎湯で服す。その花は卽ち山中の石上に生ずる白蘚で、錢のやうな形態のものである。蒼耳草の煎湯で洗

浴し、然る後に藥を服す。七日にして效が現れる。體力の壯なものは一日一服、體力の弱いものは二日一服で癒える。

勞瘵を治し、能く尸蟲を驅る。賊を以て賊を攻むるの要領である。趺蹼絕、邪瘧、尸蛀、石疣。

【癆蟲を驅る】吳秀峯虛勞論に云く、癆に蟲あるは濕鬱のために化生するので、外に在つては蝨となり、臟腑に在つては蟲となる。死人身上の蛆蟲を用ゐ、製して潔淨にし、焙乾して藥に和して服すれば、癆蟲は化して水となつて下る。

人蚜　陳所安今見錄――近頃一種不逞の奸徒に屍骸殯斂の齋場で接近する浮浪人を賄賂で唆し、浮浪人もそれで懷を肥し、未葬の棺の賃料預りを營業するものがある。杭の一般人はそれを開寄場と呼ふ。七日以內に未葬の棺を出すものがある每に、棺がその場に到著すると、早速夜に乘じ棺を啓けて人蚜を竊み取り、それを方術家や、藪醫者に賣られて了ふ。それが夾棍藥になり、幷に趺打絕、邪瘧等を治するに用ゐられるのだ。予は初め人蚜なるものの何物なるかが解らなかつたが、後の唐博士與宜を詢ねたとき、博士の家に老僕の來升といふ者がゐて、嘗てそれを見た

といふ。その話に、凡そ人は死んで七七日以上になると、全身の肌肉は腐つて漿のやうになり、心氣が散漫して蒸して人蚜となる。形は九龍蟲のやうで小さく、色は血のやうに赤くして非常に光滑なものだ。男、女いづれもあるが、藥に入れるには男の棺のものが佳し。これを取る方法は、大鑽を用ゐて棺の頭の前に合せる部分に一大孔を鑽り開け、香糟をその孔の外に塗つて置く。すると棺内の蟲はその糟の氣を聞いてみな孔から出て來る。その蟲は甲があるけれども飛べないので、手で搦め取つて小瓶中に投入し、燒酒で浸して陰陽瓦上で焙乾して用ゐるのだといふ。

按ずるに、人は死ねば血肉が腐つて蟲となり、或は蛆となり、或は蚜となる。形はそれぞれ異ふが、或は二物は同時に生ずるものだといひ、或は一物が先で後に互に化するのだといひ、又、貧窮者は蛆が多くして蚜が少く、富貴の者は蚜が多くして蛆が少いといふものもある。兎に角深き考究はせず、並にその說を存して博雅の君子の折衷に俟つ。

虹蟲

物理小識――虹は淫氣であつて、方士は東海で虹の處を見て地を掘つて取る蟲は紅色のものだ。これを取つて術に用ゐる材料とする。媚藥として幃箔を益すること紫稍花と同じく、功力は更に大である。

本草綱目拾遺第十卷　終

昭和八年四月十七日印刷
昭和八年四月十九日發行

頭註國譯本草綱目拾遺(二)(第十四冊)

非賣品

翻譯者　鈴木眞海

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　氣賀林一

東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行

東京
春陽堂
出版